

みんなくりポジトリ

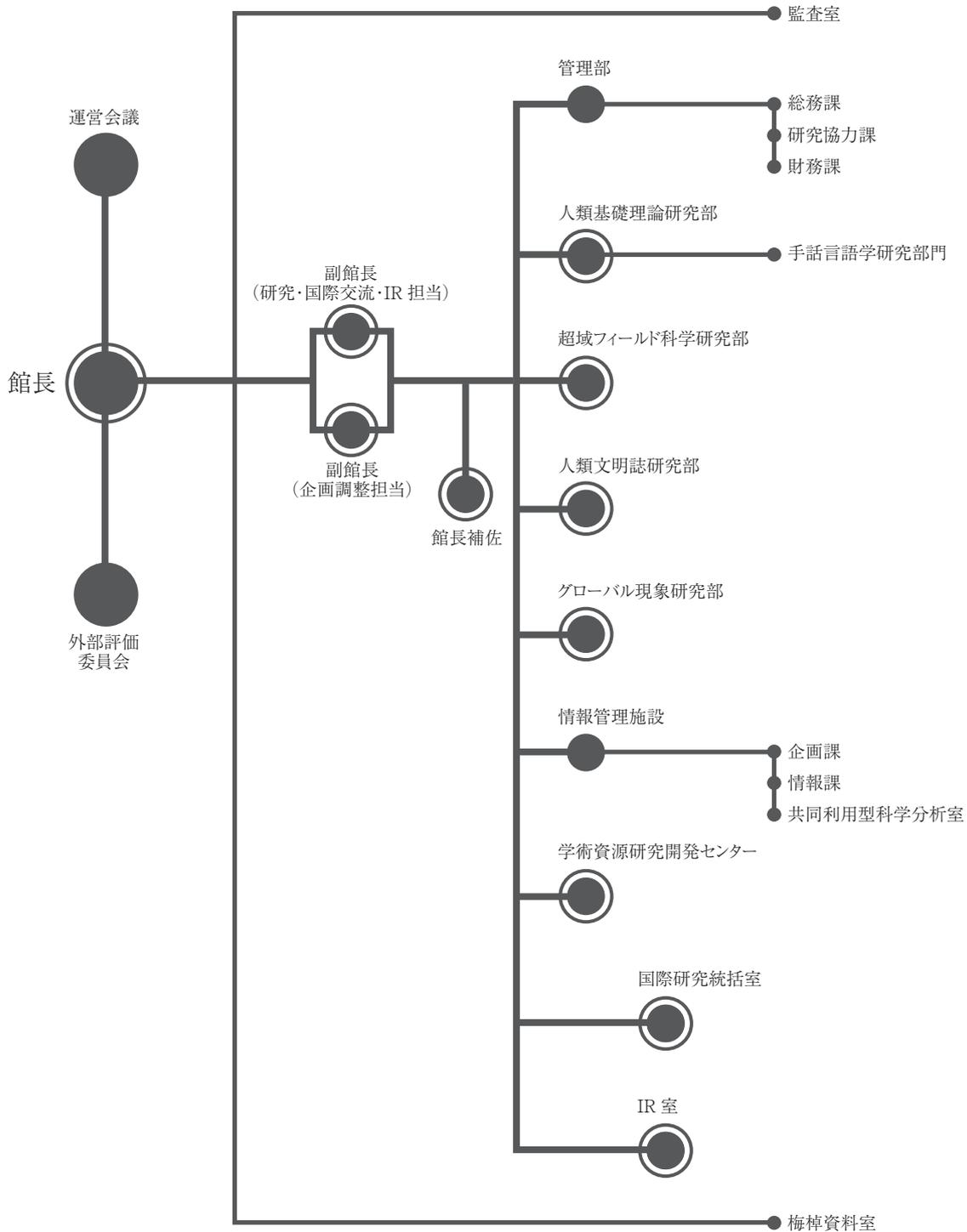
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1. 組織

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009672

1 組織

組織構成図 (2020年3月31日現在)



運営組織 (2020年3月31日現在)

●運営会議

窪田幸子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授 *2
栗本英世	大阪大学副学長*1
後藤 明	南山大学人文学部教授*3
佐野千絵	東京文化財研究所保存科学研究センター長*3
出口 顕	島根大学副学長*2
富沢寿勇	静岡県立大学国際関係学部特任教授*1
豊田由貴夫	立教大学観光学部教授*1
松田素二	京都大学大学院文学研究科教授*2
山梨俊夫	国立国際美術館長
飯田 卓	人類文明誌研究部長*1*2*3
宇田川妙子	総合研究大学院大学文化科学研究科 比較文化学専攻長／超域フィールド 科学研究部 教授*1
關 雄二	副館長（企画調整担当）*1*2
園田直子	人類基礎理論研究部長*1*2*3
野林厚志	学術資源研究開発センター長*1*2*3
林 勲男	超域フィールド科学研究部長*1*2*3
平井京之介	副館長（研究・国際交流・IR担当） *1*2
三尾 稔	グローバル現象研究部長*1*2*3

注) *1 人事委員会委員
*2 共同利用委員会委員
*3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳	国立情報学研究所副所長
池田博之	公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長
大野 泉	独立行政法人国際協力機構 JICA 研究所長
八村廣三郎	立命館大学名誉教授
堀井良殷	公益財団法人関西・大阪21世紀協会理事長
水沢 勉	神奈川県立近代美術館長
山極壽一	京都大学総長
山下晋司	東京大学名誉教授
山本真鳥	法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2020年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会	大学院委員会
創設五十周年記念事業推進委員会	情報運営会議
福利厚生委員会	文化資源運営会議
安全衛生委員会	国際研修博物館学コース運営委員会
ハラスメント防止委員会	施設マネジメント委員会
広報企画会議	危機管理委員会
特別研究運営会議	大規模災害復興支援委員会
刊行物審査委員会	国際研究統括室会議
研究出版委員会	フォーラム型情報ミュージアム委員会
知的財産委員会	研究資料共同利用委員会
地域研究拠点運営委員会	

現員 (2020年3月31日現在)

区 分	館長	教授	准教授	助教	事務職員・技術職員	計
館長	1					1
管理部					28	28
情報管理施設					22	22
監査室					1	1
研究部		19(1)	20	1(1)		40(2)
学術資源開発センター		4	4	1		9
客員(国内)		6	4			10
客員(国外)*		5	1			6
計	1	34(1)	29	2(1)	51	117(2)

注) ()は特任研究員の人数を外数で示す
注) 客員(国外)*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2020年3月31日現在)

●歴代館長

初代/梅棹忠夫(故人)	1974年6月～1993年3月
第2代/佐々木高明(故人)	1993年4月～1997年3月
第3代/石毛直道	1997年4月～2003年3月
第4代/松園萬亀雄	2003年4月～2009年3月
第5代/須藤健一	2009年4月～2017年3月
第6代/吉田憲司	2017年4月～

●名誉教授

祖父江孝男(故人)	1984年4月1日	森田恒之	2002年4月1日	八杉佳穂	2015年4月1日
岩田慶治(故人)	1985年4月1日	石毛直道	2003年4月1日	須藤健一	2017年4月1日
加藤九祚(故人)	1986年4月1日	栗田靖之	2003年4月1日	塚田誠之	2017年4月1日
伊藤幹治(故人)	1988年4月1日	杉田繁治	2003年4月1日	竹沢尚一郎	2017年4月1日
中村俊亀智(故人)	1988年4月1日	熊倉功夫	2004年4月1日	横山廣子	2018年4月1日
君島久子	1989年4月1日	立川武蔵	2004年4月1日	印東道子	2018年4月1日
和田祐一(故人)	1990年4月1日	田邊繁治	2004年4月1日		
垂水 稔(故人)	1991年4月1日	藤井龍彦	2004年4月1日		
杉本尚次	1992年4月1日	山田睦男(故人)	2004年4月1日		
梅棹忠夫(故人)	1993年4月1日	江口一久(故人)	2005年4月1日		
大給近達(故人)	1993年4月1日	大塚和義	2005年4月1日		
片倉素子(故人)	1993年4月1日	松原正毅	2005年4月1日		
竹村卓二(故人)	1994年4月1日	石森秀三	2006年4月1日		
周 達生(故人)	1995年4月1日	野村雅一(故人)	2006年4月1日		
松澤員子	1995年4月1日	大森康宏	2007年4月1日		
大丸 弘(故人)	1996年4月1日	山本紀夫	2007年4月1日		
友枝啓泰(故人)	1996年4月1日	松園萬亀雄	2009年4月1日		
藤井知昭	1996年4月1日	松山利夫	2010年4月1日		
佐々木高明(故人)	1997年4月1日	長野泰彦	2011年4月1日		
杉村 棟	1997年4月1日	秋道智彌	2012年4月1日		
和田正平	1998年4月1日	中牧弘允	2012年4月1日		
清水昭俊	2000年4月1日	小林繁樹	2014年4月1日		
黒田悦子	2001年4月1日	田村克己	2014年4月1日		
崎山 理	2001年4月1日	吉本 忍	2014年4月1日		
端 信行	2001年4月1日	久保正敏	2015年4月1日		
小山修三	2002年4月1日	庄司博司	2015年4月1日		

研究部教員の紹介 (2020年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

館長		吉田憲司		
副館長(企画調整担当)		關 雄二		
副館長(研究・国際交流・IR担当)		平井京之介		
研究部	職名・研究部門	教授	准教授	助教
人類基礎理論研究部	研究部長	園田直子		
	第一超域	日高真吾	福岡正太 山本泰則	
	第二超域		川瀬 慈 吉岡 乾	
	第三超域	出口正之	菊澤律子 丸川雄三	
附置	日本財団助成 手話言語学	※飯泉菜穂子	菊澤律子(併)	※相良啓子
超域フィールド科学研究部	研究部長	林 勲男		
	第一超域	櫻永真佐夫 韓 敏	太田心平 奈良雅史	
	第二超域		菅瀬晶子 松尾瑞穂	
	第三超域	宇田川妙子 ピーター・J・マシウス	新免光比呂	
人類文明誌研究部	研究部長	飯田 卓		
	第一超域		卯田宗平 小野林太郎 寺村裕史 藤本透子	
	第二超域	池谷和信	上羽陽子	
	第三超域	齋藤 晃 鈴木 紀 關 雄二(副館長)		
グローバル現象研究部	研究部長	三尾 稔		
	第一超域	信田敏宏 平井京之介(副館長)	河合洋尚 廣瀬浩二郎	
	第二超域	西尾哲夫	相島葉月 三島禎子	鈴木英明
	第三超域	鈴木七美 森 明子		
学術資源研究開発センター	センター長	野林厚志		
	第一超域	笹原亮二	齋藤玲子	
	第二超域	寺田吉孝 山中由里子	南 真木人	
	第三超域	岸上伸啓(併)	伊藤敦規 丹羽典生	八木百合子
	人文知コミュニケーター			大石侑香(併)
国際研究統括室		平井京之介(室長)(併) 韓 敏(兼務) 齋藤 晃(兼務)	卯田宗平(兼務) 丹羽典生(兼務) 福岡正太(兼務)	鈴木英明(兼務)

※は特任研究員を示す。

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】大阪大学文学部美学科研究生（1980）、ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（1993）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2000）、国立民族学博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センターセンター長（2006）、放送大学客員教授（2010）、国立民族学博物館副館長（2015）、国立民族学博物館館長（2017）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】博物館人類学、文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて——南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

2004 第1回木村重信民族藝術学会賞

2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。本研究は、文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を実践的に考究することを目的としている。

本年度は、科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」の一環として、南部アフリカ、ザンビアのチェワ社会およびンゴニ社会における文化の伝統とその創造的継承の実態についての現地調査を実施した。あわせて、国際博物館会議（ICOM）京都大会の場で、「博物館とコミュニティ開発」「（民族誌博物館における）多様性と普遍性」のセッションを組織し、基調講演を担当して、博物館による文化の継承と表象のあり方について、新たな提言をおこなった。

また、本格実施が承認された、科研費による研究基盤リソース支援プログラム「地域研究画像デジタルライブラリ」の構築を通じて、国内に所蔵される世界各地の自然と文化の記録画像の集積と共有化の作業を継続した。

・成果

チェワ社会を含む南部アフリカの文化の伝統とその創造的継承に関する研究については、チェワ社会に隣接するンゴニ社会で10年を費やして公開に至った、同社会のコミュニティ・ミュージアム、ンスインゴ・ミュージアムにおいて、現地ワークショップを実施し、実際にミュージアムの建設・資料収集に携わったコミュニティの人びととの間で、その建設過程の検証と評価の作業を実施した。その成果は、2019年9月に開催された国際博物館会議（ICOM）京都大会の「博物館とコミュニティ開発」のセッションにおける基調講演の中で公表した。その内容は、下記刊行物に掲載している。

YOSHIDA, Kenji “Museum as a Basis of Community Development”, Sonoda, Naoko(ed.)

Museums and Community Development, Organizing Committee of the ICOM Kyoto session “Museums and Community Development”, pp.7-26, 2020.

南部アフリカ全域を覆う宗教運動に絡んだ文化の継承・創造の過程については、これまでの作業で、その大要を把握しえたが、本年度内にその成果の欧文出版に向けた作業を完了した。

さらに、2000年以降の世界の博物館の動向に関する研究成果を踏まえて、広範囲な読者を対象とした博物館学の啓発書の刊行準備を進める一方、民博の所蔵する世界の仮面をもとに、世界の無形文化遺産の創造的継承のありかたを総覧する刊行物の編集を進めている。

「地域研究画像デジタルライブラリ」については、同プロジェクトの向こう3年間の本格実施が承認され、進行中の科学研究費補助金による外部の研究プロジェクト15件を対象にデジタル化とデータベース構築の支援を実施した。

◎出版物による業績

[論文]

Yoshida, K.

2020 Museums as a Basis of Community Development. In N. Sonoda(ed.) *Museums and Community Development*, pp.7-26. Kyoto: Organizing Committee of the ICOM Kyoto session “Museums and community development”.

[その他]

吉田憲司

2019 「現代のことば 桜とプラント・ハンター」『京都新聞』4月16日夕刊。

2019 「通巻五〇〇号の節目に」『月刊みんぱく』43(5):1。

2019 「現代のことば アートと人類学の接近」『京都新聞』6月27日夕刊。

2019 「共感・共創の時間空間の創造」『チームラボ永遠の今の中で teamLab AT THE NOW OF ETERNITY』pp.86-93, 京都:青幻舎。

2019 「仮面の来訪者」『ベストエッセイ2019』pp.154-156, 東京:光村図書出版。

2019 「エキタビ 大阪モノレール万博記念公園駅(大阪府吹田市)『世界の文化 こんにちは』『読売新聞』7月20日夕刊。

2019 「想像界の生物相 キフェベの仮面」『月刊みんぱく』43(8):14-15。

2020 「記憶をつなぐ——災害と文化遺産」『かがやけ みらい 小学校 道徳 5年 きづき』pp.86-88, 東京:学校図書。

2020 「大阪・国立民族学博で『みんぱくセミナー』欧米博物館の変貌紹介」『奈良新聞』2月28日。

2020 「インタビュー 博物館がつなぐ人、文化、社会——異なるものへのまなざし」『CEL』124:2-7。

2020 「万博の正解」『BRUTUS』41(5):34-37。

2020 「ごあいさつ」『先住民の宝』pp.4-5, 大阪:国立民族学博物館。

2020 「ICOM京都大会を振り返る——成果と課題」『別冊 博物館研究 ICOM京都大会2019記念特集号』東京:日本博物館協会。

2020 「『民博通信』のオンライン化にあたって」『民博通信 Online』1:2。

Yoshida, K.

2019 WELCOME ADDRESS. *ICOM ICME 52nd ANNUAL CONFERENCE Diversity and Universality Programme Abstracts*.

2020 Intangible Cultural Heritage and Local Communities: A Perspective on Museums. *Proceedings of International Researchers Forum: Perspectives of Research for Intangible Cultural Heritage towards a Sustainable Society*, pp.1-10. Osaka: International Research Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region(IRCI).

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月9日 「文化多様性の時代におけるミュージアムの役割」公開シンポジウム『文化多様性は何をめざすのか ミュージアムと考える、新時代』北海道大学

2019年6月15日 「民族藝術学会の新たな展開に向けて」対話フォーラム『民族藝術学会と民族藝術学会のこれ

からを考える』大阪大学豊中キャンパス

- 2019年9月3日 'Museums as a Basis of Community Development.' 第25回ICOM(国際博物館会議) 京都大会2019みんなく JICA セッション "Museums and Community Development", 京都国際会館
- 2019年9月5日 'Ethnographic Museums at the Turn of Civilization.' ICOM ICME 52nd Annual Conference 2019 "Diversity and Universality", ホテル阪急エキスポパーク
- 2019年11月9日 「万博博覧会という装置——その過去、現在、未来」『万国博覧会と人間の歴史』研究会、京都大学吉田キャンパス
- 2019年12月17日 「無形文化遺産と地域コミュニティ」国際研究者フォーラム『無形文化遺産研究の展望——継続可能な社会にむけて』東京文化財研究所
- 2019年12月21日 「人類学と博物館——これまでとこれから」南山大学人類学研究所設立70周年記念事業公開シンポジウム『人類学と博物館——民族誌資料をどう研究するのか?』南山大学
- 2020年2月1日 「日本美術はいかに語られてきたか?——欧米の美術館・博物館の中の日本」国際シンポジウム『展示室で語る「日本美術」』東京国立博物館
- 2020年2月11日 「ICOM 京都大会を振り返る——成果と課題」ICOM (国際博物館会議) 京都大会2019記念シンポジウム『日本のミュージアムの未来』京都国立博物館

・みんなくゼミナール

- 2020年2月15日 「文明の転換点におけるミュージアム——みんなくのこれまでとこれから」第500回みんなくゼミナール

・広報・社会連携活動

- 2019年9月13日 「文化の展示の現在」JICA、国立民族学博物館
- 2019年9月26日 「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築『みんなくアフリカ展示場から』」神戸市シルバークレッジ、国立民族学博物館
- 2019年10月25日 「武器をアートに——モザンビークにおける内戦後の平和構築」日本国際連合協会関西本部、帝国ホテル
- 2020年1月20日 「武器をアートに——アフリカ・モザンビークにおける平和構築の営み」国立民族学博物館、文部科学省エントランス
- 2020年1月24日 「人類文化の多様性と普遍性——仮面をめぐる私のフィールドワークから」香川県中小企業家同友会同友会大学、香川産業頭脳化センター

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

- 2019年5月26日 「国際博物館の日 記念シンポジウム『文化をつなぐミュージアム——伝統を未来へ』パネルディスカッション」ICOM 京都大会組織委員会、京都国立博物館
- 2019年7月26日 「『未来志向のミュージアム——都市（まち）のシンボルとして』コメンテーター」千里文化財団、ホテル阪急インターナショナル
- 2019年9月29日 「みんなく研究公演『能と怪異』 対談 吉田憲司×辰巳満次郎」国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2019年8月4日～8月25日—ザンビア（ザンビア国立博物館機構との協定に基づく博物館ワークショップの実施と、ザンビア東部州における文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する調査・研究）
- 2019年10月26日～11月1日—カナダ（先住民族の無形文化遺産管理に関するカナダとアフリカとの比較調査研究）
- 2020年2月21日～2月24日—カナダ（先住民族の無形文化遺産管理に関するカナダとアフリカとの比較調査研究 総括）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- 科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人2025年日本国際博覧会協会シニアアドバイザー、独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館評議員、公益財団法人教育美術振興会第55回教育美術・佐武賞ゲスト選考委員、公益財団法人京都服飾文化研究財団評議員、大阪府第26回山片蟠桃賞審査委員、日本民族藝術学会会長、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター理事、ICOM 京都2019組織委員会委員、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、ASEMUS (Asia-Europe Museum Network) Executive Committee、African Arts (UCLA) Consulting Editor、Museum International (ICOM) Editorial Board Member、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員会委員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、公益財団法人日本博物館協会参与、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、日本展示学会評議員、独立行政法人国立美術館国立国際美術館評議員、関西サイエンス・フォーラム理事

・他大学の客員、非常勤講師

浙江大学客員教授、放送大学客員教授

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程退学（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授・部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2016）、国立民族学博物館民族文化研究部研究部長（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館副館長（2017）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 古代アンデス文明の形成過程、現代ペルーの文化行政、考古学と国民国家形成、世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology、Institute of Andean Studies

【主要業績】

[単著]

關 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[編著]

關 雄二編

2017 『アンデス文明 神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2019 カハマルカ州名誉勲章（ペルー）

2019 アントニオ・ギジェルモ・ウレロ大学名誉博士号

2016 外務大臣表彰

2015 ペルー文化功労者表彰

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈を行う。具体的には、ペルー北部山中パコパンバ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C.2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費（基盤研究（A））をあてた。

・成果

2016年度から科学研究費（基盤研究（A））を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。こうした成果を、共著書1冊、論文4本として出版した。

また、6月にハンガリーで開催された第19回ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟(FIEALC)でダニエル・D・サウセド・セガミ、ルーシー・C・サラサルとともにシンポジウム『Materializando identidades: El patrimonio cultural y la formación de identidades locales, regionales y nacionales en América Latina』を組織した。

このほか、ペルー文化省とともに日本とペルーの文化交流記念シンポジウム『Protección del patrimonio cultural Peruano en el nuevo milenio: Perspectivas y experiencias de investigadores de Perú y Japón』、9月にはペルー北高地カハマルカ市の文化省カハマルカ支局で日本人調査40周年記念展示『Año de la amistad Peruano Japonesa y los 40 años de investigación de la Misión Arqueológica Japonesa en Cajamarca』および日本人調査40周年記念シンポジウム『Entre el pasado y presente: Estudios y protección del patrimonio cultural en la costa y sierra norte del Perú』、12月には東京文化財研究所においてシンポジウム『ペルーの文化遺産保護の最前線——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのミイラ』を開催し、研究発表をおこなった。これらのシンポジウムおよび展示は、文化庁から「日本ペルー交流年における文化遺産保護に係るシンポジウム等実施委託業務」の資金を得て実施した。

◎出版物による業績

[編著]

Burger, R. L., L. C. Salazar, and Y. Seki (eds.)

2020 *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC* (Yale University Publications in Anthropology 94). New Haven: Yale University Department of Anthropology and the Yale Peabody Museum of Natural History. [査読有]

[分担執筆]

関 雄二

2020 「アンデス文明におけるモニュメントと権力生成」国立歴史民俗博物館・松木武彦・福永伸哉・佐々木憲一編『日本の古墳はなぜ巨大なのか——古代モニュメントの比較考古学』pp.54-69, 東京：吉川弘文館。

Seki, Y., D. A. Paredes, M. O. Livia, and D. M. Chocano

2020 Emergence of Power during the Formative Period at the Pacopampa Site. In R. L. Burger, L. C. Salazar and Y. Seki (eds.) *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC* (Yale University Publications in Anthropology 94), pp.107-127. New Haven: Yale University Department of Anthropology and the Yale Peabody Museum of Natural History. [査読有]

Seki, Y.

2020 La centralidad del espacio social en el Periodo Formativo Temprano: Una perspectiva desde el Norte de los Andes Centrales. In R. Vega-Centeno and J. Dulanto(eds.) *Los desafíos del tiempo, el espacio y la memoria: Ensayos en homenaje a Peter Kaulicke*, pp.309-338. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú. [査読有]

Sakai, M., S. Shibata, T. Takasaki, J. P. H. Villanueva, and Y. Seki

2020 Monumental Architecture, Stars, and Mounds at the Temple of Pacopampa: The Rising Azimuth of the Pleiades and Changing Concepts of Landscape. In R. L. Burger, L. C. Salazar and Y. Seki (eds.) *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC* (Yale University Publications in Anthropology 94), pp.129-148. New Haven: Yale University Department of Anthropology and

the Yale Peabody Museum of Natural History. [査読有]

[論文]

- Nakagawa, N., Y. Seki, J. P. H. Villanueva, M. Ordoñez, D. Alemán, and D. M. Chocano
2019 El proceso del complejo arqueológico Pacopampa. *Actas del V Congreso Nacional de Arqueología* volumen 1: 199-209 (CD-ROM).
- Nakagawa, N., J. P. H. Villanueva, Y. Seki, and D. M. Chocano
2019 La cerámica utilizada en el festín en Pacopampa durante el Periodo Formativo. *Actas del IV Congreso Nacional de Arqueología* volumen 2: 7-15 (CD-ROM).
- Nagaoka, T., Y. Seki, J. P. H. Villanueva, and D. M. Chocano
2020 Bioarchaeology of Human Skeletons from an Elite Tomb at Pacopampa in Peru's Northern Highlands. *Anthropological Science*. (doi.org/10.1537/ase.200218) [査読有]

[その他]

関 雄二

- 2019 「カハマルカの温泉」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』59：3。
2019 「マチュ・ピチュ生中継」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』60：3。
2020 「書評：古谷嘉章著『縄文ルネサンス』」『西日本新聞』3月28日。

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

関 雄二監修・出演

- 2019年6月1日～6月2日 「謎の天空遺跡 マチュピチュ大中継」NHK 4K、NHK BSプレミアム（出演）
2020年2月23日 「世界遺産 チャン・チャン遺跡地帯——アメリカ大陸最大！土でできた古代都市」TBS（監修）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2019年12月14日 「パコパンパ遺跡——金製品の発見と地域文化遺産の保護」ペルー日本人移住120周年・日本ペルー交流年記念シンポジウム『ペルーの文化遺産保護の最前線——アンデスの黄金、ナスカの地上絵、インカのみイラ』東京文化財研究所

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月28日 'Relacionando el patrimonio cultural material e inmaterial par su uso y protección en la sierra norte del Perú.' XIX Congreso de la FIEALC, Departamento de Estudios Hispánicos, Universidad de Szeged, Szeged, Hungary
- 2019年8月9日 'Pacopampa: Arquitectura y poder en el Periodo Formativo de la sierra norte del Perú.' Simposio Internacional CHAVÍN "100 años de arqueología desde Julil C. Tello hasta nuestros días", Auditorio del Centro Cívico de la Municipalidad Distrital de Chavín de Huántar, Ancash, Perú
- 2019年8月13日 'Las investigaciones ye el uso social del sitio arqueológico Pacopampa.' "VI Congreso Nacional de Arqueología, Simposio por el de Amistad entre Japón y Perú", Ministerio de Cultura del Perú, Cajamarca, Perú
- 2019年9月6日 'Pacopampa: 14 años de investigación y conservación del patrimonio cultural local.' "Simposio conmemorativo por los 120 años de la inmigración japonesa / Año de la amistad Peruano Japonesa y los 40 años de investigación de la Misión Arqueológica", Campo Santo, Complejo Monumental Belén-DDC-Cajamarca, Cajamarca, Perú

・広報・社会連携活動

- 2019年4月20日 「チャビン問題再考」アンデス文明研究会
2019年6月10日 「南米アンデス文明の探求——なぜ神殿を掘るか？」川西公民館集会室
2019年6月24日 「南米アンデス文明の探求——アンデスの文化遺産の保護と活用」川西公民館
2019年7月8日 「池田市制施行80周年記念中央公民館特別講座『アンデス文明の謎を追って 日本の考古学調査60年』」池田市中央公民館大ホール
2019年9月28日 「現代における持続可能な文化遺産の保護——アンデス文明調査での経験から」関西広域連合／歴史街道推進協議会／文化庁地域文化創生本部、堺市総合福祉会館

- 2019年10月1日 「アンデスの文化遺産をめぐる問題——盗掘の実態」 阪神シニアカレッジ
- 2019年10月1日 「アンデス文明の神殿を掘る」 阪神シニアカレッジ
- 2019年10月5日 「アンデスの古代遺跡とそこに暮らす人々」(県立図書館とことん活用講座) 岡山県立図書館
- 2019年12月21日 「パコパンバ追跡調査概報2019」 アンデス文明研究会
- 2019年12月22日 「アンデスの世界 神殿のひみつ」 2019 地球たんけんたい⑧ワークショップ
- 2020年1月10日 「アンデス先住民と文化遺産——インカをめぐる葛藤」 阪神シニアカレッジ
- 2020年1月10日 「マチュ・ピチュの発見と出土品の行方」 阪神シニアカレッジ

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員(2人)、副指導教員(2人)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(基盤研究(A))「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」研究代表者、科学研究費(基盤研究(B))「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」(研究代表者: 鶴澤和宏(東亜大学))研究分担者、科学研究費(基盤研究(B))「先住民の視点からグローバル・スタディーズを再構築する領域横断研究」(研究代表者: 池田光穂(大阪大学))研究分担者、金沢大学戦略的研究推進プログラム超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」(研究代表者: 河合 望(金沢大学))プロジェクト担当者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

東京大学総合研究博物館外部評価委員、日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会ユネスコ「世界の記憶」選考委員会委員、公益財団法人高梨学術奨励基金選考委員、金沢大学研究域附属研究センター外部評価委員、文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、金沢大学国際文化資源学研究所センターアドバイザー、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、アンデス文明研究会顧問

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——副館長(研究・国際交流・IR担当)、グローバル現象研究部教授

【学歴】 東北大学文学部社会学専攻卒(1988)、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了(1992)、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了(1998) **【職歴】** 国立民族学博物館第一研究部助手(1995)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2001)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2013)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授(2017)、国立民族学博物館人類文明誌研究部部長(2018)、国立民族学博物館副館長(2019)、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授(2019) **【学位】** Ph.D.(ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998)、M.Sc.(ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992) **【専攻・専門】** 社会人類学 水俣病被害者支援運動の人類学的研究、タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究 **【所属学会】** 日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京: NTT出版。

[編著]

平井京之介編

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都: 京都大学学術出版会。

Hirai, K. (ed.)

2015 *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、熊本県水俣において、水俣病という悲惨な出来事を伝える場所やモノがいかんして「負の遺産」として保存されるようになったか、水俣病紛争が沈静化した現在の水俣社会においてそれらはどのような役割を果たしているかを明らかにすることである。本研究では、①水俣病被害者が運動のなかで収集してきたモノや記録が1990年代以降になって、いかんして「遺産」と認識されるようになったか、②行政がどのような経緯でそれらを「負の遺産」として保存・活用するようになったか、③「負の遺産」は社会においてどのような役割をもつか、を解明することを具体的な研究目的とする。なお、当研究に関わる現地調査においては、自身が代表を務める科学研究費（基盤研究（C））を利用する。

・成果

水俣病に関わる「負の遺産」の保存・活用の実態とその歴史的経緯を把握するために、科学研究費（基盤研究（C））を利用して、水俣病を語り継ぐ会や水俣市立水俣病資料館、熊本県水俣病保健課などを対象とする約50日間の現地調査を実施した。調査の中心になったのは、1990年以降に水俣病問題に関連する行政の施策に参加してきた関係者からの聞き取り調査と、現在、行政およびNPO団体が実施している水俣病の教訓に関する教育普及活動への参与観察である。特に、水俣病資料館の博物館活動と、熊本県水俣病保健課が水俣病を語り継ぐ会と共同で実施する水俣病啓発事業について重点的に調べた。さらに、本研究の調査結果をまとめ、来年度の投稿に向けて論文執筆を進めた。

◎出版物による業績

[その他]

平井京之介・黄 貞燕・日高真吾・謝 仕淵・林 奎妙・寺村裕史・川村清志

2019 「総合討論」『地域文化を保存する——実践者の視点から』pp.203-230, 大阪：国立民族学博物館。

平井京之介・林 琮穎

2019 「挑戦公害病及其汗名——日本水俣病事件的博物館実践」『中華民国博物館学会』。

平井京之介

2019 「書評：永野三智著『みな、やっとの思いで坂をのぼる——水俣病疾患相談のいま』』『ごんずい』154：10-11。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「ポスト紛争期の水俣における『負の遺産』の生成過程に関する博物館人類学的研究」研究代表者

人類基礎理論研究部

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 部長（併）教授

【学歴】 Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学文学部美術史と考古学・美術史卒(1980)、Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 / U.E.R Art et Archéologie/ Maîtrise des Sciences et Techniques: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques 修士課程修了(1982)、Ecole du Louvre エコール・ド・ルーブル卒(1983)、Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 / Histoire de l'art 美術史博士課程修了(1987) 【職歴】 Direction des Musées de France / Labora-

toire de recherche des musées de France / アメリカ・グッティエー財団との共同プロジェクト研究員(1987)、Direction des Musées de France / Service de restauration des peintures des musées nationaux / assistante scientifique (1989)、国立歴史民俗博物館助手 (1991)、国立民族学博物館第5研究部助手 (1993)、国立民族学博物館第5研究部助教授 (1997)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (1998)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (1999)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授 (2004)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授 (2007)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2016)、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長 (2016)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授 (2017)、国立民族学博物館人類基礎理論研究部研究部長 (2017)

【学位】博士 (美術史) Doctorat de 3ème cycle en Histoire de l'art (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 1987)、科学技術修士 Maîtrise des Sciences et Techniques - Spécialité: Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学 1982)、文学士 Licence es Lettres (Université de Paris I (Panthéon-Sorbonne) パリ第1大学1980) 【専攻・専門】保存科学【所属学会】ICOM (国際博物館会議)、IIC (国際文化財保存学会)、IIC-Japan (国際文化財保存学会日本支部)、文化財保存修復学会

【主要業績】

[編著]

Sonoda. N. (ed.)

2016 *New Horizons for Asian Museums and Museology*. Singapore: Springer.

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学 (第2版)』東京：岩田書院。

[学位論文]

園田直子

1987 *Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse*. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2019 文化財保存修復学会第13回学会賞

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

持続可能な資料管理に向けた収蔵庫再編成

・研究の目的、内容

本館における収蔵庫再編成は、単なる狭隘化対策ではなく、保存科学研究と連動した持続的な資料管理の一環として、IPM (総合的有害生物管理) 研究の延長線上に位置づけている。これまで民族資料を対象とした収蔵庫再編成の手法に関しては、小型・中型資料 (特別収蔵庫〈毛皮〉〈絨毯〉〈漆器〉、第3収蔵庫) と大型資料 (多機能資料保管庫〈船〉、第1収蔵庫)、それぞれにおいて確立してきた。本年度は、衣類資料の収納・保管方法のプロトタイプの完成を目指すとともに、生物被害にあいやすい資料を対象とした不活性雰囲気での資料保管法の継続調査と検証をおこなう。また、2018年の大阪府北部を震源とした地震は、収蔵庫における収納・保管方法の安全性、有効性を検証する契機ともなった。このうち改善が必要な事項について対応策を検討する。

・成果

収蔵庫の狭隘化対策はいずれの館においても大きな課題である。本館においては、長期的視点のもと、計画的に収蔵庫再編成に取り組んでいる。本館の収蔵庫再編成においては、資料にとって安全な配架・収納であることは当然ながら、研究者が調査・閲覧しやすいことにも留意している。2018年の地震による収蔵庫の被害とその直後の対応については、2019年6月に開催された第41回文化財保存修復学会で発表し、本館の経験を開連分野の研究者と共有した。収蔵庫に関わる調査・活動の詳細とそこから得た知見は、「国立民族学博物館における大阪府北部を震源とする地震による収蔵庫の被害と対応」として論文にまとめた (『国立民族学博物館研究報告』44巻1号 (2019))。

◎出版物による業績

[編著]

Sonoda, N. (ed.)

- 2019 *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2020 *Museums and Community Development*. Kyoto: Organizing Committee of the ICOM Kyoto session "Museums and community development".

[論文]

園田直子

- 2019 「国立民族学博物館における大阪府北部を震源とする地震による収蔵庫の被害と対応」『国立民族学博物館研究報告』44(1)：1-51。[査読有]

Sonoda, N.

- 2019 Introduction. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.1-7. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2019 Sustainable Collection Management in a 1970s Building: A Case Study of the National Museum of Ethnology, Osaka. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.39-55. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2019 Environmentally Friendly Pest Control Treatment Facilities at the National Museum of Ethnology, Osaka. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.87-95. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2020 About the Publication of Museums and Community Development. In N. Sonoda (ed.) *Museums and Community Development*, pp.1-5. Kyoto: Organizing Committee of the ICOM Kyoto session "Museums and community development".

[その他]

田中祐輝・岡山隆之・小瀬亮太・関 正純・園田直子

- 2019 「微細セルローズファイバー塗工による脆弱化した経年紙資料の強化処理」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.130-131。[査読有]

河村友佳子・園田直子・日高真吾・末森 薫・橋本沙知・和高智美・川越和四・富岡康浩

- 2019 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.290-291。[査読有]

橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森 薫・西澤昌樹

- 2019 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.218-219。[査読有]

末森 薫・園田直子・日高真吾

- 2019 「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.272-273。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸江

- 2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.206-207。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森 薫・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸江・和高智美

- 2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会於東京研究発表要旨集』pp.208-209。[査読有]

園田直子

- 2019 「収蔵庫再編成とその舞台裏」特集「みんなの収蔵庫」『月刊みんなく』43(4)：2-3。
- 2019 「学会賞・受賞者の声」『文化財保存修復学会通信』165：2。
- 2020 「ICOM日本・国立民族学博物館 Museums and Community Development 博物館とコミュニティ開発」『ICOM 京都大会準備室編「文化をつなぐミュージアム——伝統を未来へ」第25回 ICOM (国際博物館会議) 京都大会2019報告書』p.117, 京都：ICOM 京都大会2019組織委員会。

Okayama, T., Y. Tanaka, R. Kose, M. Seki, and N. Sonoda

2019 A Paper Strengthening Method Combined with Mass Deacidification: Applicability of Fine Cellulose Fibre Coating with Vacuum Drying. *XIVth Congress Warsaw 2019, International Association of Book and Paper Conservators (IADA)*, p.18. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年5月19日 'Conservation Research on Ethnological Collection.' International Museum Day Forum "Museum as Cultural Hubs: The Future of Tradition", National Museum Nay Pyi Taw, Mini Theater Hall, Myanmar
- 2019年6月22日 (田中祐輝・岡山隆之・小瀬亮太・関 正純・園田直子と共同発表)「微細セルロースファイバー塗工による脆弱化した経年紙資料の強化処理」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (末森 薫・園田直子・日高真吾と共同発表)「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森 薫・西澤昌樹と共同発表)「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (園田直子・日高真吾・末森 薫・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸江・和高智美と共同発表)「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸江と共同発表)「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年6月23日 (河村友佳子・園田直子・日高真吾・末森 薫・橋本沙知・和高智美・川越和四・富岡康浩と共同発表)「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会第41回大会、ポスター発表、帝京大学八王子キャンパス
- 2019年9月23日 (Okayama, T., Y. Tanaka, R. Kose, M. Seki, and N. Sonoda) 'A Paper Strengthening Method Combined with Mass Deacidification: Applicability of Fine Cellulose Fibre Coating with Vacuum Drying.' *XIVth Congress Warsaw 2019, Polin Museum - Auditorium, Warsaw, Poland*
- 2019年12月5日 'Risk Mitigation and Risk Prevention for Storage - With Special Reference to National Museum of Ethnology, Osaka.' Seminar on Conservation and Storage Management for Paintings and Fabric Artefacts for Museum Professionals in the ASEAN Countries, Mingalar Thiri Hotel, Nay Pyi Taw, Myanmar

◎調査活動

・海外調査

- 2019年5月17日～5月21日—ミャンマー (ミャンマー「国際博物館の日」フォーラムでの講演)
- 2019年9月22日～9月29日—ポーランド (IADA (図書・紙の国際保存修復協会) 大会参加と発表)
- 2019年12月2日～12月6日—ミャンマー (ASEAN 諸国の博物館専門家を対象とする国際セミナーでの司会および講演)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (A)) 「ネットワーク型博物館学の創成」(研究代表者: 須藤健一) 研究分担者、科学研究費 (基盤研究 (B)) 「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」研究代表者、科学研究費 (基盤研究 (B)) 「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」(研究代表者: 日高真吾) 研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都橋大学「国立民族学博物館での資料管理」、京都橋大学「民族資料の収蔵と保管」

出口正之 [でぐち まさゆき] 教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2017）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR=International Society for Third Sector Research）、非営利法人研究学会、日本文化人類学会、日本NPO学会

【主要業績】

[著書]

出口正之

1993 『フィランソロピー』東京：丸善出版。

[共編]

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi (eds.)

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York, Dordrecht, Heidelberg and London: Springer.

本間正明・出口正之編

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

【受賞歴】

1995 ESP 大来佐武郎賞

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

トランスフォーマティブな非営利研究/サイバー空間のフィールドワーク

・研究の目的、内容

トランスフォーマティブな非営利研究は、科学研究費補助金挑戦的研究（開拓）「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」を中心とした研究である。新しい分野の研究に積極的に挑戦して行く。あわせて、「民都・大阪」フィランソロピー会議議長として、「ビジネスセントリズム」に基づかない文化人類学的な視点により、本研究の成果として、地域社会貢献の実績を積んでいく。研究は、Shore & Wright (1999) が主張する「地理的フィールド」ではない「社会的かつ政治的空間としてのフィールド」を研究対象としたものであり、実際の政策に適用していくことによって一層の研究を深めていく。また、昨年度からは、21世紀社会の新現象である「サイバー空間」もShore & Wrightのいう「フィールド」として捉えることで、萌芽的に「サイバー空間」のフィールドワークにも挑戦し、メールにおけるデータ収集を行う。Shore, C., & Wright, S. (Eds.). (1997). *Anthropology of policy: Perspectives on governance and power*. Routledge.

Budka, P., & Kremser, M. (2004). *Cyberanthropology-anthropology of cyberculture*. in Khittel, S., Planckensteiner, B., & Six-Hohenbalken, M. eds. *Contemporary Issues in Socio-cultural Anthropology. Perspectives and Research Activities from Austria*. Wien: Löcker.

・成果

出口正之

2020/02/01 「難産だった米国企業フィランソロピー」（フィランソロピー寄付探訪）『「フィランソロピー」』（396）：22-22. 東京：公益社団法人日本フィランソロピー協会。

出口正之

2019/10/01 「『社会的インパクト評価』とエドセルの法則」(フィランソロピー寄付探訪)『『フィランソロピー』』(394):22-22. 東京:公益社団法人日本フィランソロピー協会。

出口正之

2019/08/01 「『まちかどのフィランソロピー』のバトンの行く先」(フィランソロピー寄付探訪)『『フィランソロピー』』(393):22-22. 東京:公益社団法人日本フィランソロピー協会。

出口正之

2019/07/01 「ヨーロッパ財団センターの30周年年次大会『自由・平等・フィランソロピー』に参加して」『JFC Views』(97):5-5. 東京:公益財団法人助成財団センター。

出口正之

2019/06/01 「ロックフェラーの愛した用語」(フィランソロピー寄付探訪)『『フィランソロピー』』(392):22-22. 東京:公益社団法人日本フィランソロピー協会。

Deguchi, M.

2019/05/28 “The Universality of Philanthropy” Alliance Magazine.
<https://www.alliancemagazine.org/blog/the-universality-of-philanthropy/>

出口正之

2019/05/01 「改革の趣旨と第三者機関の役割」『公益・一般法人』(986):1-1. 東京:全国公益法人協会。

[口頭発表]

出口正之

2019/10/05 「アウトサイダーから見た論理矛盾」会計制度・政策研究会臨時研究会、関西大学梅田キャンパス

出口正之

2019/09/15-2019/09/16 「税制優遇のルビンの壺: 価値的多様性と手段的多様性の奨励」非営利法人研究会全国大会、久留米大学: 招待講演

出口正之

2019/07/15-2019/07/16 Shifting Sands of dormant accounts policy for public interest activities in Japan: global trend and Japanese culture, The 11th International Society for Third Sector Research, Asia Pacific Regional Conference, Bangkok

Deguchi, M.

2019/04/20-2019/04/21 Applying for a government grant as ritual process?: Anthropological perspective on Japan's "sleeping account funds", AJJ(Anthropology of Japan in Japan) Spring Workshop 2019, National Museum of Ethnology 招待講演

◎出版物による業績

[その他]

出口正之

2019 「改革の趣旨と第三者機関の役割」『公益・一般法人』986:1。

2019 「寄付探訪④ ロックフェラーの愛した用語」『フィランソロピー』392:22。

2019 「ヨーロッパ財団センターの30周年年次大会『自由・平等・フィランソロピー』に参加して」『JFC Views』97:5。

2019 「寄付探訪⑤ 『まちかどのフィランソロピー』のバトンの行く先」『フィランソロピー』393:22。

2019 「寄付探訪⑥ 『社会的インパクト評価』とエドセルの法則」『フィランソロピー』394:22。

2020 「寄付探訪⑧ 難産だった米国企業フィランソロピー」『フィランソロピー』396:22。

Deguchi, M.

2019 The Universality of Philanthropy. *Alliance*.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年4月20日 ‘Applying for a Government Grant as Ritual Process?: Anthropological Perspective on Japan's “Sleeping Account Funds”’, “AJJ(Anthropology of Japan in Japan) Spring Workshop 2019”, National Museum of Ethnology

2019年7月15日 ‘Shifting Sands of Dormant Accounts Policy for Public Interest Activities in Japan: Global

Trend and Japanese Culture.' The 11th International Society for Third Sector Research, Asia Pacific Regional Conference, Bangkok, Thailand

2019年9月15日 「税制優遇のルビンの壺——価値的多様性と手段的多様性の奨励」非営利法人研究会全国大会、久留米大学

2019年10月5日 「アウトサイダーから見た論理矛盾」会計制度・政策研究会臨時研究会、関西大学梅田キャンパス

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年8月25日 「えっ、何で博物館で会計の話？ おかねの言語体系『会計』と人類学」第552回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年5月20日～5月26日—フランス（ヨーロッパ財団センター主催 会議「自由・平等・フィランソロピー」に出席）

2019年7月12日～7月18日—タイ（国際学会 ISTR での研究発表）

2019年12月2日～12月6日—台湾（台北大学訪問及びSocial Value International Conference 2019: Social Value Matters, Going Mainstream に参加）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」研究代表者

日高真吾 [ひだか しんご] ————— 教授

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1994）【職歴】（財）元興寺文化財研究所研究員（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授（2019）【学位】文学博士（東海大学2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

2015 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』大阪：千里文化財団。

2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』平塚：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

【受賞歴】

2016 文化財保存修復学会業績賞

2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞

2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

地域文化の再発見とその表象システムの構築

・研究の目的、内容

本研究では、グローバル化や災害を原因として大きな変貌を遂げている地域社会において、どのように文化が

継承され、新たな文化が構築されているのかについて調査・研究をおこなう。さらに、地域社会の動向に対して人間文化研究がいかに貢献しうるかを考察することを研究の主眼とする。

この研究からは、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示、②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを住民自身が感じることができるとするプログラムの策定、③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築、④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す。

なお、本研究を進めるにあたっては、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（代表 日高真吾 18H00760）の研究プロジェクトと関連づけながら実施する。

・成果

2019年度は、①豊かな地域社会の創生に向け、災害時における地域文化の重要性の提示について、特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」（仮称）を2021年3月から開催するための準備を開始した。②博物館を積極的に活用し、平常時に地域住民の意識が希薄となっている地域文化の大切さを住民自身が感じることができるとするプログラムの策定では、村上市教育委員会の民俗資料を対象として、小学校の授業で使用可能な教育キットの学校運用を開始した。③地域の文化を発掘し、その実践活動を検証する人間文化研究の新たなモデルの構築では、台北芸術大学との協定のもと、地域文化の活用に着目した国際フォーラム『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』を開催した。④研究成果を地域において活用するための、地域と研究者の結節点の発見を目指す点では、2018年度に実施した京都造形芸術大学における連続講座「民俗文化財の保存・活用入門」の成果を2021年3月から開催の特別展「復興を支える地域の文化——3.11から10年」（仮称）にあわせて刊行する準備を整えた。

以上の研究は、人間文化研究機構基幹プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（代表 日高真吾）および、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（代表 日高真吾 18H00760）の研究プロジェクトと関連づけながら実施した。

◎出版物による業績

[編著]

日高真吾・黄 貞燕編

2019 『地域文化を保存する——実践者の視点から』京都：Knit-K。

[論文]

日高真吾

2019 「大阪府北部を震源とする地震で被災した国立民族学博物館の復旧活動」国立民族学博物館編『国立民族学博物館研究報告』44(1)：53-127。[査読有]

2019 「被災した国立民族学博物館の取り組み事例について——展示施設を中心に」文化財虫菌害研究所編『文化財の虫菌害』78：10-15。

2020 「災害と地域文化——研究者が果たす役割」民族藝術学会編『民族藝術学会誌 arts/』36：42-45。

Hidaka, S.

2019 Mobile and Non-Chemical Pest Control Measures Applicable to Small-Size Museums. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.69-84. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年10月30日 「博物館の事前学習のための教育キット——地域文化の宝箱」国際フォーラム『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』宜蘭県立蘭陽博物館、宜蘭県、台湾

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月22日 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学

2019年6月22日 「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学

2019年6月22日 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学

- 2019年6月22日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学
- 2019年6月22日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学
- 2019年6月22日 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」第41回文化財保存修復学会大会、帝京大学
- 2019年11月10日 「学校教育における民具の活用 地域文化の宝箱の展望と課題」日本民具学会第44回大会、桜美林大学
- 2019年12月22日 「フォーラム型情報ミュージアム『時代玩具コレクションデータベース』について」近畿民具学会2019年度研究大会、大東市立歴史民俗資料館

・展示

2019年3月21日～5月28日 特別展「子ども／おもちゃの博覧会」国立民族学博物館

・みんなくウィークエンド・サロン

2019年4月14日 「戦後のおもちゃ」第539回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・国内調査

2019年4月2日～4月3日 一高知県南国市（津波碑調査）

2019年4月8日 一 大妻女子大学（大妻女子大学の特別展についての意見交換および時代玩具コレクションDBに関する研究会）

2019年4月9日 一 セカンドブレン（寺社石碑DB改修についての検討会）

2019年4月15日 一 大徳寺（京都府9（土蔵の環境調査））

2019年4月21日 一 枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館（鋳物に関する教育パックについての研究会）

2019年4月22日～4月23日 一 高知県南国市琴平神社（津波碑の3Dスキャナー調査）

2019年5月11日～5月12日 一 国立民族学博物館（地域文化を対象とした教育パックに関する研究会）

2019年5月12日～5月13日 一 岩川八幡神社（鹿児島県大隅町）・西都原考古博物館（宮崎県西都市）（弥五郎どん祭りの基本調査と宮崎県西都原考古博物館の博物館活動の調査）

2019年6月8日～6月10日 一 大分県豊後高田市（お田植え祭りの調査）

2019年6月11日～6月12日 一 新潟県村上市（地域文化を対象とした教育パックの学校運用の可能性についての意見交換）

2019年6月28日～6月29日 一 能生町白山神社（新潟県糸魚川市）（宝物庫の環境調査）

2019年7月20日 一 滋賀県日野市馬見岡綿向神社（馬見岡綿向神社祭礼渡御図絵馬の調査および日野大祭の調査）

2019年7月24日～7月25日 一 滋賀県米原市・富山県南礪波市・石川県金沢市（米原市及び城端曳山の山蔵の環境調査と江戸村の活動調査）

2019年7月29日 一 熊本県水俣市（水俣病候所管の展示資料の状態調査）

2019年8月3日 一 福井県越前市（曳山の山蔵の実態調査）

2019年8月5日～8月7日 一 新潟県村上市（教育パックの展示と説明会の開催）

2019年8月9日～8月10日 一 熊本県熊本市（熊本地震関連シンポジウムに関する打ち合わせ）

2019年8月24日～8月26日 一 岩手県釜石市（東日本大震災で被災した明治の津波碑の状態調査と修復に向けた意見交換）

2019年9月1日～9月4日 一 京都国際会館（ICOM京都大会での障害者向け展示ツールの展示）

2019年9月4日～9月5日 一 香川県観音寺市神恵院観音寺（教育活用を目的とした涅槃像の複製品の制作）

2019年9月19日～9月20日 一 愛知県豊橋市（津波碑の調査）

2019年9月24日～9月26日 一 新潟県村上市小川小学校（小川小学校における教育パック活用のための意見交換）

2019年9月30日～10月1日 一 国立民族学博物館（気仙沼市の魚食をテーマとした教育パックに関する意見交換）

2019年10月13日 一 滋賀県米原市（米原曳山祭りの調査）

2019年10月16日～10月17日 一 東京都国立市・神奈川県川崎市（台風19号による被災博物館等施設の状況調査）

2019年10月21日～10月22日 一 熊本県熊本市（被災した熊本城の復興に関する実態調査）

2019年11月29日 一 愛知県豊橋市（津波碑関連の調査）

2020年1月14日～1月16日 一 神奈川県川崎市（台風19号で被災した川市民ミュージアム民具資料の今後の教育利用の可能性についての意見交換）

2020年2月2日～2月3日—国立民族学博物館（教育パックの利用も含めた東日本大震災から10年の展示会についての研究会）

2020年2月22日～2月24日—新潟県村上市・十日町市（教育パック運用に関する意見交換と東日本大震災関連展示の打ち合わせ）

・海外調査

2019年4月26日～4月29日—台湾（台北市・宜蘭市にて国際フォーラムの打ち合わせおよび宜蘭の蘭陽博物館及び淡水の古蹟博物館の調査）

2019年10月12日～10月17日—中国（敦煌莫高窟における壁画技法・材料の調査）

2019年10月28日～11月4日—台湾（国際フォーラム「地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割」での発表及び意見交換）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（研究代表者：佐々木史郎（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館））研究分担者、科学研究費（挑戦的研究（萌芽））「被災地芸能の二次創作に関する実践研究」（研究代表者：橋本裕之（大阪市立大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「時代玩具コレクションの公開プロジェクト」研究代表者、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「地域における歴史文化研究拠点の構築」（研究代表者：小池淳一）メンバー、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

一般社団法人文化財保存修復学会理事、日本展示学会理事

川瀬 慈 [かわせ いつし] ————— 准教授

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（2007）、日本学術振興会海外特別研究員/マンチェスター大学グラナダ映像人類学センター（2010）、メケレ大学 Abba Gorgoryos Guest Professor（2011）、SIC-Sound Image Culture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所 Hiob Ludolf Guest Professor（2013）、プレーメン大学人類学・文化調査学部客員教授（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科2007）【専攻・専門】アフリカ研究、映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[単著]

川瀬 慈

2018 『ストリーートの精霊たち』京都：世界思想社。

[編著]

川瀬 慈編

2019 『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』東京：新曜社。

[論文]

Kawase, I.

- 2017 ETHNOGRAPHIC FILMMAKING IN ETHIOPIA, the Approach and the Film Reception. In S. Dinslage and S. Thubauville (eds.) *Seeking out wise old men: Six decades of Ethiopian Studies at the Frobenius Institute revisited* (Studien zur Kulturkunde 131), pp.75-86. Berlin: Reimer-Verlag.

【受賞歴】

- 2019 第6回鉄犬ヘテロトピア文学賞
 2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞
 2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、自身の映画制作や上映活動を事例に、コミュニケーションによって生成する人類学的な映像実践を示すことにある。報告者は、撮影者の存在や行動を前景化し、撮影の過程でかわされる撮影者・被写体間の議論を映像の中であえて開示し、撮影プロセスを明示する方法論を発展させてきた。民族誌映画においては、観察型、解説型の映画様式が重視され、制作中の撮影者・被写体間の相互作用や、映画を視聴する幅広いアクターの役割が軽視される傾向にあった。そのようななか本研究では、民族誌映画を固定的で完結した表象としてではなく、視聴する人々とのたえまない相互作用のなかに位置づける。さらにその相互作用が、研究の新たな展開を生成させる創発的な営みであることを自身の民族誌映画制作の実践や映画公開の活動を基軸に提示し、論文としても発表する。

・成果

2019年度は研究課題に関する複数の著作を執筆し、発表することができた。まず、映像人類学の研究論集『ジャン・ルーシュ——映像人類学の越境者』（千葉文夫、金子遊編、森話社、2019年）にフランスの映像人類学者ジャン・ルーシュの映像民族誌の制作方法論を分析すると同時に、自身の方法論を省察的に検討する論考を発表。人類学者による小説集『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』（川瀬 慈編、新曜社、2019年）においては、アフリカでの音楽職能集団を対象にした人類学調査の成果を小説の形式で公開した。Senri Ethnological Studies 102には国立民族学博物館が所蔵するドイツの映像百科事典 *Encyclopedia Cinematographica* の使用事例に立脚し、アーカイブ映像の創造的な活用を提案する論考を発表した。また、科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」の資金で、エチオピア北部の音楽芸能を中心とした無形文化の調査と映像記録を実施し（8-9月）、複数の映像民族誌の制作に取り組んだ。エチオピア政府によって、ユネスコ世界無形文化遺産登録への申請準備がすすめられているお祭り「アシェンダ」を対象にした映像民族誌では、行政によって「文化遺産」としての価値を付与され、構築される祭りの記録を、現地の人々の祭りに対する多様な願いや個人的な記憶をとりいれながら制作し、完成させた。

◎出版物による業績

[編著]

川瀬 慈編

2019 『あふりこ——フィクションの重奏／遍在するアフリカ』東京：新曜社。

[分担執筆]

川瀬 慈

2019 「神々との終わりなきインプロヴィゼーション」千葉文夫、金子 遊編『ジャン・ルーシュ——映像人類学の越境者』pp.167-184, 東京：森話社。

[論文]

Kawase, I.

2019 Exploring the Creative Use of Germany's *Encyclopedia Cinematographica*. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.157-164. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

川瀬 慈 監修

2020 『アシェンダ！ エチオピア北部地域社会の女性のお祭り』（ビデオテープ 番組番号7251）（日本語・38分）

◎調査活動

・海外調査

2019年5月15日～5月27日—エチオピア（エチオピア、ティグレイ族の祭り“アシェンダ”を対象とした映像民族誌の制作）

2019年8月18日～9月2日—エチオピア（エチオピアの音楽職能集団アズマリの都市における活動調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習Ⅰ」、「地域文化学基礎演習Ⅱ」、「比較文化学基礎演習Ⅰ」、「比較文化学基礎演習Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究」研究代表者

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程退学（1995）、ハワイ大学大学院言語学部言語学専攻博士課程修了（2000）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2005）、総合研究大学院大学人文科学研究科准教授（2006）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学 音声言語と手話言語の対照言語学、記述言語学、歴史（比較）言語学、言語類型論、オーストロネシア語族、歴史（比較）統語論、フィジー語諸方言、マラガシ語諸方言、オセアニアの先史研究、ヒトの移動誌、動植物のドメスティケーション、文化接触・文化交流、他分野との協働による研究 1 言語情報と地理情報システム（GIS）【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics、日本手話学会、Sign Language Linguistics Society、関西言語学会

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[編著]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011* (Current Issues in Linguistic Theory 326). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480-516.

【受賞歴】

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

- 2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞
- 2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀研究者賞
- 2008 第4回日本学術振興会賞
- 2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フィジー諸言語の発達史研究における地理情報システム（GIS）の応用

・研究の目的、内容

昨年度に引きつづき、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））の二年度目として、フィジー語諸方言データの地理情報システム（GIS）を活用し、言語情報とその地理情報を組み合わせることで、当該言語の史の変遷についてどのような研究ができるのか、その手法の研究を行う。

GISは近年、考古学や歴史学等の人文科学系分野にも応用されるようになり、成果をあげているが、言語データへの適用は限られている。その理由のひとつに、言語データはその分布域の特定が難しく、そもそも地図上にデータを落とすことが困難であることに加え、その手続きを踏むことの利点が見えにくいことがあげられる。特に、言語データの比較がマクロレベルで行われる場合には、地理情報・地形情報と言語との結びつきはゆるやかであり、人間の目でみて分析することができた。ところが、近年、現地調査による詳細なデータが報告されるに従い、ミクロレベルでの比較再建が必要となってきた。言語は、垂直伝播と水平伝播が入り組んで発達するが、今のところ、これらを組み合わせて動的な史の変遷の模様を解明するツールはない。これを、地面情報を媒介とし、音対応、語彙や文法現象の共有・非共有といった言語情報と、地形や行政や文化にかかわる区域を組み合わせた分析を可能にすることで、新しい研究手法に結び付けられる可能性があると考えている。本研究では、そのためにどのような情報をどのような形でシステムに組み込んでゆく必要があるのか、昨年度に引き続き、基盤整備を進めつつ、合わせて理論的な裏付けについても取り組む。また、国際共同研究、学際共同研究の一例として、課題や解決法について発生の都度、報告をまとめること、また、地図として成果物の博物館展示への応用や社会還元の方法などについても検討することで、学界および社会貢献にも結び付ける。

・成果

本研究は、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「時空間を融合する——GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」（2018.10-2023.3、研究代表者：菊澤律子、日本学術振興会科学研究費補助金）の一部として行った。海外メンバーが確保した研究資金と組み合わせることで、ウェブ上で動作するベータ版を完成した。ニュージーランドで開催したワークショップ & シンポジウムでは、このプロトタイプを操作しながら、言語学、地理学、統計学、文化人類学、それぞれの視点で評価を行い、今後の研究計画をたてた。SESに報告書を投稿中である。

国際シンポジウム「Fijian Languages Symposium」（2020年1月31日）およびサテライト・ワークショップ（2月1日～2日）をニュージーランドのマシー大学で開催した。

詳細 <https://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/rm/20200131>

◎出版物による業績

[編著]

Kikusawa, R. and F. Sano (eds.)

2019 *Minpaku Sign Language Studies 1* (Senri Ethnological Studies 101). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[分担執筆]

菊澤律子

2020 「ポリネシアの言語の起源とアジアとのつながり」 秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか』pp.180-186, 東京：雄山閣。

[論文]

Sagara, K. and R. Kikusawa

2019 Paradigm Leveling in Japanese Sign Language and Related Languages. In R. Kikusawa and F. Sano (eds.) *Minpaku Sign Language Studies 1* (Senri Ethnological Studies 101), pp.147-163. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Kikusawa, R.

- 2019 Utilizing Visual Materials for Introducing the Languages of the World and the World of Language. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing world* (Senri Ethnological Studies 102), pp.195-204. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

菊澤律子

- 2019 「声の言葉と手の言葉²² コトバの変化(2)」『ミネルヴァ通信「究」』97：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²³ 言語と仲間意識」『ミネルヴァ通信「究」』98：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁴ フィジーの地図プロジェクト」『ミネルヴァ通信「究」』99：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁵ フィールドにでかけよう！(1)」『ミネルヴァ通信「究」』100：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁶ フィールドにでかけよう！(2)」『ミネルヴァ通信「究」』101：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁷ フィールドにでかけよう！(3)」『ミネルヴァ通信「究」』102：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁸ ソースコミュニティ還元」『ミネルヴァ通信「究」』103：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉²⁹ 言語アートを垣間見る」『ミネルヴァ通信「究」』104：20-23。
2019 「声の言葉と手の言葉³⁰ 多言語社会に向けて」『ミネルヴァ通信「究」』105：20-23。
2020 「南の島でコトバの調査をはじめのまで」『わたしの外国語漂流記——未知なる言葉と格闘した25人の物語』pp.177-184, 東京：河出書房新社。
2020 「旅・いろいろ地球人 フィジー語で暮らす① 私は『ワイレヴ人』」『毎日新聞』3月7日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 フィジー語で暮らす② 私達ってだれのこと？」『毎日新聞』3月14日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 フィジー語で暮らす③ これ、あげる！」『毎日新聞』3月21日夕刊。
2020 「旅・いろいろ地球人 フィジー語で暮らす④ 単純ではない公用語」『毎日新聞』3月28日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2019年12月7日 'Arbitrary Signs Are More Stable Than Iconic Signs: Evidence from Taiwan Sign Language and Japanese Sign Language.' The 8th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, National Museum of Ethnology
2020年1月31日 'Linguistic Mapping and Historical Analyses: Vertical and Horizontal Transmission and Potential GIS Applications.' Fijian Languages Symposium, Massey University, Palmerston North, New Zealand

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月16日 「フィジー語の森にでかけよう！——『ことば』と『場』と『担い手』と」関西学院大学手話研究センター言語手話学コロキウム『ことばの森に出かけよう！フィールドワークによる言語の研究』関西学院大学梅田キャンパス
2019年7月5日 'Toward the understanding of Alignment Changes and "Subjecthood" in Austronesian Languages.' The 24th International Conference on Historical Linguistics (ICHL24), Australian National University, Canberra, Australia
2019年12月7日 (with Jane Tsay and Keiko Sagara) 'Arbitrary Signs Are More Stable Than Iconic Signs: Evidence from Taiwan Sign Language and Japanese Sign Language.' The 8th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, National Museum of Ethnology
2020年1月28日 (平山 亮と共同発表)「音声および手話生成における運動器官の計測と比較」電子情報通信学会音声研究会 (SP)、高岡市生涯学習センター
2020年3月1日 「音声言語と手話言語の共通点と相違点——言語学の視点と今後の研究への展望」人工知能学会分科会 (言語・音声理解と対話処理研究会)、東海大学清水キャンパス

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員 (1人)

◎調査活動

・海外調査

- 2019年6月4日～6月12日—スペイン (言語展示に関する打合せ)
2019年6月29日～7月15日—オーストラリア (国際歴史言語学会出席・手話言語学研究に関する学術交流)

2019年9月23日～10月2日—ドイツ、スペイン（TISLR 出席・言語展示に関する打合せ）

2020年1月29日～2月3日—ニュージーランド（国際シンポジウムとプロジェクト研究会の開催）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「手話翻訳システム構築を目指した手話対話における文単位の認定」（研究代表者：坊農真弓（国立情報学研究所））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「時空間を融合する——GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（研究代表者：相良啓子）研究分担者

- ・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

日本財団助成金「『手話言語学研究部門』の設置および手話言語学事業の推進」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

Virtual Conference: Language, Communication and Education 学術評価委員、日本言語学会常任委員、日本歴史言語学会会長、大阪大学2017-2019年度全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、Brill's Studies in Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、日本歴史言語学会理事、International Society for Historical Linguistics (ISHL) 国際歴史言語学会評議委員、The Conference on Asian Linguistic Anthropology 専門委員

福岡正太 [ふくおか しょうた] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒（1986）、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了（1991）、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】芸術学修士（東京藝術大学大学院 1991）【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスンダ伝統音楽についての研究【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

[論文]

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端信行編『民族の二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9）pp.144-160, 東京：ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28(2)：257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp.95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究

- ・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究において一定の役割を果

たしてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることができない。一方、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化発展が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、手軽なビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら映像を作成して発表するようになり、映像は音楽芸能にかかわる活動に不可欠なものとして組み込まれつつある。こうした状況の中、研究機関等にとって、音楽関連資料をいかに活用可能な形でアーカイブ化するかが大きな課題となっている。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響および情報メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、①20世紀のアジアにおいて、レコードやラジオなどのメディアおよび博物館や学校などの近代的制度が音楽にもたらした変化を明らかにする研究に取り組む。民博が所蔵する日本コロムビアレーベルの外地録音金属原盤資料について、台湾大学等との研究協力を深めながら、そのデータ共有の意義と方法について検討する。また、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多元的意味に関する研究」（19H01208、代表者：福岡まどか）により、インドネシア芸能の発展とメディアや近代的制度とのかわりについて研究を進める。②楽器資料に関するフォーラム型情報ミュージアム「世界の音楽と楽器」を活用し、通文化的な広がりをもつ双方向的データベースにより、楽器に関する学術的な知識の蓄積と活用の可能性を探るとともに、音楽関連資料のアーカイブ化における諸問題を明らかにする。③科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（18K01205、代表者：福岡正太）により鹿児島徳之島および三島村の芸能を例として、芸能の映像記録を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像記録が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。

・成果

①日本の博物館におけるラーマーヤナに関する展示についての考察をおこない、バンコクで7月に開催された国際伝統音楽学会（ICTM）において、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマーヤナの多元的意味に関する研究」（19H01208、代表者：福岡まどか）の一環として、“Contemporary Development of Ramayana Theatre in Southeast Asia”と題したパネルにおいて、国立民族学博物館の東南アジア展示場におけるラーマーヤナに関連する展示の変遷について研究発表“Southeast Asian Ramayana in a Museum of Japan”をおこなった。また、レコード産業初期の時代に日本に本拠をおくレコード会社（日本蓄音器商会）が台湾向けにどのようなレコードを制作したかを明らかにするため、情報計画事業により、国立民族学博物館が所蔵する金属原盤のうち1910年代に台湾の音楽を録音されたと思われるものを、再生しデジタル化する作業を日本コロムビア（株）に依頼しておこなった。②国立民族学博物館が所蔵する楽器資料の研究の成果の一環として、9月に友の会講演「世界の楽器を探る」をおこなった。また、音楽芸能の研究資料のアーカイブ化に関する研究の一環として、国立民族学博物館が所蔵する「東洋音楽学会調査記録」資料について、その実態と将来の活用の可能性についての研究を進め、埼玉大学で11月に開催された東洋音楽学会大会においてパネル「民博所蔵東洋音楽学会調査記録資料の意義と今後の活用」を組織し、研究発表「民博所蔵東洋音楽学会調査記録資料の研究」をおこなった。さらに、同資料についての研究を発展させるため国立民族学博物館と東洋音楽学会間の連携に関する協定を結んだ。③音楽芸能の上演や伝承において映像記録が果たする役割を実践的に探るため、徳之島の天城町、伊仙町、徳之島町の協力を得て、フォーラム型情報ミュージアム「徳之島の唄と踊り」の活用についての検討を進めた。成果の1つとして、天城町立西阿木名小中学校の授業等での実験的利用に基づき、フォーラム型情報ミュージアムの経費により、教室等で使いやすい画面デザイン等を工夫した。また、共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」（代表者：野澤豊一）において5月に研究発表「ミュージッキングとしての映像記録作成——フォーラム型情報ミュージアム『徳之島の唄と踊り』」をおこなった。さらに、国立民族学博物館学術資源研究開発センターと科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（18K01205、代表者：福岡正太）の共催による国際シンポジウムを3月に開催する準備を進めたが、新型コロナウイルス感染症の広がりにより延期となった。

◎出版物による業績

[分担執筆]

福岡正太

2019 「音楽」白坂 蕃・稲垣 勉・小沢健市・古賀 学・山下晋司編『観光の事典』pp.348-349、東京：朝倉出版。

2019 「ポピュラー音楽」信田敏宏・綾部真雄・岩井美佐紀・加藤 剛・土佐桂子編『東南アジア文化事

典』pp.440-441, 東京：丸善出版。

- 2019 「人形劇」信田敏宏・綾部真雄・岩井美佐紀・加藤 剛・土佐桂子編『東南アジア文化事典』pp.454-455, 東京：丸善出版。

[論文]

Fukuoka, S.

- 2019 The Use of Images in the Music Gallery. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.177-181. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

福岡正太

- 2019 「旅・いろいろ地球人 世界をめぐる楽器① インドの楽器と分類」『毎日新聞』4月6日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 世界をめぐる楽器② 木琴の起源」『毎日新聞』4月13日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 世界をめぐる楽器③ 棒ツィター」『毎日新聞』4月20日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 世界をめぐる楽器④ 名前の一人旅」『毎日新聞』4月27日夕刊。
 2019 「ワヤン人形の目」『月刊みんぱく』43(12)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年5月12日 「ミュージッキングとしての映像記録作成——フォーラム型情報ミュージアム『徳之島の唄と踊り』」『音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年7月13日 'Southeast Asian Ramayana in a Museum of Japan, the 45th International Council for Traditional Music World Conference.' Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand
 2019年11月17日 「民博所蔵東洋音楽学会調査記録資料の研究」東洋音楽学会第70回大会、京都市立芸術大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年7月21日 「ジャワ島のガムランのリズム」第548回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2019年9月14日 「世界の楽器を探る」第127回国立民族学博物館友の会東京講演会、千里文化財団、国立音楽大学

◎調査活動

・海外調査

2019年7月11日～7月18日タイ（国際伝統音楽学会バンコク大会に参加し研究発表をおこなう）
 2019年10月25日～10月29日—韓国（映像上映会への参加および死者儀礼の調査）
 2019年11月21日～11月28日—インドネシア（「世界無形文化遺産フェスティバル2020」にかかわる招聘芸能の調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（3人）、

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアの現代芸術におけるラーマヤナの多面的意味に関する研究」（研究代表者：福岡まどか（大阪大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」（研究代表者：野澤豊一（富山大学））メンバー、国立民族学博物館特別研究「パフォーマンス・アーツと積極の共生」（研究代表者：寺田吉孝）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

広島市立大学「音楽人類学Ⅱ」（集中講義）、広島市立大学「音楽人類学Ⅰ」（集中講義）

・その他の社会活動・館外活動

日本民俗音楽学会理事、東洋音楽学会理事

【学歴】東京工業大学理学部応用物理学専攻（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）【職歴】東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構 CREST 研究員（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2017）【学位】博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）【専攻・専門】文化財情報発信、連想情報学【所属学会】アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

〔論文〕

丸川雄三

2018 「美術関係資料アーカイブズにおける情報管理発信システムの研究」『アート・ドキュメンテーション研究』25：3-17。〔査読有〕

2017 「ミュージアムの情報発信力を高める文化遺産オンラインの活用法」『情報の科学と技術』67(12)：628-632。〔査読有〕

丸川雄三・阿辺川武

2010 「横断的連想検索サービス『想—IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性」『情報管理』53(4)：198-204。

【受賞歴】

2017 第11回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞（身装画像データベース）

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムを、データと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。

2019年度は、美術情報分野を中心とする制作者データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、科学研究費（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2017年度）の助成を受け実施してきたものであるが、研究成果をふまえて今年度も継続して研究を進める。さらに文化庁の「文化遺産オンライン」や国立映画アーカイブの「日本アニメーション映画クラシックス」など、これまで国立情報学研究所高野明彦研究室と共同で進めてきた文化財情報の活用と発信に関する研究を、今年度も継続して進める。

・成果

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究として、国立情報学研究所と国立映画アーカイブの共同研究に参画し、明治から昭和初期に制作された映画フィルムのデジタルアーカイブを活用した情報発信の実証を進めた。その成果として2019年6月にウェブサイト「映像でみる明治の日本」が一般に公開された。この研究に関連して、以前に公開されたウェブサイト「アニメーション映画クラシックス」に関する技術研究論文がSESに採択され12月に刊行された。またデジタル技術を活用した展示場情報発信の研究として、国立情報学研究所と奈良国立博物館の共同研究に参画した。その成果として奈良国立博物館特別陳列「法隆寺金堂壁画写真ガラス原板——文化財写真の軌跡」（会期：2019年12月7日～2020年1月13日）において映像展示とデジタルビューアが公開された。美術情報分野の情報統合手法の研究については、ウェブサイト「『みづゑ』の世界」のリニューアル公開に向けた準備を進めた。その他にミュージアムが所蔵する作品や資料の情報を公開するためのデータ

変換手法の研究に取り組み、成果の一部を2019年6月に開催されたアート・ドキュメンテーション学会で発表した。

◎出版物による業績

[論文]

Marukawa, Y.

2019 Creation of the “Japanese Animated Film Classics” Database. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.145-156. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

丸川雄三

2019 「文化財デジタルアーカイブズの活用を目的としたメタデータ自動付与の研究——文化遺産オンラインにおける過去の取り組みを例に」『2019年度アートドキュメンテーション学会年次大会要旨集』pp.10-11。

2019 「『知の世界』への入り口をつくる」『鴨東通信』108：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月9日 「文化財デジタルアーカイブズの活用を目的としたメタデータ自動付与の研究——文化遺産オンラインにおける過去の取り組みを例に」アート・ドキュメンテーション学会年次大会、成安造形大学

・展示

2019年12月7日～2020年1月13日 「『法隆寺金堂壁画写真ガラス原板』ムービー&デジタルビューア」(制作ディレクション)『特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板——文化財写真の軌跡」』奈良国立博物館

・ウェブサイト

2019年6月27日 「映像でみる明治の日本」国立映画アーカイブ(制作ディレクション)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』)「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(研究代表者:吉田憲司)研究支援分担者、国立情報学研究所客員准教授、国立美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学

・他の機関から委嘱された委員など

日本写真家協会「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」諮問委員

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒(1978)、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻生物工学分野博士前期課程修了(1980)、大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻生物工学分野博士後期課程退学(1983)【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手(1983)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手(1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授(1998)、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任(2000)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授(2004)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授(2007)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授併任(2007)、国立民族学博物館人類学基礎理論研究部准教授(2017)【学位】工学修士(大阪大学大学院基礎工学研究科1980)【専攻・専門】博物館情報学【所属学会】情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

[論文]

Yamamoto, Y., F. Adachi, and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-Digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp.224-225. IEEE Computer Society. [査読有]

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。[査読有]

山本泰則

2011 「国立国会図書館 PORTA と人間文化研究機構統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』pp.53-68, 東京：人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館資料・情報・展示の関係性について

・研究の目的、内容

本研究では、博物館資料（モノ）とそれがもつ情報、情報提示としての展示の3者の関係性について考察をおこなう。博物館では所蔵資料を情報化し、データベースに蓄積している。一方、博物館でおこなう展示は、モノを直接観覧者に提示する行為で、それに資料解説が補われる。民博が所蔵する民族誌資料について、記述に必要不可欠な情報項目や音楽展示・言語展示、ドキュメント展示の方法を分析することにより、モノ資料がもつ情報と展示を介してモノから観覧者に伝わる情報の本質を明かにする。

今年度は、ここ10数年携わってきた共通メタデータによる人文系の分野横断的な検索手法の歴史を再調査するとともに、その限界を明かにし、モノ資料がもつ情報と記述される情報の関係性について考察する。

・成果

今年度は、民博の13のデータベースを国の分野横断ポータルをめざすジャパンサーチを介しても公開する作業を完了した。そして、すでに確立している民博のデータベースを人間文化研究機構の統合検索システム（nihuINT）の登録データへ変換する手続きとは独立して、民博のデータベースからジャパンサーチの登録データに変換する処理方式を確定した。

これにより、以下のことを具体例を通して示すことができた。nihuINTとジャパンサーチはともに異分野間の情報連携を目的とするシステムであるが、共通メタデータに変換したときに損なわれる原データベースの情報に補う方法が異なる。そのため、両者の共通メタデータ間の直接の変換は適切でなく、原データベースからそれぞれの共通メタデータの特性に応じて変換する方が望ましい。この点に関しては、電子図書館やデジタルアーカイブを専門とする宇陀准教授（筑波大、民博客員）とも議論をおこない、賛同を得た。

なお、この成果の一部は、2019年10月に民博で開催された身装文化デジタルアーカイブ研究会において「MCDのnihuINTおよびジャパンサーチへの移行の試み」と題した発表をおこなった。

◎出版物による業績

[論文]

Yamamoto, Y.

2019 Videotheque: Past, Present and Future. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.205-208. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年10月4日 「MCDのnihuINTおよびジャパンサーチへの移行の試み」身装文化デジタルアーカイブ研究会、国立民族学博物館 第4演習室

・みんぱくウィークエンド・サロン

2020年2月16日 「バリ島トゥングナン暦100年分のカレンダーをつくる」第565回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年11月14日～11月15日 「Databases at Minpaku」（博物館とコミュニティ開発コース 個別研修H: Documentation and Databases）国際協力機構、民博社会連携室

吉岡 乾 [よしおか のほる] ————— 准教授

1979年生。【学歴】東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2012）【職歴】国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員PD（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部助教（2017）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授（2019）【学位】博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）【専攻・専門】言語学 記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、南アジア（パキスタン）研究【所属学会】日本言語学会、関西言語学会、日本南アジア学会、Societas Linguistica Europaea

【主要業績】

[論文]

吉岡 乾

2015 「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」パルデシ プラシヤント・桐生和幸・ハイコ ナロック編『有対動詞の通言語的研究——日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』pp.321-334, 東京：くろしお出版。
[査読有]

Yoshioka, N.

2019 The Decay and Reconstruction of Nominal Classes in Srinagar Burushaski. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 44(2): 239-254. [査読有]

2017 Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 41(2): 109-125. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、系統的孤立語であるブルシャスキー語、北パキスタンの消滅の危機に瀕した言語であるドマーキ語を中心しつつ、カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、カシミリー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。

・成果

2019年度は8月から10月に掛けて、パキスタン北部へと現地調査に赴き、ギルギット・バルティスタン州のフンザ谷で東ブルシャスキー語とドマーキ語を、ギルギット市でシナー語と、新規にバシト一語北東方言を、ヤスイン谷でコワール語と西ブルシャスキー語を、ハイバル・パフトゥンフワー州ルンブール谷でカラーシャ語とカティ語とを、それぞれ調査した。ルンブール谷では、2020年度に予定している南アジア展示関連の資料の買い付けに関して、打ち合わせも行って来た。

研究の成果として、10月にブルシャスキー語スリナガル方言に関連したジャーナル論文（英語）を発表した。8月には、現地とフィールド言語学とに関連する一般書を刊行した。近日公開予定の、国立国語研究所の名詞修飾表現データベースに、ブルシャスキー語のデータを提供している。同テーマの論文集も近刊予定で、ブルシャスキー語に関する論文（日本語）を寄稿している。

◎出版物による業績

[単著]

吉岡 乾

2019 『現地嫌いなフィールド言語学者、かく語りき。』大阪：創元社。

[論文]

Yoshioka, N.

2019 The Decay and Reconstruction of Nominal Classes in Srinagar Burushaski. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 44(2): 239-254. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年4月28日 「どうして言葉は変わるのか」第541回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

2020年1月25日 「消滅の危機に瀕した言語」第128回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル御徒町店
サロン

2020年2月13日 「食べるフィールド言語学——「Food×風土」の視点から」『読売新聞 大手町アカデミア：
食べるフィールド言語学——「Food×風土」の視点から』読売新聞ビル3階新聞教室

◎調査活動

・海外調査

2019年8月26日～10月17日—パキスタン（北部にてドマーキ語、ブルシャスキー語、シナー語、パシュトー語、
コワール語、カラーシャ語、カティ語に関する調査）

2020年1月29日～2月5日—ニュージーランド（フィジー語 GIS プロジェクトの会議）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MIND-
AS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見
た日本語の音声と文法」サブプロジェクト「名詞修飾構造」（リーダー：ブラシャント・バルデシ共同研究員、
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「文法の動的体系性を探る(1)：文法
の多重性と分散性」（研究代表者：中山俊秀）共同研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共
同利用・共同研究課題「[アルタイ型]言語に関する類型的研究(2)」（研究代表者：児倉徳和）共同研究員、科
学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「時空間を融合する——GISと数理モデルを用い
た新たな言語変化へのアプローチ」研究分担者

飯泉菜穂子 [いづみ なおこ]——— 特任教授

【学歴】早稲田大学法学部卒（1985）、お茶の水女子大学家政学研究科修士課程修了（1989）【職歴】日本アイビーエム株式会社入社（本社人事部）（1989）、NHK 手話ニュースキャスター（1990）、フリーランス手話通訳、手話講師（1993）、学校法人大東学園・世田谷福祉専門学校手話通訳学科および手話通訳専攻学科学科長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任准教授（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任教授（2017）【学位】家政学修士（お茶の水女子大学、1989）【専攻・専門】手話通訳論、手話通訳養成【所属学会】日本通訳翻訳学会、日本手話通訳士協会、全国手話通訳問題研究会

【主要業績】

[著書]

飯泉菜穂子

2013 「手話通訳士専門養成機関（世田谷福祉専門学校）における養成について」『手話通訳士試験の在り方等
に関する検討会』pp.64-72。

[共著]

小谷眞男・下城史江・飯泉菜穂子

2011 「新しいリベラルアーツとしての日本手話 お茶の水女子大学における『手話学入門』導入の経験から」
『手話学研究』20：19-38。

[映像教材]

飯泉菜穂子

1995 『DVDで学ぶ手話入門講座』<http://www.hj.sanno.ac.jp/ps/course/4092>（構成、テキスト・スクリプト
執筆、演出、ナビゲーターとしての出演）産業能率大学通信教育講座。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証

・研究の目的、内容

目的：将来的に関西地区における学術手話通訳ニーズを関西地区の手話通訳で担うことが出来る最低限度の学術手話通訳の人数確保・質の担保に寄与することを目指した学術手話通訳養成研修事業を展開する。

内容：(1)研修員研修会：スクリーニングにより選考した少人数の「学術手話通訳研修事業研修員」に対して、年間を通じて定期的・安定的に研修会（休日を利用した一日研修会および平日夜間の通訳技術研修会）を実施。(2)学術手話通訳OJT：関連講座およびみんぱく手話部門所属教員の担当する民博主催講座等を研修員による学術手話通訳OJTとして活用。研修事業修了者・担当教員をメンターと位置づけて研修員とメンターの組み合わせでの通訳を実施し、通訳記録映像・音声を用いて研修会で通訳技術検証を実施。(3)関連諸講座：学術手話通訳を目指す一般の通訳者および通訳者を目指す人、通訳者を養成する人を対象とした有料の公開講座①『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』②『みんぱくで手話通訳士を目指そう！』③『みんぱくで手話通訳技術を磨こう！』を実施。(4)『大阪府と国立民族学博物館との手話言語に係る連携協力に関する協定書』を締結。協定に基づくトライアル事業を計画・実施。（飯泉は上記すべての事業のコーディネートおよび講師を担当。）

・成果

学術手話通訳研修事業の中心事業である研修会の回数・質ともに充実させることができた。研修本体と関連講座・民博主催講座を強固に連動させることで、本事業4年目にして、年間を通じてコンスタントに学術領域に特化した研修を提供する環境をようやく構築することができたと判断している。みんぱく手話部門終了予定の2020年度末（2021年3月）を目標に進めている『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』のテキスト発行に向けた準備も進行中である。

新しく大阪府と締結した協定に基づき、大阪府の「手話通訳養成講師の質の向上」（関連講座①『みんぱくで手話言語学を学ぼう！』の現任研修指定）、「登録手話通訳者の質の向上」（関連講座③『みんぱくで手話通訳技術を磨こう！』の現任研修指定）に寄与することができた。のみならず大阪府からは『若手手話通訳者養成トライアル事業』を受託し、手話言語条例関連事業に参画している「若手ろう者の手話通訳理解の向上」「若手聴者の手話通訳技術・業務への関心の向上」に結びつくようそれぞれ「A:late signer 講座」「B:若手手話通訳者講座」を企画した。（しかし、残念ながら、新型コロナウイルス対策の影響のためAは中止、Bも予定していた6講座のうち実施できたのは1講座にとどまった。）そのほか、本事業で使用する手話ネイティブ話者の談話を集めたDVD教材を作成した。若手手話通訳者養成は、学術手話通訳研修事業本体の実施目的との関連性の強い事業であり、来年度も大阪府と協働していく予定である。

◎調査活動

・海外調査

2019年7月16日～7月22日一フランス（世界手話通訳者協会（WASLI）カンファレンス2019への参加）

相良啓子 [さがら けいこ]

特任助教

【学歴】筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻修士課程修了（1999）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所大学院 MPhil 修士課程修了（2014）【職歴】株式会社JTB 首都圏新橋支店営業三課パリアフリーツアー推進担当（2002）、英国セントラル・ランカシャー大学国際手話ろう文化学研究所研究官（2010）、国立民族学博物館プロジェクト研究員（2014）、国立民族学博物館特任助教（2016）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部特任助教（2017）【学位】手話言語学修士（M. Phil.）（セントラル・ランカシャー大学国際手話言語学・ろう者学研究所（iSLanDS）2014）、修士（筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻 1999）【専攻・専門】手話言語学類型論・聴覚障害児教育【所属学会】日本手話学会、日本語学会、日本歴史言語学会、社会言語科学会

【主要業績】

[編著]

Zeshan, U. and K. Sagara (eds.)

2016 *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

[論文]

Sagara, K. and U. Zeshan

2016 A Comparative Typological Study. In U. Zeshan, and K. Sagara (eds.) *Semantic Fields in Sign Languages: Colour, Kinship and Quantification*, pp.3-37. Berlin: Mouton de Gruyter & Nijmegen: Ishara Press.

Nonaka, A., K. Mesh, and K. Sagara

2015 Signed Names in Japanese Sign Language: Linguistic and Cultural Analyses. *Sign Languages Studies* 16(1): 57-85.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明

・研究の目的、内容

本研究の目的は、歴史的に関連がある日本手話、台湾手話、韓国手話（日本手話ファミリー）の語や表現における意味および用法の変化を明らかにし、これら3つの手話言語における史の変遷を体系的に示すことである。本研究は、科学研究費（基盤研究（C））「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（代表者：相良啓子）によって推進していく。まず、現在使用されている表現と似ている形をもつ古日本手話のデータ約「100語」を抜き出し、これらの語彙について音韻および形態の情報を記述する。現在使用されている日本手話については、原が作成した『日本語——日本手話事典』（1997）を基にした語彙の音韻情報のデータベースの中から関連する語を選択し、Global Signbank に登録する。Global Signbank を構築しているラドバウド大学のCrasborn氏と打合せを行い、具体的な語の記述方法と分析のあり方について研究分担者とも確認しながら進めていく。

・成果

6月に、Global Signbank を構築しているラドバウド大学のCrasborn氏および研究分担者の原と、データの登録方法について打合せを行った（科研費、19K00592）。データの入力開始に向けて、現在使用されている表現と似ている形をもつ古日本手話のデータ「100語」の抜き出し作業を進めている。

本研究の関連として、9月にハンブルク大学で開催された第13回国際手話言語学会において、「Numeral Variants and Their Diachronic Changes in Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language and Korean Sign Language」についてのポスター発表を行った。また、「日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化——『10』『100』『1000』に着目して」のタイトルで執筆した論文が、『国立民族学博物館研究報告44巻3号』に掲載された。

◎出版物による業績

[共著]

加藤三保子・小林昌之・相良啓子・赤堀仁美・重田千輝・中山真一郎

2020 『アジア太平洋諸国の手話』（DVD付）岐阜：コムラ

[分担執筆]

菊澤律子・相良啓子

2019 「日本手話の方言」木部暢子編『明解方言学辞典』pp.114-115, 東京：三省堂。

[論文]

相良啓子

2020 「日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化——『10』『100』『1000』に着目して」『国立民族学博物館研究報告』44(3)：557-583。[査読有]

Kikusawa, R. and K. Sagara

2019 Paradigm Leveling in Japanese Sign Language and Related Languages. In R. Kikusawa and F. Sano (eds.) *Minpaku Sign Language Studies 1* (Senri Ethnological Studies 101), pp.147-163. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月26日 'Chinese Language Influences on Tibetan Sign Language Users in Lhasa: Cardinal

- Numbers and Days of the Week.' Theoretical Issues in Sign Language Research 13, University of Hamburg, Hamburg, Germany
- 2019年9月26日 'Numeral Variants and Their Diachronic Changes in Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language and Korean Sign Language.' Theoretical Issues in Sign Language Research 13, University of Hamburg, Hamburg, Germany
- 2019年12月6日 'Arbitrary Signs Are More Stable Than Iconic Signs: Evidence from Taiwan Sign Language and Japanese Sign Language.' The 8th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, National Museum of Ethnology
- 2019年12月7日 「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語の数変化」GEC手話科目開講記念シンポジウム『日本手話を学ぼう——日本にある「もう一つの言語」の習得を目指して!』早稲田大学

◎調査活動

・海外調査

- 2019年7月9日～8月6日—連合王国、フランス（手話言語と音声言語の社会言語学シンポジウムでの発表、世界ろう者会議への参加、研究打合せ等）
- 2019年9月24日～9月30日—ドイツ（TISLR13での研究発表とTISLR14（in Minpaku）に向けての打合せ）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
- 科学研究費（基盤研究（B））「アジア太平洋諸国における手話の対照言語学的研究：外国手話事典の編集をめざして」（研究代表者：加藤三保子（豊橋技術科学大学））研究分担者

超域フィールド科学研究部

林 勲男 [はやし いさお] ————— 部長（併）教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2001）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2012）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2018）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2019）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長（2019）【学位】文学修士（立教大学大学院文学研究科1983）【専攻・専門】社会人類学 パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、オセアニア近代史の人類学的研究、自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会、The International Union of Anthropology and Ethnological Sciences (IUAES)、Japan Anthropology Workshop (JAWS)

【主要業績】

[編著]

林 勲男編

- 2016 『災害文化の継承と創造』京都：臨川書店。
- 2015 『アジア太平洋諸国の災害復興』東京：明石書店。
- 2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害の想起における媒体の役割——遺構・モニュメント・語り継ぎ

・研究の目的、内容

大規模災害の被災地では、遺構や遺物の保存・公開、モニュメントの建立、被災体験の語り継ぎなどによって、被災経験を後世に継承していかうとの活動が生まれる。その一方で、こうした活動は、被災の苦悩や悲痛さを喚起するものとして、反対もしくは距離を置く人びとも存在する。本研究は、大規模災害の集合的記憶を、物を介して保存・伝承（物象化）したり、言葉により語り継いでいく（物語化）活動をプロセスとして、それぞれの地域社会の動態の中で捉える。今年度は、記憶と物質性と語りの関係について先行研究を整理するとともに、現地調査を東日本大震災と新潟県中越地震の被災地で予定している。調査には、科学研究費（基盤研究（A））「災害の想起における媒体の役割——遺構・モニュメント・語り継ぎ」（研究代表者：林 勲男）を当てる。

・成果

2019年11月16日、東北大学災害科学国際研究所主催による講演会にて「災害を伝える——ミュージアムと災害の記憶・記録」（於：同研究所気仙沼分室）のタイトルで講演をおこない、研究成果の一端を紹介した。

2020年1月24日から26日に神戸市で開催した「2020世界災害語り継ぎフォーラム」の実行委員として関わり、上記科研プロジェクトが共催となり、25日には分科会「災害遺構と記憶の継承」を開催した。成果は2020年度に日・英語で出版予定である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2019年11月16日 「災害を伝える——ミュージアムと災害の記憶・記録」第32回防災文化講演会、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

◎調査活動

・海外調査

2019年12月23日～12月29日—インドネシア（アチェ津波ミュージアム及び災害遺構・モニュメントに関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「マイクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築——20世紀前半収集資料を中心として」（研究代表者：林 勲男）研究代表者

宇田川妙子 [うだがわ たえこ]——教授

1960年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】東京大学教養学部助手（1990）、中部大学国際関係学部講師（1992）、中部大学国際関係学部助教授（1995）、金沢大学文学部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2002）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2018）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究、ジェンダーとセクシャリティ研究、ヨーロッパ近代をめぐる問題群【所属学会】日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[単著]

宇田川妙子

2015 『城壁内からみるイタリア——ジェンダーを問い直す』京都：臨川書店。

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2016 『仕事の人類学——労働中心主義の向こうへ』京都：世界思想社。

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』京都：世界思想社。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。今年度は、昨年度同様、食という観点からの研究調査を続けるが、特に家族を中心とする親密圏との関連に焦点をあてる。

・成果

本年度は、昨年度同様、食の場面に着目して、主として親密な関係性と公的な関係性との関連についての研究を行った。また、親密な関係性に関しては、セクシュアリティ研究の再検討にも着手した。その主な成果は以下の通りである。

[刊行物]

2019年9月 『『地中海料理』というイメージ——国民料理を補助線として』西澤治彦編 『『国民料理』の形成』 pp.88-108, ドメス出版。

2019年9月 「むしろ、ジェンダー研究を進化論から見直すために」『日本人類学会進化人類学分科会ニューズレター』 pp.23-27。

[口頭発表等]

2019年9月28日 「イタリアの食におけるナショナル・ローカル・グローバル——トマトを事例として」イタリア近現代史研究会第40回全国大会「品種改良と食文化」、京都キャンパスプラザ。

2019年11月2日 「イタリアの食に関わる運動における『地域』」地域研究コンソーシアム一般公開シンポジウム「グローバル時代の文化力」、国立民族学博物館。

2019年12月11日 「イタリア人と食——生活を楽しむために」（阪急生活楽校講演会）阪急、みんぱく友の会（千里財団）、阪急うめだホール。

2020年1月18日 「イタリアにおける人と食のかかわり——地域への関心」第499回みんぱくゼミナール、国立民族学博物館。

◎出版物による業績

[分担執筆]

宇田川妙子

2019 『『地中海料理』というイメージ——国民料理を補助線として』西澤治彦編 『『国民料理』の形成』 pp.88-108, 東京：ドメス出版。

[その他]

宇田川妙子

2019 「むしろ、ジェンダー研究を進化論から見直すために」『日本人類学会進化人類学分科会ニューズレター』（2019/9）：23-27。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月28日 「イタリアの食におけるナショナル・ローカル・グローバル——トマトを事例として」イタリア近現代史研究会第40回全国大会『品種改良と食文化』京都キャンパスプラザ

2019年11月2日 「イタリアの食にかかわる運動における『地域』」2019年度地域研究コンソーシアム年次集会一般公開シンポジウム『グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント』国立民族学博物館

- ・ **みんぱくゼミナール**
2020年1月18日 「イタリアにおける人と食のかかわり——地域への関心」第499回みんぱくゼミナール
- ・ **みんぱくウィークエンド・サロン**
2019年12月15日 「サンタクロースとなまはげ——ヨーロッパの時間と季節の感覚」第562回みんぱくウィーク
エンド・サロン 研究者と話そう
- ・ **広報・社会連携活動**
2019年12月11日 「イタリア人と食——生活を楽しむために」阪急うめだ本店・千里文化財団主催阪急生活楽校
講演会、阪急うめだホール
- ◎ **調査活動**
- ・ **海外調査**
2019年10月20日～11月1日—イタリア（イタリアのフードムーブメント組織の運営に関する調査研究）
- ◎ **大学院教育**
- ・ **指導教員**
副指導教員（2人）
- ◎ **上記以外の研究活動**
- ・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など**
科学研究費（挑戦的研究（開拓））「個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究」（研
究代表者：出口正之）研究分担者
- ◎ **社会活動・館外活動**
- ・ **他の機関から委嘱された委員など**
日本文化人類学会評議員

樫永真佐夫 [かしなが まさお]————— 教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、ベトナム民族学博物館客員研究員（1997）、放送大学学園非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）、総合研究大学院大学教授併任（2016）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授（2017）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。

2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。

2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナムにおける黒タイ文字と文書

- ・研究の目的、内容

ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイ（ベトナムではターイの地方集団として分類）の伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。

とくに黒タイ文化の独自性が近代以降にどのように構築され、現在に至るまでどのように継承されてきたのかを視野に入れつつ、黒タイの「伝統」を考察する。

- ・成果

『季刊民族学』に、黒タイが伝えてきた独自の暦の特徴について、暮らしとの関わりから描き出した「黒タイの暦」を2019年4月に発表した。

『東南アジア文化事典』（丸善出版）の「タイ」「米」「ビンロウ」「格闘技」の項目を執筆し2019年10月刊行した。

ボクシングの受容と発展に関する各個研究の最終成果として、2019年4月に拳で殴る暴力の精神史を描いた単著『殴り合いの文化史』を左右社から刊行した。この成果に関連するその他の業績としては、エッセー「100年前のボクシング——『チャップリンの拳闘』」を『月刊みんぱく』（2019年9月号）の執筆、文筆家佐伯誠氏との対談「思索の射程、知の体幹」（2019年9月12日（木） 於・東京都渋谷区 Roundabout）、哲学者萱野稔人氏との対談記事が『月刊サイゾー』2020年2月号と3月号に連載された。

外部資金の導入はない。

- ◎出版物による業績

- [単著]

樫永真佐夫

2019 『殴り合いの文化史』東京：左右社。

- [分担執筆]

樫永真佐夫

2019 「タイ」信田敏宏編『東南アジア文化事典』p.107, 東京：丸善出版。

2019 「米」信田敏宏編『東南アジア文化事典』pp.394-395, 東京：丸善出版。

2019 「ビンロウ」信田敏宏編『東南アジア文化事典』pp.418-419, 東京：丸善出版。

2019 「格闘技」信田敏宏編『東南アジア文化事典』pp.492-493, 東京：丸善出版。

- [論文]

樫永真佐夫

2019 「ベトナム、黒タイの暮らしと暦」『季刊民族学』168：32-39。

- [その他]

樫永真佐夫

2019 「100年前のボクシング——『チャップリンの拳闘』」『月刊みんぱく』43(9)：18-19。

- ◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月12日 「思索の射程、知の体幹」『殴り合いの文化史』（左右社）刊行記念対談、Roundabout

2019年9月30日 「『殴り合いの文化史』について」アイアイ例会、ローレルタワーサンクタス梅田30階会議室

2019年10月27日 「『殴り合いの文化史』出版記念講演」一般社団法人日本ハイインテンシティトレーニング協会例会、ホテル京阪京橋グランデ

- ◎調査活動

- ・海外調査

2019年11月21日～12月2日—ベトナム、ラオス（ベトナムとラオスの文化的多様性について情報収集）

- ◎大学院教育

- ・指導教員

副指導教員（1人）

- ・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

- ・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）、博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に」(研究代表者：小野林太郎) メンバー

韓 敏 [ハン ミン]—————教授

1960年生。【学歴】中国吉林大学外国語学部日本語科卒(1983)、中国吉林大学大学院外国文学言語研究科日本文学専攻修士課程修了(1986)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了(1989)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了(1993)【職歴】武蔵大学人文学部非常勤講師(1992)、東京大学教養学部客員研究員(1994)、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師(1995)、東洋英和女学院大学社会科学部助教授(1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授(2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授(2001)、Harvard University Fairbank Center for East Asian Research Visiting Scholar(2002)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科教授(2011)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2011)、国立民族学博物館民族社会研究部研究部長(2012)、人間文化研究機構国立民族学博物館運営会議委員(2012)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授(2017)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部研究部長(2017)、人間文化機構国立民族学博物館運営会議委員(2017)【学位】学術博士(文化人類学)(東京大学大学院総合文化研究科 1993)、学術修士(文化人類学)(東京大学大学院総合文化研究科 1989)、文学修士(中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986)【専攻・専門】社会、歴史と象徴に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

韓 敏

2015 『大地の民に学ぶ 激動する故郷、中国』(フィールドワーク選書18) 京都：臨川書店。

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

韓 敏編

2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』 東京：風響社。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

社会、歴史と象徴に関する超域フィールドの研究

・研究の目的、内容

本研究は、近代社会における社会記憶と歴史の資源化に焦点を当て、超域フィールドの視点から国家と社会の多様な関係性を考察する。

具体的に昨年度に引き続き、人間文化研究機構北東アジア地域研究(代表者 池谷和信)の分担者として、中国北部のシボ族における歴史と文化の資源化の動態について論文執筆を行う。また、本館の共同研究「グローバル時代における寛容性/非寛容性をめぐるナラティブ・ポリティクス」(2018.10-2022.3 代表：山 泰幸)の分担者として、中国の口頭伝承における異人論の要素およびその口承性や書承性を考える。最後に、これまでの研究成果をまとめ、毛沢東をめぐる社会記憶に関する単著を執筆する。

・成果

これまでの研究成果をまとめ、論文執筆や口頭発表に努めてきた。

具体的に人間文化研究機構北東アジア地域研究(代表者 池谷和信)の分担者として、中国北部のシボ族における歴史と文化の資源化の動態について英語の論文を執筆しているところである。

また、儺戯、龍舞、獅子舞と京劇に関する項目の執筆を完成し、『世界の仮面文化事典』(丸善出版)に掲載

する予定である。

2019年3月1日(金)に本館において開催された学術潮流フォーラムⅡ 超域フィールド科学研究部・国際シンポジウム「歴史のロジックと構想力——世界のフィールドから」について、英文のエッセイ *The Logic and Conception of History: Cross-field approaches from the world* を執筆し、MINPAKU Anthropology Newsletter (48: 13-14) に掲載し、世界に発信した。

また、中国展示場において、第546回ウィークエンド・サロンを担当し、「中国文化の中の『動物』たち」(2019/06/30) について、動物のもつ社会的、文化的意味およびその変化を紹介した。

◎出版物による業績

[その他]

韓 敏

2020 「みんぱく回遊 茶の旅」『月刊みんぱく』44(1): 16-17。

Han, M.

2019 *The Logic and Conception of History: Cross-Field Approaches from the World. MINPAKU Anthropology Newsletter* 48: 13-14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年6月30日 「中国文化の中の『動物』たち」第546回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員 (5人)

・博士論文審査委員 (総研大に限る)

博士論文審査委員 (1件)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「グローバル時代における『寛容性／非寛容性』をめぐるナラティブ・ポリティクス」(研究代表者: 山 泰幸) メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」(拠点代表者: 池谷和信) 拠点構成員

◎学会の開催

2019年11月2日 地域研究コンソーシアム「グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント」国立民族学博物館第4セミナー室

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョゼフ]————— 教授

1959年生。【学歴】オークランド大学生物科学部人類科学部植物学卒 (1981)、オークランド大学大学院生物科学植物学修士課程修了 (1984)、オーストラリア国立大学大学院先史考古学遺伝学博士課程修了 (1990) 【職歴】科学技術庁農水産省野菜茶業試験場特別研究員 (1990)、日本学術振興会 Plant Science 特別研究員 (京都大学理学部) (1993)、Freelance Editor/Self-employed Editor (1994)、国立民族学博物館助手 (1995)、国立民族学博物館助教授 (1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任 (2002)、国立民族学博物館研究戦略センター助教授 (2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授 (2008)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2015)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授 (2017) 【学位】Ph.D. (オーストラリア国立大学 1990)、M. Sc. (オークランド大学 1984) 【専攻・専門】民族植物学、先史学【所属学会】Society for Economic Botany、Indo-Pacific Prehistory Association、Society of Writers, Editors and Translators、International Aroid Society、European Association of Science Editors、World Archaeology Congress、Royal Society of New Zealand

【主要業績】

[単著]

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison, and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Ahmed, I., P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart

2013 Identification of Chloroplast Genome Loci Suitable for High-Resolution Phylogeographic Studies of *Colocasia esculenta* (L.) Schott (Araceae) and Closely Related Taxa. *Molecular Ecology Resources* 13(5): 929–937.

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

1. 『東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証』科学研究費（基盤研究（B））海外学術調査 課題番号17H04614、2017年度～2020年度）研究代表者として、海外の研究者と共同して研究を進める。
2. 『政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統知の賦存』科学研究費（基盤研究（A））海外学術調査 課題番号17H01682、2017年度～2020年度）研究分担者として、海外の研究者と共同して研究を進める。

・研究の目的、内容

1. MoUs were prepared with a counterpart (Dr Mhd A. Hossain) at Bangladesh Agricultural University, Mymensingh, where I gave a lecture on 7th Nov., 2019. DNA sequences obtained from samples collected in Bangladesh, Vietnam and China were analysed. I also visited the Department of Sociology, Delhi University, India, as an associated visiting researcher, and conducted fieldwork in Kolkata, where I also gave a lecture at the Acharya Jagadish Chandra Bose Indian Botanical Garden (19th Sept., 2019).
2. For the study of plant genetic resources, I established an MoU with the School of Forestry, Kasetsart University, then carried out fieldwork in Bangkok and vicinity with Dr Duangchai Sookchaloem from the Dept of Forest Biology, Kasetsart University. On 15th Jan. 2020, I gave a lecture at the Dept of Forest Biology.

・成果

See publications.

Public outreach & exhibition

Continued to (i) serve as leader for the Oceania Gallery curatorial team, Minpaku, and as leader of the Editorial panel for Minpaku Anthropology Newsletter, (ii) maintain two websites, The Research Cooperative (<http://researchcooperative.org>), and Wild Taro Project (<http://colocasia.net>), and (iii) serve as a board member for the New Zealand Studies Society - Japan (<http://nzstudies.org>). Published a short essay in Minpaku Monthly (Feb. 1, 2020): “Toshio Asaeda and Templeton Crocker: journeys for art and science”.

◎出版物による業績

[共著]

Aoyagi, M., H. Ikeda, A. Otani, M. Kondo, H. Shiota, H. Shibata, and Matthews, P

2019 Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand Today*. Yokohama: Shumpusha.

[論文]

Matthews, P. J.

2019 Why are Kauri Dying? In Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand Today*, pp.130–131. Yokohama: Shumpusha.

2019 Can I Swim in This? In Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand Today*, pp.128–129. Yokohama: Shumpusha.

2019 Zealandia: the 7th Continent? In Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand*

Today, pp.2-3. Yokohama: Shumpusha.

2019 Why is Auckland the “City of Sails”? In Japan Society for New Zealand Studies (ed.) *New Zealand Today*, pp.190-191. Yokohama: Shumpusha.

◎調査活動

・海外調査

2019年8月21日～9月5日—フランス (École nationale des chartes (フランス国立古文書学校) で開催される国際交流研究会で発表、Bonaguil Castleでワークショップ「From Earth to Air, an Archaeology of Dreams」を開催)

2019年9月14日～10月2日—インド (デリー大学でのセミナー開催、研究打ち合わせ。コルカタ植物園での標本調査。ガンジス川流域のサトイモ科植物の野外調査)

2019年11月1日～11月10日—バングラディッシュ (バングラディッシュ農科大学でのMoU締結、セミナー開催、研究打ち合わせ、サトイモ科植物の野外調査)

2020年1月13日～1月24日—タイ (カセサート大学でのMoU締結、セミナー開催、研究打ち合わせ、サトイモ科植物の野外調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (A)) 「政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統の賦存」 (研究代表者: 渡邊和男 (筑波大学)) 研究分担者、科学研究費 (基盤研究 (B)) 「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」 研究代表者

太田心平 [おおた しんぺい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒 (1998)、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了 (2000)、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得退学 (2003)、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了 (2007) 【職歴】文部科学省アジア諸国等派遣留学生 (2000)、(韓国) ソウル大学社会文化研究院比較文化研究所研究員 (2003)、(韓国) 暎園大学歴史・哲学部非常勤講師 (2003)、(韓国) ソウル女子大学教養教育部非常勤講師 (2003)、日本学術振興会特別研究員 (PD) (2004)、京都産業大学文化学部非常勤講師 (2004)、天理大学国際文化学部非常勤講師 (2005)、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手 (2005)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教 (2007)、同志社大学社会学部嘱託講師 (2007)、大阪大学大学院人間科学研究科招へい研究員 (2007)、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者 (2009)、国立民族学博物館研究戦略センター助教 (2010)、宮崎公立大学人文学部非常勤講師 (2010)、(米国) アメリカ自然史博物館人類学部門上級研究員 (2011)、国立民族学博物館民族社会研究部助教 (2012)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授 (2013)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授 (2014)、大阪大学大学院人間科学研究科非常勤講師 (2014)、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授 (2017) 【学位】博士 (人間科学) (大阪大学 2007)、修士 (人間科学) (大阪大学 2000) 【専攻・専門】北東アジア研究、博物館学、社会文化人類学 【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会 (韓国)、Association for Asian Studies (米国)、韓国・朝鮮文化研究会、American Anthropological Association (米国)

【主要業績】

[分担執筆]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336, 京都: 昭和堂。

[論文]

오타 심페이

2006 「료한 : 일본에서의 한국문화 표상양식에 관한 지식인류학적 연구」『한국문화인류학』39(2): 85-128. [査読有]

Ota, S. C.

2015 Collection or Plunder: The Vanishing Sweet Memories of South Korea's Democracy Movement. In K.

Hirai (ed.) *Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia* (Senri Ethnological Studies 91), pp.79-193. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に2つの柱を立て、両側面から研究を推進する。

第1の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ——マイクロ双対性をもっていたのか、その一貫性と非連続性を明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとする。この期間には、これまでに公開した研究成果を整理しなおしつつ、新しい関連研究とつきあわせて再検討し、総括する作業を進める。この推進のため、人間文化研究機構の地域研究推進事業である北東アジア地域研究プロジェクトの資金を使用する。

第2の柱は、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、本館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」を研究代表者として既に実施している。また、研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業するが、この兼業も同プロジェクトのためである。

・成果

上記3で示した第1の柱に関しては、主題に関連する国際研究グループを作り、それを率いた。IUAES (国際人類学・民族学連合) の2019年大会パネル「Rethinking the Relationships between Real Societies and Cyberspaces」を、デンマーク国立博物館のMartin Petersen 上席研究員とともに組織して採択され、その一部として個人発表「The Laboratory for Anyone: South Korean (Anti-)Ethno-Nationalism on HellKorea.com」をおこなう一方、パネル全体に対するコメントを韓国科学技術院の金東柱助教と分担して務めた。なお、これは韓国文化人類学会の海外理事としての活動でもあった。このパネルを準備し、学会に参加するために、人間文化研究機構の地域研究推進事業である北東アジア地域研究プロジェクトの資金を使用した。

一方、上記3で示した第2の柱に関しては、本館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの資金を資料し、資料データベースの強化について所定の成果を上げた。特に、アメリカ自然史博物館人類学部門の研究者および技術者で行ってきた国際共同研究に、本館の外来研究員や総合研究大学院大学の大学院生を参加させたことで、このプロジェクトの推進のみならず、次世代の研究者にも研究のためのノウハウやネットワークを伝えることが出来たものと考えられる。ただし、本年度の最終四半期に予定していた総括のための活動は、新型コロナウイルスの国際的感染拡大のため、断念せざるをえなかった。

◎出版物による業績

[その他]

太田心平

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国に特有のこと① 元日はみんなが歳をとる日」『毎日新聞』1月4日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国に特有のこと② キャッシュレス先進国の気持ち」『毎日新聞』1月11日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国に特有のこと③ 化粧する青少年たち」『毎日新聞』1月18日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 韓国に特有のこと④ 急速な国民の再編成」『毎日新聞』1月25日夕刊。

2020 「改良韓服は語る」『みんぱく e-news』224：巻頭コラム。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年8月30日 'Rethinking the Relationships between Real Societies and Cyberspaces.' IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities", Adam Michiewicz University, Poznan, Poland

2019年8月30日 'The Laboratory for Anyone: South Korean (Anti-)Ethno-Nationalism on HellKorea.com.' IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities", Adam Michiewicz University, Poznan, Poland

・研究講演

2019年5月11日 「嗜好品とAI」嗜好品文化研究会、京都新聞社

・展示

2019年6月1日～2020年3月31日 「梅棹忠夫生誕100年記念企画展『知的生産のフロンティア』ワーキング」
国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2020年2月11日 「韓国人はどうして大統領を罷免できたのか」大阪府高齢者大学校「現代社会を考える科」

2020年2月19日 「韓国の親日と反日は矛盾しない」大阪府高齢者大学校「現代社会を考える科」

◎調査活動

・海外調査

2019年7月19日～9月12日—アメリカ合衆国、オランダ、ポーランド（アメリカ自然史博物館において標本資料データベースに関する研究、アダムミツケヴィッチ大学においてIUAES年次大会への参加と研究動向調査）

2019年9月26日～9月30日—韓国（朝鮮半島の文化展示の改修にかかる標本資料の収集）

2019年12月1日～12月9日—韓国（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの成果物評価会について協議）

2019年12月20日～2020年1月22日—アメリカ合衆国（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの成果物の最終調整とその評価会について協議）

2020年2月20日～3月31日—アメリカ合衆国（米国の現政権下の移民制度とニューカマー韓国系移民の調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習I」、「地域文化学基礎演習II」、「比較文化学基礎演習I」、「比較文化学基礎演習II」

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（強化型）「朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

Grant for Int'l Study Trip, Dept. of Anthropology BrainKorea21 Plus Team of Seoul Nat'l Univ. 「Preliminary Fieldwork on the Contemporary Sociocultures in Machiya Neighborhoods」（研究代表者：JIN, Seo-Hyun (Department of Anthropology at Seoul National University, MA Student)) Field Advisor、International Scholarship Exchange of PhD Candidates, Polish National Agency for Academic Exchange 「Field Research on Japanese Urban Legends」（研究代表者：SALAMONIK, Anna (Institute of Anthropology and Archeology, University of Gdansk, PhD Student)) Organiser

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

株式会社CDI嗜好品文化研究会メンバー、韓国文化人類學會海外理事、味の素の文化研究所責任編集委員

・他大学の客員、非常勤講師

American Museum of Natural History・Research Associate

1959年生。【**学歴**】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学（1992）【**職歴**】帝京大学非常勤講師（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、東方研究会専任研究員（1992）、国立民族学博物館第三研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2004）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【**学位**】博士（文学）（筑波大学大学院 2019）、文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【**専攻・専門**】宗教学・東欧研究【**所属学会**】東方研究会

【**主要業績**】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【**2019年度の活動報告**】

◎各研究

・研究課題

知識人亡命の二つの形態——国外のミルチャ・エリアーデと国内のコンスタンティン・ノイカ

・研究の目的、内容

社会主義体制が成立した国々では、それ以前の体制に尽くした知識人たちは亡命を余儀なくされた。ルーマニアの場合、エリアーデ、シオラン、イヨネスクなどは国外へ逃れたが、ノイカは国内にとどまり、厳しい監視下に置かれた。亡命は故郷喪失の悲惨な体験であるが、前者たちはそれによって世界史に残る名声を得ることになった。一方、後者は弾圧下での苦しい体験を経たが真に後継者とよべるリチュエヌたち思想家たちを育てた。これら二つの異なる運命から知識人の移動とはなんなのかという問いを立ててみたい。ロシアのツァーリ体制、スターリン体制、ドイツのナチズム体制から逃れた知識人たちについての古典的なテーマに属するものではあるが、ルーマニアの歴史事情に即して考察を行って知識人の戦略、教育使命、権力との関わり方などについてエリアーデとノイカを通して考察した。

・成果

研究の成果は「戦間期ルーマニアの知識人と歴史表象」（平藤喜久子編『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』所収、2020年4月刊行予定）として発表される。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱくゼミナール

2019年11月16日 「ルーマニア近代の知識人と民衆——民族主義、正教信仰、社会主義のなかで」第497回みんぱくゼミナール

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] 准教授

【学歴】 東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科アジア第三専攻博士前期課程修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻博士後期課程修了（2006）**【職歴】** 総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、総合研究大学院大学融合推進センター特別研究員（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）、滋賀県立大学非常勤講師（2012）、神戸女子大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2016）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）**【学位】** 博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）**【専攻・専門】** 文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）**【所属学会】** 日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

- 2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。
- 2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。
- 2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：溪水社。

【受賞歴】

- 2006 長倉研究奨励賞
2006 総研大研究賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

20世紀前半、歴史的パレスチナで活躍したナジブ・ナッサーらアラブ・ナショナリストの活動について調査する。宗教をこえたナショナル・アイデンティティの創出の過程をあきらかにするとともに、キリスト教徒であった彼ら自身の宗教的アイデンティティが、彼らの執筆活動に与えた影響をさぐる。また、平行して彼らがおもな活動の場としていたアラビア語紙に寄稿していた中東系ユダヤ教徒に注目し、アラビア語によるアラブ・ナショナリズムとシオニズムの議論とその影響を調査する。

・成果

年度前半は現代中東地域研究国立民族学博物館拠点のメンバーとして、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『見られる私』より『見る私』」の準備と運営、後半は委員長をつとめるJICA博物館学コースの運営に多大な労力を割いた。前者において、各個研究とのかかわる部分については、2019年8月19日におこなったウィークエンドサロン「ヒジャーズとパレスチナ、その歴史的なかかわり」で講演した。

各個研究の内容については、2019年5月1日におこなわれたイスラーム映画祭4の解説としても講演した。ほかに、コーヒー文化研究については2017年度におこなった新着資料展示「標交紀の咖啡の世界」をもとに、西アジア展示内に「グローバル文化としてのコーヒー」を新しくもうけた。この新セクションについては、いずれ研究の推進にとまない内容を拡充してゆくことを視野に入れている。

さらに、特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の関連書籍として出版された山中由里子・山田仁史（編）『この世のキワ〈自然〉の内と外』に、「歴史的パレスチナという場とジン憑き」（pp.149-162）を寄稿した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

菅瀬晶子

2019 「歴史的パレスチナという場とジン憑き」山中由里子・山田仁史編『この世のキワ——〈自然〉の内と外』（アジア遊学 239）pp.149-162, 東京：勉誠出版。

◎調査活動

・海外調査

2019年7月14日～8月6日—イスラエル、パレスチナ自治区、連合王国（歴史的パレスチナにおけるアラブ・ナショナリズムの調査、およびキリスト教祝祭の参与観察）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

奈良雅史 [なら まさし] ————— 准教授

1982年生。【学歴】筑波大学第一学群人文学類卒（2005）、筑波大学大学院人文社会科学研究科一貫制博士課程修了（2014）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD／国立民族学博物館（2014）、Sciences Po Bordeaux Les Afriques dans le monde 客員研究員（2015）、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院助教（2015）、北海道大学メディア・コミュニケーション研究院准教授（2017）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2019）【学位】博士（文学）（筑波大学大学院人文社会科学研究科、2014）、修士（文学）（筑波大学大学院人文社会科学研究科、2008）【専攻・専門】文化人類学、中国地域研究、イスラーム地域研究【所属学会】日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)、EASSSR (East Asian Society for the Scientific Study of Religion)

【主要業績】

[単著]

奈良雅史

2016 『現代中国の〈イスラーム運動〉——生きにくさを生きる回族の民族誌』東京：風響社。

[共編]

西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編

2019 『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』京都：ミネルヴァ書房。

澤井充生・奈良雅史編

2015 『「周縁」を生きる少数民族——現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』東京：勉誠出版。

【受賞歴】

2020 観光学術学会2020年度教育啓蒙著作賞

2018 北海道大学平成29年度教育研究総長表彰（研究部門）

2017 日本文化人類学会第12回日本文化人類学会奨励賞

2017 国際宗教研究所第12回国際宗教研究所賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

宗教と移動に関する人類学的研究——現代中国における回族の事例から

・研究の目的、内容

本研究は、中国内陸部から中国沿岸部にアラビア語通訳として出稼ぎに行く、回族と呼ばれるムスリム・マイノリティの動きに焦点を当て、中国政府による「一帯一路」構想の推進に伴う中国とイスラーム諸国との間での経済交流の促進が人々の移動の活発化をもたらし、イスラーム復興を促進してきたプロセスを明らかにすることを目的とする。

本研究は、研究代表者を務める科学研究費（若手研究）（19K13454）「宗教と移動をめぐる人類学的研究——現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」研究分担者として加わる科学研究費（基盤研究（B））（18H00787）

「中国ムスリムの超国家・超民族的ネットワークの構築と多文化共生圏の創出に関する研究」、科学研究費（基盤研究（B））（17H02248）「東アジアにおける拡張現実時代の観光に関する研究」の援助を受けて実施する。

本研究では以上の目的を達成するため、回族と呼ばれるムスリム・マイノリティの出身地におけるイスラーム復興の状況と沿岸部への出稼ぎの実態を明らかにする。本年度はこれらの地域における現地調査を通じて、宗教活動に大きく影響する中国共産党の宗教政策、および出稼ぎに影響する中国共産党の経済政策の実施状況についても明らかにするとともに、出稼ぎ先でのトランスナショナルなムスリム・コミュニティの実態とそこの宗教実践のあり方を明らかにする。

・成果

当該研究による成果は以下である。

◎出版物による業績

[編著]

西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編

2019 『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』京都：ミネルヴァ書房。

[分担執筆]

奈良雅史

2019 「観光の領域横断的な拡がり——中国ムスリムの宗教／観光実践」西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』pp.182-199, 京都：ミネルヴァ書房。

2019 「ムスリムによる公益活動の展開——中国雲南省昆明市回族社会の事例から」石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』pp.291-326, 横浜：春風社。

[その他]

奈良雅史

2019 「書評とリプライ 鈴木正崇著『東アジアの民族と文化の変貌——少数民族と漢族、中国と日本』』『宗教と社会』25：162-166。

2019 「国立民族学博物館の収藏品⑩ 中国のコーラン」『文部科学 教育通信』464：2。

2019 「義理の親？」『月刊みんぱく』43(8)：20。

2019 「書評 木村自著『雲南ムスリム・ディアスポラの民族誌』』『文化人類学』84(2)：202-205。

2020 「回族の宣教活動に参加する」『月刊みんぱく』44(1)：10-11。

2020 「回回は天下に遍し」『月刊みんぱく』44(3)：16-17。

2020 「エスニック・ツーリズム開発に伴う民族間関係の変化——中国雲南省における回族社会の事例から」『國學院大學研究開発センター研究紀要』14：196-214。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年11月28日 「エスニシティの変容とゆらぐマジョリティ／マイノリティの境界——中国雲南省における回族の事例から」2019年みんぱく若手研究者奨励セミナー『ゆらぐマジョリティ／マイノリティ』

・民博研究懇談会

2019年7月24日 「民族間関係の変容——中国雲南省回族社会における民族観光とイスラモフォビア」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年7月27日 'Exchange of Piety: Islamic Revival and Social Change among Hui Muslims in Contemporary China.' The 2nd Annual Conference of the EASSSR (East Asian Society for the Scientific Study of Religion), Hokkaido University, Sapporo

2019年8月30日 'Entanglement of Islamic Missionary Activities and Islamophobia through Tourism Development: A Case Study of Hui Muslim Society in Yunnan Province, China.' The IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) 2019 Inter-Congress "World Solidarities", Adam michiewicz University, Poznan, Poland

2019年9月12日 「日本の回民研究」中日人類学学术交流研讨会、中央民俗大学、北京、中国

2019年9月28日 'Changes in Textbooks of Islamic Education and Entanglements of Ethnicity and Religiosity.' EAAA (East Asian Anthropological Association) Annual Meeting 2019, 全北大学校、全州市、韓国

2019年10月14日 「『異教徒』を迎え入れる——中国雲南省紅河州沙甸区における民族観光」日本文化人類学会
課題研究懇談会『歓待の人類学』第3回公開研究会、札幌市民交流プラザ

・研究講演

2019年10月9日 「オンライン・コミュニティによる観光実践——観光が生み出す社会的つながり」北海道大学
メディア・コミュニケーション研究院2019年度公開講座『観光とメディアの新たな出会い』
北海道大学

・広報・社会連携活動

2020年1月11日 「中国に生きるムスリムたち」第496回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2019年8月5日～8月11日—台湾（台北市、桃園市、新竹県、屏東県、台南市にて客家の宗教信仰に関する調査）

2019年8月26日～9月2日—ポーランド（IUAES（国際人類学民族科学連合）2019 Inter-Congressに参加し、基
盤研究（B）「東アジアにおける拡張現実時代の観光に関する研究」（17H02248）の
成果として口頭発表を行うとともに、当該プロジェクトに関する情報収集を行う）

2019年9月15日～9月22日—中国（浙江省義烏市にてトランスナショナルなムスリム・コミュニティに関する
調査）

2019年10月31日～11月4日—台湾（台北市、桃園市、宜蘭市にて台湾におけるムスリム・コミュニティに関す
る調査）

2020年1月16日～1月20日—中国（香港、マカオ、珠海市にてムスリム・コミュニティに関する調査）

2020年2月29日～3月18日—台湾（台北市、桃園市にて台湾におけるムスリム・コミュニティに関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「東アジアにおける拡張現実時代の観光に関する研究」（研究代表者：山田義裕
（北海道大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「中国ムスリムの超国家・超民族的ネットワークの
構築と多文化共生圏の創出に関する研究」（研究代表者：木村 自（立教大学））研究分担者、科学研究費（若
手研究）「宗教と移動をめぐる人類学的研究——現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク」研究代表者、国立
民族学博物館共同研究「グローバル化時代における『観光化／脱——観光化』のダイナミズムに関する研究」
（研究代表者：東賢太朗（名古屋大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中
国研究の理論的的定位——12のテーマをめぐる再検討と再評価」（研究代表者：河合洋尚）メンバー、東北大学東
北アジア研究センター共同研究「移動と流行——移民がもたらしたもの／持ち帰ったもの」（研究代表者：川口
幸大（東北大学））メンバー、京都大学「東南アジア研究の国際共同研究拠点」共同研究「移動者がホームにも
たらずもの——中国と東南アジアにおける人口移動と送り出し社会の変容」（研究代表者：堀江未央）メンバー

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

植松東アジア研究基金「エスニシティと多文化共生をめぐる人類学的研究——台湾ムスリム・コミュニティの
事例から」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会『文化人類学』編集委員

松尾瑞穂 [まつお みずほ] ————— 准教授

【学歴】 南山大学文学部人類学科卒（1999）、名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了
（2002）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士後期課程単位取得退学（2007）【職歴】 日本学術振
興会特別研究員（PD）（2007）、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科講師（2010）、新潟国際情報大学情報
文化学部情報文化学科准教授（2013）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2014）、国立民族学博物館超
域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】 文学博士（総合研究大学院大学文化科学研究科 2008）、学術修士

(名古屋大学大学院国際開発研究科 2002)【専攻・専門】文化人類学、ジェンダー医療人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本宗教学会、宗教と社会学会

【主要業績】

[単著]

松尾瑞穂

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学——インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013 『インドにおける代理出産の文化論——出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

[編著]

杉本良男・松尾瑞穂編

2019 『聖地のポリティクス——ユーラシア地域大国の比較から』東京：風響社。[査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インドにおけるサブスタンスと人種に関する研究

・研究の目的、内容

(1) 目的

本研究は、南アジアにおける遺伝子というサブスタンスとそれにまつわる諸実践を検討することを通して、人、家族、親族、カースト、宗教といった自他のカテゴリーの生成や圍繞、他者とのつながり (relatedness) の様態の変容について明らかにすることを目的とする。サブスタンスとは、親子や家族、集団の間で共有し、継承されるとみなされる身体構成物を指す。このサブスタンスの共有がいかに関と集団のカテゴリーの同定や差異を形成するののかについて、血液、母乳、精液といった、南アジア社会における伝統的なサブスタンス概念と、卵子、精子のような配偶子や遺伝子といった新しいサブスタンス概念との比較に注目する。また、人種のような集団の差異の「自然化」や「実体化」にサブスタンスが作用するメカニズムを考察することも目的である。

本研究が具体的に対象とするのは、インドにおける人種や民族、カーストといった集団の差異化において、血と遺伝子をめぐる言説が、社会のなかで科学的知識として生成され、流通し、機能している様態である。そこには、歴史、政治、ナショナリズムなどが複雑に絡み合っている。例えば、ヒンドゥーナショナリズムの台頭と宗教的対立が深まる近年のインドにおいては、ヒンドゥーとムスリムの(想像される)本質化された差異が強調されている。このような絡み合いを解きほぐすことを通じて、「遺伝子化」の時代における社会集団の範疇化や他者との差異化について考察を行う。

(2) 内容

1) インドにおける人種概念の検討

インドにおける人種主義は、大英帝国の植民地支配や、植民地下での啓蒙主義的人種主義とロマン主義的人種主義の交錯、アーリア人概念の変遷、民族とカーストなどが複雑に絡み合って成立している。例えば、インドでは「アーリア人侵略説」は、先住性と権利を主張する南のドラヴィダ系政党によっては政治的なアジェンダとなる一方で、その否定は、ヒンドゥー・ナショナリストにとってはインド文明の連続性を主張する思想的基盤を与えるものとなる。インドにおける人種概念は、欧米のそれとはまったく異なった位置づけを持っているのである。近年では、こうした集団の差異を歴史的な解釈のみならず、より「科学的」だとみなされる遺伝子や生物学的差異によって同定しようとする動きも広がっている。例えば、形質人類学、考古学、遺伝学などを用いて、インダス文明の担い手は、南部のドラヴィダ系集団と類似性が高くみられる、と結論付ける研究知見は、単なる「科学的事実」とはならず、常に政治的な論争的になる。こうした科学を取り巻く状況のなか、インドにおいて人種という概念はどのように変化し、現在ではどのようなものとして現れるのだろうか。今年度は、アーリア人学説、インダス文明論、歴史修正主義、ムスリム異人種論について特に資料を読解し、分析する。

2) ヒンドゥーとムスリムの「差異」の検討

ヒンドゥーナショナリズムの思想的支柱とされる「ヒンドゥットワ」は、インド=ヒンドゥースタン(ヒンドゥーの土地)に生きる人は、言語、宗教、カースト、階級などの差異にかかわらず、本質的に「ヒンドゥー」であるとする概念である。そこでは、インドに居住するムスリムもヒンドゥーからの改宗者であることが強調され、本来的にはヒンドゥーであるといなされる本質的同化主義が主張されている。だが、その一方で近年で

はヒンドゥーとムスリムを生物学的に（人種的に）異なる集団であるとして、差異化する言説も広まっている。そのどちらもが、同時に進展しながら、他者としてのムスリム像を作り上げてきた。ヒンドゥーとムスリムの差異について語られる際のイディオムとして、何がどのように用いられているのか。ヒンドゥーとムスリムの差異が顕在化するいくつかの事例の検討を行う。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、現地調査、共同研究会の組織・運営、現代南アジア地域研究事業（INDAS）第11回国際シンポジウム「Life and Death in Contemporary South Asia: Living through the age of Hope and Precariousness」の企画・運営、第32回日本南アジア学会での分科会「Food and body in South Asia」での研究報告をはじめとする多数の学会、ワークショップ、共同研究会での研究報告を実施した。これらを通して、インドにおける配偶子（卵子や精子）がインド社会で有する文化的な特徴の明確化と、生殖医療（代理出産や配偶子提供など）の現場における卵子のような新たなサブスタンスの可視化、顕在化について明らかにするとともに、それがより広範囲の人種といった社会的カテゴリーと接合する文脈について考察を深めた。暫定的に、1) 今日、インドにおける「人種」概念は、宗教的差異（特にヒンドゥーとムスリム）との関係づけが顕著になっていること、2) 血とともに、遺伝子というイディオムの使用が専門職だけでなく、少なくとも都市部の若い世代では一般化されつつあること（たとえばネット空間）、3) それゆえ、人種とサブスタンスの関係はきわめて政治化されていること、が明らかになった。同時に、人種概念の歴史性（導入時の現地語への翻訳過程、カーストと宗教の人種との混合など）をより詳細にたどる必要があるという課題も明らかとなった。

競争的資金を得た調査研究活動は、次の通り実施した。まず、松尾が代表を務める科学研究費（若手研究（B））「現代インドにおける遺伝子の社会的配置に関する人類学的研究」として、インドにおける遺伝的つながりと血のつながりの認識における差異と類似、および民俗生殖論の観念などについて、文献調査およびインド・マハーラーシュトラ州での聞き取り調査を行った。都市部でのドナー配偶子利用者へのインタビューおよび農村部での生殖年齢にある女性たちへの生殖観に関する調査を行った。

また、研究分担者である科学研究費（基盤研究（B））「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究——ジェンダーの視点から」（研究代表：白井千晶静岡大学教授）のため、前年度までに収集したデータの整備・分析を勧めるとともに、成果報告会および報告書の作成を行った。さらに、MINDAS（現代南アジア地域研究・民博拠点）プロジェクトの一環として、スリランカにおけるサブスタンスと生殖に関する予備的調査を実施し、スリランカにおける出産、授乳慣行、ラクテーション管理、生殖医療に関してコロポ市、キャンディ市等で病院の訪問調査、産婦人科医への聞き取り調査、保健師・看護師調査を行った。また、分担者となっている科学研究費（基盤研究（B））「開発のアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表：杉田映理大阪大学准教授）の一環で、インドとシンガポールにおいて、教育現場における月経・性教育に関する政府およびNGOの取り組み、教材開発とローカルな社会の慣習の変容に関する調査を行った。

研究会活動としては、3年半にわたる研究会の最終年度にあたる民博の共同研究会「グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置の比較研究」を研究代表として組織し、開催するとともに、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代南アジア地域研究」（MINDAS）として、松尾がリーダーを務める「社会変動と親密圏」班の運営を行った。

成果公開として、科研の成果報告書『現代アジアのリプロダクションの変容に関する国際比較研究』の分担執筆（「インド」「スリランカ」）、『月刊みんぱく』へのエッセイを執筆、刊行するとともに、学会・共同研究会等での研究報告を10回、来館者向け講演会を1回実施した。

◎出版物による業績

[その他]

松尾瑞穂

2019 「鬼の棲む島——『鬼ヶ島』の古今東西」特集「驚異と怪異——想像界の生きものたち」『月刊みんぱく』43(8)：8-9。

2020 「シネ倶楽部M 月経のタブーに挑む心優しきヒーロー『パッドマン——5億人の女性を救った男』」『月刊みんぱく』44(1)：18-19。

2020 「インド」白井千晶編『現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究——ジェンダーの視点から調査報告書』pp.233-247。

2020 「スリランカ」白井千晶編『現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究——ジェンダーの視点から調査報告書』pp.248-261。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年7月13日 「サブスタンスの人類学に向けて——序論検討」研究会『グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究』国立民族学博物館

2020年2月2日 「サブスタンスと関係性の構築と分断」研究会『文化人類学を自然化する』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月2日 'Sociocultural Practices Influencing the Medical Termination of Pregnancy in India.' 第71回日本人口学会、香川大学

2019年9月5日 'Blood and Egg: Making Relatedness in Third-Party Assisted Reproductive Technologies (ARTs) in India.' XI AFIN International Conference, Granada University, Granada, Spain

2019年10月6日 'The Body in Difference: "Naturalisation" of the Communal Difference in India.' 日本南アジア学会第32回全国大会、慶應義塾大学（査読あり）

2019年10月18日 「身体物質のやり取りから見えるもの——サブスタンス研究の射程」京都市人類学研究会10月例会、京都大学

2019年10月26日 'Living with Bodily Contingency: Pregnancy loss among childless women in West India.' 2019 INDAS シンポジウム国内研究会、京都大学

2019年12月14日 'Living with Bodily Contingency: Pregnancy Loss among Childless Women in West India.' 2019 INDAS Symposium on Life and Death in Contemporary South Asia, Ryukoku University, Kyoto

2020年1月6日 'Creating Relatedness, Cutting Ties: Corporeal Reality in Third-Party Assisted Reproductive Technologies in India.' 9th Annual Arts, Humanities, Social Sciences and Education Conference, Prince Waikiki, Hawaii, United States

2020年1月25日 「サブスタンス概念の検討とその射程」中部人類学談話会（日本文化人類学会中部地区研究懇談会）、名古屋大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年10月20日 「インドにおける異形の神々」第557回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年8月1日～8月16日—インド（インドにおける生殖観と遺伝的つながりに関する調査）

2020年2月18日～2月29日—スリランカ（スリランカにおけるリプロダクションの実践に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究（B））「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表者：杉田映理（大阪大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「現代アジアのリプロダクションに関する国際比較研究——ジェンダーの視点から」（研究代表者：白井千晶（静岡大学））研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））「遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化——インドにおける血と遺伝子を中心に」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

人類文明誌研究部

飯田 卓 [いいだ たく] 部長（併）教授

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻准教授（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2018）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻教授兼任（2018）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2019）、国立民族学博物館人類文明誌研究部研究部長（2019）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）【専攻・専門】漁撈社会、技術と知識、物質文化、視覚メディア、文化遺産、日本人類学史【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会、地域漁業学会、日本島嶼学会、環境社会学会、Association of Critical Heritage Studies

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2014 『身をもって知る技法——マダガスカル漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

[編著]

飯田 卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）大阪：国立民族学博物館。

【受賞歴】

2010 第22回 日本アフリカ学会学術研究奨励賞（日本アフリカ学会）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

知識と情報、コミュニケーションに関する諸概念の理論的検討

・研究の目的、内容

2018年度末に刊行された論文“Traveling and Indwelling Knowledge: Learning and Technological Exchange among Vevo Fishermen in Madagascar” (Keiichi Omura et al. (eds.) *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, London and New York: Routledge, pp.190-204) において、筆者は、知識と呼ばれているものについて広く考察し、①個人の身体に宿る身体知、②物理的属性や形態・構造などのかたちでモノが備えた情報、③メディアに記録された情報、④ヒトがモノを知覚したりヒトとヒトとのあいだでコミュニケーションがおこなわれるさいに受け渡される情報、などに分類できることを指摘した。本研究ではこれらの概念を基礎として、信念や確証できないことから、想像、期待、夢想、幻想などの現象の情報学的基盤について考察する。

理論的研究であるため、特段の外部資金獲得を予定してはいないものの、進行中のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトや特別研究、また申請中の科研費プロジェクトなどの成果もできるだけ本研究に関わらせて考察していく。

・成果

共同研究「エージェンシーの定立と作用（2013～2016年度）」の研究成果『存在論的コミュニケーションの人類学』（杉島敬志編、臨川書店、2019年）において「技術習得と知識共有——マダガスカル漁撈民ヴェズの事例から考える」を分担執筆し、近年の人類学における存在論的転回の議論において既刊の情報論を位置づけた。ま

た、同じく共同研究「呪術の実践＝知の現代的位相（2014～2017年度）」の研究成果『呪術の現代的位相——文化人類学的探究』（川田牧人・白川千尋・飯田 卓編、春風社、印刷中）の一章として「経験されざるものを知る——マダガスカル漁撈民ヴェズにおける霊と呪術のリアリティ」を準備し、環境のアフォーダンスを手がかりとした想像世界のたち現れについて論じた。ただし後者の問題は、知覚に連続したアブダクションの観点からより深く考察する必要がある。この点は、中川 敏を代表とする共同研究会「文化人類学を自然化する（2017年度～2020年度）」における口頭発表で明確化し、同研究においてさらに深めていく予定である。

◎出版物による業績

[分担執筆]

飯田 卓

2019 「技術習得と知識共有——マダガスカル漁撈民ヴェズの事例から考える」杉島敬志編『コミュニケーション的存在論の人類学』pp.304-342, 京都：臨川書店。

Iida, T.

2019 DiPLAS: Academic Image Platform for Twentieth-Century Photographs. In N. Sonoda (ed.) *Conservation of Cultural Heritage in a Changing World* (Senri Ethnological Studies 102), pp.165-174. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

[その他]

飯田 卓

2019 「書評 高田 明著『相互行為の人類学——「心」と「文化」が出会う場所』『アジア・アフリカ地域研究』19(1)：68-71。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年2月2日 「読むことの現象学」研究会『文化人類学を自然化する』（代表者：中川 敏）国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月18日 「くらしのなかの文化遺産——物質文化研究と博物館活動、そして文化継承支援を統合する試み」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学、京都

2019年6月18日 'Communal Wellbeing among Competitive Fishermen.' International Seminar by the UK-Japan Network on the Political Ecology of Coastal Societies "The Politics and Pitfalls of Maritime Governance", University of Aberdeen, Aberdeen, United Kingdom

2019年6月18日 'What Matters for Natural Kelp Collectors and Kelp Aquafarmers? Physical and Social Factors Taken in Account.' International Seminar by the UK-Japan Network on the Political Ecology of Coastal Societies "The Politics and Pitfalls of Maritime Governance", University of Aberdeen, Aberdeen, United Kingdom

2019年7月13日 「国立民族学博物館のアフリカ研究」TICAD7パートナー事業シンポジウム『日本のアフリカ研究を総覧する』上智大学四谷キャンパス、東京

2020年3月2日 'Ethnology in Interwar Japan: Keizo Shibusawa's Ethnographic Collection and Its Surrounding Currents.' Conference au Musée d'Ethnographie de Genève, Musée d'Ethnographie de Genève, Genève, Switzerland

・広報・社会連携活動

2019年11月15日 「遺産観光におけるバーチャリティ」第20回みんぱく公開講演会『アニメ「聖地」巡礼——サブカルチャー遺産の現在』日経ホール、東京

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年5月27日 「マダガスカルのバスケットリー」科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」（代表：上羽陽子）研究会、国立民族学博物館

2019年5月27日 「無形文化遺産はマダガスカルでいかにふるまったか——ザフィマニリの木彫り知識を事例に」科学研究費（基盤研究（B））「文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究——東部アフリカを事例に」（代表：飯田 卓）研究会、国立民族学博物館

2019年6月10日 「日常生活的文化遺産化（日常生活の文化遺産化）——馬達加斯加木彫商品化案例（マダガスカルの木彫り商品化を例に）」（國立臺北藝術大學博班實驗室系列講座『時空移轉・文化續存』國立臺北藝術大學、臺北、台湾

◎調査活動

・海外調査

2019年6月9日～6月10日—台湾（文化遺産に関する研究打合せ）

2019年6月16日～6月22日—連合王国（アバディーン大学の研究会「沿岸社会のポリティカルエコロジー」への参加）

2019年7月24日～8月25日—ケニア（スワヒリ海岸部の文化遺産とそれを支えるコミュニティの調査）

2019年10月24日～11月11日—マダガスカル（マダガスカル海岸部の文化遺産とそれを支えるコミュニティの調査）

2019年11月28日～11月30日—韓国（日本と韓国の漁業に関する展示観覧と研究会参加）

2020年1月8日～1月17日—ケニア（ケニア国内における文化遺産行政の調査）

2020年2月27日～3月15日—スイス、フランス、連合王国（両大戦間期の人類学界における日仏交流に関する調査、文化遺産の人類学に関わるシンポジウム準備としての研究打ちあわせ）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究」（研究代表者：吉田憲司）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究——イワシをめぐる韓国の民俗変化」（研究代表者：松田陸彦（国立歴史民俗博物館））連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：Peter Matthews）連携研究者、科学研究費（基盤研究（S））「『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服——人類の未来を展望する総合的地域研究」（研究代表者：松田素二（京都大学））連携研究者、科学研究費（基盤研究（B））「文化遺産の『社会的ふるまい』に関する応用人類学的研究——東部アフリカを事例に」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」（研究代表者：上羽陽子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「ファシズム期における日独伊のナショナリズムとインテリジェンスに関する人類学史」（研究代表者：中生勝美（桜美林大学））研究分担者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」（研究代表者：中生勝美（桜美林大学））メンバー、国立民族学博物館共同研究「文化人類学を自然化する」（研究代表者：中川 敏（大阪大学））メンバー、人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」（研究代表者：日高真吾）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館企画展示「海がつなぐ日本と韓国（仮称）」展示プロジェクト委員、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会「民間ユネスコ活動助成のための補助事業」審査委員、日本文化人類学会理事、日本文化人類学会評議員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員、ICOM（国際博物館会議）京都大会運営委員、京都大学東南アジア研究所 CIRAS センター（京都大学地域研究情報統合センター）共同研究課題選考委員、文化遺産国際協力コンソーシアムアフリカ分科会委員、マダガスカル研究懇談会世話役

・他大学の客員、非常勤講師

静岡県立大学国際関係学部「国際社会論」（集中講義）、神戸大学大学院国際文化学研究所「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）

池谷和信 [いけや かずのぶ] ————— 教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】京都大学アフリカ地域研究センター教務補佐員（1987）、日本学術振興会特別研究員（DC）（1989）、北海道大学文学部附属北方文化研究施設文化人類学部門助手

(1990)、国立民族学博物館第一研究部助手(1995)、国立民族学博物館民族社会研究部人類環境部門助教(1998)、総合研究大学院大学先導科学研究科生命体科学専攻助教(1999)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2007)、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻教授(2007)国立民族学博物館民族文化研究部研究部長(2015)、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授(2017)、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長(2019)【学位】理学博士(東北大学大学院理学研究科 2003)【専攻・専門】環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、植民地時代における民族社会の変容に関する研究、地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合(IUAES)、アメリカ人類学会(American Anthropological Association)、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会、国際狩猟採集民学会(International Society for Hunter Gatherer Research)

【主要業績】

[単著]

池谷和信

- 2014 『人間にとってスイカとは何か——カラハリ狩猟民と考える』(フィールドワーク選書5)京都:臨川書店。
- 2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』仙台:東北大学出版会。
- 2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』(国立民族学博物館研究叢書4)大阪:国立民族学博物館。

【受賞歴】

- 2007 日本地理学会優秀賞
- 1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

狩猟採集民の生業に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人類文明誌研究の一環として、「狩猟採集民の生業の歴史の変容を把握すること」が目的である。これまでの狩猟採集民の歴史研究においては、植民地以前や先史時代の狩猟採集民とのかかわり方が不明瞭であった。本研究では、狩猟採集民の生業に注目して過去100年を超える時間のなかでの変容と持続を把握することが目的である。このため、アフリカ南部のカラハリ砂漠での地域研究を軸にして、西アジアのヨルダン地域、東南アジアの大陸部、シベリア北東部における先史から現在までの狩猟採集民の歴史を復元することを計画している。

・成果

狩猟採集民の生業に関する歴史人類学的研究では、3つの成果がでている。

1) 論文:2019年5月末に、狩猟採集民の犬猟に関する論文(「犬を使用する狩猟法の人類史」)が、学術図書分担部として刊行された。この論文は、カラハリ砂漠のサンの犬猟の実態を軸にしながらも世界の狩猟採集民の犬猟に関する一般的傾向に言及している。

2) 短報:アラビア半島の岩絵に描かれている犬と人のかかわりに対して民族考古学的に解釈を加えた。「アジアの新人文化における狩猟活動について——アラビア半島の犬猟に注目して」野林厚志編『パレオアジア文化史学B01班 2019年研究報告』4、1-4頁。

3) 研究発表:名古屋大学の門脇誠二氏との連名で、国際第四紀学会(ダブリン)にて報告した。報告タイトルは、“Adaptive strategy to dryland among Paleolithic hunter-gatherers: ethno-archaeological approach of using water and animals in southern Jordan”である。なお、参加したセッションにはマックスプランク研究所(人類史)の研究者が多く、最先端の情報を得るには有効であった。

なお、狩猟採集民の生業そのものではないが、狩猟採集民の装飾文化や認知革命を扱っている研究が2020年3月に刊行された。それは、「序章:人類とビーズ」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.1-20、昭和堂である。今後、先史狩猟採集民の生業と装飾とのかかわり方を論議する予定である。

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[編著書]

池谷和信編

2020 『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』京都：昭和堂。

[論文]

黒澤弥悦・池谷和信

2019 「変わりつつあるイノシシと人の関係」『BIOSTORY』31：8-13。

池谷和信・那須浩郎

2019 「変わりつつある野菜と人の関係」『BIOSTORY』32：8-13。

池谷和信

2019 「犬を使用する狩猟法（犬猟）の人類史」大石高典・近藤社秋・池田光穂編『犬からみた人類史』pp.46-67, 東京：勉誠出版。

2020 「サン、ソマリ」『先住民の宝』pp.91-106, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「アジアの新人文化における狩猟活動について ——アラビア半島の犬猟に注目して」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究 B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.1-4, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）

2020 「序章 人類とビーズ」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.1-20, 京都：昭和堂

2020 「日本で華開くビーズ文化——ガラスビーズ・ビーズバッグ・ビーズ織り」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.285-295, 京都：昭和堂

[その他]

池谷和信

2019 「ビーズに秘められた可能性⑥ 生き物の歯」『Bead Art & Embroidery』29：66-69。

2019 「東南アジアの狩猟採集民からみた旧石器時代人の環境適応」野林厚志・彭宇潔・高木仁編『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会』pp.4-5, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班。

2019 「ビーズに秘められた可能性⑦ 多様な素材」『Bead Art & Embroidery』30：60-63。

2019 「イッカクとユニコーン」山中由里子編『驚異と怪異——想像界の生きものたち』p.225, 東京：河出書房新社。

2019 「ビーズに秘められた可能性⑧ ビーズバッグ」『Bead Art & Embroidery』31：66-69。

2019 「アフリカ人の心のあり方」『大法輪』86(11)：104-108。

2019 「アジアの狩猟採集民の多様性」門脇誠二編『「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」第7回研究大会予稿集』18-19, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班。

2019 「ハンターとともに走る」『月刊みんぱく』43(4)：10-11。

2020 「アマゾンにおけるベッカー狩猟活動について」川本直美・中尾央編『出ユーラシア・プロジェクト第1集 第2回全体会議予稿集』p.35。

2020 「主役なき土地権運動——カラハリ先住民」『季刊民族学』171：56-63。

2020 「おわりに——人類の美の起源を探る」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.296-297, 京都：昭和堂。

2020 「はじめに」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.i-ii, 京都：昭和堂。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「アジアの狩猟採集民の多様性」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学

2019年5月18日 「カラハリ狩猟採集民における物質文化の変容——狩猟具に注目して」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学

- 2019年5月25日 「営みにさぐる「ヒトらしさ」」国立科学博物館、千里文化財団主催トークイベント『ヒトってなんだ??——ホモ・サピエンスの誕生から文化の獲得まで』国立科学博物館
- 2019年6月15日 「趣旨説明」味の素食の文化センター・食の文化フォーラム40周年記念I『食の人類史』第1回「食資源の開発」、味の素グループ高輪研修センター
- 2019年6月15日 「狩猟採集民の食」味の素食の文化センター・食の文化フォーラム40周年記念I『食の人類史』第1回「食資源の開発」、味の素グループ高輪研修センター
- 2019年7月30日 (K. Ikeya and S. Kadowaki) 'Adaptive Strategy to Dryland among Paleolithic Hunter-Gatherers: Ethno-Archaeological Approach of Using Water and Animals in Southern Jordan.' INQUA (The International Union for Quaternary Research) 2019, Convention Centre Dublin, Ireland
- 2019年9月12日 「生き物文化誌の今後」生き物文化誌研究会、東京大学総合研究博物館
- 2019年9月21日 (池谷和信・高木 仁)「開会挨拶・趣旨説明」生き物文化誌学会・ウミガメ例会(テーマ:「ウミガメの文化誌」)、神戸市須磨区民センター
- 2019年9月28日 「趣旨説明」味の素食の文化センター・食の文化フォーラム40周年記念I『食の人類史』第2回「食の行動」、味の素グループ高輪研修センター
- 2019年10月19日 (Adi Prasetijo and K. Ikeya) 'Hunter-Gatherers in Indonesia.' Minpaku Workshop "Hunter-Gatherers in Asia: Ecological Adaptation and Social Relationships", National Museum of Ethnology
- 2019年10月19日 'Introduction.' Minpaku Workshop "Hunter-Gatherers in Asia: Ecological Adaptation and Social Relationships", National Museum of Ethnology
- 2019年10月29日 「日本の山村研究の最前線——佐々木高明氏の写真からの展望」北東アジア地域研究プロジェクト・民博拠点月例会、国立民族学博物館
- 2019年11月2日 「1960年の五木村の暮らし——佐々木高明氏の写真から」熊本県五木村伝承館
- 2019年12月4日 「人類は何を食べてきたか?——フィールドワークから探る肉食の30万年」大手町アカデミア・人間文化研究機構コラボ、読売新聞ビル、東京
- 2019年12月7日 (佐藤靖明・池谷和信)「趣旨説明」生き物文化誌学会第77回例会『バナナの文化誌』熱川バナナワニ園
- 2020年12月14日 「東南アジアの狩猟採集民からみた旧石器時代人の環境適応」パレオアジア文化史学第8回研究大会、国立民族学博物館
- 2020年1月11日～11月12日 「アマゾンにおけるベッカーリヤ狩猟活動について」出ユーラシア・プロジェクト第2回全体会議(ポスター発表)、南山大学
- 2020年1月31日 'Hunter-gatherers and culture in Africa: Bow and arrows as an index of foraging behaviors.' The SOKENDAI Advanced Science Synergy Program (SASSP) Minpaku Seminar on the Integrated Anthropology, National Museum of Ethnology
- 2020年2月1日 「世界のハンターと動物」ヒトと動物の関係学会・関西シンポジウム『狩猟採集の現代』国立民族学博物館
- 2020年2月29日 「趣旨説明」味の素食の文化センター・食の文化フォーラム40周年記念I『食の人類史』第3回「食の価値観」、味の素グループ高輪研修センター
- ・研究講演
- 2019年4月27日 「企画展『ビーズ——自然をつなぐ、世界をつなぐ』民博 vs. 科博」講演会、国立科学博物館
- 2019年11月22日 「装いの文化誌——アフリカのビーズに注目して」『国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装』ギャラリートーク、阪急うめだギャラリ
- ・展示活動
- 2019年4月9日～6月16日 国立民族学博物館・国立科学博物館共同企画展「ビーズ——自然をつなぐ、世界をつなぐ」実行委員
- 2019年11月13日～25日 阪急うめだギャラリ 阪急うめだ本店/国立民族学博物館/千里文化財団主催「国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装」実行委員
- ・みんぱくウィークエンド・サロン
- 2019年4月21日 「認知革命とビーズ」第54回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・ 広報・社会連携活動

- 2019年6月4日 「ニワトリと人」兵庫県阪神シニアカレッジ、国際理解学科
- 2019年6月4日 「ラクダの文化誌」兵庫県阪神シニアカレッジ、国際理解学科
- 2019年7月19日 「ブタの文化誌」兵庫県阪神シニアカレッジ、国際理解学科
- 2019年7月19日 「クジラ、イルカの文化誌」兵庫県阪神シニアカレッジ、国際理解学科

◎調査活動

・ 国内調査

- 2019年9月16日—高知県室戸市（日本におけるウミガメと人のかかわりに関する資料収集）
- 2019年10月9日—静岡県東伊豆町熱川（人とバナナに関する資料収集）
- 2019年11月2日～11月4日—熊本県五木村（焼畑に関する調査）
- 2019年12月7日～12月8日—静岡県東伊豆町熱川（人とバナナに関する資料収集）
- 2020年2月7日～2月9日—宮城県気仙沼市（海の生き物文化に関する資料収集）

・ 海外調査

- 2019年6月6日～6月13日—インド、ブータン（家畜資源に関する資料収集）
- 2019年7月28日～8月5日—アイルランド、フランス（INQUA（International Union for Quaternary Research）2019の研究会議出席・発表および研究情報収集・打合せ）
- 2019年8月13日～8月25日—ブータン（家畜資源に関する資料収集）
- 2019年8月28日～9月3日—ヨルダン（先史時代の狩猟採集民の生業に関する資料収集）
- 2019年11月26日～11月29日—マレーシア（食文化の資料収集およびThe 9th Asian Food Study Conferenceに参加）
- 2019年12月8日～12月13日—ラオス（アジアにおける人間と動物の関係に関する調査）
- 2019年12月21日～12月27日—インドネシア（先史時代の狩猟採集民の生業に関する調査）
- 2020年1月21日～1月25日—アメリカ合衆国（人と動物の関係に関する研究資料収集）
- 2020年2月15日～2月23日—ペルー（アマゾンにおける生業複合に関する研究資料収集）

◎大学院教育

・ 指導教員

主任指導教員（3人）、副指導教員（2人）

・ 博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「低生産性品種・形質に向けられる心象の学融合解析と品種継承施策のパラダイム転換」（研究代表者：遠藤秀紀（東京大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「ポスト古代ゲノム解読期における家畜化概念のヒューマンアニマルボンド的学融合刷新」（研究代表者：遠藤秀紀（東京大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証」（研究代表者：ピーター J. マシウス）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」拠点代表者

・ 他機関から委嘱された委員など

Nomadic Peoples 編集委員、Studies of Tribes and Tribals (India) 編集委員、Journal of Communication (India) 編集委員、日本アフリカ学会評議員、人文地理学会理事、生き物文化誌学会会長、ヒトと動物の関係学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営会議員、ピオストーリー編集委員（編集長）、コスモス国際賞選考専門委員会委員、味の素の文化センター企画委員および会員

・ 非常勤講師

東北大学文学部「考古学各論（考古学と狩猟採集民研究）」及び文学研究科「考古学特論III」（集中講義）、広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）、放送大学「フィールドワークと民族誌」（オンライン）

齋藤 晃 [さいとう あきら]—————教授

【学歴】京都大学文学部フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】国立民族学博物館第四研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2017）【学位】学術修士（東京大学大学院総合文化研究科1991）【専攻・専門】文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

齋藤 晃

1993 『魂の征服——アンデスにおける改宗の政治学』東京：平凡社。

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

齋藤 晃編

2020 『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』名古屋：名古屋大学出版会。

【受賞歴】

2018 大同生命地域研究奨励賞（公益財団法人大同生命国際文化基金）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究

・研究の目的、内容

1570年代、スペイン統治下のアンデスにおいて、世界史上希有な社会工学実験が実施された。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの命令により、かつてのインカ帝国の中核地域で約150万の先住民が碁盤目状に整然と区画された1千以上の町に強制移住させられた。総集住化と呼ばれるこの政策は、在来の居住形態、社会組織、権力関係、アイデンティティを大きく変えたといわれているが、その内実には不明な点が多い。本研究では、地理情報システム等を活用して、副王トレドの総集住化の全体像の解明を目指す。なお、本研究は、科学研究費（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」（2015～2017年度、代表者：齋藤 晃）の一環として実施される。

・成果

6月23日、立教大学文学部人文研究センターの公開講演会で、「ラテンアメリカ史への人文情報学の貢献——植民地期アンデスにおける先住民の総集住化を事例として」と題する講演をおこない、歴史学研究へ人文情報学の道具と方法を応用することの有効性や問題点を論じた。

また、科研費による国際共同研究のメンバーと共著で、大量のデータを処理する人文情報学の能力を副王トレドの総集住化の研究に活用することでもたらされる新たな知見に関して英語論文を執筆し、『Journal of Field Archaeology』に掲載された。

◎出版物による業績

[編著]

齋藤 晃編

2020 『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』名古屋：名古屋大学出版会。

[論文]

齋藤 晃

2020 「宣教師の異文化適応を再考する」齋藤 晃編『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』

pp.1-52, 名古屋：名古屋大学出版会。

2020 「福音以前の祖先と『粗野な人びと』の救済——16世紀の日本とペルー」 齋藤 晃編『宣教と適応——グローバル・ミッションの近世』pp.88-130, 名古屋：名古屋大学出版会。

Wernke, S., P. VanValkenburgh and A. Saito

2020 Interregional Archaeology in the Age of Big Data: Building Online Collaborative Platforms for Virtual Survey in the Andes. *Journal of Field Archaeology* 45(supplement 1): S61-S74. [査読有]

[その他]

齋藤 晃

2019 「アマゾンでゴムと格闘する」『月刊みんぱく』43(11)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月2日 「アマゾンの『文字化された都市』——モホスのイエズス会ミッションの洗礼簿」日本ラテンアメリカ学会第40回定期大会、創価大学

・研究講演

2019年6月23日 「ラテンアメリカ史への人文情報学の貢献——植民地期アンデスにおける先住民の総集住化を事例として」2019年度人文研究センター公開講演会、立教大学

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年11月10日 「『旧世界』の驚異——キリスト教宣教とアメリカ先住民」第559回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「アンデスにおける植民地的近代——副王トレドの総集住化の総合的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「近代ヒスパニック世界における文書ネットワークの成立・展開・変容（衰退）過程の究明」（研究代表者：吉江貴文（広島市立大学））研究分担者

鈴木 紀 [すずき もとひ]——教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部教授（2019）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 開発援助プロジェクト評価、フェアトレード、マヤ・ユカテコ民族の社会変化、先住民文化の比較展示学【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84, 東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学——冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-66, 東京：明石書店。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代ラテンアメリカ文明の輪郭

・研究の目的、内容

本研究は、文明論の視点から現代のラテンアメリカ地域の特徴を分析することを目的とする。ラテンアメリカ地域は先コロンブス時代にメソアメリカ文明やアンデス文明、その他多くの地域文化を育み、16世紀以降は西洋文明を受容した。したがって文明として現代のラテンアメリカを捉えるためには、先コロンブス時代の文明の継続／再解釈と、西洋およびその他の地域の文明の受容／再解釈、および両者の結果としての現代文明としてのラテンアメリカの固有性／普遍性の検討が必要になる。本研究を推進するための方法論として、ラテンアメリカ地域の先住民族文化を展示する考古学・人類学・歴史博物館および美術館における展示内容の比較を中心におこなう。2019年度は、2014年度から2018年度にかけて実施した科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」（研究代表：鈴木 紀）で収集した資料の分析を継続する。また本研究を次年度以降も発展させるために、2019年度後半には科学研究費、民間の研究助成金などに応募する。

・成果

科学研究費助成事業・新学術領域「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」の成果を『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』（青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編、京都大学学術出版会、2019年）の第3章「植民地時代から現代の中南米の先住民文化——古代アメリカ文明の資源化」（鈴木 紀、271-280頁）および第3章第9節「時間旅行の楽しみ——博物館で学ぶ古代アメリカ文明」（鈴木 紀、390-402頁）として発表した。

また同科研プロジェクトの研究成果は「博物館の中のアルテ・ポプラル」（第40回日本ラテンアメリカ学会定期大会、創価大学、2019年6月1日）、“Arte popular latinoamericano: un estudio comparativo de museografía”（FIEALC 2019, Szeged 大学、2019年6月26日）として口頭発表した。

さらに中南米各地のアルテ・ポプラル（芸術的な手工芸品）の博物館展示の比較をつうじて、メキシコのアルテ・ポプラルの特徴として先スペイン期に起源をもつこと、先住民と非先住民双方の作品を含むことを確認し、その見解に基づいて国立民族学博物館の企画展「アルテ・ポプラル——メキシコの造形表現のいま」（2019年10月10日～12月24日）を計画、実施した。

◎出版物による業績

[編著]

青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編

2019 『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』京都：京都大学学術出版会。

[分担執筆]

青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀

2019 「はじめに」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp.i-xvi, 京都：京都大学学術出版会。

青山和夫・坂井正人・鈴木 紀・米延仁志

2019 「メソアメリカとアンデスの比較文明論」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp.403-433, 京都：京都大学学術出版会。

鈴木 紀

2019 「植民地時代から現代の中南米の先住民文化——古代アメリカ文明の資源化」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp.271-280, 京都：京都大学学術出版会。

2019 「時間旅行の楽しみ——博物館で学ぶ古代アメリカ文明」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀編『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』pp.390-402, 京都：京都大学学術出版会。

2020 「マヤ」信田敏宏編『先住民の宝』pp.75-79, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「旅と映画とグアテマラ」信田敏宏編『先住民の宝』p.90, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

鈴木 紀

- 2019 「旅・いろいろ地球人 中南米博物館紀行① プエルトリコ」『毎日新聞』5月11日夕刊。
2019 「旅・いろいろ地球人 中南米博物館紀行② ウシュアエア」『毎日新聞』5月18日夕刊。
2019 「旅・いろいろ地球人 中南米博物館紀行③ ティワナク」『毎日新聞』5月25日夕刊。
2019 「二つの通貨の間で——キューバ」『みんぱく e-news』216：巻頭コラム。
2019 「旅・いろいろ地球人 中南米博物館紀行④ パナマ」『毎日新聞』6月1日夕刊。
2019 「『生命の木』のふるさとを訪ねて——メキシコ」『みんぱく e-news』220：巻頭コラム。
2019 「百花繚乱のアルテ・ポプラルへのいざない」特集「メキシコのアルテ・ポプラル」『月刊みんぱく』43(10)：2-3。
2019 「アルテ・ポプラルを収集した先達たち」特集「メキシコのアルテ・ポプラル」『月刊みんぱく』43(10)：8-9。
2019 「アルテ・ポプラル——メキシコの造形表現のいま」『季刊民族学』170：85-97。

Suzuki, M.

- 2019 Arte Popular: Contemporary Expression of Mexican Crafts. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 49: 12-13.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2019年11月2日 「アルテ・ポプラル展——ラテンアメリカの〈地域知〉を表象する試み」2019年度地域研究コンソーシアム年次集会一般公開シンポジウム『グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネジメント』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月1日 「博物館の中のアルテ・ポプラル」日本ラテンアメリカ学会第40回研究大会、創価大学
2019年6月26日 'Arte Popular Latinoamericano: un Estudio Comparativo de Museografía.' XIX Congreso de la FIEALC, Szeged, Hungary
2019年8月28日 "Fire" in the Museum and the Precarity of Anthropology: a Reflexion from National Museum of Ethnology, Japan.' IUAES 2019 Inter-Congress, Adam Michiewicz University, Poznan, Poland
2020年1月20日 「ブラジル国立博物館の火災に関する IUAES 2019における議論について」文化遺産国際協力コンソーシアム 第13回中南米分科会、東京文化財研究所

・研究講演

- 2019年10月18日 「メキシコの食文化と造形表現の変化」メキシコ・日本アミーゴ会、在日メキシコ大使館
2020年2月2日 「映画で学ぶラテンアメリカの女性たちの挑戦」（女性の暮らしととりまく社会）特定非営利活動法人 one village one earth、西宮市男女共同参画センターウェブ

・研究公演

- 2019年10月27日 国立民族学博物館研究公演「ソン・ハローチョ——国境を越えるメキシコの歌」国立民族学博物館、本館エントランスホール

・展示

- 2019年10月10日～12月24日 企画展「アルテ・ポプラル——メキシコの造形表現のいま」本館展示場

・みんぱくウィークエンド・サロン

- 2019年11月3日 「ラテンアメリカのアルテ・ポプラル」第558回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

- 2019年6月23日～7月3日—ハンガリー、ルーマニア（2019年国際ラテンアメリカ・カリブ研究連合（FIEALC 2019）における研究発表、ハンガリーの民衆芸術に関する資料閲覧、ルーマニアの民衆芸術に関する資料閲覧）
2019年7月27日～8月8日—メキシコ（メキシコの民族資料収集）
2019年8月26日～9月1日—ポーランド（IUAES（国際人類学民族科学連合）2019中間会議）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（3人）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本ラテンアメリカ学会理事

關 雄二 [せき ゆうじ]—————副館長（企画調整担当）、人類文明誌研究部教授

上羽陽子 [うえば ようこ]—————准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士前期課程修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士後期課程修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

[分担執筆]

Ueba, Y.

2020 Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India. In A. Nakatani (ed.) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, pp.235-251. Lanham: Lexington Books.

[論文]

Ueba, Y.

2012 「インド・グジャラート州アーメダバード市における女神儀礼用染色布の製作技術の現状」『国立民族学博物館研究報告』37(1)：1-51。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族芸術学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、現代インドにおける手工芸品に焦点をあて、つくり手たちが急速に変化する自然環境や社会環境にどのように対応しながら、伝統的な手工芸技術の生産形態を保持あるいは変容させつつ、現代的な要素をいかに選択しているかを明らかにすることが目的である。

研究資金は、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」（2019年度～2023年度）および、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（2016年度～2020年度、代表：野林厚志）を用いる。

・成果

本年度は、共催展「国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装」において現代インドを含む、世界の衣装の状況を紹介し、手工芸技術の変化にともなう衣装の変容を考察した。論文は、上記外部資金をもちいておこなった調査成果として、“Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India” in A. Nakatani (ed.) *Fashionable traditions: Asian handmade textiles in motion*, Lanham: Lexington Books. pp.235-251. を公表した。研究発表は、上記、科研新学術領域主催の研究大会等でおこなった。

◎出版物による業績

[分担執筆]

上羽陽子・中谷文美・金谷美和・山岡拓也

2020 「道具としての植物利用(2)——インドネシア東部 西ティモールを中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.5-11, 文部科学省学術研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)2016-2020年度計画研究B01班(研究課題番号16H06411)。

上羽陽子

2020 「はじめにヒモありき——『線具』から民族技術を問い直す」民族藝術学会編『民族藝術学会誌 arts/』36: 50-53。

Ueba, Y.

2020 Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India. In A. Nakatani (ed.) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, pp.235-251. Lanham: Lexington Books.

[その他]

上羽陽子・山岡拓也・中谷文美・金谷美和

2019 「道具資源としての植物利用の多様性——ヤシ科植物の事例から」『パレオアジア文化史学第7回研究大会』pp.20-21。

金谷美和・上羽陽子・中谷文美

2019 「小石刃が卓越しない地域における植物資源の道具利用」『パレオアジア文化史学第8回研究大会』p.10。

上羽陽子

2019 「バスケットリーとものづくり」特集「バスケットリー」『月刊みんぱく』43(7): 2-3。

2019 「編み材・組み材をうみ出す」特集「バスケットリー」『月刊みんぱく』43(7): 8-9。

2019 「共催展『国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装』『みんぱく e-news』221: 巻頭コラム。

2019 「糸での表現、布への表現」『月刊みんぱく』43(11): 16-17。

Ueba, Y., T. Yamaoka, A. Nakatani and M. Kanetani

2019 Variation in Plant Resources Used in Making Implements: the Case of Palmae. *The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, pp.22-23.

Kanetani M., Y. Ueba and A. Nakatani

2019 The Use of Plant Resources for Tools in Regions without the Development of Bladelet Technology. *The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, p.11.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年12月7日 「アッサムにおける植物利用について——タケとヤシを中心に」基盤研究(B)バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究 2019年度第2回研究会、国立民族学博物館第2演習室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「道具資源としての植物利用の多様性——ヤシ科植物の事例から」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学環境総合館レクチャーホール

2019年12月14日 「小石刃が卓越しない地域における植物資源の道具利用」パレオアジア文化史学第8回研究大会、国立民族学博物館

・展示

2019年11月13日～11月25日 「国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装」 阪急うめだ本店

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年5月16日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる①」 川島テキスタイルスクール

2019年5月23日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる②」 川島テキスタイルスクール

2019年6月6日 「模写実践と異文化理解——インド西部の刺繍布を読みとる③」 川島テキスタイルスクール

2019年6月19日 「バスケットリーとものづくり——人類の『線具』利用」（2019年度 第2回 来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座）国立民族学博物館

2019年6月20日 「手織り絨毯の織技術について」株式会社絨毯ギャラリー主催、クロス・ウェーブ梅田

2019年6月29日 「インドの刺繍文化——ミラー刺繍を中心に」『キャリアデザインゼミナール』奈良女子大学

2019年7月13日 「コメント」シンポジウム『インド・ファッションの世界——素材から考える装い』国際ファッション専門職大学名古屋キャンパス マルチホール

2019年10月23日～10月24日 「インドの西部ラバーリーのミラー刺繍」京都市立芸術大学

2019年11月20日 「インド西部ラバーリーの装いから考える」『国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装』阪急うめだ本店・国立民族学博物館・千里文化財団主催、阪急うめだ本店

2019年11月30日 「インドの刺繍文化の今——ラバーリーの刺繍布の役割から」沖印友好協会主催、沖縄県立芸術大学

2019年11月30日 「ミラー刺繍に挑戦！インド西部ラバーリーの刺繍に学ぶ」沖印友好協会主催、沖縄県立芸術大学

◎調査活動

・海外調査

2019年8月13日～8月30日—インド（「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」および「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」にかかる調査研究）

2020年2月29日～3月14日—インド（「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」にかかる調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「バスケットリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

京都精華大学「制作演習7・クラフト1」、京都精華大学「美術工芸史1・文様史1・版画論」

卯田宗平 [うだ しゅうへい] ————— 准教授

1975年生。【学歴】立命館大学産業社会学部卒（1998）、立命館大学大学院理工学研究科修士課程修了（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了（2003）【職歴】日本学術振興会特別研究員DC1（総研大、2000-2003）、日本学術振興会海外特別研究員海外PD（中央民族大学、2005-2007）、中央民族大学民族学社会学院外籍講師（2005-2010）、日本学術振興会特別研究員PD（東京大学、2008-2010）、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構特任講師（2011-2015）、東京大学東洋文化研究所汎アジア研究部門講師（兼任）（2011-2015）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2015）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2016）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2017-）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2003）【専攻・専門】環境民俗学・東アジア地域研究【所属学会】日本民俗学会、文化人類学会、生態人類学会、The Society for Human

【主要業績】

[単著]

卯田宗平

2014 『鵜飼いと現代中国——人と動物、国家のエスノグラフィ』東京：東京大学出版会。

[編著]

卯田宗平編

2014 『アジアの環境研究入門——東京大学で学ぶ15講』（古田元夫監修）東京：東京大学出版会。

[論文]

卯田宗平

2015 「ポスト『北方の三位一体』時代の中国エヴェンキ族の生業適応——大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性——フィールドからのサステナビリティ論』（研究双書 No.616）pp.73-108, 千葉：アジア経済研究所。

【受賞歴】

2010 第5回日本文化人類学会奨励賞

1998 学部長コース賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

鵜飼文化の比較研究

・研究の目的、内容

本年度の研究では、(1)中国雲南省の鵜飼い漁におけるカワウの繁殖技術を明らかにし、日本の鵜匠によるウミウの繁殖技術と比較することで双方の特徴を導きだす。(2)北マケドニア共和国ドイラン湖における鵜飼について、その技術や知識、周辺の魚食文化などをフィールド調査によって明らかにし、アジア地域の鵜飼との比較研究を進める。なお、本研究は科学研究費（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなう。

・成果

本年度は、北マケドニア共和国ドイラン湖の鵜飼い漁を対象とし、旧ユーゴスラヴィア時代におこなわれていた漁の技術を明らかにした。既存の研究においてドイラン湖の鵜飼技術を取りあげたものはない。北マケドニアにおける調査の結果、ドイラン湖の鵜飼い漁は初冬に捕獲した野生のカワウを漁で利用し、翌春にすべて放鳥すること、仕掛けが定置型であること、一連の操業において複数の漁師が個々の役割を分担することという特徴があることを明らかにした。さらに、本年度はドイラン湖の漁師たちがウ類の生殖に介入しない要因も検討した。その結果、ドイラン湖では毎年初冬に飛来するカワウを確実に捕獲できるため、漁師たちは手間がかかる鳥類の人工繁殖をおこなう必要がなく、毎年初春の漁期終了後にすべてを放つことができることがわかった。こうした成果を「旧ユーゴスラヴィア時代における鵜飼い漁の技術とその存立条件」としてまとめ、国立民族学博物館研究報告に投稿した。くわえて、2014年から実施されているウミウの人工繁殖にかかわる4年間の記録をまとめ、鵜匠たち3名との共同研究の成果として「飼育下のウミウの成長過程と技術の収斂化」の論文を生き物文化誌学会に投稿し、査読後に受理された。以上の研究は、科学研究費（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開（代表・卯田宗平）」に基づいておこなった。なお、年度末に計画していた中国の鵜飼調査に関しては、新型肺炎の影響で延期とした。

◎出版物による業績

[その他]

卯田宗平

2019 「なぜ鵜飼は誕生したのか」『UP』563：26-33。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年11月20日 'Multi Joining Methods among Cormorants, Fishers and Fishing Techniques: the Case

Study on Regional Similarities and Differences in Cormorant Fishing in China.' American Anthropological Association (AAA) and Canadian Anthropology Society (CASCA) Joint Annual Conference, Vancouver Convention Center West, Vancouver, Canada

2019年12月20日 「伝統鷓鴣捕魚方式面臨的挑戰与未来——以岐阜市長良川鷓鴣捕魚為例」 首届東北亜社会文化論壇、中国哈爾濱・黒龍江大学国際文化教育学院、中国

2020年2月14日 「脱ドメスティケーション論——民博の共同研究で考えたこと」 京都人類学研究会、京都大学稲盛財団記念館

・ **みんなくウィークエンド・サロン**

2020年1月12日 「カワウの雛を同時に孵化させる技術」 第563回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・ **大学院ゼミでの活動**

論文ゼミ「地域文化学演習」

◎調査活動

・ **海外調査**

2019年8月27日～9月4日—イタリア（イタリア・トラジメーノ湖における淡水漁撈と漁具の比較調査）

2020年9月13日～9月27日—北マケドニア共和国（北マケドニア・ドイラン湖における淡水漁撈の比較調査）

2019年11月18日～12月3日—カナダ、アメリカ合衆国（American Anthropological Association (AAA) と Canadian Anthropology Society (CASCA) の共同開催による国際学会における研究発表と国際猛禽類センターにおける資料収集）

2019年12月19日～12月24日—中華人民共和国（黒龍江大学における「東北アジア社会文化シンポジウム」での発表とエクスカージョン）

2020年1月27日～2月5日—北マケドニア共和国（北マケドニア・ドイラン湖における淡水漁撈の比較調査）

◎大学院教育

・ **指導教員**

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

・ **大学院ゼミでの活動**

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

・ **博士論文審査委員（総研大に限る）**

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（基盤研究（C））「ポスト家畜化時代の鷓鴣文化とリバランス論——新たな人・動物関係論の構築と展開」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・ **他の機関から委嘱された委員など**

生き物文化誌学会学会誌『BIOSTORY』編集委員、生き物文化誌学会評議委員、岐阜県岐阜市長良川鷓鴣習俗総合調査専門委員会委員、岐阜県関市小瀬鷓鴣習俗総合調査委員会委員、生態人類学会理事

小野林太郎 [おの りんたろう] ————— 准教授

【学歴】上智大学文学部史学科卒業（1998）、上智大学外国語学研究科地域研究専攻前期博士課程修了（2000）、上智大学外国語学研究科地域研究専攻後期博士課程単位取得退学（2003）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC 1（2000-2003）、日本学術振興会特別研究員 PD（国立民族学博物館）（2003-2006）、総合地球環境学研究所研究プロジェクト推進支援員（2007-2008）、日本学術振興会海外特別研究員 PD（オーストラリア国立大学）（2008-2010）、東海大学海洋学部海洋文明学科専任講師（2010-2014）、東海大学海洋学部海洋文明学科准教授（2014-2019）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2019）【学位】博士（地域研究）（上智大学 2006）【専攻・専門】海洋考古学、東南アジア・オセアニア研究【所属学会】東南アジア考古学会、インド太平洋先史学会、世界動物考古学会、

日本オセアニア学会、日本人類学会、日本文化人類学会、日本生態人類学会、日本考古学研究会、東南アジア学会、日本動物考古学会、日本考古学協会、日本イコモス国内委員会、日本海洋政策学会

【主要業績】

[単著]

小野林太郎

2018 『海の人類史：東南アジア・オセアニア海域の考古学——増補改訂版』東京：雄山閣。

[編著]

小野林太郎・長津一史・印東道子編

2018 『海民の移動誌——西太平洋のネットワーク社会』京都：昭和堂。

[論文]

Ono, R., A. Oktaviana, M. Ririmasse, M. Takenaka, C. Katagiri, and M. Yoneda

2018 Early Metal Age interactions in Island Southeast Asia and Oceania- jar burials from Aru Manara, northern Moluccas. *Antiquity* 92(364): 1023-1039. <https://doi.org/10.15184/aqy.2018.113>

【受賞歴】

2013 第4回東南アジア考古学会奨励賞

2006 第5回井植アジア太平洋研究賞（佳作）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア海域を軸とした人類の島嶼移住と海洋適応史の解明

・研究の目的、内容

本研究の目的の一つは、東南アジア島嶼部を中心とするアジア・オセアニアの海域世界へと移住・拡散した人類（主にホモ・サピエンス）が、いつ頃、どのように島嶼環境への移住に成功したのかを考古・人類学的手法により追究するところにある。また移住後の人類による島嶼・海洋適応のプロセスにかかわる人類学的データを、新たな発掘調査や民族考古学的手法により発見・収集していくのが二つ目の目的となる。この研究は、科学研究費（新学術領域研究・国際共同研究強化B）を軸としたインドネシア、およびミクロネシアでの発掘調査と出土遺物の分析調査を進める。またその過程で新たに得られた成果については逐次、国内外の学術誌や学会等にて論文発表するほか、一般書としても公表し、成果の社会還元も目指す。

・成果

テーマにかかわる英語共著論文を国際的な学術誌やモノグラフに3本、和文論文を国内の学術誌に1本公表できたほか、成果の社会還元を第一の目的とした一般書の章論文やコラムとして4本を公表した。このほか、国内の学会や研究集会での発表や講演として、本研究の成果を積極的に公表した。

◎出版物による業績

[論文]

小野林太郎

2020 「環境変化からみた環太平洋圏におけるヒトの移住史——ウォーレシア・オセアニアの事例から」『環太平洋文明研究』4：76-88。[査読有]

Ono, R., S. Hawkins, and S. Bedford

2019 Lapita Maritime Adaptations and the Development of Fishing Technology: A View from Vanuatu. In S. Bedford and M. Spriggs (eds.) *Debating Lapita: Distribution, Chronology, Society and Subsistence* (Terra Australis Series 52), pp.415-438. Canberra: ANU Press. [査読有]

Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, H. Nishizawa, J. Siswanto, N. Aziz, Sriwigati, H. O. Sofian, T. Miranda, and A. Pawlik

2019 Technological and Behavioural Complexity in Expedient Industries: The Importance of Use-wear Analysis for Understanding Flake Assemblages. *Journal of Archaeological Science* 112. [査読有]

Fuentes, R., R. Ono, N. Nakajima, Siswanto, J. Aziz, N. Sriwigati, S. Octavianus, T. Miranda, and A. Pawlik

2020 Stuck within Notches: Direct Evidence of Plant Processing during the Last Glacial Maximum in North Sulawesi. *Journal of Archaeological Science: Reports* 30. [査読有]

[分担執筆]

小野林太郎

2019 「日本への人類移住と南方起源説——その魅力と可能性」石森大知・丹羽典夫編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.21-24, 東京：明石書店。

2019 「人類史から見た縄文時代と南太平洋の人々——海を越えた私たちの祖先とその関係性」石森大知・丹羽典夫編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.25-28, 東京：明石書店。

2020 「オセアニアへの人類移住と海洋適応」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか——オセアニア考古学の挑戦』pp.70-87, 東京：雄山閣。

2020 「オセアニアの釣り針」秋道智彌・印東道子編『ヒトはなぜ海を越えたのか——オセアニア考古学の挑戦』pp.131-138, 東京：雄山閣。

[その他]

小野林太郎

2019 「国立民族学博物館の収蔵品⑧ 東南アジアにおける銅鼓」『文部科学 教育通信』463：2。

2019 「サンゴの海で漁師になる」『月刊みんぱく』43(9)：10-11。

2019 「ラピタ土器と鋸歯印文」『月刊みんぱく』43(10)：16-17。

2020 「ゴム時間の危機」『月刊みんぱく』44(1)：20。

2020 「サピエンスによる葬送行為を島という視点から探る」『民博通信 Online』1：18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2020年2月18日 'Introduction of Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia.' International Workshop "Maritime Adaptation and Material Culture in Southeast Asia", National Museum of Ethnology

・共同研究会での報告

2019年11月12日 「島世界における葬送の人類学」『島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較』国立民族学博物館

・民博研究懇談会

2019年11月28日 「海のサピエンス史——海域アジアへ移住した人類の海洋・島嶼適応」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「東南アジア——オセアニア海域にかけての新人の拡散と文化変化」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学

2019年10月16日 'Human Migration, Interisland Networks, and Coastal Change in Eastern Micronesia: A Case Study of Lenger Island, Pohnpei, FMS.' The 9th International Lapita Conference, PNG National Museum & Art Gallery, Port Moresby, Papua New Guinea

2019年11月17日 「インドネシアの貝塚遺跡と完新世期における人類の貝利用」『東南アジア考古学会大会』早稲田大学

2019年12月14日 「東南アジアの不定形剥片とその機能——使用痕分析から見てきた人間行動と技術の複雑性」文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2019年12月21日 「『海の人類史——東南アジア・オセアニア考古学の最前線』」第498回みんぱくゼミナール

・研究講演

2019年11月16日 「東海地方と水中の文化遺産」第3回とよはし歴史座『東海地方と水中の文化遺産』豊橋市教育委員会、豊橋市民センター

2019年11月30日 「海からみたアジア・オセアニアの人類史」『古代東北アジアと日本研究会』明治大学博物館 友の会、豊島区民センター

◎調査活動

・海外調査

- 2019年6月7日～7月28日—インドネシア（インドネシアでのフィールド調査（発掘）および分析調査の実施）
2019年8月17日～9月8日—ミクロネシア連邦（マリアナ諸島・ミクロネシア連邦共和国でのフィールド調査（発掘）・資料収集・分析調査の実施）
2020年1月14日～1月20日—マレーシア（マレーシアでの海外プロジェクトメンバー（マレーシア国立博物館・アダット博物館・プトラジャヤ大学）との打ち合わせ、資料収集の実施）
2020年1月27日～2月3日—フィリピン（フィリピンでの海外プロジェクトメンバー（フィリピン国立博物館・フィリピン国立大学）との打ち合わせ、資料収集の実施）
2020年3月1日～3月16日—インドネシア（インドネシアでの考古学的資料の分析と資料収集の実施）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（S））「浅海底地形学を基にした沿岸域の先進的学際研究——三次元海底地形で開くパラダイム」（研究代表者：菅浩伸）研究分担者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「ホモ・サピエンスのアジア定着期における行動様式の解明」（研究代表者：門脇誠二）研究分担者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）））「オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「琉球列島における西欧沈没船遺跡の実態把握と水中遺跡公園化へ向けた基礎的研究」（研究代表者：片桐千亜紀）研究分担者、国立民族学博物館基幹研究プロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化——東南アジア資料を中心に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「島世界における葬送の人類学——東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」研究代表者

・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

琉球大学島嶼地域科学研究所共同利用・共同研究「南太平洋島嶼地域におけるタバ（樹皮布）の未公表コレクションの調査およびタバ素材植物の樹種と系譜の研究」（研究代表者：矢野健一、立命館大学、教授）メンバー

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本動物考古学会理事（庶務）、日本オセアニア学会評議員、東南アジア考古学会編集委員、文化遺産国際協力コンソーシアム東南・南アジア分科会委員、立命館大学衣笠リサーチオフィス環太平洋文明研究センター客員協力研究員

寺村裕史 [てらむら ひろふみ] ————— 准教授

1977年生。【学歴】岡山大学文学部歴史文化学科（考古学履修コース）卒（2000）、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修士課程修了（2002）、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻博士課程修了（2005）【職歴】同志社大学文化情報学部実習助手（2005）、総合地球環境学研究所研究部プロジェクト研究員（2007）、国際日本文化研究センター研究部機関研究員（2011）、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室特任准教授（2013）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2015）、国立民族学博物館人類文明誌研究部助教（2017）、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授（2018）【学位】博士（文学）（岡山大学大学院 2005）、修士（文学）（岡山大学大学院 2002）【専攻・専門】情報考古学、文化情報学【所属学会】考古学研究会、地理情報システム学会、日本情報考古学会

【主要業績】

[単著]

寺村裕史

2014 『景観考古学の方法と実践』東京：同成社。

[共著]

Maekawa, K., E. Matsushima, H. Teramura, and S. Watanabe

2018 *Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: A Catalogue*. Edited by K. Maekawa. Kyoto: Kyoto University Press.

【論文】

寺村裕史

2017 「情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用」『国立民族学博物館研究報告』42(1): 1-47。[査読有]

【受賞歴】

2007 日本情報考古学会優秀賞（日本情報考古学会）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、ユーラシア大陸における東西交流（東洋と西洋）の結節点としての古代シルクロード都市の果たした役割と、それらの都市を介しておこなわれた人や文化の交流の実態を明らかにすることを目的として実施するもので、ウズベキスタン共和国のサマルカンドに所在するウズベキスタン共和国科学アカデミー ヤフヨ・グロモフ考古学研究所（以下、考古学研究所）との国際共同研究のかたちをとる。体的には、考古学研究所と連携して実施するカフィル・カラ遺跡などの都市遺跡の発掘調査や、ザラフシャン川中流域に点在する都市遺跡の分布踏査などを通じて、古代シルクロード都市の形成・発展過程ならびに、人と文化の東西交流の動態について国際的な議論を深め、成果を共同で発信する。

・成果

2019年（令和元年）9月に、ウズベキスタン共和国・サマルカンド市に所在するウズベキスタン共和国科学アカデミー ヤフヨ・グロモフ考古学研究所（以下、考古学研究所）と国立民族学博物館（民博側協定担当責任者：寺村）との間で、学術協力に関する協定を締結し、その協定のもと調査を実施した。

具体的には、サマルカンド近郊に所在する古代のオアシス都市遺跡であるカフィル・カラ遺跡での発掘調査を、考古学研究所と日本隊の協働調査として実施した。報告者は、日本側調査隊の一員としてその調査に参加するとともに、今年度調査に関する成果を共有するため現地研究者とディスカッションをおこなった。なお、上記の協定締結並びに調査は、科学研究費（基盤研究（B））「シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究」[課題番号：19H01350、研究代表者：寺村裕史]にもとづき実施したものである。

発掘調査の成果としては、カフィル・カラ遺跡のシタデル（城塞）の調査区（Room 12）から、火災で焼け落ちたとみられる炭化木材とともに、床面にはほぼ等間隔に並ぶ6個の柱穴を検出した。部屋の二階部分を構成する何らかの建築部材を支えるための柱と考えられる。

さらに、柱穴の周りからは底部が据わった状態の大甕やその破片が大量に出土し、火災層の焼土中からは、ムギヤアワと考えられる穀物類、ニンニクや豆などの炭化物が出土していることから、この部屋は水・油や食物を貯蔵する穀物倉のような機能を持っていたと考えられる。カフィル・カラ遺跡はソグド王の離宮という説があり、これらの出土品は、シルクロードを通じた東西交易に活躍したソグド人の実態を探る上でも貴重な資料として、今後詳細な研究を進めていくことにしている。

こうした成果については、2020年3月に日本西アジア考古学会主催の『第27回西アジア発掘調査報告会』において、「ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2019年）——シタデルを覆う火災層とシャフリスタンの調査」という口頭発表を日本隊・ウズベク隊の共同成果として報告する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため開催中止となり、『報告集』のみ刊行されることとなった。

◎出版物による業績

【論文】

村上智見・寺村裕史・宇野隆夫・宇佐美智之・ベグマトフ・アリシェル・ベルディムロドフ・アムリディン・ボゴモロフ・ゲンナディ・サンディボエフ・アリシェル

2020 「シタデルを覆う火災層の調査——ウズベキスタン、カフィル・カラ遺跡の発掘調査（2019年）」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集——令和元年度 考古学が語る古代オリエン特』つくば市：日本西アジア考古学会。

[その他]

寺村裕史

2019 「すごいよな」『月刊みんぱく』43(7)：20。

◎映像音響メディアによる業績

- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[ビデオテーク]

寺村裕史 監修

2020 『オアシス都市の暮らし——ウズベキスタン・サマルカンドの食文化』（みんぱく映像民族誌）（日本語・57分38秒）

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年10月30日 「地域文化の活用を支援する科学調査の可能性」国際フォーラム『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』宜蘭県立蘭陽博物館、宜蘭県、台湾

- ・共同研究会での報告

2019年12月15日 「本研究に関わる考古学の先行研究概要」『感性と制度のつながり——芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える』国立民族学博物館

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年1月27日 「津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース」こうちミュージアムネットワークワークショップ、高知県立高知城歴史博物館

- ・展示

2019年3月21日～5月28日 「特別展『子ども／おもちゃの博覧会』」国立民族学博物館

- ・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年7月28日 「バザールの風景——ウズベキスタンの市場事情」第549回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- ・広報・社会連携活動

2019年7月27日 「みんぱくにおける調査研究と博物館活動」（MMP新規会員養成研修）国立民族学博物館

2019年11月27日 「シルクロードの古代オアシス都市遺跡を掘る」（来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座）みんぱくミュージアムパートナーズ、国立民族学博物館

◎調査活動

- ・海外調査

2019年9月17日～10月5日—ウズベキスタン（ウズベキスタン・カフィルカラ遺跡における発掘調査の実施ならびに現地情報収集）

2019年10月29日～11月2日—台湾（国際フォーラム「地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割」での発表及び意見交換）

2019年12月24日～12月30日—イラン（科研費「古代イランとメソポタミア——歴史地理学的アプローチ」に関する現地調査および研究打合せ）

◎大学院教育

- ・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究代表者：吉田憲司）研究支援分担者、科学研究費（基盤研究（B））「古代イランとメソポタミア——歴史地理学的アプローチ」（研究代表者：前川和也（国士舘大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中央・北アジアの物質文化に関する研究——民博収蔵の標本資料を中心に」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

岡山大学文学部「博物館情報・メディア論 a/b」(集中講義)

藤本透子 [ふじもと とうこ] ————— 准教授

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒(1998)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了(2002)、京都大学大学院人間・環境学研究科環境相関研究専攻博士課程指導認定退学(2007)【職歴】京都大学総合人間学部リサーチ・アシスタント(2002)、京都大学大学院人間・環境学研究科ティーチング・アシスタント(2005)、日本学術振興会特別研究員(2006)、京都桂看護専門学校非常勤講師(2006)、関西学院大学経済学部非常勤講師(2008)、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員(2008)、神戸松蔭女子学院大学文学部非常勤講師(2010)、国立民族学博物館先端人類科学研究部機関研究員(2010)、国立民族学博物館民族文化研究部助教(2012)、立命館大学国際関係学部非常勤講師(2015)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2016)、国立民族学博物館人類文明誌研究部准教授(2017)【学位】博士(人間・環境学)(京都大学大学院人間・環境学研究科 2010)、修士(人間・環境学)(京都大学大学院人間・環境学研究科 2002)【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[編著]

Yamada, T. and T. Fujimoto (eds.)

2016 *Migration and the Remaking of Ethnic-Micro-Regional Connectedness* (Senri Ethnological Studies 93). Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

藤本透子編

2015 『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』 神奈川：春風社。

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』 東京：風響社。

【受賞歴】

2013 人間文化研究奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カザフスタンにおける社会・宗教・伝統医療の人類学的研究

・研究の目的、内容

社会・宗教・身体の関係性を考察することを目的として、1) 伝統医療とイスラーム、2) 村落社会の形成と変容のメカニズムに関する以下の調査研究を行った。

1) 伝統医療とイスラームの展開

科学研究費(基盤研究(C))「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」に基づき、7月にカザフスタンで調査を実施し、①中央アジアにおける伝統医療の歴史的背景、②伝統医療の再活性化メカニズム、③社会主義を経験した社会の近代医療と伝統医療の関係、④イスラームおよびシャマニズムと伝統医療の布置について検討した。

2) 村落社会の形成と変容のメカニズム

北東アジア地域研究および科研新学術領域「パレオアジア文化史学」B01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の分担者として、8月にカザフスタンで調査を行い、人の移動にともなう社会の形成および変容のメカニズムを分析した。

・成果

1) 伝統医療とイスラームの展開に関しては、科学研究費(基盤研究(C))(16K02028)に基づく調査をふまえて、「カザフスタンにおける伝統医療とエムシ(治療者)の活動」を執筆し、現在、初校の段階である。ま

た、「聖者になる過程——カザフスタンにおける近代とイスラーム」を論集の一部として投稿した。カザフスタンで7月にロシア語による口頭発表も2回行った。

- 2) 村落社会の形成と変容のメカニズムに関しては、科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型))(16H06411)に基づく調査をふまえて、ポスター発表「中央アジア草原地帯における肉の共食の社会的意味」「移動する集団の行動パターンとその痕跡」を行った。また、「中央アジア草原地帯におけるコミュニティの再編と維持——カザフのアウルに着目して」を論集の一章として刊行した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

藤本透子

2020 「中央アジア草原地帯におけるコミュニティの再編と維持——カザフのアウルに着目して」本村 真編『辺境コミュニティの維持——島嶼、農村、高地のコミュニティを支える「つながり」』pp.179-215, 那覇:ボーダーインク社。

小河久志・川村義治・川本智史・桑野 萌・小磯千尋・小西賢吾・坂井紀公子・藤本透子・本康宏史・山田孝子

2019 「日本における弔いの現状と未来——『死』との断絶を克服する必要性」小西賢吾・山田孝子編『弔いにみる世界の死生観』(比較文化学への誘い5) pp.109-132, 京都:英明企画編集。

小河久志・川村義治・川本智史・桑野 萌・小磯千尋・小西賢吾・坂井紀公子・アヒム・バイヤー・藤本透子・本康宏史・山田孝子

2019 「『死』と『死者』と『死後』のとらえ方——死は悪であり、死者は畏怖の対象なのか」小西賢吾・山田孝子編『弔いにみる世界の死生観』(比較文化学への誘い5) pp.9-37, 京都:英明企画編集。

小河久志・川本智史・小西賢吾・坂井紀公子・桑野 萌・藤本透子・本康宏史・山田孝子

2019 「イスラームとキリスト教の弔いと死生観——葬送、追悼、供養の儀礼にみるその特徴」小西賢吾・山田孝子編『弔いにみる世界の死生観』(比較文化学への誘い5) pp.65-86, 京都:英明企画編集。

[その他]

藤本透子

2020 「ユーラシアの温帯草原における人の行動パターンとその痕跡」野林厚志編『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 計画研究B01班2019年度 研究報告』東京:文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)2016-2020年度計画研究B01班(研究課題番号16H06411)』。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月12日 「中央アジア草原地帯における肉の共食の社会的意味」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学

2019年7月19日 'Perspektivy etnograficheskogo issledovaniya kazakhov v Yaponii: Altaiskie materialy v Natsional'nom muzee etnologii.' "Altay in History and Culture of the Great Steppe", East-Kazakhstan State Technical University, Ust'-Kamenogorsk, Kazakhstan

2019年7月24日 'Etnologicheskoe issledovanie Bayanaul'skogo regiona s vzglyada yaponskogo issledovatelya.' "History and Culture of the Great Steppe", Pavlodar State Pedagogical Institute, Pavlodar, Kazakhstan

2019年12月15日 「移動する集団の行動パターンとその痕跡——中央アジア草原地帯の事例から」パレオアジア文化史学第8回研究大会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2019年7月12日～8月9日—カザフスタン(イスラームと伝統医療に関する調査・パレオアジア文化史の調査)

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員(1人)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など
日本中央アジア学会日本中央アジア学会報編集委員
- ・他大学の客員、非常勤講師
甲南大学「死生学」

グローバル現象研究部

三尾 稔 [みお みのる] ————— 部長（併）教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1986）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学（1992）【職歴】東京大学教養学部助手（1992）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1999）、東洋英和女学院大学国際社会学部助教授（2001）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2018）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2019）【学位】社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1988）【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が25年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。本年度は昨年度に引き続き、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践やローカリティのあり方をどのように変容させているかという点に注目し、特に地方都市におけるフィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。この調査に必要な経費として、日本学術振興会科学研究費補助金の獲得もめざす。

6年計画で進められている人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」は今年度で4年目を迎える。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きつとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。各個研究のテーマは、この地域研究プロジェクトの内容に密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマのもとでの1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

・成果

インドの地方都市のサバルタンの宗教実践やローカリティの変容に関する人類学的調査研究のため申請していた日本学術振興会科学研究費補助金は申請が認められた科学研究費（基盤研究（C））「インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究」19K01217。この経費による研究は2019年度か

ら4年間の計画で実施される予定であり、その初年度の調査として2019年11月初旬にインド・ラージャスターン州ウダイプル市でカースト・コミュニティ毎に維持されているローカルな寺院の所在に関する悉皆調査を行い、82箇所の寺院について管理形態や寺院での宗教実践の態様を把握した。

このテーマに関連して、2019年4月上旬には「南アジア地域研究」経費により、上記の寺院群で挙行される女神祭礼に関する現地滞在調査も実施し、都市においてカーストごとの集住という形態が大きく変容する中でもこの種の祭礼がローカリティの持続に大きな意義をもつ実態を把握した。

これらは本格的調査のための予備的なものと位置づけられるが、その成果は現在執筆中の著書、また計画中の投稿論文等に反映させる。

宗教実践がインドにおける多様な集団のアイデンティティ形成、また異なる集団間の共存に果たす意義については、自身のフィールド調査に基づき長期にわたり研究を蓄積して来ているが、このことに関連して「現代インドの多様な宗教の共存と葛藤——現地調査からの視点」と題して、依頼に基づく講演を行った（2019年9月28日。「ユタ日報」松本研究会主催講演会。長野県松本市）。

2019年はインド独立運動の主要な指導者であったマハトマ・ガンディーの生誕150周年にあたり、インドのみならず世界各地で記念事業や講演会等が開催された。三尾もこの動きを背景に、特にガンディーの宗教的な信念と社会改革運動の関連という観点から、「ガンディー未完の『実験』」と題する講演を行った（2019年6月15日。朝日カルチャーセンター京都教室。）ほか、みんなくウィークエンド・サロンで「ガンディーの手紡ぎ車」と題する講演を実施し（2019年10月13日）、南アジア研究の成果の一般社会への発信に努めた。

またインドの宗教文化の多様性に関して、地域や宗教伝統ごとに異なる暦法の多様性と関連させた一般向けの解説的エッセイ「さまざまな暦の大らかな共存」を『季刊民族学』に発表した（2019年4月刊。『季刊民族学』168号、40-49頁）。

◎出版物による業績

[その他]

三尾 稔

2019 「さまざまな暦の大らかな共存」『季刊民族学』168：40-49。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんなくウィークエンド・サロン

2019年10月13日 「ガンディーの携帯用手紡ぎ車」第556回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・広報・社会連携活動

2019年6月15日 「ガンディー 未完の『実験』——宗教融和への道のり」朝日カルチャーセンター京都教室

2019年9月28日 「現代インドの多様な宗教の葛藤と共存——現地調査からの視点」『ユタ日報』松本研究会、松本市中央図書館

2019年12月7日 「糖尿病ライフとインド」大阪府済生会中津病院糖尿病患者会、大阪府済生会中津病院

◎調査活動

・海外調査

2019年10月9日～10月13日—韓国（韓国外国語大学南アジア研究センター主催の国際シンポジウムに出席）

2019年11月1日～11月15日—インド（インドの都市のローカリティ形成と宗教実践に関する現地調査）

2019年11月21日～11月25日—シンガポール（シンガポールにて開催される第3回 ACSAS（アジアにおける南アジア研究センターコンソーシアム）国際シンポジウムに出席）

2020年1月29日～2月3日—インド（インド・コルカタ市における祭礼の変容に関する調査、および関連資料収集）

2020年3月19日～3月31日—インド（グローバル化とインド地方都市の生活実践の変容に関する現地調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MIND-AS）」拠点代表者

鈴木七美 [すずき ななみ] 教授

【学歴】 東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）**【職歴】** 財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師（1997）、京都文教大学人間学部文化人類学科助教授（2000）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授（2002）、マギル大学文化人類学部客員助教授（2003）、放送大学分担協力講師（2004）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（文化人類学'04 主任講師）（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2009）、総合研究大学院大学比較文化学専攻長（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2014）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）**【学位】** 博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）学士（薬学）（東北大学 1981）**【専攻・専門】** 文化人類学、エイジング研究、医療社会史**【所属学会】** 日本文化人類学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会 Association for Anthropology and Gerontology (AAGE)

【主要業績】

[単著]

鈴木七美

- 2019 『エイジングフレンドリー・コミュニティ——超高齢社会における人生最終章の暮らし方』東京：新曜社。
- 2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』京都：世界思想社。
- 1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』東京：新曜社。

【受賞歴】

- 1998 第13回女性史青山なを賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ——エイジング・イン・プレースの重層化にむけて

・研究の目的、内容

超高齢社会において、すべての世代がどのように生活の基盤とウェルビーイングを構想できるのかに関心が集まっている。本研究は、高齢者のニーズを契機として全ての世代の生活環境を再考・開発するエイジング（エイジ）フレンドリー・コミュニティ（AFC）に関する研究蓄積を生かし、語り合いやモノ作りなど多世代が参加する活動実践について、研究調査・成果公開を実施する。

多文化・多世代が認知症者を含む高齢者との交流にどのような経験を紡ぎ意義を見いだしているのか、またそうした場はいかにして実現できるのかについて、現地調査と情報収集を行う（外部資金：科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」2018-2021 研究代表者：鈴木七美）。

モノと情報を素材として多世代・多文化に開かれた学びと交流機会開発の一環として企画した企画展（2018年度文化資源プロジェクト「企画展 アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」The World of Amish Quilts: Seeking Ways of living, Weaving the World 企画展プロジェクトリーダー：鈴木七美）の成果にかかわる口頭発表・論考執筆を行う。

・成果

外部資金：科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」2018-2021 研究代表者：鈴木七美）に関連する下記の活動を行った。

I 認知機能が低下する過程を含む高齢者のエイジング・イン・プレース（居場所を得て生活する）に関わる論考をまとめた。

単著

鈴木七美 『エイジングフレンドリー・コミュニティ——超高齢社会における人生最終章の暮らし方』東京：新

曜社、2019年。

II モノと情報を素材として多世代・多文化に開かれた学びと交流機会開発の一環として企画した「企画展 アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」The World of Amish Quilts: Seeking Ways of living, Weaving the World (2018年 8月23日～12月25日 2018年度文化資源プロジェクト プロジェクトリーダー：鈴木七美)に関連する研究成果の発信を国際学会にて行い、論考を執筆した。

論考

Suzuki, Nanami “The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World - A Thematic Exhibition at the National Museum of Ethnology, Osaka, Japan” *Blanket Statements* (American Quilt Study Group), 143: 11-15, 2020. (2020.3.24)

口頭発表

(国際研究集会)

Suzuki, Nanami “‘Thematic Exhibition: The World of Amish Quilts: Seeking the Way of Living, Weaving the World’ in 2018 at the National Museum of Ethnology (NME) in Osaka and Its Development,” 2019 Amish Conference: Health & Well-Being in Amish Society, June 7, 2019, The Young Center for Anabaptist and Pietist Studies at Elizabethtown College (Elizabethtown, USA)

Suzuki, Nanami “The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World: A Thematic Exhibition at the National Museum of Ethnology in Osaka, Japan,” AQSG (American Quilt Study Group) 2019 Seminar: Uncovering Together, October 12, 2019, Embassy Suites by Hilton (Lincoln, USA)

(その他)

鈴木七美「アーミッシュキルトの誕生——米国のエスニックグループの交流史から」みんなくウィークエンドサロン (国立民族学博物館 2019年 5月19日)

◎出版物による業績

[単著]

鈴木七美

2019 『エイジングフレンドリー・コミュニティ——超高齢社会における人生最終章の暮らし方』東京：新曜社。

[その他]

Suzuki, N.

2020 The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World - A Thematic Exhibition at the National Museum of Ethnology, Osaka, Japan. *Blanket Statements* 143: 11-15.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年 6月 7日 “‘Thematic Exhibition: The World of Amish Quilts: Seeking the Way of Living, Weaving the World’ in 2018 at the National Museum of Ethnology (NME) in Osaka and Its Development’ 2019 Amish Conference “Health & Well-Being in Amish Society”, Elizabethtown College, Elizabethtown, Pennsylvania, United States

2019年10月12日 ‘The World of Amish Quilts: Seeking Ways of Living, Weaving the World: A Thematic Exhibition at the National Museum of Ethnology in Osaka, Japan.’ AQSG (American Quilt Study Group) 2019 Seminar “Uncovering Together”, Embassy Suites Hotel by Hilton Lincoln, Nebraska, United States

・みんなくウィークエンド・サロン

2019年 5月19日 「アーミッシュキルトの誕生——米国のエスニックグループの交流史から」第543回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年 4月 1日～2020年 3月31日 「『2019年国立民族学博物館オリジナルカレンダー アーミッシュ・キルトを訪ねて』監修・解説」

◎調査活動

・海外調査

2019年 5月30日～6月17日—アメリカ合衆国（高齢者がかかわるコミュニティ教育の研究調査）

2019年10月 2日～10月22日—アメリカ合衆国（高齢者がかかわる生活文化伝承の研究調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

公益信託澁澤民族学振興基金公益信託澁澤民族学振興基金2019年度事業 第46回澁澤賞選考委員会委員、American Society on Aging (ASA) 2020 Aging in America Conference 発表の査読者 (peer reviewer)、Anthropology & Aging (A&A): The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE) Editorial Advisory Board

- ・他大学の客員、非常勤講師

京都ノートルダム女子大学人間文化研究科「ウェルビーイング研究特論」（集中講義）

西尾哲夫 [にしお てつお] ————— 教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（1984）、京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士後期課程満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第二研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部教授・部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館副館長（2012）、国立民族学博物館国際学術交流室室長（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部教授・部長（2015）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2016）、国立民族学博物館副館長（2016）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 アラブ遊牧民の言語人類学的研究、アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

2013 『ヴェニスの商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）

1992 オリエント学会奨励賞

1992 新村出記念財団研究助成賞

1992 流沙海西奨学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

グローバル化と中東地域の民衆文化

- ・研究の目的、内容

「アラブの春」を主導した新興の都市部中流層が用いた「中間アラビア語」と呼ばれる新生の共通アラビア語は、新たなコミュニケーション空間を創出した。この空間では差異化された社会的アイデンティティ獲得をめぐり、グローバルな動向に感応する社会運動の場が確立しつつある。本研究では、民衆、大衆、地域住民とい

う概念の再構築を通じて彼らがグローバル化されたコミュニケーション空間に感応している状況を具体的に分析することによって、「中間アラビア語」が創出した公共的コミュニケーション空間において民衆文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、および個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個々の人間の社会的動員作用として働くメカニズムを解明する。また「中間アラビア語」による文学的社会的位相の中で成立した、シンドバード航海記に焦点をあてて分析することによって、グローバル化の観点から多元的共創文学の可能性について考察する。

・成果

- ①研究成果として、『ガラン版千一夜物語』（岩波書店、全六巻）を刊行中である。同書は本邦における最初の全訳であるが、多くの新聞や雑誌の文化欄・書評欄で画期的な仕事として高い評価を受け、特に読売新聞書評欄では「2019年の三冊」に選ばれている。アラビアンナイトがイスラミ的な価値観を代表する形で形成されてきただけでなく、その伝承においてはキリスト教徒も重要な役割を果たしてきた可能性が高いことを解明し、アラビアンナイト形成史に関する新たな仮説を提示することができた。
- ②研究発表として、「現代中東地域研究推進事業」の一環でオックスフォード大学中東研究所との国際的共同研究による第三回国際シンポジウム「Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East」（於・オックスフォード大学）を開催した。「Beyond Orientalism: Studying Belly Dance as a Globalised Cultural Phenomenon」と題した基調講演をおこない、文化的な知識のグローバルな還流経路を探るにあたり、西洋を基点として行われてきた中東と日本の文化交流の様相について検討し、グローバル化論における新たな研究地平の開拓を目指した。
- ③研究発表として、龍谷大学の協力のもとに国際ワークショップ「『シャルギー（東洋人）』上映ワークショップ」を開催し、現在国際的に再評価されている井筒俊彦をテーマとした映画上映とイラン人監督ならびに海外の研究者を招聘した。「井筒俊彦と言語学——言葉・文化・思惟の関係性をめぐって」と題した基調講演をおこない、現代言語学の知見から井筒俊彦の思考を解体し、言語と文化と思惟の関係性にかかる人文科学として再構築する可能性について提言した。
- ④一般向けの研究成果公開として、「世界史の中のアラビアンナイト」朝日カルチャーセンター（中之島教室）、「世界文学としてのアラビアンナイト——新発見資料にもとづく最近の研究から」2019年度芦屋川カレッジ（於・芦屋市立公民館）、「アラビアンナイトとコーヒー」日本コーヒー文化学会第26回総会・記念講演会（於・学士会館・東京）、「物語は極上の嗜好品——女性が愛したアラビアンナイト」阪急生活楽校講演会（於・阪急うめだホール）等の一般向け講演会を数多く開催し、日本人にとって馴染みの薄いアラブ文化や中東世界を紹介する活動も精力的におこなった。
- ⑤科学研究費（基盤研究（B））（特設分野）「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（代表・西尾哲夫）ならびに科学研究費（基盤研究（B））（一般）「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」（代表・西尾哲夫）による海外および国内での調査をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

西尾哲夫

2019 『ガラン版千一夜物語1』東京：岩波書店。

2019 『ガラン版千一夜物語2』東京：岩波書店。

2019 『ガラン版千一夜物語3』東京：岩波書店。

2020 『ガラン版千一夜物語4』東京：岩波書店。

2020 『ガラン版千一夜物語5』東京：岩波書店。

[分担執筆]

西尾哲夫

2019 「『ゆとろぎ』とは」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』pp.46-47、東京：河出書房新社。

[その他]

西尾哲夫

2019 「『ゆとろぎ』の概念と片倉もとこ」特集「サウジアラビア、女性の暮らしの半世紀」『月刊みんぱく』43(6)：9。

2020 「大修館の一冊 鷺見朗子編著『例文で学ぶアラビア語単語集』」『英語教育』68(11)：92。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年4月27日 「井筒俊彦と言語学——言葉・文化・思惟の関係性をめぐって」『「シャルギー（東洋人）」上映ワークショップ』龍谷大学

2019年5月25日 'Beyond Orientalism: Studying Belly Dance as a Globalised Cultural Phenomenon.' "Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East", University of Oxford, Oxford, United kingdom

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「フォーラムとしての現代中東地域研究の可能性」日本中東学会第35回年次大会公開講演会『中東地域における多元的資源観の醸成を目指して』秋田大学

2019年6月2日 「アラビアンナイトとコーヒー」日本コーヒー文化学会第26回総会・記念講演会、学士会館

2019年11月17日 「企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』について」『サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから』横浜情報文化センター

・みんぱくゼミナール

2019年6月15日 「物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀」第492回みんぱくゼミナール

・研究講演

2019年11月10日 「片倉もともとアラブ・イスラームの文化人類学」『横浜ユーラシア文化館連続講座』横浜ユーラシア文化館

・展示

2019年6月6日～9月10日 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2019年6月21日 「世界史の中のアラビアンナイト」朝日カルチャーセンター（中之島教室）

2019年7月17日 「世界文学としてのアラビアンナイト——新発見資料にもとづく最近の研究から」芦屋川カレッジ、芦屋市立公民館

2019年8月27日 「物語は極上の嗜好品——女性が愛したアラビアンナイト」阪急生活楽校、阪急うめだホール

2020年1月17日 「西尾哲夫インタビュー（聞き手：二宮敦人）魅惑の現象アラビアンナイト『ガラン版 千一夜物語』（岩波書店）刊行を機に」（『週刊読書人』2020年1月17日号（第3323号））株式会社読書人

◎調査活動

・海外調査

2019年5月22日～5月28日—連合王国（オックスフォード大学主催国際シンポジウムでの基調講演）

2019年9月12日～9月24日—フランス（研究成果編集作業および民博図書館所蔵 Villoteau 手稿本校訂作業と情報収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」拠点代表者

信田敏宏 [のぶた としひろ]——教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究所社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授（2012）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）、国立民族学博物

館文化資源研究センター教授（2014）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部研究部長（2017）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*. Subang-Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 東南アジアの文化に関する人類学的研究
- 2) インクルーシブ社会に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) 本研究は、マレーシアを含む東南アジアの文化に関わる諸現象について、グローバルな状況を視野に入れながら、その最新の動向を探ることを目的とする。具体的には、民族状況や親族制度、生業や食文化など、東南アジアにおける文化現象について情報の収集・整理を行ない、その全体像を把握する。
- 2) 本研究は、本館の文化資源プロジェクト「知的障害者の博物館活用モデル構築に関する実践的研究」を中心として、知的障害者やその保護者や介護者などへのアンケートや聞き取りなどの手法を用いて、知的障害者をめぐる教育環境や社会状況の実態を探ることを目的とする。本研究の目的には、インクルーシブ社会実現に関する具体的な提言も含まれている。

・成果

- 1) マレーシアの先住民オラン・アスリの民族状況、親族制度等に関する単著『家族の人類学——マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ』（臨川書店）を刊行した。また、編集委員長として進めてきた『東南アジア文化事典』（丸善出版）も刊行した。さらに、オラン・アスリの彫像や仮面に関するエッセイや論考も刊行した。成果の一部は、特別展「先住民の宝」で展示されている。
- 2) “Minpaku Sama-Sama School: for People with Intellectual Disabilities” と題したエッセイを MINPAKU Anthropology Newsletter にて発表した。また、第2回日本ダウン症会議において、「みんぱく Sama-Sama 塾——博物館を活用した知的障害者対象の学習ワークショップ」と題した口頭発表をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

信田敏宏

2019 『家族の人類学——マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ』京都：臨川書店。

[編著]

信田敏宏編

2020 『特別展 先住民の宝』大阪：国立民族学博物館。

信田敏宏・綾部真雄・岩井美佐紀・加藤 剛・土佐桂子編

2019 『東南アジア文化事典』東京：丸善出版。

[その他]

信田敏宏

2019 「マレーシア」信田敏宏・綾部真雄・岩井美佐紀・加藤 剛・土佐桂子編『東南アジア文化事典』pp.30-31, 東京：丸善出版。

- 2019 「旅・いろいろ地球人 マレーシアふしぎばなし① おばけ」『毎日新聞』12月7日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 マレーシアふしぎばなし② 猿まね」『毎日新聞』12月14日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 マレーシアふしぎばなし③ 神の手」『毎日新聞』12月21日夕刊。
 2019 「旅・いろいろ地球人 マレーシアふしぎばなし④ ねずみ」『毎日新聞』12月28日夕刊。
 2020 「だれが先住民なのか」『季刊民族学』171：12-14。
 2020 「森をとりもどせ——マレーシア、オラン・アスリの闘い」『季刊民族学』171：24-31。
 2020 「特別展『先住民の宝』」『みんぱく e-news』225：巻頭コラム。
 2020 「先住民の思いをのせて」特集「先住民とアート」『月刊みんぱく』44(3)：2-3。
 2020 「はじめに」信田敏宏編『特別展 先住民の宝』pp.6-9, 大阪：国立民族学博物館。
 2020 「マレーシア オラン・アスリ」信田敏宏編『特別展 先住民の宝』pp.29-42, 大阪：国立民族学博物館。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

文化庁2019年度障害者による文化芸術活動推進事業（文化芸術による共生社会の推進を含む）選定委員

・他大学の客員、非常勤講師

京都女子大学現代社会学部「家族の人類学」

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]——副館長（研究・国際交流・IR 担当）、グローバル現象研究部教授

森 明子 [もり あきこ]——教授

【学歴】 筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程単位取得退学（1989）**【職歴】** 筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授・センター長（2009）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）、国立民族学博物館グローバル現象研究部教授（2017）**【学位】** 文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）**【専攻・専門】** 文化人類学 ヨーロッパ人類学、ドイツ、オーストリアの民族誌研究、民族学・民俗学の歴史的展開**【所属学会】** 日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

Mori, A. (ed.)

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social* (Senri Ethnological Studies 81). Osaka: National Museum of Ethnology.**【2019年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

社会的なものの意味と通文化的普遍性に関する人類学研究

・研究の目的、内容

近年、人文社会科学の諸分野において、社会的なものを問い直す研究が多く行われるようになった。こうした関心は、グローバル化やネオリベリズムのなかで社会が再編成されているという問題関心と連続しており、人類学の研究対象である他者も、この状況下で同時代を生きる存在として再配置されている。本研究は、このような他者のもとで再編成されつつある社会的なものを、民族誌の接近法によって明らかにしていくもので、社会的なものの再編成を、人類学の比較のパースペクティブと、人間社会の普遍性という命題のもとで、考察していく。

・成果

研究分担者として参加する科学研究費（基盤研究（B））「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘、東京学芸大学）で、オーストリア/スロヴェニア国境地域の現地調査を進めた。本年はEUの農業政策のもとで農家経営がいかに変化しているか調べた。また、ローカルな次元で展開する文化活動について前年にひきつづいて調査した。その一角をなす住民と難民申請者との活動を、民博で展示できることになった。オーストリアでの調査にもとづいて、6月に開催された日本文化人類学会研究大会（於東北大学）において口頭発表した。

館内研究者として参加しているふたつの共同研究「カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて」「心配と係り合いについての人類学的探求」のそれぞれにおいて研究発表を行い、議論と考察をすすめた。このテーマの調査研究をさらに進める目的で、科研申請を行うとともに、翌年から切り口をあらたにした共同研究をたちあげる準備を進めた。

終了した共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」（研究代表者：森 明子）の成果として、論文集『ケアが生まれる場——他者とともに生きる社会のために』（森 明子編、ナカニシヤ出版、323頁）を4月に刊行した。

6月にベルリン国立博物館群・ヨーロッパ諸文化博物館主催で開催された国際シンポジウム‘What’s Missing? Collecting and Exhibiting Europe.’において招待講演を行なった。

公開講演会「ふたつの文化を生きる」を他大学の研究者と組織し準備した（ただし、新型コロナウイルス拡散の影響で開催は中止された）。

◎出版物による業績

[編著]

森 明子編

2019 『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』 京都：ナカニシヤ出版。[査読有]

[分担執筆]

森 明子

2019 「序章 ケアが生まれる場へ」 森 明子編『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』 pp.1-16, 京都：ナカニシヤ出版。[査読有]

2019 「街区のラーデン——1980年代ベルリンの再開とケア」 森 明子編『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』 pp.170-188, 京都：ナカニシヤ出版。

2019 「あとがき」 森 明子編『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』 pp.315-316, 京都：ナカニシヤ出版。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年10月19日 「社会的なものをめぐるプロジェクト——1980年代西ベルリンにおける試みとその後の展開」 『心配と係り合いについての人類学的探求』 国立民族学博物館

2020年1月25日 「EU農業政策とホーフ——オーストリアの事例」 『カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて』 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月2日 「ケア労働者を迎える家族——オーストリア農村の調査から」 日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学

2019年6月26日 ‘Exhibiting Europe in an Ethnological Museum in Japan: Rethinking the Opposition between the Self and Others.’ “What’s Missing? Collecting and Exhibiting Europe”, Staatliche Museen zu Berlin, Berlin, Germany (招待)

・研究講演

2020年2月28日 「あるトルコ系ドイツ人の肖像——国境を越える家族の父として」公開講演会『ふたつの文化を生きる——ドイツのトルコ系移民から私たちのこれからを考える』国立民族学博物館、オーバルホール、大阪（新型コロナウイルスのため非開催）

◎調査活動

・海外調査

2019年6月23日～7月1日—ドイツ（ベルリン国立博物館群ヨーロッパ諸文化博物館で行われるシンポジウムでの発表）

2019年11月18日～12月6日—オーストリア（オーストリア・スロヴェニア国境をめぐるプロジェクトに関する調査研究）

◎大学院教育

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「変動する EU 国境地域におけるエスニック集団共生の課題」（研究代表者：加賀美雅弘（東京学芸大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「カネとチカラの民族誌——公共性の生態学にむけて」（研究代表者：内藤直樹）メンバー、国立民族学博物館共同研究「心配と係り合いについての人類学的探求」（研究代表者：西 真如（京都大学））メンバー、「JSPS 研究拠点形成事業『日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成』」（研究代表者：坂井一成（神戸大学））メンバー

相島葉月 [あいしま はつき] ————— 准教授

【学歴】上智大学比較文化学部比較文化学科卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫性博士課程修士号取得退学（2002）、オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科社会人類学修士課程修了（2005）、オクスフォード大学大学院東洋学研究科イスラーム世界専攻博士課程修了（2011）【職歴】Zentrum Moderner Orient Visiting Research Fellow（2009）、Zentrum Moderner Orient Research Fellow（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、マンチェスター大学人文学部 Lecturer in Modern Islam（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2016）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻准教授（2017）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】博士（東洋学）（オクスフォード大学大学院東洋学研究科・セントアントニーズカレッジ 2011）、科学修士（社会人類学）（オクスフォード大学大学院社会文化人類学研究科・グリーンカレッジ 2005）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2002）【専攻・専門】社会人類学、イスラーム学、中東研究【所属学会】日本中東学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

Aishima, H.

2016 *Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*. London: IB Tauris. [査読有]

[分担執筆]

Aishima, H.

2016 Are We All Amr Khaled? Islam and the Facebook Generation of Egypt. In A. Masquelier and B. Soares (eds.) *Muslim Youth and the 9/11 Generation*, pp.105-122. Santa Fe: School for Advanced Research Press. [査読有]

[論文]

Aishima, H.

2017 Consciously Unmodern: Situating Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt. *Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal* 18(2): 149-164. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代エジプトにおける美と身体文化

・研究の目的、内容

本研究の目的は、エジプトの空手家コミュニティ（競技者、指導者、父兄）の事例より、都市中流層的な美的感覚と身体文化の関係を再考することにある。本研究の出発点は、なぜエジプト中流層の少年・少女にとって、空手道が「ハラール（イスラーム法的に合法、倫理的）」な習い事であるのに対し、同様の身体動作を行うクラシック・バレエが「ハラーム（イスラーム法的に違法、非倫理的）」なのかという問いにある。ハラール／ハラームと言ったイスラーム法的な語彙を援用しているとはいえ、エジプトの空手人気を支える言説を分析するに際し、中流層的な倫理観になぞられた近代主義との関係性において論じる必要がある。空手道に取り組む意義を「目的」と「効果」で説明し、バレエを享乐的な行為と批判する言説は、国際政治経済の周縁に置かれたエジプトの中流層的な倫理観を如実に反映しているからである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、空手道の稽古を、都市中流層的な倫理観と美的感覚が実践される場として考察する。

・成果

4月25日に「人間文化機構ネットワーク型基幹プロジェクト・現代中東地域研究拠点」の事業として、*Wiley Blackwell History of Islam* (2018) の出版を記念し、編著者のアルマンド・サルヴァトーレ（マッギル大学）を招聘して、国内外のイスラーム史の専門家とともに書評会を開催し、イスラーム史を書くための理論的枠組みや方法論について話し合った。本研究会の成果については、アメリカ歴史学会の学会誌にラウンドテーブルとして投稿した。4月26日にイラン人映像作家による井筒俊彦に関するドキュメンタリー『シャルギー（東洋人）』の上映会を開催し、井筒の業績やイランの思想の専門家とともに、本作品の意義について話し合った。本イベントの成果は『月刊みんぱく』で発表した。

5月10・11日に秋田大学で開催された日本中東学会第35回年次大会に実行委員として参加し、現代中東地域研究・秋田大学拠点と協力して年次大会の企画運営に尽力した。また、現代中東地域研究若手共同研究「アラブ世界における近代的メディアとイスラーム——穏健派を中心に」（2017～18年度）の成果である分科会「メディアとイスラーム思想／知の連環」に登壇し、研究発表をおこなった。

5月24・25日は科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化（代表者・西尾哲夫）」より出張旅費を捻出して、オクスフォード大学セントアントニーズカレッジ中東センターで開催された国際ワークショップ *Niether Near nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East* に参加し、研究発表を行った。本企画は、2016年に始まった国際共同研究の三回目の研究集会であり、論文集として成果発表を行う予定でいる。

10月31日～12月2日は研究代表者をつとめる、科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」より出張旅費を捻出して、カイロにおいて隣地調査を実施した。エジプト伝統空手道協会に所属する空手教室や講習会に参加し、聞き取り調査や参与観察を通じて、エジプトの空手家コミュニティについての知見を深めた。成果の一部を発表した論文をSERに投稿中である。

1月14日～2月25日は「現代中東地域研究拠点」の用務としてマンチェスターに滞在し、グローバル化する中東とイギリス人ムスリムの身体文化についての隣地調査を実施した。1月31日にイギリスのEU離脱が始まったことを受け、味の素食文化センターの広報誌『Vesta』に「イギリスの夕食シーンにおける『多文化』をめぐるポリティクス」と題したエッセーを寄稿した。1月22～23日はフロリダ大学グローバルイスラーム研究所の招聘で、国際ワークショップ *Media and "Public" Islam in Africa and Elsewhere* に参加し、研究発表を行った。2月17～18日はルーヴァンカソリック大学とアントワープ大学の招聘でベルギーに出張し、公開講演を行った。

◎出版物による業績

[その他]

相島葉月

2019 「グローバル時代の外国研究」『*Toyro Business*』185: 1。

2020 「神の声に耳をすます」（シネ倶楽部M）『月刊みんぱく』44(2): 18-19。

Aishima, H.

2019 *Review of Religion as Critique: Islamic Critical Thinking from Mecca to the Marketplace* by

Irfan Ahmad. *American Ethnologist* 46(4): 537-538.

2020 Review of *The al-Ghazali Enigma and Why Shari'a is Not Islamic Law* by Haifaa G. Khalafallah. *Journal of Islamic Studies* 31(1): 111-113.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2019年4月26日 'Introduction, Review Roundtable of the *Wiley Blackwell History of Islam*.' 国立民族学博物館

2019年4月27日 "Post-Screening Discussion", 「『シャルギー（東洋人）』京都上映会」人間文化研究機構機関研究プロジェクト現代中東地域研究・国立民族学博物館拠点、龍谷大学深草キャンパス

2019年5月25日 'Introduction.' Workshop "Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East", Middle East Centre, St Antony's College, Oxford, United Kingdom

・共同研究会での報告

2019年7月27日 「ムスリム知識人像の変容——メディア化するイスラームと都市中流層について」『現代ムスリム知識人の地域横断ネットワークに関する研究』2019年度第2回研究会、東京外国語大学本郷サテライト

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月11日 「エジプト中流層のメディア消費と教養としてのスーフイズムの形成」日本中東学会第35回年次大会、秋田大学手形キャンパス

2020年1月24日 'Branding Sufism for the Middle Class: Mass media and 'Abd al-Halim Mahmud's Sufi Da'wa in Post-Socialist Egypt.' "Media and 'Public' Islam in Africa and Elsewhere", University of Florida, Florida, United States

・研究講演

2019年5月22日 'Escaping the Nafs in Socialist Egypt: 'Abd al-Halim Mahmud's Search for a Sufi Master.' Centre Seminar, Oxford Centre for Islamic Studies, Oxford, United Kingdom

2019年9月26日 「現代エジプトの社会階層とスポーツ実践——ポストスポーツとしての空手道の試論」第171回東北人類学談話会、東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室

2020年2月17日 'Orientalising the Orient: Searching for Karate's Budo Roots in Contemporary Egypt.' Arabic and Islamic Studies and Japanese Studies, Faculty of Arts, KU Leuven, Leuven, Belgium

2020年2月18日 'Orientalising the Orient? Searching for Karate's Budo Roots in Contemporary Egypt.' The Centre for Research on Body Cultures in Motion, Ghent University, Ghent, Belgium

・みんなくウィークエンド・サロン

2019年7月14日 「サウジ版『江南スタイル』に見るハラールな若者文化」第547回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年5月17日～5月29日—連合王国（オクスフォードでの研究発表および研究会の企画運営）

2019年10月31日～12月3日—エジプト（エジプト人空手家コミュニティに関する調査）

2020年1月14日～2月25日—連合王国、アメリカ合衆国、ベルギー（イギリスにおけるムスリム移民の身体文化についての臨地調査および研究発表）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」（研究代表者：西尾哲夫）研究分担者、科学研究費（若手研究（B））「エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

東北大学「文化人類学各論『中東イスラーム人類学』」(集中講義)

河合洋尚 [かわい ひろなお] ————— 准教授

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒(2001)、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了(2003)、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程修了(2009)【職歴】中国嘉応大学客家研究所ビジティング・スカラー(2007)、中国嘉応大学客家研究院民族学分野専任講師(2008)、広東外語外貿大学継続学院非常勤講師(2009)、中国嘉応大学客家研究院客員准教授(2010)、中国国立中山大学社会学与人類学院助理研究員[講師相当](2010)、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員(2011)、流通科学大学総合政策学部非常勤講師(2012)、園田学園女子大学シニア専修コース非常勤講師(2013)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2013)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2016)、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授(2017)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学 2009)、修士(社会人類学)(東京都立大学 2003)【専攻・専門】都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、日本華南学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[単著]

河合洋尚

2020 『〈客家空間〉の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』東京：風響社。

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2013 『日本客家研究の視角与方法——百年の軌跡』北京：社会科学文献出版社。

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) ランドスケープおよびフードスケープの人類学的研究
- 2) 環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌

・研究の目的、内容

- ①ランドスケープおよびフードスケープの動向を再整理し、その研究の到達点と今後の課題を再考する。さらに、フードスケープの視点から客家料理の再カテゴリー化についての理解を深めるとともに、客家の人々がそれとは別の食を重視し生態景観を維持してきた動きについて調査を進める。
- ②漢族、特に中国南部から世界各地に移住している客家に焦点を当て、国境を越えた社会文化的ネットワークを明らかにする。具体的には、第一に、環太平洋における客家の移動やネットワークを加味したうえで、中国広東省(梅県など)、オセアニア、中南米の客家に関する研究を進める。第二に、日本に焦点を当て、日本と台湾、広東、福建、東南アジア諸国との歴史的ネットワークについて理解を深める。

・成果

- ①景観人類学の動向を整理し、中国の北京大学、中央民族大学、アモイ大学で講演をおこなった。また、客家の景観とバーチャル世界との関係について、日経新聞社で講演をおこなった。さらに、人類学とその隣接領域におけるフードスケープの研究動向を整理して東アジア人類学研究会で発表し、その成果を研究ノートとして『国立民族学博物館研究報告』に投稿した。
- ②客家の故郷・梅県で2004年から15年間調査してきたデータを整理し、民族誌(『〈客家空間〉の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』)として風響社から刊行した。同時に、2018年12月に国立民族学博物館で開催した国際シンポジウムの成果を整理し、『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現況』

(客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在)をSERとして刊行した。さらに、客家の歴史と文化を一般向けに広く紹介する概説書として『客家——歴史・文化・イメージ』を出版した(本書は中国語に翻訳される予定である)。この本では、グローバルな客家の分布と移住、梅県、東南アジア、日本などの項目を担当した。他にも、毎日新聞の「旅いろいろ地球人」の連載で「南太平洋に住む客家」について紹介した。

◎出版物による業績

[単著]

河合洋尚

2020 『〈客家空間〉の生産——梅県における「原郷」創出の民族誌』東京：風響社。

[共著]

飯島典子・河合洋尚・小林宏至

2019 『客家——歴史・文化・イメージ』東京：現代書館。

[編著]

河合洋尚・張 維安編

2020 『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現状(客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在)』(国立民族学博物館調査報告 150) 大阪：国立民族学博物館。

[論文]

河合洋尚

2019 「四川省における〈客家空間〉の生成——成都市東山区の都市景観開発を中心として」愛知大学現代中国学会編『中国21』49：189-210。

2020 「民族文化をめぐるジレンマ——中国客家地域における市場経済化と生活実践」愛知大学国際問題研究所編『グローバルな視野とローカルの思考——個性とのバランスを考える』pp.173-190, 名古屋：あるむ。

2020 「序論——客家移民研究の現状と課題(序論——客家海外移民研究の現状と課題)」河合洋尚・張 維安編『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現状(客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在)』(国立民族学博物館調査報告150) pp.1-28, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「ペルーの客家に関する初歩的報告」河合洋尚・張 維安編『客家族群与全球現象——華僑華人在「南側地域」的離散与現状(客家とグローバル現象——「南側地域」における華僑華人の移住と現在)』(国立民族学博物館調査報告150) pp.319-340, 大阪：国立民族学博物館。

[その他]

飯島典子・河合洋尚

2019 「第29回世界客家大会の会議参加報告」『華南研究』5：89-95。

河合洋尚

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家① 客家の故郷・中国広東省」『毎日新聞』2月1日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家② タヒチの春節と元宵節」『毎日新聞』2月8日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家③ タヒチ客家の『中国人』意識」『毎日新聞』2月15日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家④ ニューカレドニアへの再移住」『毎日新聞』2月22日夕刊。

2020 「旅・いろいろ地球人 南太平洋に住む客家⑤ ニューカレドニアの『客家文化』」『毎日新聞』2月29日夕刊。

Kawai, H.

2019 Annual Junior Researcher's Seminar. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 48: 3-5.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月13日 「景観人類学在日本的發展与展望」(陳 昭と共同発表) 国際ワークショップ『中日人類学学術交流研討会』中央民族大学、北京市、中国

2019年10月5日 「渡邊欣雄与客家研究」国際シンポジウム『百年往返——台湾与日本客家研究之対話』台湾交通大学、台湾新竹市、台湾

2019年11月2日 「大洋州的『客家人』与『客家菜』——以大溪地為主」第10回客家文化学術高級論壇、贛南師範大学、贛州市、中国(基調講演)

2019年12月8日 「歴史性と景観建設——徐福信仰をめぐる歴史の資源化」日本華南学会研究大会・総会、東北

大学

・研究講演

2019年9月9日 「環太平洋的旅行者」魯東大学招待講演、煙台市、中国

2019年9月11日 「景観人類学——田野科学如何分析景観問題と景観設計？」北京大学建築と設計学院招待講演、北京市、中国

2019年11月8日 「景観人類学的新趨向——現状と展望」アモイ大学人類学部招待講演、厦門市、中国

2019年11月15日 「アニメのある景観——中国地域の客家文化継承をめぐって」日経新聞社・国立民族学博物館講演会『アニメ『聖地』巡礼——サブカルチャー遺産の現在』日経ホール、東京

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年8月4日 「南太平洋・ヴァヌアツの華僑華人」第550回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究「社会・文化人類学における中国研究の理論的的定位——12のテーマをめぐる再検討と再評価」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「中国——南太平洋島嶼国関係の変化と「オセアニアン・チャイニーズ」像の表出」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「民族誌調査に基づくニッチ構築メカニズムの解明」（研究代表者：大西秀之（同志社女子大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

中国嘉応大学客家研究院客員准教授、京都市立芸術大学・非常勤講師「アジア文化史Ⅰ」、大阪経済大学・非常勤講師「民俗学」、関西学院大学非常勤講師「フィールド文化特論A」「死と病の文化史」

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう] ————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校人類学部留学（1995）、京都大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程指導認定退学（1997）【職歴】 京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）、関西学院大学非常勤講師（2010）、東海大学非常勤講師（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】 文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）【専攻・専門】 日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）【所属学会】 日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすすめ』京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』大阪：解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

2019年度も館内外で研究講演、ワークショップなどを積極的に担当していきたい。今年度最大の課題は、2018年度末まで取り組んできた共同研究「『障害』概念の再検討」の成果公開を目的として、秋にシンポジウムを開催することである。民博でユニバーサル・ミュージアムを主題とするシンポジウムを行うのは4回目となる。過去10年余の研究活動を総括する有意義なシンポとなるよう、準備を進めたい。

ユニバーサル・ミュージアム研究の国際的発信も、今年度の大きな目標だろう。2018年度から実施している科研プロジェクト「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」の内容を欧米の学会、研究会で報告する予定である。昨年度からの懸案である教育現場で活用される「さわる絵本」も、今年度中には刊行したい。2020年度の秋の特別展に向けて、今年度後半からは展示設計等の打ち合わせで多忙となるだろう。「ポストオリパラ」の障害者施策をリードするような展示、民博の存在感を示す学際的な事業展開をめざし、各方面への協力を呼び掛ける。

・成果

今年度は館内外における研究講演を43回、“触”を主題とするワークショップを20回担当した。このうち海外での研究発表は3回、各種シンポジウムでの報告は4回、学会発表（日本特殊教育学会）は1回である。今年度最大の成果は『触常者として生きる』（伏流社、2020年1月）の刊行だろう。ここ数年の既発表論文、新聞コラムなどを集め、「触文化」の学術的な入門書として再編集した。2020年度秋に開催予定の特別展「ユニバーサル・ミュージアム」の理念を解説する書籍として、展覧会の広報にも積極的に活用したい。

2019年11月3日～4日には公開シンポジウム「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題」を実施した。シンポジウムには両日とも全国の博物館関係者を中心に、140名余が参加し、民博がユニバーサル・ミュージアム研究の拠点であることを館内外に宣言する貴重な機会となった。本シンポジウムの成果は、上記特別展の図録に収録する予定である。

年度後半は特別展の準備に忙殺されたが、ボランティア論をテーマとして、二つの小論文を執筆することができた。また2019年11月には韓国（国立工芸博物館）、2020年3月には米国（ミシガン大学、ミシガン州立大学）で日本のユニバーサル・ミュージアム研究について講演した。

◎出版物による業績

[単著]

廣瀬浩二郎

2020 『触常者として生きる——琵琶を持たない琵琶法師の旅』東京：伏流社。

[分担執筆]

廣瀬浩二郎・渥美公秀・八木絵香

2020 「『できない』を『できる』に変えていく力」八木絵香・水町衣里編『<つながり>を創り出す術 続・対話で創るこれからの「大学」』（大阪大学COデザインセンター監修）pp.143-172, 大阪：大阪大学出版会。

廣瀬浩二郎

2019 「『発建』の喜び——そこにラーメン屋がある！ 座頭市流フィールドワーカー『野生の勘』の勘の戻し方」食品産業新聞社編『おいしいはおもしろい——ニッポンの食をささえる素敵な会社』pp.60-61, 東京：食品産業新聞社。

[論文]

廣瀬浩二郎

2020 「『未開の知』に触れる——2020東京オリパラを迎える前に」『KG人権ブックレット No.26』pp.17-35, 西宮：関西学院大学人権教育研究室。

[その他]

廣瀬浩二郎

2019 「ユニバーサル・ミュージアム」『月刊みんぱく』43(5)：16-17。

2019 「芳一なし“耳”の話」『季刊民族学』170：70-75。

2019 「ぶんかのミカタ ユニバーサルミュージアムの今（上）『感覚の多様性』取り戻す実験」『毎日新

聞』11月16日夕刊。

廣瀬浩二郎・伊藤亜紗

2019 「脱・視覚依存のすすめ『目の見えない人』の世界を体験してみた」『Fole』201:14-17。

廣瀬浩二郎

2020 「『分・結・創』のボランティア論——『世話をする/世話になる』の関係を越えて」『にいがた☆高校生ボランティア2019』pp.13-26, 新潟:新潟県高等学校文化連盟。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年11月3日 「シンポジウム趣旨・概要」公開シンポジウム『日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題——2020オリパラを迎える前に』国立民族学博物館

2019年11月4日 「『合理的配慮』再考」公開シンポジウム『日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題——2020オリパラを迎える前に』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月22日 「『合理的配慮』再考——2020オリパラを迎えるに当たって」日本特殊教育学会第57回大会、広島大学

・研究講演

2019年11月11日 「多様な人々の博物館利用——視覚障害者のアクセシビリティ向上を考える」龍山工芸館、ソウル、韓国

2020年3月10日 「The Universal Museum Makes a World without Borders.」ミシガン大学美術史学部、ミシガン州、アメリカ合衆国

2020年3月12日 「Significance and Methods of the Tactile Culture Exhibition.」ミシガン州立大学博物館、ミシガン州、アメリカ合衆国

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年12月8日 「『健常者』幻想をぶっ壊せ！——琵琶法師、イタコの触角力」第561回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年11月11日～11月13日—韓国（龍山工芸館「多様な人々の博物館利用—視覚障害者のアクセシビリティ向上を考える」国際会議に参加（基調講演））

2020年3月9日～3月17日—アメリカ合衆国（米国の大学博物館における障害者サービスの現状の調査および関係者との意見交換）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「共生の技法としてのユニバーサルツーリズムの理論と実践」（研究代表者：石塚裕子（公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「インクルーシブアート教育論及び視覚障害等のためのメディア教材・カリキュラムの開発」（研究代表者：茂木一司（群馬大学）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究」研究代表者

三島禎子 [みしま ていこ] ————— 准教授

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第2課程修了（1992）、津田塾大学大学院国際関係学研究所博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究所第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2003）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）【学位】D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究所1993）、M. Soc.（パリ第5大

学大学院社会科学部 1992)【専攻・専門】文化人類学(西アフリカ研究)【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

Charbit, Y. et T. Mishima (éds.)

2014 *Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: LHarmattan.

[論文]

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima (éds.) *Questions de migrations et de santé en Afrique subsaharienne*. Paris: LHarmattan.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の移動と世界経済に関する歴史人類学的研究

・研究の目的、内容

大西洋貿易以降のアフリカ商業民の移動は、従来、もっぱら世界資本主義の観点から取り上げられてきた。経済の中心にある西欧に対して、アフリカが周辺に位置するという構図は、アフリカ商業民の移動の実態を従属や低開発といった分析枠におしとどめてきた。一方、民族文化の継承という観点からは異なる経済倫理が読み取れ、有形・無形の「財」に対する価値観が移動の伝統を支えてきたと考えられる。

このような過去の考察を踏まえ、各時代の経済状況と移動の実態、および語り継がれ世代を経て継承される移動の文化について、歴史的考察と人類学的調査をあわせておこなう。時間軸と空間軸が交差する帰結点に注目することで、ミクロな視点をグローバルな世界に位置づける作業が可能になり、アフリカ商業民がグローバルな経済のなかで演じた役割を問い直すことにつながる。

この研究は今年度申請する予定の共同研究『人類史における移動の「自由」と「不自由」の相克に関する歴史人類学的研究』（代表 鈴木英明）の一環でもあり、これまでの各個研究の総括でもある。

・成果

移動の文化を考察する過程で、対象社会の人びとが民族文化そのものをどのように向き合っているかという点から、かれらが10年以上にわたって継続している「文化週間」についての民族誌的な分析を行い論文を執筆した。これは2017年におこなった映像資料の収集を素材にしたものであり、同じデータを使って『みんなく映像民族誌』も完成した。

また計画に記した共同研究が採択され、歴史学、文化人類学、宗教学、考古学などの分野の研究者が集い、人類史における移動について多角的な視点から今後の共同研究の方向性を議論した。

◎出版物による業績

[分担執筆]

三島禎子

2019 「商業民ソニンケがつくる経済ネットワーク」永原陽子編『人々がつなぐ世界史』pp.79-82, 京都: ミネルヴァ書房。

[論文]

Mishima, T.

2020 「ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局——『文化週間』をめぐる民族誌的考察」『国立民族学博物館研究報告』44(4): 683-732。[査読有]

[その他]

三島禎子

2019 「ガラス絵とガラスアイコン」『月刊みんなく』43(6): 16-17。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

三島禎子監修

- 2020 『セネガルを越える人と地域ラジオ』（日本語・118分）
- ・DVD・CD などの制作・監修
 - 三島禎子監修
 - 2020 『みんなく映像民族誌 第34集 セネガルを越える人と地域ラジオ』（日本語・118分）
 - ◎口頭発表・展示・その他の業績
 - ・みんなくウィークエンド・サロン
 - 2019年5月12日 「新ビデオテーク紹介『ただいまオンエアソニケ・ディアスポラをつなぐ地域ラジオ』」
 - 第542回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう
 - ・広報・社会連携活動
 - 「世界の移民の歴史・事情」大阪府高齢者大学校「国際文化交流科」
 - ◎大学院教育
 - ・指導教員
 - 副指導教員（1人）
 - ・大学院ゼミでの活動
 - 「地域文化学基礎演習 I」、「地域文化学基礎演習 II」、「比較文化学基礎演習 I」、「比較文化学基礎演習 II」
 - ◎上記以外の研究活動
 - ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト M331041720 「アフリカ資料の多言語双方データベースの構築」（研究代表者：飯田 卓）メンバー
 - ◎社会活動・館外活動
 - ・他の機関から委嘱された委員など
 - Revue Européenne des Migrations Internationales 編集委員（アジア担当）

鈴木英明 [すざき ひであき]————— 助教

【学歴】 学習院大学文学部史学科卒業（2001年）、慶応義塾大学大学院文学研究科修了（2003年）、東京大学人文社会科学系研究科単位取得退学（2010年）【職歴】 日本学術振興会特別研究員、長崎大学多文化社会学部准教授（2014–2018）を経て現職【学位】 博士（文学 東京大学 2010）【専攻・専門】 歴史学、インド洋海域史、グローバルヒストリー【所属学会】 日本アフリカ学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

Suzuki, H.

2017 *Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the 19th Century*. New York: Palgrave.

[編著]

鈴木英明編

2019 『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』東京：明石書店。

Suzuki, H. (ed.)

2016 *Abolitions as a Global Experience*. Singapore: NUS Press.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド洋におけるアフリカン・ディアスポラの研究

・研究の目的、内容

本研究は、インド洋におけるアフリカン・ディアスポラの実態解明を目的とし、特に19世紀から20世紀の動向に着目しこの課題に取り組むものである。また、アフリカン・ディアスポラの当事者だけでなく、彼らと共生する人びともに着目する。その理由とは、19世紀から20世紀初頭のインド洋では、現在我々が認識するような

「アフリカ」や「アフリカ人」という概念が同時代において通用していたとは考えられないからである。その一方で、20世紀初頭にはパン・アフリカ主義が大西洋で沸きあがっていた。こうした大西洋を震源とする「アフリカ人」意識がインド洋に伝わったのか、あるいは、伝わらないとすれば、インド洋のアフリカ大陸から離れた場所に生きるアフリカ大陸出身者はいかなる自己意識を有していたのか、この点の解明を試みる。

・成果

本テーマについては、インド洋のアフリカン・ディアスポラを概観した“African Diaspora in Asia,” David Ludden, et al. (eds.), *Oxford Research Encyclopaedia of Asian History*, Oxford: Oxford University Press, 28p. を執筆した。また、2020年2月2日に立教大学で開催された公開シンポジウム「アジアの海を渡る人々：18・19世紀の渡海者」において『アフリカ人』の誕生——19世紀インド洋西海域における救出奴隷の行方」と題する報告を行った。これは救出奴隷がインドに送致され、そこで教育を受け、アフリカに送り返されるという内容で、現在、論文化を進めている。また、京都精華大学で開催された日本アフリカ学会第56回学術大会にて“African Diaspora in the 20th Century Persian Gulf: Preliminary Observations with Slave Narratives”と題する報告を行った。これは、本年度で完了した科学研究費（若手研究（B））「20世紀前半ペルシア湾における「奴隷解放調書」の研究」の成果であり、これについては今後数年をかけ、さらに発展させ、研究書を書く予定である。

◎出版物による業績

[編著]

鈴木英明編

2019 『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』東京：明石書店。[査読有]

[分担執筆]

鈴木英明

2019 「海域史研究の展開とその課題」鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』pp.11-43, 東京：明石書店。

2019 「海域史研究の可能性——ネットワーク論の課題と展望」鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』pp.303-313, 東京：明石書店。

デレック・ヘン著、鈴木英明訳

2019 「9世紀の沈船黒石号から見える港・航海・商人・国家」鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』pp.45-71, 東京：明石書店。

アンゲラ・ショッテンハマー著、鈴木英明訳

2019 「16-18世紀における太平洋を跨ぐ水銀の密貿易」鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』pp.229-265, 東京：明石書店。

Suzuki, H.

2020 African Diaspora in Asia. In David Ludden, et al (eds.) *Oxford Research Encyclopaedia of Asian History*, pp.1-28. Oxford: Oxford University Press. [査読有]

[論文]

鈴木英明

2020 「海域世界の鼓動に耳を澄ます——19世紀インド洋西海域世界の季節性」『国立民族学博物館研究報告』44(4)：591-623。[査読有]

[その他]

鈴木英明

2019 「ノウルーズは海を渡ったのだろうか——ザンジバルにおける幾つかの謎」『季刊民族学』168：56-63。

2019 「アストロラーベ」『季刊民族学』168：64。

2019 「ルーズ・ナーマ」『季刊民族学』168：64。

2019 「国立民族学博物館の収蔵品②世界で一番有名な奴隷船ブルークス号」『文部科学 教育通信』466：2。

2019 「奴隷展示を介した過去、現在、そして未来」特集「奴隷展示は問う」『月刊みんぱく』43(9)：2-3。

2019 「旅・いろいろ地球人 サントメ砂糖紀行① ギニア湾の小島」『毎日新聞』11月2日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 サントメ砂糖紀行② 燃える水の味」『毎日新聞』11月9日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 サントメ砂糖紀行③ 世界最低品質の砂糖」『毎日新聞』11月16日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 サントメ砂糖紀行④ サトウキビを噛む」『毎日新聞』11月30日夕刊。

2020 「みんぱくで大西洋奴隷交易に触れる」『月刊みんぱく』44(2)：16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年12月7日 「移動概念の現状と可能性」『人類史における移動概念の再構築——「自由」と「不自由」の相克に注目して』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月18日 'African Diaspora in the 20th Century Persian Gulf: Preliminary Observations with Slave Narratives.' 日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学

2019年6月15日 「西アフリカ調査報告」地中海型奴隷制度の史的展開とその変容研究会、一橋大学

2019年6月22日 「インド洋西海域世界の近代?——奴隷交易を事例にして」インド洋交易圏の統計的研究研究会、総合地球環境学研究所

2019年9月4日 'Borderless World and Global History.' "Why Do We Need Global History?," The University of Tokyo

2019年10月4日 「ネットワーク、季節性、インド洋西海域世界——19世紀を事例に」近世史フォーラム10月例会、大阪市立北区民センター

2019年10月17日 Network and Kaiiki: Node=Network and Flow=Network, Categories at Work, Warwick University, Warwick, United Kingdom

2019年12月22日 「海を渡りきることの意味——19世紀後半インド洋西海域の救出奴隷を事例に」渡海者研究会岡山大会、岡山大学

2020年2月2日 「『アフリカ人』の誕生——19世紀インド洋西海域における救出奴隷の行方」公開シンポジウム『アジアの海を渡る人々——18・19世紀の渡海者』立教大学

2020年2月17日 'In between Japan and Africa: Or, Indian Ocean world in Japanese Khanga.' "Oceanic Circularities: The Indian Ocean in the Modern World", Georgetown University Qatar, Doha, Qatar

・みんぱくゼミナール

2019年9月21日 「奴隷交易の世界史——サハラ以南アフリカと世界」第495回みんぱくゼミナール

・研究講演

2019年4月14日 「スパイスアイランドに生きる人々——ヒトとモノの移動が作り出す19世紀ザンシバル社会」MMP、国立民族学博物館

2019年9月18日 「インドとアフリカ——インド洋海域世界史の観点から」(2019年度南アジアセミナー) NIHU プログラム「南アジア地域研究」、広島大学

2019年11月2日 「インド洋西海域世界、より深く、その先へ」(地域研究コンソーシアム賞研究作品賞受賞者記念講演) 地域研究コンソーシアム、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2019年11月2日 「マウシムを生きる人びとの歴史——19世紀ペルシア湾の生業、交易、移動」第494回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・その他(「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの)

2019年5月17日 'Short Introduction.' Joint Research Seminar "Special Session on Africa in the Indian Ocean World", 国立民族学博物館

2019年5月18日 オーガナイザー、Forum "African History in Broader Perspective: Some Dimensions in 19th and 20th Century", 第56回日本アフリカ学会学術大会、京都精華大学

◎調査活動

・海外調査

2019年9月9日～9月17日—インド(インドにおける渡海者関連史跡の調査)

2019年10月15日～10月29日—連合王国(ウォーリック大学での会議に出席、バーミンガム大学図書館での調査)

2019年11月10日～11月25日—ケニア(ケニア博物館群と締結のMoUの受け取り、ケニア沿岸部での調査)

2019年12月7日～12月17日—ジブチ共和国(ジブチにおける真珠採取業と港湾史、及び文化遺産に関する調査)

2019年12月22日～2020年1月1日—タイ(東南アジア大陸部における植民地国家建設に関する研究)

2020年1月4日～1月18日—ケニア、タンザニア(モンバサ、ザンジバルでの文化遺産調査、ザンジバルでの季節変動と交易に関する調査)

2020年1月21日～1月31日—インド（インド・ボンベイ管区およびペルシア湾における植民地国家建設に関する研究）

2020年2月14日～2月19日—カタル（Oceanic Circularities: The Indian Ocean in the Modern Worldへの参加と報告）

2020年2月23日～3月1日—クウェート（ペルシア湾における奴隷解放調書の研究）

2020年3月6日～3月18日—連合王国（ロンドンにおけるインド洋交易圏に関する文書館調査）

2020年3月20日～3月30日—ベトナム（ベトナム南部におけるポスト奴隷制の労働力移動に関する調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「地中海型奴隷制度の史的展開とその変容——隷属の多様性をめぐる比較的研究」（研究代表者：清水和裕（九州大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「植民地国家建設の比較研究——国家と情報の関係に焦点を当てて」（研究代表者：鬼丸武士（九州大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「渡海者のアイデンティティと領域国家——21世紀海域学の史的展開」（研究代表者：上田 信（立教大学））研究分担者、国立民族学博物館共同研究「人類史における移動概念の再構築——『自由』と『不自由』の相克に注目して」研究代表者

学術資源研究開発センター

野林厚志 [のばやし あつし]——センター長（併）教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程退学（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2012）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授・センター長（2014）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2015）、国立民族学博物館文化資源研究センターセンター長（2015）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長（2019）【学位】博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）【専攻・専門】フォルモサ研究 原住民族研究、博物資源学、民族考古学 狩猟園芸農耕民研究、通文化モデル研究、人類学 生業研究、先住民族研究、食文化研究【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会、The American Anthropological Association、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

野林厚志編

2018 『肉食行為の研究』東京：平凡社。

順益台湾原住民研究会・野林厚志主編

2014 『台湾原住民研究の射程——接合される過去と現在』北京：順益台湾原住民博物館。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

生態資源獲得の技術の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、人類が生態資源の獲得に使用してきた技術を、(1)物質文化、(2)人間の行動、(3)環境条件、

という3つの側面から分析し、人類の適応行動の空間的な変異と時間的な変化を明らかにすることである。

このために、(1)台湾、インドネシアで、生業行動、食生活に関する野外調査を、国立民族学博物館をはじめとする内外の博物館で、生業資源の獲得に関連する資料の熟覧調査を行い、生態資源（動物、植物、鉱物、水等）を獲得するための技術インデックスを作成する。同時に民族誌データ（Binford2001等）の定量分析を進め、環境と文化要素との相関に関する考察を行う。以上の結果にもとづき、自然環境への適応、集団接触による文化変容を説明するための生態資源の獲得技術の人類学的モデルを提示する。

なお、本研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施する。

・成果

本年度は当初の計画にしたがい、台湾、インドネシアでの野外調査を実施した。特に、インドネシア・ハルマヘラ島においては、生態資源の獲得手段の新たな技術がある集団に導入された場合の、集団の反応として、(1)既存の生態資源の利用には在来技術と新技術との併存、(2)生態学的適応と無関係の事物の在来社会への定着という知見を、具体的な民族誌事例にもとづき得ることになった。前者ではハルマヘラのガレラ社会では、従来型のカヌーと船外動力機つき漁船が併用されており、この背景には、船外動力機つきの漁船は、必ずしも従来型のカヌーを用いた漁場のすべてに適応的ではなかったが、沿海での漁撈へはより適応的であり、そこでの獲得資源量が、従来、獲得できていた資源量よりも多いということがあった。後者に対応する民族誌的事実はカヌーフロート装着法の組み込みが、間接装着法から直接装着法という単純な構造へ移行する現象が見られたことである。以上の結果は、「パレオアジア文化史」主催の第9回研究大会でポスター発表を行い、成果の速報的公開を行った。民族誌データ（Binford2001等）の定量分析については、オーストロネシア系集団の鳥占いに共伴する文化事象の確率分布について、他の研究機関所属の研究者の協力を得て分析した。この成果は、アメリカ人類学会の年次大会において口頭発表を実施した。

なお、本研究は、新学術領域研究「パレオアジア文化史」の計画研究「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の一環で実施した。

◎出版物による業績

[編著]

野林厚志編

2020 『パレオアジア文化史学 計画研究 B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

[分担執筆]

野林厚志

2020 「台湾原住民族の文化の多様性——ビーズにみる過去と現在」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史——美の起源に迫る』pp.239-254, 京都：昭和堂。[査読有]

[論文]

野林厚志

2019 「台湾原住民族の生態資源獲得の技術に関する研究——狩猟方法を中心に」『第12回台日原住民族研究論壇』pp.208-225, 台北：国立政治大学原住民族研究中心。[査読有]

2019 「特集『地域の食の形成——日本を中心とした産業化の脈絡のなかで』序」『国立民族学博物館研究報告』44(2)：279-289。[査読有]

2019 「台湾社会における甘味を嗜好した飲食文化の形成——砂糖の歴史生態から考える」『国立民族学博物館研究報告』44(2)：407-437。[査読有]

2019 「服飾織物重製と博物館」『消失與重視——博物館織品重製研討會』pp.8-17, 苗栗：苗栗縣原住民工藝協會。

2020 「台湾原住民族パイワン族のアワ利用——社会関係と物質文化を中心に」『歴史と民俗』（神奈川大学日本常民文化研究所論集）36：121-142。

[その他]

野林厚志

2019 「旅の読書室④ 自分がなにものかを教えてくれる旅」『まほら』99：52-53。

2019 「下顎骨を飾る文化」『BIOSTORY』31：32-33。

2019 「持続可能な地球環境は実現できるか」『こころ』51：6-7。

- 2019 「パイワン族の円形鉄鍋とアワ食」『季刊民族学』170：98-105。
- 2019 「共創のための空間——台湾原住民族と国立民族学博物館」『台湾——黒潮でつながる隣ジマ』pp.24-27, 那覇：沖縄県立博物館・美術館。
- 2019 「生業技術の変化の文化的解釈——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会』pp.79-80, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班。
- 2020 「台湾・タオ族の原住民運動——海の先住民の選択」『季刊民族学』171：32-3。
- 2020 「タオ（台湾）」『特別展 先住民の宝』pp.43-58, 大阪：国立民族学博物館。
- 2020 「生業技術の変化の文化的解釈——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」『パレオアジア文化史学 計画研究B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』pp.19-23, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班（研究課題番号16H06411）。
- 2020 「共同研究『主食論』をはじめるとあたって」『民博通信 Online』1：24-25。

彭 宇潔・高木 仁・野林厚志

- 2019 「パレオアジア民族誌DBの構築に向けて(2)——スンダーサフル生態圏における狩猟用具の素材と形状に着目して」『パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会』pp.83-84, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究B01班。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年5月11日 「ベクトルモデルはデータと比較可能か？」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学
- 2019年5月12日 「パレオアジア民族誌DBの構築に向けて(1)——狩猟技術データ投影の試行」パレオアジア文化史学第7回研究大会、名古屋大学
- 2019年9月3日 「台湾原住民族の生態資源獲得の技術に関する研究——狩猟方法を中心に」第12回台日原住民族研究論壇、国立政治大学原住民族研究中心、台北市、台湾
- 2019年10月19日 「ハルマヘラ島における生態資源利用」みんぱく国際ワークショップ『アジアにおける狩猟採集民——生態学的適応と社会関係』国立民族学博物館
- 2019年11月20日 'Historical Ecology of Bird Augury in Austronesian Culture, Human-bird Entanglements in the Pacific Anthropocene.' AAA/CASCA Annual Meeting, Vancouver Convention Center, Vancouver, Canada
- 2019年12月14日 「パレオアジア民族誌DBの構築に向けて(2)——スンダーサフル生態圏における狩猟用具の素材と形状に着目して」パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会、国立民族学博物館
- 2019年12月14日 「生業技術の変化の文化的解釈——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 第8回研究大会、国立民族学博物館
- 2020年2月29日 「人類集団の肉食——拡大する消費」食の文化フォーラム40周年記念『食の人類史第3回 食の価値観』味の素食の文化センター、東京

・研究講演

- 2019年12月20日 「肉食行為の人類史」南開大学、天津、中国

・展示

- 2018年10月2日～2019年4月14日 「南方共筆 継承される台南風土描写」国立臺灣歴史博物館

・広報・社会連携活動

- 2019年6月16日 「亥年講演会 イノシシとブタ——愛憎の文化史」日本モンキーセンター、愛知
- 2019年7月11日 「台湾原住民族における動物の生命循環」多摩美術大学
- 2019年7月19日 「日本の食文化」中国南開大学、国立民族学博物館
- 2019年9月14日 「台湾座談会——国立民族学博物館と台湾とのつながり」沖縄県立博物館
- 2019年11月14日 「写真アーカイブスの可能性を探る——内田勤コレクションに刻まれた台湾の風景」『写真よ、語れ！台湾と日本——時代と国を超えた民間写真史研究プロジェクトフォーラム』NPO法人 Art Bridge Institute、台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター、東京

◎調査活動

・海外調査

2019年8月20日～8月30日—インドネシア（インドネシア ハルマヘラでの野外調査）

2019年9月2日～9月6日—台湾（台日原住民族研究フォーラムに参加し、台湾原住民族の狩猟技術の研究
成果発表ならびに議論を行う）

2019年11月8日～11月11日—台湾（フォーラム型情報ミュージアムの成果に関するワークショップと招待講演）

2019年11月19日～11月28日—カナダ、アメリカ合衆国（バンクーバーで開催のアメリカ人類学会に参加、トル
マン大学（アメリカ ミズーリ州カークスビル）で狩猟採集社会の通文化アーカイ
ブスの調査）

2019年12月19日～12月22日—中国（人類の肉食行動の進化論的研究に関する講演と研修）

2020年1月4日～1月6日—台湾（順益台湾原住民族博物館にて研究活動の報告と来年度計画に関する懇談）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（5人）、副指導教員（4人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

博士論文審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト
の代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研
究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的
モデル構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

生き物文化誌学会理事、アジア太平洋フォーラム・淡路会議アジア太平洋研究賞選考委員、味の素の文化セ
ンター食の文化フォーラム会員、奈良県文化財保存・活用会議委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文
化研究所フィールド・サイエンス・コロキウム運営委員

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]————— 教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修
了（1983）、マギル大学人類学部人類学科博士課程退学（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育
大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学教育学部函館校助教授（1992）、国立民族学博物館第一研究
部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授
（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授（2005）、
国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、
国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部部長（2009）、国立民族学博物館研究戦
略センター教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センターセンター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）、
国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センターセンター長
（2017）、人間文化研究機構本部理事（2018）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（併任）（2018）【学
位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専
攻・専門】文化人類学 カナダ・イヌイットの社会変化、都市在住のイヌイットの民族誌的研究、先住民による海
洋資源の利用と管理、アラスカ先住民イヌピアットとカナダ・イヌイットの捕鯨、環北太平洋先住民文化の比較研
究【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会、生き物文化誌学会、
函館人文学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』 京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007 第18回カナダ首相出版賞

1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカ北方先住民社会におけるホッキョククジラ鯨とシロイルカ鯨の比較研究——獲物の分配を中心に

・研究の目的、内容

北アメリカのアラスカ先住民イヌピアットとカナダ・イヌイットはホッキョククジラを捕獲している。一方、同じ人びとが小型鯨類であるシロイルカも捕獲している。彼らは、国際的なおよび国家の規制や環境・動物保護団体による反捕鯨運動、温暖化などの地球環境の変化の影響を受けながら、これらの捕鯨を実施している。本研究では、グローバル化時代における捕鯨の社会・文化・経済・政治的意義を解明するために、現在の北アメリカ先住民社会におけるホッキョククジラ鯨とシロイルカ鯨の関する比較研究する。とくに、これらの捕鯨の歴史と現状について、狩猟方法と狩猟技術、狩猟集団、産物の分配、クジラと人間の関係をめぐる世界観、捕鯨の文化・社会・経済的意義などに着目しながら比較研究を行なう。

また、2019年度は、科学研究費（基盤研究（A））「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究——伝統継承と反捕鯨運動の相克」（2015年度～2018年度）及び民博共同研究「捕鯨と環境倫理」（2016年度～2019年度）、国際シンポジウム「Whaling Activities and Issues in the Contemporary World」（2018年11月30日～12月1日）の成果を取りまとめ、出版の準備を進める。

・成果

- (1) 北アメリカ北方先住民社会におけるホッキョククジラ鯨とシロイルカ鯨の分配に関する比較研究を行い、論文執筆の準備を行った。大型鯨類と小型鯨類の違いはあるが、現在でもイヌイットやイヌピアットの鯨肉や脂皮が数次にわたり分配され、家族・親族のネットワークに沿って村全体に流通しており、必要な食料源のひとつであることが判明した。論文は2020年度中に完成させる予定である。
- (2) 科学研究費（基盤研究（A））「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究」（2015年度～2018年度、代表者：岸上伸啓）の成果報告書として『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（SER149号）（国立民族学博物館、2019）を編集し、出版した。同書において「北アメリカ先住民の捕鯨の現状と課題」および「世界の捕鯨に関する最近の研究動向」の2本の論文を出版した。
- (3) 科学研究費（基盤研究（A））「グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究——伝統継承と反捕鯨運動の相克」（2015年度～2018年度、研究代表者：岸上伸啓）および民博共同研究「捕鯨と環境倫理」（2016年度～2019年度、研究代表者：岸上伸啓）、国際シンポジウム「Whaling Activities and Issues in the Contemporary World」（2018年11月30日～12月1日開催）の成果として、『捕鯨と反捕鯨のあいだに』と『World Whaling』を取りまとめ、出版準備を完了させた。2020年度内に刊行する予定である。
- (4) クジラと人間の関係の歴史的变化について2019年6月1日に東北大学で開催された日本文化人類学会第53回研究大会にて口頭発表を行なった。また、アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨と食の安全保障・食の主権について、2019年8月末にポーランド国ボズナンで開催された国際人類・民族学連合の中間研究大会（Inter-Congress of IUAES）で口頭発表を行なった。後者は、科学研究費（基盤研究（A））「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」（2019年度）の成果の一部である。その発表に基づいて、生業としての捕鯨はアラスカ先住民イヌピアットの食料の安全保障と食料の主権の両方に貢献しており、混交経済下で生活を営んでいる彼らにとって重要であることを検証した和文論文（「アラ

スカ先住民社会における食料の安全保障と食料の主権について——2010年代のアラスカ州ウットゥキアグヴィク（旧バロー）のイヌピアットの事例を中心に」を『人文論究』第89号（2020年3月）から出版した。

◎出版物による業績

[編著]

岸上伸啓編

2019 『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[分担執筆]

岸上伸啓

2019 「世界の捕鯨と捕鯨に関する最近の研究動向」岸上伸啓編『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp.5-30，大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2019 「北アメリカ先住民の捕鯨の現状と課題」岸上伸啓編『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp.85-104，大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2020 「クジラ取りの系譜——生業捕鯨と商業捕鯨」秋道智彌・角南篤編『海はだれのものか』（海とヒトの関係学③）pp.52-65，大阪：西日本出版社。

2020 「北西海岸先住民（カナダ）」信田敏宏編『先住民の宝』pp.107-122，大阪：国立民族学博物館。

[論文]

岸上伸啓

2020 「北米アラスカ・北西海岸研究からみた環北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究の展望」北海道立北方民族博物館編『第34回北方民族文化シンポジウム網走 報告 環北太平洋地域の伝統と文化4 アラスカ・ユーコン地域』pp.1-6，網走：北方文化振興協会。

2020 「アラスカ先住民社会における食料の安全保障と食料の主権について——2010年代のアラスカ州ウットゥキアグヴィク（旧バロー）のイヌピアットの事例を中心に」『人文論究』89：59-71。[査読有]

[その他]

岸上伸啓

2019 「米国アラスカ地域の捕鯨文化における気候変動の諸影響——ウットゥキアグヴィクのイヌピアットの事例を中心に」『アークトス』54：1-4。

2019 「人間とクジラの関係の歴史的变化に関する——考察 アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラを中心に」『第53回日本文化人類学会研究大会発表要旨集』，東京：日本文化人類学会。[査読有]

2019 「環北太平洋地域における先住民文化の比較研究に関する一考察：歴史、現状、未来」『日本シベリア学会第5回研究大会 プログラム発表要旨』p.7，京都：日本シベリア学会第5回研究大会事務局。

2019 「はじめに」『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp.1-2，大阪：国立民族学博物館。

2019 「おわりに」『世界の捕鯨文化——現状・歴史・地域性』（国立民族学博物館調査報告149）pp.213-214，大阪：国立民族学博物館。

2019 「対談：なぜ人は極北をめざすのか」『中央公論』133(10)：172-184。

2019 「環北太平洋沿岸地域におけるカナダ西海岸先住民文化の位置づけ——新たな地域研究の視座」『日本カナダ学会第44回年次研究大会 プログラム・報告要旨』p.23，鹿児島：鹿児島純心女子大学・日本カナダ学会第44回年次研究大会実行委員会。[査読有]

2019 「カナダ・イヌイット社会の歴史と現状、問題点」『歴史地理教育』899：10-15。

2019 「セッションⅢ『先住民』」『日本カナダ学会ニューズレター』114：7-8。

2020 「贈りものってなんだろう？」『Ace（エース）』266：12-13。

2020 「クジラ取りの系譜——生業捕鯨と商業捕鯨」『Ocean Newsletter』468：4-5。

2020 「捕鯨は結局、文化なの？ GHQが許した歴史、TVドラマによる神格化（インタビュー記事）」『Withnews』。

2020 「カナダ先住民のトーテムポール制作とその地域産業化」特集「先住民とアート」『月刊みんぱく』44(3)：6-7。

2020 「コンピュータがひもとく歴史の世界——デジタル・ヒューマニティーズってなに？ 第38回人文機構シンポジウムについて」『NIHU Magazine』47，3月16日。

Kishigami, N.

- 2019 An Argument for Sustainable Whaling: The Case of Alaska's Indigenous Peoples. *JAPAN Forward: Real Issues, Real Voices, Real JAPAN*. Tokyo: JAPAN Forward Association, Inc.
- 2019 Food Security and Sovereignty Problems among the Inupiat in Utqiagvik, Alaska, USA. *Abstract of IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities"* pp.95-96. Poznan: The Organizing Committee of the 2019 Inter-Congress "World Solidarities".
- 2020 38th NIHU Symposium, Worlds of History Opened Up by Computers: Considering the Digital Humanities. *NIHU Magazine* 47. Tokyo: National Institutes for the Humanities.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

- 2020年1月25日 「コンピュータで読む人間文化」第38回人間文化研究機構シンポジウム『デジタル・ヒューマニティーズってなに——コンピュータがひもとく歴史の世界』日比谷図書文化館・日比谷コンベンションホール（大ホール）

・共同研究会での報告

- 2020年2月16日 「捕鯨をめぐる世界の動きと諸問題」『捕鯨と環境倫理』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月1日 「人間とクジラの関係の歴史的变化に関する一考察——アラスカ先住民イヌピアットとホッキョククジラを中心に」日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学
- 2019年6月2日 「分科会『「布施」とは何か』全体へのコメント」日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学
- 2019年6月8日 「環北太平洋地域における先住民文化の比較研究に関する一考察——歴史、現状、未来」日本シベリア学会第5回研究大会、同志社女子大学
- 2019年8月29日 'Food Security and Sovereignty Problems among the Inupiat in Utqiagvik, Alaska, USA.' IUAES 2019 Inter-Congress "World Solidarities", Adam Mickiewicz University, Poznan, Poland
- 2019年9月8日 「環北太平洋沿岸地域におけるカナダ西海岸先住民文化の位置づけ——新たな地域研究の視座」日本カナダ学会第44回年次研究大会、鹿児島純心女子大学
- 2019年10月5日 「北米アラスカ・北西海岸研究からみた環北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究の展望」第34回北方民族文化シンポジウム網走『環北太平洋地域の伝統と文化4 アラスカ・ユーコン地域』オホーツク文化交流センター

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

- 2019年11月24日 「極北の極寒に耐えるイヌイット——毛皮服の秘密」国立民族学博物館コレクション『世界のかわいい衣装』ギャラリートーク、阪急うめだ本店

◎調査活動

・海外調査

- 2019年8月7日～8月19日—カナダ（カナダ北西海岸先住民クワクワクウとハイダの社会変化に関する現地調査）
- 2019年8月25日～9月1日—ポーランド（ポズナン開催の国際人類学・民族学会中間会議（2019 IUAES Inter-Congress）での研究発表と Adam Mickiewicz University 文化人類学・民族学部での社会変化に関する人類学的研究方法・理論の調査）
- 2020年2月21日～2月24日—カナダ国ブリティッシュ・コロンビア州キャンベルリバー（カナダ・バンクーバー島における先住民によるトーテムポールおよびその制作に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- 科学研究費（基盤研究（A））「ネットワーク型博物館学の創成」（研究代表者：須藤健一）研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

- 早稲田大学博士論文審査委員、日本カナダ学会理事・副会長、日本文化人類学会日本文化人類学会第28期評議

員、Journal of Anthropological Research Editorial Board Associate Editor、北極環境研究コンソーシアム (JCAR) 北極環境研究コンソーシアム (JCAR) 第4期運営委員、民族藝術学会理事、ArCS北極域研究推進プロジェクト評議会委員、北海道大学北極域研究センター北極域研究共同推進拠点運営委員会委員

笹原亮二 [ささはら りょうじ] ————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒 (1982)、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程退学 (1995)、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士前期課程修了 (1995) 【職歴】国立民族学博物館第一研究部助手 (1996)、国立民族学博物館民族文化研究部助手 (1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授 (2001)、国立民族学博物館民族文化研究部教授 (2011)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授 (2017) 【学位】博士 (歴史民俗資料学) (神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 2001)、修士 (歴史民俗資料学) (神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 1995) 【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 日本の獅子舞の民俗学的研究、日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、民俗学における資料論 【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』pp.273-294, 京都：思文閣出版。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

地域の歴史文化研究における民俗誌の有効性

・研究の目的、内容

日本列島の各地では、平地・山間・沿岸などの立地、寒冷地・温暖地などの気候、農業・林業・水産業などの生業など、様々な面で多様性に富む数多くの地域社会が存在し、そこでは大勢の人々の多種多様な生活が営まれてきた。そうした地域社会や人々の生活は一朝一夕に形成されたわけではなく、そこに住む人々が、その時々での社会や環境などの変化と密接に関わりながら世代を重ねる間に、人々の暮らしぶりが重層的に蓄積したり、取捨選択されたり、混交したりして形成されてきた歴史文化といえる。

近年、震災や豪雨被害などの大規模災害や急速な少子高齢化による地方の過疎化などにより、高度経済成長を初め、過去の急激な社会の変化の時以上に、地域社会の疲弊や存続の危機が各方面から指摘されるようになった。そんな中で、地域社会を将来的にいかにつなぐか再生させたりしていくか、そのための手がかりや参照点として、慣習的な互助組織、信仰行事、祭礼、民俗芸能などの地域の歴史文化が注目を集めるようになってきた。

民俗学は、明治維新以来の近代化という社会全体の一元的で強力な変化に各地の地域社会が巻き込まれ、人々の生活も様々な面で急激な変化を余儀なくされる状況に直面して、歴史文化としての各地の人々の生活の種々相の詳細な記録、即ち民俗誌の作成を通じ、地域社会のよりよいかたちでの将来的な存続や再生に資することを目標の一つとしてきた。本研究では、従来の民俗学の民俗誌作成の試みについて検討を行い、それが近年の地域社会における歴史文化研究の方法としていかに有効性を持ちうるかを考えてみたい。

本研究の実施にあたっては、申請者が研究代表者の科学研究費（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」、及び人間文化研究機構広域連携型機関研究プロジェクト「地域における歴史文化研究拠点の構築」と連携して進める。

・成果

本研究では、新潟県佐渡島に関する柳田国男『北小浦民俗誌』（1947）と福田アジオ他「北小浦の民俗」（『柳田国男の世界 北小浦民俗誌を読む』2001所収）の二つの民俗誌、及び、沖縄県域で盛んに刊行されている字誌（地域誌）について、それぞれの作成の経緯・現地との関係・記述の内容・記述の方法などの特徴を検討し、相互に比較を行い、民俗誌・地域誌の地域社会における歴史文化研究の方法としての有効性の検討を行った。

柳田国男『北小浦民俗誌』は、倉田一郎の現地調査の「採集手帖」や『佐渡海府方言集』などの著作、柳田自身の佐渡での見聞を基に、北小浦という一地域を全国的な視野から記述を試みている。記述の基本は歴史的な視角で、社会や生活の歴史の変遷の提示が試みられ、断定を避けた論述、推論や仮説や課題の提示、柳田が考える民俗学や民俗誌の方法が主張されている。福田アジオ他「北小浦の民俗」は、北小浦の社会や生活の様相を福田らが自らの現地調査の成果を基に記したもので、近年の民俗調査報告書と同様の項目立てで地域の全体像の提示が試みられている。内容は北小浦に関することに限られ、ほとんどが聞き取った過去の様相の再現で、中立的な調査資料の提示に終始している。沖縄県域の字誌は地域の歴史や風俗習慣などについて地域の人々自らが記している。各地の字誌には、地域の歴史や文化の後世への継承やよりよい地域の将来の実現という刊行の目的、移民や米軍基地などの地域の人々の興味関心に関する記述、住民の名簿などの地域の関係者向けの個人情報掲載といった共通点がみられる。

これらの民俗誌や字誌には様々な違いが認められる。特に地域との関係では、地域内外の研究者や地域住民などの誰を読者に想定しているかという点で異なるが、両者の関係は字誌が最も密接である。地域の人々自らの執筆、よりよい地域の実現という刊行の目的といった字誌の特徴は、柳田国男の郷土研究や民俗学の主張に通じる。更に、各地の字誌の刊行に指導的役割を果たした名護市史編纂室の存在も注目される。それらを考慮すると、民俗誌の作成を、地域との関係が密接な字誌のありようを参照しつつ、地域の歴史文化研究の方法として再構成を試みるのが有効ではないかと思われた。

本研究の成果は、「課題としての地域の歴史や文化の記述——二つの民俗誌と字誌を巡る小考（仮題）」として『国立歴史民俗博物館研究報告 特集号』に投稿の予定である。

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）研究分担者

寺田吉孝 [てらだ よしたか] ————— 教授

【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部民族音楽学科修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部民族音楽学科博士課程修了（1992）【職歴】ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2012）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授（2017）【学位】Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】民族音楽学【所属学会】東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka:

National Museum of Ethnology.

【論文】

Terada, Y.

2000 T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【受賞歴】

2000 Jaap Kunst Award (Society for Ethnomusicology, USA)

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

1. パフォーミング・アーツによる共生社会実現の可能性
2. 映像音響メディアの特質と活用の可能性の再検討

・研究の目的、内容

- 1) 音楽・芸能などに代表されるパフォーミング・アーツは身体を媒体とし実践されるため、視覚中心的な認識体系とは異なる人間の知覚・思考形態に作用すると考えられ、人間の感情に大きな影響を与えることが報告されている。しかし、その一方で、感情に作用するパフォーミング・アーツの力が、偏狭な国家主義、民族主義、性差別主義などに利用されてきたこともまた事実である。そこで、本研究では、パフォーミング・アーツが共生の達成に寄与する枠組みや条件を、具体的な事例の蓄積と比較検討から探りたい。なお、本研究は民博特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」(2017年度～2019年度)と連動させて推進するものである。
- 2) 映像音響メディアは、音や動きなど文字媒体による描写・分析が困難な対象の記録・分析に優れているため、これまでも音楽・芸能の研究だけでなく継承・保存のツールとして頻繁に用いられてきた。また近年は、安価で高性能な映像機器・編集ソフトの登場により、人類学をはじめとする幅広い研究領域で映像番組の制作が活発に行なわれている。また、人類学では制作者と取材対象者の関係が根本的に見直され、それを反映する新しい映像制作手法も開発されつつあるが、概ね映像作品の制作を重視するあまり、その活用に関しての議論は遅れている。研究における映像音響メディアの活用は、様々な形態が考えられる。本研究では、映像の上映と多様なオーディエンスとの議論を積み重ねることから映像音響メディアの活用方法を検討するものである。

・成果

- 1) 特別研究の国際シンポジウムを年度末に行うべく準備を進めた。8月6日に準備研究集会を開き、国際共同研究員であるデボラ・ウォン教授(カリフォルニア大学リヴァーサイド校)を含めシンポジウム出席予定者3名が研究発表を行い、特別研究の研究テーマに関する討論を行った。この準備集会での議論の一部を、*MINPAKU Anthropology Newsletter* (49号, 2019年12月)の特集号で紹介した。エッセイの著者とタイトルは以下の通りである。

1. Terada, Yoshitaka, "Performing arts and conviviality" (1-3)
2. Nakamura, Mia, "Musical conviviality in the otto & orabu ensemble" (3-5)
3. Urbain, Olivier, "Musicking conviviality, solidarity and peacebuilding" (6-8)
4. Wong, Deborah, "Intension, connection and convivencia" (8-11)

新型コロナウイルス感染症の拡散防止のために国際シンポジウムが延期されたため、期待されていた成果は次年度以降に持ち越されたが、準備研究集会や国際研究協力者らとの継続的な議論を通して、シンポジウムで検討すべき論点を整理することができた。

- 2) 民博製作映像番組「アリラン峠を越えていく——在日コリアンの音楽」の上映会を、日本(大阪、東京、福岡など)、韓国(光州、全州、釜山、坡州)、中国(上海)、タイ(バンコク)、カナダ(シドニー)、チェコ(プラハ)の6ヶ国で計16回開催し、アンケートや上映後の討論などから番組の活用方法について理解を深めることができた。また、韓国における4回の上映会では、韓国における在日コリアンについての認識が極めて低いことや、そのような状況を改善するために映像番組が一定の役割を果たしうることが明らかになった。さらに同番組は、韓国の国楽TV(インターネット配信のテレビ放送局)で2020年1月に放映され、個別の上映会よりも幅広い層に観てもらうことができた。

◎出版物による業績

[共編]

Jähnichen, G. and Y. Terada (eds.)

2019 *Double Reeds Along the Great Silk Road*. Berlin: Logos Verlag Berlin. [査読有]

[分担執筆]

Terada, Y.

2019 Charumera and the Representation of the Other in Japan. In G. Jähnichen and Y. Terada (eds.) *Double Reeds Along the Great Silk Road*, pp.185-198. Berlin: Logos Verlag Berlin. [査読有]

[その他]

寺田吉孝

2019 「村人と一緒に演奏する」『月刊みんぱく』43(12)：10-11。

Terada, Y.

2019 Traveling Music: The South Asian String Instruments. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 48: 10-11.

2019 Performing Arts and Conviviality. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 49: 1-3.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・展示

2019年2月21日～5月7日「旅する楽器——南アジア、弦の響き」国立民族学博物館本館企画展示場

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年4月7日「南アジアの弦楽器」第538回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎調査活動

・海外調査

2019年5月12日～5月17日—韓国（全南大学校、全北大学校における民博制作映像番組「アリラン峠を越えてゆく——在日コリアンの音楽」（韓国語字幕版）の上映と討論）

2019年7月8日～7月18日—タイ（国際伝統音楽学会（ICTM）第45回世界大会への出席と民博制作映像番組“Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Music”（76分、2018年）の上映）

2019年8月25日～8月31日—中国（上海音楽学院で開催された1st China Music Ethnographic Film Exhibitionへの参加と、民博制作映像番組Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Musicの上映）

2019年9月20日～9月23日—韓国（京畿道高陽市で開催された第11回「DMZ国際ドキュメンタリー映画祭」での民博制作映像番組 Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Musicの上映）

2019年10月6日～10月14日—カナダ（ケープブレトン大学で開催されたコロキウム Songs and Stories of Migration and Encounterへの参加と、コロキウム前日に開催された映画祭で民博制作映像番組 Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Musicの上映）

2019年10月25日～10月29日—韓国（釜山大学で開催されたシンポジウムへの参加と、民博制作映像番組 Crossing over the Arirang Pass: Zainichi Korean Musicの上映）

2019年12月26日～2020年1月9日—インド（南インド古典音楽・舞踊における在外タミル人の活動に関する実態調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究」（研究代表者：田森雅一（東京大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「島嶼社会における芸能伝承の課題——対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ」（研究代表者：福岡正太）研究分担者、国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型

基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点 (MINDAS)」(拠点代表者：三尾 稔) 拠点構成員

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語美術専攻卒(1988)、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了(1991)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学(1993)【職歴】東京大学東洋文化研究所助手(1993)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(2004)、国立民族学博物館民族文化研究部准教授(2009)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授(2017)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授(2019)【学位】学術博士(東京大学 2007)、学術修士(東京大学 1991)【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会、International Society for Iranian Studies

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

山中由里子編

2015 『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

【受賞歴】

2011 第7回日本学士院学術奨励賞

2011 第7回日本学術振興会賞

2010 第15回日本比較文学会賞

2010 島田謹二記念学藝賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

想像界の生きものたちに関する比較研究

・研究の目的、内容

常識や慣習から逸脱した「異」なるもの(異境・異界・異人・異類・異音)をめぐる人間の心理と想像力の働きを「驚異」と「怪異」をキーワードに、比較文明論的な視点から考察する。自然界のどのような現象が「驚異」や「怪異」として認識され、どのような言説や視覚表象物が現れたのか、その背景にはどのような自然観があるのか、知識体系に接点はあるのかといった点に注目し、ユーラシアにおける人間と自然の相関関係の歴史の変遷を多元的視点から究明するとともに、生態系と人間の想像力と表象物の相関関係を、より広い人類史的な視点からも検証する。

・成果

本研究は、科学研究費(基盤研究(A))「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」(代表:山中由里子)の補助金、科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型))「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」(代表:野林厚志)および科学研究費(基盤研究(C))「ヨーロッパ中世における博物学的知識の伝承——中東および古代・近世との関わり」(代表:大沼由布)と関連付けて上記の内容の各個研究を実施した。

研究の成果は、2019年8月29日～11月26日に開催した特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」において一般公開し、世界各地の幻獣表象の地域的特徴や共通性を明らかにした。特別展はNHK日曜美術館のアー

トシーン、BSフジのガリレオXをはじめ、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌・ウェブマガジンなどの多くのメディアで取り上げられ、3ヶ月の会期中に入館者数が78,682人に達した。社会的に多大な反響を呼んだこの展示の図録『驚異と怪異——想像界の生きものたち』（河出書房新社、2019年）は4刷され、第61回全国カタログ展において図録部門の金賞「経済産業省商務情報政策局長賞」を、さらに日本タイポグラフィ年鑑2020のエディトリアル部門で審査員賞を受賞した。

この他、山中由里子・山田仁史共編『この世のキワ——〈自然〉の内と外』（勉誠出版、2019年）を刊行した。

◎出版物による業績

[編著]

山中由里子編

2019 『驚異と怪異——想像界の生きものたち』東京：河出書房新社。

[共編]

山中由里子・山田仁史編

2019 『この世のキワ——〈自然〉の内と外』（アジア遊学239）東京：勉誠出版。

[論文]

山中由里子

2019 「自然界と想像界のあいにある驚異と怪異」山中由里子・山田仁史編『この世のキワ——〈自然〉の内と外』（アジア遊学239）pp.4-16, 東京：勉誠出版。

[その他]

山中由里子

2019 「想像界の生態系」特集「驚異と怪異——想像界の生きものたち」『月刊みんぱく』43(8)：2-3。

2019 「ソフィア 京都新聞文化会議691老いも若きも『怖い』大好き」『京都新聞』12月27日。

◎映像音響メディアによる業績

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

山中由里子監修・出演

2019年10月13日 「ガリレオX 驚異と怪異 知的好奇心を生みだした不思議と常ならざるもの」BSフジ

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究公演

2019年9月29日 「能と怪異（あやかし）」（特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」国立民族学博物館、エントランスホール（本館1階）

・展示

2019年8月29日～11月26日 「驚異と怪異——想像界の生きものたち」国立民族学博物館特別展示館

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年9月1日 「特別展『驚異と怪異——想像界の生きものたち』第553回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年11月9日 「ワンダーストラック」（みんぱく映画会 みんぱくワールドシネマ）セミナー室

◎調査活動

・海外調査

2019年5月9日～5月27日—ドイツ（REDIM (Dynamiken religiöser Dinge im Museum 博物館における宗教的モノのダイナミクス) プロジェクト)

2019年6月26日～7月2日—フランス（シンポジウム「ペルシア語文化圏における語りの諸相」参加）

2020年3月13日～4月17日—ドイツ（驚異に関する文献および博物館調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究分担者、科学研究費（基盤研究（C））「ヨーロッパ中世にお

ける博物学的知識の伝承——中東及び古代・近世との関わり」(研究代表者:大沼由布(同志社大学))研究分担者、科学研究費(基盤研究(B))「日本文化の対話的発展の比較文学的研究——世界のポップ・テキストをめぐって」(研究代表者:平石典子(筑波大学))研究分担者、科学研究費(基盤研究(A))「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」(拠点代表者:西尾哲夫)拠点構成員

伊藤敦規 [いとう あつり] ————— 准教授

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒(2000)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学修士課程修了(2003)、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学(2009)【職歴】国立民族学博物館特別共同利用研究員(2007)、三重大学人文学部非常勤講師(2008)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員(2008)、Visiting Researcher of the A:shiwi A:wam Museum and Heritage Center(2009)、立教大学兼任講師(2009)、日本学術振興会特別研究員PD(2009)、国立民族学博物館外来研究員(2009)、三重大学人文学部非常勤講師(2010)、東北大学東北アジア研究センター共同研究員(2010)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員(2010)、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員(2010)、国立民族学博物館若手共同研究員(2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教(2011)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員(2012)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2012)、Research Associate of the Museum of Northern Arizona Research Associate(2015)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2016)、総合研究大学院大学文化科学研究科准教授(2016)、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授(2016)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授(2017)、東北大学大学院文学研究科非常勤講師(2019)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学 2011)、修士(社会人類学)(東京都立大学 2003)【専攻・専門】社会人類学、米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本知財学会、American Anthropological Association、デジタルアーカイブ学会

【主要業績】

[編著]

伊藤敦規、キャシー・ドーハーティ、ケレイ・ハイズ=ギルピン編

2020 『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』(国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4)大阪:国立民族学博物館。[査読有]

伊藤敦規編

2020 『国立民族学博物館収蔵186点の「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』(国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3)大阪:国立民族学博物館。[査読有]

[論文]

Hays-Gilpin, K., A. Ito, R. Breunig

2020 Decolonizing Museum Catalogs: Defining and Exploring the Problem. *TRAJECTORIA 1*. Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

2019 座長が推すベスト発表(デジタルアーカイブ学会の優秀学会発表賞制度)2019年3月16日第3回研究大会(京都大学)[A12]伊藤敦規「民族誌資料のデジタルアーカイブ化にかかる諸問題」に対して。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は五年計画(2016~2020年度)で実施する。その目的は、第一に日本国内の博物館等が所蔵するアメリカ先住民資料の来歴、情報管理、保存状況を総合的に把握することである。第二の目的は日本国内での調査結果をソースコミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第三の目的

は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館等と共有することによって、今後の資料管理に反映される協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、調査対象機関を、松永はきもの資料館（広島）、柏木博物館（長野）、豊島みみずく資料館（東京）、猪熊源一郎現代美術館（香川）、野外民族博物館リトルワールド（愛知）、天理大学附属天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）などとする。また、資料調査対象とする民族集団はホピを中心とする。

四年度となる2019年度の計画は以下であった。

日本国内での博物館調査研究を継続するとともに、現在リニューアルオープンに向けて休館中の柏木博物館の資料熟覧の受入体制が整い次第、収蔵資料の撮影を行い、ソースコミュニティ（ホピの人びと）と共に資料熟覧を行う。さらに、米国南西部先住民の保留地に赴き、地元の多様な人々との調査成果の共有を図り、今後に向けた資料管理の要望などに関する聞き取り調査を実施する。加えて、米国ニューメキシコ州立大学附属博物館での展示会で成果を発表する（『Living in Sacred Continuum』、2019年4月26日～2019年12月15日）。成果出版に関しては、これまでに実施してきた資料熟覧の記録をまとめ、国立民族学博物館の刊行物としての成果公開を引き続き目指す。

・成果

科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究（国際共同研究強化）』（研究課題番号：15KK0069）と連動させて、調査を継続して行った。編著（伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵186点の「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3））や共編著（伊藤敦規、キャシー・ドーハーティ、ケレイ・ハイズ＝ギルピン編『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4））を刊行した。また、査読付きの国際ジャーナルに特集論文が（*TRAJECTORIA* 創刊号）、国内学会誌のリニューアル創刊号の特集の一部として論文が掲載された（『arts/（民族芸術学会誌リニュアル創刊号）』）。米国ニューメキシコ州立大学附属博物館での展示会（『Living in Sacred Continuum』、2019年4月26日～2019年12月15日）も行い、開幕式を兼ねたシンポジウムにも参加した。民博本館展示場（アメリカ展示場）の展示更新の一部として、成果を公開することもできた。さらに、民博本館展示場（多機能端末室）にて、ソースコミュニティ（ホピの人々）による資料語りの映像を視聴できる環境を整えた。それにより、モノと人との代替不可能なつながりを来館者に提示することができ、ソースコミュニティの立場に立った「フォーラムとしてのミュージアム」の一つの姿を提示することができた。

◎出版物による業績

[編著]

伊藤敦規、キャシー・ドーハーティ、ケレイ・ハイズ＝ギルピン編

2020 『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

伊藤敦規編

2020 『国立民族学博物館収蔵186点の「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3）大阪：国立民族学博物館。[査読有]

[論文]

伊藤敦規

2020 「本著の概要と民博収蔵『ホピ製』資料の来歴」伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵186点の「ホピ製」資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」3』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集3）pp.1-7, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2020 「北アリゾナ博物館収蔵『ホピ製』銀細工および関連資料の熟覧調査の概要」伊藤敦規・キャシー・ドーハーティ・ケレイ・ハイズ＝ギルピン編『北アリゾナ博物館収蔵446点の「ホピ製」銀細工および関連資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」4』（国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集4）p.4, 大阪：国立民族学博物館。[査読有]

2020 「共有されるアートをめぐる記憶」『民族芸術学会誌 arts/』36(1)：70-73。

Hays-Gilpin, K., A. Ito, and R. Breunig

2020 Decolonizing Museum Catalogs: Defining and Exploring the Problem (Special Theme: An Ap-

proach of the Info-Forum Museum: To Create a Source Community-driven Multivocal Museum Catalog). *TRAJECTORIA* 1. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

Ito, A.

- 2020 Outline of This Report and Provenance of Objects Labeled “Hopi” in National Museum of Ethnology. In A. Ito (ed.) *Collections Review on 186 Items Labeled “Hopi” in the National Museum of Ethnology: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 3* (Info-Forum Museum Resources 3), pp.9-17. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2020 Brief Overview of the “Reconnecting Project” on the Silverworks and Related Items Labeled “Hopi” in the Museum of Northern Arizona. In A. Ito, K. Dougherty, and K. Hays-Gilpin (eds.) *Collections Review on 446 Silverworks and Related Items Labeled “Hopi” in the Museum of Northern Arizona: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 4* (Info-Forum Museum Resources 4), pp.21-43. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]
- 2020 Introduction (Special Theme: An Approach of the Info-Forum Museum: To Create a Source Community-driven Multivocal Museum Catalog). *TRAJECTORIA* 1. Osaka: National Museum of Ethnology. [査読有]

◎映像音響メディアによる業績

・その他、映像メディアによる業績（論文型映像を含む）

Ito, A. (Production)

- 2020 *Demonstrational Lecture of the Collections Review Research by Cynthia Chavez Lamar and Jim Enote* (英語、31: 51)
- 2020 *Denver Museum of Nature & Science, A1713.26, 2017/1/18* (英語、17: 03)
- 2020 *Museum of Northern Arizona, E11060, 2015/7/22* (英語、03: 12)
- 2020 *Museum of Northern Arizona, E11286, 2015/12/10* (英語、14: 27)
- 2020 *National Museum of Ethnology, H0281581, Jerolyn Honwytewa, 2018/11/18*. (英語、01: 02)
- 2020 *Reviewers’ Self-Introduction and Remarks, Gerald Lomaventema, 2015/7/22* (英語、03: 03)
- 2020 *Self-Introduction and Remarks on the “Reconnecting Project,” Delwyn “Spyder” Tawvaya, 2017/01/16, Denver Art Museum* (英語、04: 11)

伊藤敦規 監修

- 2019 「国立民族学博物館, 027-0162 (D1), 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 027-0162 (D18), 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 027-0162 (D28), 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 027-0162 (D9), 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012267, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、12分29秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012270, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、8分06秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012289 H0075653~H0075656, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、12分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012293 H0114976 H0114977, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、6分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0012295, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、6分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0033962, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、7分41秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0033963, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、1分51秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0033964, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、1分48秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0033965, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、1分50秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0036155, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分26秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074755, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分17秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074756, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分27秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074769, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、1分55秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074771, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074772, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、8分57秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074773, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、6分59秒)

- 2019 「国立民族学博物館, H0074785, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分11秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074786 H0074787, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、6分21秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074792, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分11秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074794 H0074793, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、7分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074797, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分49秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074798~H0074803, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分35秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074804, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分56秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074807, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分30秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074817, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分02秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074822, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分31秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074849, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、6分57秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074850, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、7分24秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074851, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分48秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074852, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、10分31秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074853, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分43秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074854, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分43秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074855, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、8分47秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074856, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分00秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074857, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分30秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074858, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分16秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074890, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分03秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074901, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分03秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0074943~H0074948, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、5分09秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075658 H0075657 H0012288 H0075667 H0083264, 個人コメント, 2015/04/23」
(英語・日本語、14分55秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075659, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、3分20秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075665 H0075021, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分29秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075666 H0075751 H0075835 H0075851, 個人コメント, 2015/04/23」(英
語・日本語、14分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075680 H0036153 H0114988, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、
5分20秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075702, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分54秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075702, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分55秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075717, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、8分29秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075721, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分21秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075722, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、9分40秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075727 H0075715, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、9分02秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075731, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、8分27秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0075772, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分55秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083200, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、5分23秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083205, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分43秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083229, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、3分29秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083250, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、4分24秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0083344~H0083348, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、0分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0085648, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、7分44秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0085649, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、6分23秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0085650, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、6分02秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0114978 H0114979, 個人コメント, 2015/04/22」(英語・日本語、2分32秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0115019, 個人コメント, 2015/04/23」(英語・日本語、4分09秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268549, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、11分25秒)

- 2019 「国立民族学博物館, H0268550, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、10分21秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268551, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分58秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268552, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分15秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268553, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、4分24秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268553, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分28秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268554, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、11分25秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268555, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分34秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268557, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、7分44秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268558, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、7分49秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268559, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、5分41秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268560, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、7分07秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268561, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、10分07秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268562, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268571, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、7分20秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268573, 個人コメント, 2015/11/12」(英語・日本語、9分07秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268574, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、13分39秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268575, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、11分58秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268576, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、6分48秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268577, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、16分49秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268578, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、18分10秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268579, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、8分26秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268580, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、11分38秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268581, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、6分26秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268582, 個人コメント, 2015/11/14」(英語・日本語、9分04秒)
- 2019 「国立民族学博物館, H0268583~H0268630, 個人コメント, 2015/11/11」(英語・日本語、41分56秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 自己紹介・『再会』プロジェクトについて ジェロ・ロマベンティマ 2015/11/11」(英語・日本語、1分42秒)
- 2019 「国立民族学博物館, 自己紹介・『再会』プロジェクトについて マール・ナモキ 2015/11/12」(英語・日本語、1分42秒)

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年4月18日 'Minpaku Info-Forum Museum Project: Reconnecting Source Community with Museums.' KAKENHI Project meeting (15KK0069), National Museum of Ethnology, Japan
- 2019年7月25日 「国立民族学博物館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト——デジタル化の目的」科 研費研究会 (15KK0069)、国立民族学博物館
- 2019年10月24日 'Revitalization of Hopi Jewelry through the Museums Collections Review.' Hopi Artist Workshops on Living in Sacred Continuum exhibition, New Mexico State University Museum, New Mexico, United States
- 2019年11月27日 「民族誌資料にかかるコンプライアンス——ソースコミュニティへの配慮の重要性和協働の可能性を事例として」『天理大学 研究倫理・コンプライアンス研修』天理大学2号棟

・展示

- 2019年4月26日~12月15日 'Living in Sacred Continuum.' New Mexico State University, American Indian Student Center
- 2020年3月5日 「本館展示場アメリカ展示新構築」国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

- 2019年4月21日~7月2日一アメリカ合衆国(標本資料画像の公衆送信のための著作権者探しと許諾取得の交渉、北アリゾナ博物館などでの資料調査等)

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

「地域文化学演習Ⅰ」、「地域文化学演習Ⅱ」、「比較文化学演習Ⅰ」、「比較文化学演習Ⅱ」

◎社会活動・館外活動

・他大学の客員、非常勤講師

北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員、Visiting Researcher of the A:shiwi A:wana Museum and Heritage Center、Research Associate of the Museum of Northern Arizona

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授（2017）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会、北海道民族学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子編

2015 『カナダ先住民芸術の歴史的展開と現代的課題——国立民族学博物館所蔵のイヌイトおよび北西海岸先住民の版画コレクションをととして』（国立民族学博物館調査報告131）大阪：国立民族学博物館。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイトと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2012 「アイヌ工芸の200年——その歴史概観」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート（先住民アート・プロジェクト報告書）』pp.45-60、札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌ文化の継承と社会的背景の研究

・研究の目的、内容

本テーマは、当館の共同研究やフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトなどを関連させながら、2014年度から続けており、2019年度まで継続予定である。アイヌ民族は、江戸時代中ごろから徐々に和人の支配下におかれ、時代を経るにつれて独自の文化の継承は次第に困難になった。しかし、現在も形を変えながらも多くの文化要素が受け継がれている。こうしたアイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、とくに物質文化に注目し、研究を続けている。最終的に、物質文化が記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

本年は、近現代の文学や漫画などにおけるアイヌの描かれ方とおし、アイヌ民族のおかれた社会的立場の変遷等について研究する。

また、引き続き科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（佐々木史郎代表・2017～2019年度）の研究分担者としてアイヌの織物資料の比較研究等をおこなう。

さらに、（公財）アイヌ民族文化財団の研究助成を受け、木彫家・藤戸竹喜氏（1934-2018）の未公開作品等の調査をし、同氏の業績をまとめた追悼集の刊行準備をおこなう。

・成果

物質文化の継承と社会的背景の研究成果の一つとして、池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史』に「現代アイヌのタマサイ」を執筆した。内容は、江戸時代の風俗画などにも頻りに描かれ、女性の宝とされたガラス玉の首飾りが、明治以降に儀式がおこなわれなくなり着用機会が減少するなかで、換金のために手放されるなどして継承されていない場合が多いものの、特別な思い入れをもって受け継いでいる例や、復元の動き

があることなどを報告した。これは、共同研究および北東アジア地域研究の成果でもあり、特別展の図録には書ききれなかった事例も盛り込むことができた。

このほかの研究成果は以下のとおりである。

- ・フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの「民博所蔵アイヌ民族資料データベース」を館内公開した。
- ・特別展「先住民の宝」で「アイヌ」の展示を担当した。また、信田敏宏編『先住民の宝』（同展図録）で「アイヌ（日本）」を執筆した。
- ・佐々木史郎編『アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化』（科研費報告書）に「オヒョウとシナノキの樹皮繊維製織布に関する覚え書き」を寄稿した。
- ・五十嵐聡美と共編で『木彫家・藤戸竹喜——その人と業績に関する研究』（アイヌ民族文化財団助成研究報告書）を発行した。

◎出版物による業績

[編著]

齋藤玲子・五十嵐聡美編

2020 『木彫家・藤戸竹喜——その人と業績に関する研究』大阪：藤戸竹喜氏業績研究会（代表：齋藤玲子・国立民族学博物館）。

[分担執筆]

齋藤玲子

2020 「現代アイヌのタマサイ——文化のシンボルとしてのビーズ」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史』pp.255-267, 京都：昭和堂。

2020 「アイヌ（日本）」信田敏宏編『先住民の宝』pp.141-172, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「オヒョウとシナノキの樹皮繊維製織布に関する覚え書き」佐々木史郎編『アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化——日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究B「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（2014年度～2016年度）日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究B「アイヌ民族の衣文化交流：博物館資料から北東アジア史を見直す」（2017年度～2019年度）報告書』pp.88-92, 白老：国立アイヌ民族博物館設立準備室・東京：東京国立博物館。

[その他]

齋藤玲子

2019 「千島アイヌの暦」『季刊民族学』168：72。

2019 「泣く子をだまらずアイヌのお化け」『月刊みんぱく』43(6)：14-15。

2020 「公共空間でのアイヌ文化の発信」特集「先住民とアート」『月刊みんぱく』44(3)：8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年9月15日 「趣旨説明および『民博所蔵アイヌ民族資料データベース』試作版について」国際ワークショップ『民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討——データベースとその活用』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年10月27日 「交流の場をめざして——現代のアイヌ文化を展示する試み」歴博国際シンポジウム『博物館と多文化社会——いかに博物館は多文化社会における対話の場となりうるか』国立歴史民俗博物館

2020年1月26日 「研究成果の還元と博物館活動——収蔵資料のデータベース化を中心に」日本文化人類学会公開シンポジウム『アイヌ民族と博物館——文化人類学からの問いかけ』法政大学

・広報・社会連携活動

2019年5月10日 「朝日小学生新聞取材」

2019年11月26日 「北海道アイヌ協会 工芸者技術研修（外来研究員）受け入れ」

2019年11月28日 「ミンパク オッタ カムイノミ」国立民族学博物館

2019年11月28日 「アイヌ工芸 in みんぱく」国立民族学博物館

2019年12月13日 「講義『アイヌ民族の歴史と文化』」プール学院中学校、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2019年8月23日—東京都豊島区（アイヌ衣類の調査）

- 2019年9月5日～9月7日—釧路市阿寒町（藤戸竹喜氏の業績に関する調査）
 2019年9月25日～9月26日—熊野市（藤戸竹喜氏の作品に関する調査および撮影）
 2019年9月27日～9月29日—大阪市、静岡市、富士市、調布市（藤戸竹喜氏の作品に関する調査および撮影）
 2019年10月20日～10月22日—壮瞥町、札幌市（藤戸竹喜氏作品の調査および撮影）
 2019年11月3日～11月5日—白老町、平取町、浦河町（みんぱく資料に関する聞き取り調査）
 2019年11月16日～11月18日—函館市（アイヌ衣類の調査）
 2019年11月21日～11月23日—釧路市阿寒町（藤戸竹喜氏作品に関する調査および撮影）
 2019年12月2日—天理市（アイヌの衣類および編み袋の製作技法に関する調査）
 2019年12月8日—松阪市（アイヌの衣類および編み袋の製作技法に関する調査）
 2020年1月9日～1月10日—札幌市、旭川市（藤戸竹喜氏業績研究打ち合わせおよびの藤戸作品の撮影と調査）
 2020年2月6日～2月7日—青森市（アイヌ衣服の調査および東北アイヌに関する文献の調査）
 2020年2月12日～2月13日—札幌市、白老町（アイヌ文化伝承の現状等に関する聞き取り調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

・博士論文審査委員（総研大に限る）

予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「アイヌ民族の衣文化交流——博物館資料から北東アジア史を見直す」（研究代表者：佐々木史郎（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館））研究分担者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」研究代表者、国立民族学博物館特別研究「パフォーミング・アーツと積極的共生」（研究代表者：寺田吉孝）メンバー、国立民族学博物館共同研究「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」（研究代表者：大西秀之）メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用——日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築」（研究代表者：日高 薫（国立歴史民俗博物館））メンバー、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」（拠点代表者：池谷和信）拠点構成員

- ・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

公益財団法人アイヌ民族文化財団研究助成「木彫家・藤戸竹喜——その人と業績に関する研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・その他の社会活動・館外活動

吹田市立博物館協議会委員、公益財団法人アイヌ民族文化財団評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員

丹羽典生 [にわ のりお] ————— 准教授

【学歴】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学（2005）【職歴】法政大学経済学部教育補助員（2004）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、日本学術振興会特別研究員PD（2005）、国立東京工業高等専門学校非常勤講師（2006）、首都大学東京非常勤講師（2006）、ハワイ大学マノア校人類学科客員研究員（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、法政大学非常勤講師（2008）、国際基督教大学非常勤講師（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）、国立民族学博物館超域フィールド科学研究部准教授（2017）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）【専攻・専門】社会人類学、オセアニア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

[共著]

丹羽典生・石森大知

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。[査読有]

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。[査読有]

[編著]

丹羽典生

2016 『〈紛争〉の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』横浜：春風社。[査読有]

【受賞歴】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

応援の人類学

・研究の目的、内容

本研究は、応援という視角から人類の諸文化を通文化的に比較しながら、文化人類学的に考察することを目的とする。応援の下位項目として、政治、スポーツ、ファン文化をさしあたり設定し、世界の事例を取り上げ検討する。主たる事例としては、日本の大学を中心とする応援団の諸活動を具体的な民族誌的研究の対象とする。

・成果

共同研究「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」の成果として「応援」に関する論集を編集集中である。共同研究を通じて日本における応援文化の発展には旧制中学や高校の文化の分析が必要であること、またそれは孤立した文化ではなくイギリスのパブリックスクールやアメリカの大学とフラニティやスポーツクラブの中にもみられる文化であることが再度確認できた。そこで関連資料を収集し文献・資料調査を進めることで、編著とは個別の査読付き論文の執筆を進めている。

◎出版物による業績

[共編]

石森大知・丹羽典生編

2019 『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』横浜：春風社。[査読有]

2019 『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』東京：明石書店。

[分担執筆]

石森大知・丹羽典生

2019 「はじめに」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.3-6, 東京：明石書店。

丹羽典生

2019 「マングローブ岸の回心とコミットメント——フィジーにおけるダク村落事業からみたオセアニア神学」石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』pp.159-187, 横浜：春風社。[査読有]

2019 「あとがき」石森大知・丹羽典生編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』pp.431-434, 横浜：春風社。[査読有]

2019 「フィジーへの実験的移民の帰結——宮本常一の著作に刻まれた父親の体験」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.58-62, 東京：明石書店。

2019 「朝枝利男の見た太平洋」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.127-129, 東京：明石書店。

2019 「フィジーの砲台——戦跡が物語る太平洋戦争」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.155-158, 東京：明石書店。

2019 「日系人の音楽活動」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』pp.317-318, 東京：明石書店。

[論文]

丹羽典生

- 2020 「朝枝利男の見たガラパゴス」『季刊民族学』171：86-94。
- 2020 「1930年代のアメリカにおける私的探検の考察——朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から」『国立民族学博物館研究報告』44(4)：625-682。

[その他]

丹羽典生

- 2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(4)：21。
- 2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(5)：21。
- 2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(6)：21。
- 2019 「オセアニア世界に広がるハカ」特集「ラグビーという文化」『月刊みんぱく』43(11)：9。
- 2019 「太平洋の国々に広がる『ハカ』」『山形新聞』11月20日。
- 2020 「コレクション展示『朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示』の開催」『みんぱく e-news』223：巻頭コラム。
- 2020 「1930年代ガラパゴスの旅——写真家朝枝利男の見たもの」特集「朝枝利男とガラパゴス」『月刊みんぱく』44(2)：2-3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年6月29日 「紛争後におけるフィジー少数民族の歴史実践の比較分析」『オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月22日 「太平洋関係の朝枝利男写真資料の時代的位置づけ及び特色」フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト『民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築』研究会

・展示

2020年1月16日～3月24日 「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」

・広報・社会連携活動

2020年2月1日 「博物学者 朝枝利男の生涯を追う」第497回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2019年8月10日～8月26日—ソロモン諸島、フィジー（フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト『民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築』に関わる情報収集と打ち合わせ及び、科研「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」に関わる調査）

2019年9月7日～9月14日—オーストラリア（科研「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」に関わる調査）

2020年2月16日～2月23日—アメリカ合衆国（フォーラム型情報ミュージアムに関する情報収集と意見交換）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「紛争後社会のレジリエンス——オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事

・他大学の客員、非常勤講師

同志社大学「アジア・オセアニア地域の文化16」

◎学会の開催

2019年11月2日 国立民族学博物館、地域研究コンソーシアム「グローバル化時代の文化力——〈地域知〉のマネージメント」国立民族学博物館。

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1989）、筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程退学（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2015）、国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター（2019）【学位】学術修士（筑波大学大学院環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店。

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines, and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner, and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol.1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp.443-466. New Delhi: Manohar.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ネパール地震から見る移動性の再検討

・研究の目的、内容

本研究の目的は、2015年のネパール地震によって顕在化した、あるいはそれを契機に生じた多様な人口移動を分析し、ネパールにおける移動性（モビリティ）を再検討することである。ネパール地震では、被災地からの避難と帰還／移出、海外からの支援金や多様な人の一時的流入、住宅再建のための技術者（大工）の国内移動、住宅再建資金の蓄積に向けた海外移住労働、若年層の山地からの流出と過疎化の進行など多様な移動が触発的に起こっている。本研究では、これらの物理的な移動を把握し、社会的な移動（ソーシャル・モビリティ）を射程に入れつつ、移動性を再検討する。

・成果

本研究は、昨年度終了した科学研究費（基盤研究（B））（海外学術調査）「2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究」の調査研究の過程で着想したものである。山地という制限のある環境において、生きていくための移動は生存戦略の一つであり続けることが地震後の多様な移動から明らかになった。過疎化の進む地域では都市部や海外で働く若年層からの送金で、非被災地域から来た技術者が住宅再建を請け負うなど、移動が別の移動を生むスパイラルも見て取れる。科研の成果は、代表者である私が編者となり論集として刊行する予定で準備を進めており年度内の出版を目指している。

◎出版物による業績

[その他]

南 真木人

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(7)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(8)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(9)：21。

2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(10)：21。

- 2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(11)：21。
 2019 「編集後記」『月刊みんぱく』43(12)：21。
 2019 「空飛ぶ神さま——ネパールのアカーシュ・バイラヴ」『みんぱく e-news』222：巻頭コラム。
 2020 「編集後記」『月刊みんぱく』44(1)：21。
 2020 「編集後記」『月刊みんぱく』44(2)：21。
 2020 「編集後記」『月刊みんぱく』44(3)：21。
 2020 「バフンのように笑うな、マガールのように笑え——ネパールの先住民運動」(特集 先住民のいま)『季刊民族学』171：40-47。
 2020 「アーディバシー (ネパール)」信田敏宏編『特別展 先住民の宝』pp.59-74, 大阪：国立民族学博物館

◎映像音響メディアによる業績

- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

南 真木人・藤井知昭監修

2019 『みんぱく映像民族誌 第35集 ネパールのサーランギ音楽』(日本語・137分)

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年10月13日 'Opening remarks.' MINDAS 国際セミナー『Beyond the Borders: International Marriages between South Asians and Japanese, and the "Mixed Generation"』国立民族学博物館

- ・広報・社会連携活動

2019年11月16日 「ヒマラヤの吟遊詩人——ガンダルバから見るネパールの変化」青年海外協力隊ネパール会主催『ネパール応援セミナー』あいも文化交流会館

2019年1月11日 「解説」(南 真木人・福岡正太)『バイラヴ仮面舞踊 (みんぱく映像民族誌シアター)』淀川文化創造館シアターセブン

2019年1月25日 「解説」(南 真木人・福岡正太)『ネパールの楽師ガンダルバ (みんぱく映像民族誌シアター)』淀川文化創造館シアターセブン

◎調査活動

- ・海外調査

2019年9月30日～10月11日—ノルウェー (特別展「先住民」に係る現地調査)

◎大学院教育

- ・指導教員

主任指導教員 (1人)、副指導教員 (1人)

- ・博士論文審査委員 (総研大に限る)

博士論文審査委員 (1件)

八木百合子 [やぎ ゆりこ]————— 助教

【学歴】天理大学国際文化学部イスパニア学科卒 (2001)、三重大学大学院人文社会科学研究所修士課程修了 (2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程単位取得退学 (2011) 【職歴】在ペルー日本国大使館専門調査員 (2012)、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員 (2015)、国立民族学博物館助教 (2018) 【学位】博士 (文学) (総合研究大学院大学 2012)、修士 (人文科学) (三重大学 2004) 【専攻・専門】文化人類学、アンデス民族学、ラテンアメリカ地域研究 【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八木百合子

2015 『アンデスの聖人信仰——人の移動が織りなす文化のダイナミズム』京都：臨川書店。

[論文]

八木百合子

2012 「聖女に捧げられた大聖堂——近代ペルーの都市建設に埋め込まれたコンフリクト」染田秀藤・關 雄二・網野徹哉編『アンデス世界——交渉と創造の力学』pp.243-267, 京都：世界思想社。

2009 「サンタ・ロサ信仰の形成と発展——20世紀ペルー社会における展開を中心に」『総研大文化科学研究』
5:5-28。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代アンデス地域における宗教的なモノの所有と継承に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、宗教的なモノに焦点をあて、現代のアンデス地域における宗教の展開について人類学的に追究するものである。ペルーを中心とするアンデス地域では近年、カトリックの聖像をはじめとする宗教的なモノの商品化が著しい。以前は特定の地域や信仰者のあいだでのみ崇拜あるいは使用されてきた聖なるモノでさえも、その複製品が大量に世に出回り、人びとが容易に入手・所有することが可能になっている。本研究では、こうしたモノの生産・流通・消費の拡大を視野に、それが現代のアンデス地域の人びとの宗教実践に及ぼす影響について検討する。

研究の遂行にあたっては、科学研究費（若手研究（B））「現代アンデス地域における聖人信仰の展開に関する人類学的研究——聖像の所有と継承に注目して」をあてる。

・成果

科研の研究最終年にあたる本年度は、宗教的なモノの継承に関して、これまでの調査データをもとに分析をおこない、ペルー南部地域特有の信仰と結びついた聖像の継承プロセスの一端を明らかにした。その成果をふまえ、2019年9月にクスコ大聖堂付属サグラダファミリア聖堂で開催された文化遺産と歴史に関する国際セミナーにおいて、国内外の研究者等の出席のもと研究報告と意見交換をおこなった。

また、本研究課題に関連して、2年半にわたり代表をつとめてきた共同研究が2020年3月をもって終了した。その成果事業の一環として、『季刊民族学』において新連載企画をスタートさせるべく、第一弾となる論考（2020年夏号）を寄稿したほか、最終成果論集の執筆・編集準備をすすめた。

◎出版物による業績

[監訳]

八木百合子

2019 ロブ・フラワーズ著・北川玲訳『世界一おもしろいお祭りの本』大阪：創元社。

[分担執筆]

八木百合子

2019 「聖母の奉納品にみるアンデスの意匠——クスコのアルムデナ教会の事例から」青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀編『古代アメリカの比較文明論』pp.329-340, 京都：京都大学学術出版会。

[その他]

八木百合子

2019 「国立民族学博物館の収蔵品④ 首長人形の軌跡」『文部科学 教育通信』458:2。

2019 「世界中にあらわれるマリア様」『月刊みんぱく』43(7):16-17。

2020 「年初めの珍客」特集「世界の縁起モノ」『月刊みんぱく』44(1):2-3。

2020 「アンデスの文化資源の活用——データベースの構築に向けた取り組み」『日本ペルー交流年における文化遺産保護に係るシンポジウム等実施委託業務報告書』pp.75-76, 大阪：国立民族学博物館。

2020 「メンディビルの首長人形」『月刊みんぱく』44(3):14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2020年2月15日 「ペルーにおける人の移動と宗教文化の変容——都市祭礼をめぐるヒト・モノ・カネ」『ネオリベラリズムのモラリティ』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月9日 'Las Imágenes Estampado en la Vestimenta de los Santos: Cambio de las Capas de la Virgen de la Natividad del Cusco.' Seminario Internacional Sobre Patrimonio, Historia del Arte Virreinal en Cusco, Catedral del Cusco, Cusco, Peru

2019年11月13日 'Utilización de Recursos Culturales Andinos: Construcción de Base de Datos Interactivos.' Simposio Internacional "50 años de Antropología Japonesa en el Sur de los Andes:

Recorridos, Etnografías y Valoración Cultural”, Museo Histórico Regional de Cusco, Cusco, Peru

2020年1月17日 ‘Base de Datos Interactivos: Colección del Museo Nacional de Etnología del Japón.’ 1º Taller sobre la Artesanía Peruana, ICTYS, Peru

・ **みんなくゼミナール**

2019年7月20日 「アンデスの褐色のキリスト——奉納品をとおしてみる信仰の世界」第493回みんなくゼミナール

・ **みんなくウィークエンド・サロン**

2019年5月26日 「アンデスの悪魔の踊り」第544回みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

・ **その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）**

2019年11月11日～11月13日 ‘Tradición Andina: Colección Fotográfica de los Antropólogos Japoneses 1960’-1980.’（文化庁受託事業）クスコ市役所、国立民族学博物館、文化庁、Centro de Convenciones de la Municipalidad del Cusco, Cusco, Peru

2020年2月19日 「宗教的なモノをめぐる実践——ペルーにおける聖像の所有・管理・継承」（MMP ステップアップ講座）みんなくミュージアムパートナーズ、国立民族学博物館

◎ **調査活動**

・ **海外調査**

2019年8月16日～9月13日—ペルー（宗教的なモノの保存・管理・継承に関する現地調査および日本・ペルー交流年関連シンポジウムの運営準備）

2019年11月1日～11月29日—ペルー（日ペルー交流年関連の国際シンポジウムと展示イベントの開催および研究発表）

2019年12月31日～2020年1月20日—ペルー（ペルーにおける聖像の所有と継承にかかる調査およびフォーラム型情報ミュージアムにかかるワークショップの開催）

◎ **上記以外の研究活動**

・ **人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（若手研究（B））「アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究——聖像の所有と継承に注目して」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「ネオリベラリズムのモラルティ」（研究代表者：田沼幸子）メンバー、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「モビリティと物質性的人类学」（研究代表者：古川不可知）メンバー

◎ **社会活動・館外活動**

・ **他大学の客員、非常勤講師**

神戸市外国語大学「中南米文化史2」（集中講義）、神戸市外国語大学「ラテンアメリカ文化特殊講義1」、神戸市外国語大学「中南米文化史1」

国際研究統括室

平井京之介 [ひらい きょうのすけ]—室長(併)、副館長(研究・国際交流・IR担当)、グローバル現象研究部教授

卯田宗平 [うだ しゅうへい]—兼：人類文明誌研究部准教授

齋藤 晃 [さいとう あきら]—兼：人類文明誌研究部教授

丹羽典生 [にわ のりお]—兼：学術資源研究開発センター准教授

韓 敏 [ハン ミン]—兼：超域フィールド科学研究部教授

鈴木英明 [すずき ひであき]————— 兼：グローバル現象研究部所助教

福岡正太 [ふくおか しょうた]————— 兼：人類基礎理論研究部准教授

IR室

出口正之 [でぐち まさゆき]————— 室長（併）、人類基礎理論研究部教授

森 明子 [もり あきこ]————— 兼：グローバル現象研究部教授

山本泰則 [やまもと やすのり]————— 兼：人類基礎理論研究部准教授

吉岡 乾 [よしおか のぼる]————— 兼：人類基礎理論研究部准教授

梅棹資料室

飯田 卓 [いいだ たく]————— 併：人類文明誌研究部教授

機関研究員

大澤由実 [おおさわ よしみ]————— 機関研究員

【学歴】 ケント大学大学院人類学部修士課程修了（2005）、ケント大学大学院人類学・保全学研究科博士課程修了（2011）【職歴】 欧州大学院大学歴史・文明学研究科研究員（2012）、チェンマイ大学社会科学部・社会科学と持続可能な開発のための地域センター特別研究員（2013）、京都大学学術研究支援室 URA（2014）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）【学位】 Ph.D.（民族生物学）（ケント大学 2012）、M. Sc.（民族植物学）（ケント大学 2005）【専攻・専門】 食の人類学、民族植物学 味の文化的認識と表象、味のグローバル化

【主要業績】

[分担執筆]

Osawa, Y.

2018 “We Can Taste but Others Cannot”: Umami as an Exclusively Japanese Concept. In N. K. Stalker (ed.) *Devouring Japan: Global Perspectives on Japanese Culinary Identity*, pp.118-132. Oxford: Oxford University Press.

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

大澤由実

2019 「現代日本におけるうま味の認識とその構築」『国立民族学博物館研究報告』44(2)：379-405。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究活動スタート支援）「食の認識体系とその変容——タイにおける MSG（グルタミン酸ナトリ

ウム)の消費と拒絶」研究代表者

- ・民間の奨学金及び助成金からのプロジェクト

ロッテ財団奨励研究助成 (B)「北タイにおける食の伝統性に関する人類学的研究——伝統食のあり方とその変容」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他大学の客員、非常勤講師

龍谷大学「栽培植物と農耕の起源」

神野知恵 [かみの ちえ]————機関研究員

【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒 (2008)、東京藝術大学大学院音楽文化研究科音楽学専攻修士課程修了 (2011)、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学専攻博士課程修了 (2016) 【職歴】東京藝術大学音楽学部楽理科教育研究助手 (2016)、東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員 (2017)、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員 (2018) 【学位】博士 (音楽学) (東京藝術大学大学院音楽研究科 2016)、修士 (音楽学) (東京藝術大学大学院音楽文化研究科 2011) 【専攻・専門】音楽学 (民族音楽学)、民俗学 近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷——伊勢大神楽と韓国農楽を中心に 【所属学会】東洋音楽学会、民俗芸能学会、韓国朝鮮文化研究会、映像民俗学の会、南道民俗研究会 (韓国)

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[共著]

金子亜美・小倉志保穂・神野知恵・田中有紀・井上さゆり

2019 『音楽を研究する愉しみ——出会う、はまる、見えてくる』(ブックレット《アジアを学ぼう》) 東京：風響社。

藤田瑞穂・矢野原佑史編・藤田瑞穂・佐藤知久・村津 蘭・川瀬 慈・神野知恵・ふくだぺろ・矢野原佑史

2019 『im/pulse』京都：京都市立芸術大学。

[分担執筆]

神野知恵

2019 「이세다이카구라의 걸립을 통해서 본 세토나िका이 쇼도시 마의 생활과 민속 (伊勢大神楽の回禮を通じて見た小豆島の生活と民俗)」ナ スンマン編『섬과 바다의 민속 연구 그 행로와 전망 (島と海の民俗研究その行路と展望)』pp.80-116, ソウル：民俗苑。

金子亜美・小倉志保穂・神野知恵・田中有紀・井上さゆり

2019 「人に会うための民族音楽学——韓国、日本、そして世界へ」『音楽を研究する愉しみ——出会う、はまる、見えてくる』(ブックレット《アジアを学ぼう》) pp.40-55, 東京：風響社。

藤田瑞穂・矢野原佑史編・藤田瑞穂・佐藤知久・村津 蘭・川瀬 慈・神野知恵・ふくだぺろ・矢野原佑史

2019 「韓国芸能と食文化の深い関係」『im/pulse』pp.193-224, 京都：京都市立芸術大学。

[論文]

神野知恵

2019 「이보형이 수집한 호남우도농악 녹음자료의 역사적 의미——1970대말부터 1980년까지 이루어진 공연녹음자료들을 중심으로 (李輔亨が収集した湖南右道農樂錄音資料の歴史的意味——1970年代末から1980年の公演錄音資料を中心に)」『南道民俗研究』38：321-369。

2020 「滋賀県の市町村誌に見られる伊勢大神楽関連記事の傾向」東京文化財研究所無形文化遺産部編『無形文化遺産研究報告』14：139-177。[査読有]

[翻訳]

神野知恵

2019 全 京秀著「民具研究の可能性の遠心力と求心力」『民具マンスリー』51(12)：12896-12898。

[その他]

神野知恵

2020 「日韓民俗文化の底流を探る (上)」『京都新聞』3月25日。

2020 「日韓民俗文化の底流を探る (下)」『京都新聞』3月26日。

2020 イギリスにおける民族音楽学の研究動向——学際的共同研究の取り組みを中心に」『民博通信Online』1:34-35。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年5月22日～26日 「일본의 동물가면 걸립의 역사와 연행방식 이세다이카구라를 중심으로 (日本の動物仮面による門付けの歴史と芸能の上演形式——伊勢大神楽を中心に)」晋州世界民俗芸術ビエンナーレ仮面劇シンポジウム、招聘講演、慶尚南道晋州市、韓国
- 2019年7月16日 'A Documentary Film on Ise-daikagura: A Lion Dance Driving Evil Power from Houses in Japan.' (悪魔を祓う獅子——伊勢大神楽の映像発表) 国際伝統音楽学会 (ICTM)、チュラロンコン大学、タイ
- 2019年9月28日 「집집을 찾아가는 가면예능과 지역사회 공동체의 관계성——일본 동북지방에 전해지는 우라하마 엄불검무를 중심으로 (家々を訪ねる仮面芸能と地域社会——日本の東北地方に伝わる浦浜念仏剣舞を中心に)」安東仮面劇フェスティバル仮面劇シンポジウム、招聘講演、慶尚北道安東市、韓国
- 2019年10月11日 「くらしと祈りと芸能——家を廻る民俗芸能から学んだこと」国際基督教大学宗教音楽センター公開講演会、招聘講演、国際基督教大学
- 2019年10月26日 「고창농악보존회가 고창의 지역농악과 함께 걸어온 길——보름굿 전수를 중심으로 (高敞農樂保存会が高敞の地域農樂と歩んできた道——旧正月行事の伝承教育を中心に)」高敞農樂シンポジウム、全羅北道高敞郡、韓国
- 2019年11月2日 「家廻り行事を通じて伝達される<地域知>——日本と韓国の事例より」地域研究コンソーシアム年次大会、国立民族学博物館
- 2019年11月17日 「伊勢大神楽の回檀における笛の機能」東洋音楽学会大会、京都市立芸術大学
- 2019年12月1日 「伊勢大神楽の回檀における笛の機能」民俗芸能学会大会、新潟県立歴史博物館
- 2019年12月12日 「伊勢大神楽と地域環境が生み出すサウンドスケープ」カワイサウンド技術・音楽振興財団第37回研究助成講演会、招聘講演、アクトシティ浜松研修交流センター

・広報・社会連携活動

- 2019年6月30日 「身体を通して研究する——韓国打楽器音楽の世界」国立民族学博物館・大阪大学主催『みんなばくディスカバリーツアー』太鼓の実演、国立民族学博物館
- 2019年11月2日～11月3日 「ゴミから生まれる異音獣！ 不思議なケモノはどんな音？ 不思議な音は何に見える？」みんなばくワークショップ、企画・運営補助、国立民族学博物館
- 2019年12月19日 「みんなばく村に神楽がやって来る！ 伊勢大神楽実演とおはなし」みんなばくワークショップ、企画・司会・解説、国立民族学博物館

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

- 2019年5月22日～5月26日 韓国晋州世界民俗芸術ビエンナーレ『伊勢大神楽講社山本勘太夫社中公演』晋州市主催、コーディネート・通翻訳、慶尚南道晋州市、韓国
- 2019年6月28日 第23回 大阪大学コレギウム・ムジクム「音楽と身体」特別公開講座・ワークショップ『韓国の打楽器芸能 農樂の身体性——叩いて、踏んで、結んで、ほどく』企画・演奏、大阪大学
- 2019年11月28日～11月29日 2019年みんなばく若手研究者奨励セミナー『ゆらぐマジョリティ／マイノリティ』運営管理

◎調査活動

・海外調査

- 2019年5月22日～5月27日—韓国（晋州国際芸術ビエンナーレにおける伊勢大神楽山本勘太夫組の出演の同行調査、および晋州仮面劇シンポジウム登壇）
- 2019年6月8日～6月10日—韓国（羅錦秋（女流農樂名人）の追悼公演における記録映像上映）
- 2019年7月9日～7月18日—タイ（ICTM（国際伝統音楽学会）タイ大会への参加）
- 2019年7月24日～7月30日—韓国（農樂演奏者イ・ブサンの取材）
- 2019年9月25日～10月2日—韓国（安東仮面劇国際シンポジウム登壇、ソウル大学校講義、国立民俗博物館日韓交流特別展示開幕式参加）
- 2019年10月23日～10月29日—韓国（高敞農樂學術シンポジウム登壇、国立中央図書館農樂関連資料調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
科学研究費（若手研究）「近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷——伊勢大神楽と韓国農楽を中心に」研究代表者

末森 薫 [すえもり かおる]————機関研究員

1980年生。【学歴】国際基督教大学教養学部人文科学科卒（2004）、筑波大学大学院芸術研究科世界遺産専攻修士課程修了（2006）、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻博士課程単位取得退学（2009）【職歴】国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター客員研究員（2009）、国際協力機構 大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家（保存修復研修計画）（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部外来研究員（2017）、関西大学国際文化財・文化研究センターポスト・ドクトラル・フェロー（2017）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）【学位】博士（学術）（筑波大学大学院人間総合科学研究科 2018）、修士（学術）（筑波大学大学院 2006）【専攻・専門】文化財保存科学、中国仏教美術史、文化遺産学【所属学会】文化財保存修復学会、日本中国考古学会、日本文化財科学科、東アジア文化遺産保存学会、国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works）

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[単著]

末森 薫

2020 『敦煌莫高窟と千仏図——規則性がつくる宗教空間』京都：法蔵館。

[分担執筆]

末森 薫

2020 「中国文明の宗教芸術にみるビーズ——敦煌莫高窟の菩薩装身具」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史』pp.147-159, 京都：昭和堂。

[論文]

末森 薫・岳 永強・李 天銘・馬 千・董 広強・松井敏也・八木春生・河村友佳子

2019 「CTを用いた麦積山石窟壁画片の非破壊構造調査」『The Proceedings of 2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Daejeon』pp.276-279。

西浦忠輝・吹田 浩・吹田真里子・岡岩太郎・末森 薫・沢田正昭・アフマド・シュエイブ

2019 「古代壁画の剥ぎ取り保存——布海苔を用いた伝統的表打ち技法の応用」『The Proceedings of 2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Daejeon』pp.92-95。

Mori, N., T. Higo, K. Suemori, H. Suita, and Y. Yasumuro

2019 Visualization of the Past-to-Recent Changes in Archaeological Heritage based on 3D Digitization. In W. Börner and S. Uhlirz(eds.) *Proceedings of the 23rd International Conference on Cultural Heritage and New Technologies 2018. CHNT 23, 2018 (Vienna 2019)*.

[その他]

末森 薫・劉 成・王 飛・孫 劍・松井敏也

2019 「中国遼寧省義県・奉国寺大雄殿に描かれた壁画の光学撮影調査」日本文化財科学会編『日本文化財科学会第36回大会 研究発表要旨集』pp.92-93。

末森 薫・園田直子・日高真吾

2019 「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.272-273。

園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵・和高智美

2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会 研究発表要旨集』pp.206-207。

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵・和高智美
2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.208-209。

橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森薫・西澤昌樹
2019 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会 研究発表要旨集』pp.218-219。

末森 薫

2019 「外から見える収蔵庫」特集「みんぱくの収蔵庫」『月刊みんぱく』43(4)：8。

2019 「文化財を対象とした光学撮影・画像処理の方法：壁画や博物館資料への活用事例」『システム制御情報学会研究発表講演会講演論文集』63：591-594。

2019 「みんぱくレプリカめぐり」『月刊みんぱく』43(9)：16-17。

2019 「旅・いろいろ地球人 河西回廊・石窟寺紀行① 武威・天梯山石窟」『毎日新聞』9月7日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 河西回廊・石窟寺紀行② 張掖・金塔寺石窟」『毎日新聞』9月14日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 河西回廊・石窟寺紀行③ 酒泉・文殊山石窟」『毎日新聞』9月21日夕刊。

2019 「旅・いろいろ地球人 河西回廊・石窟寺紀行④ 敦煌・莫高窟」『毎日新聞』9月28日夕刊。

2020 「エジプトのIBM」『月刊 みんぱく』44(2)：20。

2020 「オランダにおける資料管理等に関する研究動向調査報告」『民博通信 Online』1：36-37。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2019年11月14日 「色・光の再現から、敦煌莫高窟につくられた宗教的空間を再考する」特別研究「デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ」第3回研究会、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2019年7月19日 「オランダ・デンマークに建設された低エネルギー・共有型収蔵施設」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月22日 「文化財を対象とした光学撮影・画像処理の方法——壁画や博物館資料への活用事例」第63回システム制御情報学会研究発表講演会、中央電気倶楽部

2019年6月1日 「中国遼寧省義県・奉国寺大雄殿に描かれた壁画の光学撮影調査」日本文化財科学会第36回大会、東京藝術大学

2019年6月22日 「オランダにおける資料管理・収蔵施設の動向——持続可能な共有型収蔵施設の建設」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月22日 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月22日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月22日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年8月29日 「CTを用いた麦積山石窟壁画片の非破壊構造調査」2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia、大田、韓国

2019年8月29日 「古代壁画の剥ぎ取り保存——布海苔を用いた伝統的表打ち技法の応用」2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia、大田、韓国

2019年10月25日 「関于敦煌莫高窟千仏図有規律性絵制的多角度考察——再現模写と仮想空間的思考」敦煌唐代芸術研討会、敦煌研究院、中国

2019年10月30日 「新潟県十日町市で発見された越後縮『御召縮』関連資料の解説支援」国際フォーラム『地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割』宜蘭県立蘭陽博物館、台湾

2019年11月4日 'Quantitative Visualization of Secular Changes based on 3D Viewpoint Estimation for archaeological heritage maintenance: A Case Study at Barber Temple Ruins in Bahrain.' Conference on CHNT (Cultural Heritage and New Technologies) 24, Vienna City Hall, Taiwan

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価」研究代表者、科学研究費（研究成果公開促進費（学術図書））「敦煌莫高窟と千仏図」研究代表者、鹿島美術財団・美術に関する調査研究の助成「敦煌莫高窟初唐窟に描かれた千仏図の研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発」（研究代表者：園田直子）研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存」（研究代表者：日高真吾）研究分担者、人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」メンバー

古川不可知 [ふるかわ ふかち]————機関研究員

【学歴】 埼玉大学教養学部人類学コース卒（2006）、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了（2012）、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了（2018）**【職歴】** 一般企業SE（2006）、ネパール・トリブバン大学社会学／人類学部客員研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2014）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員（2018）、関西大学社会学部非常勤講師（2018）、関西学院大学文学部非常勤講師（2018）、神戸女学院大学文学部非常勤講師（2018）**【学位】** 博士（人間科学）（大阪大学 2018）、修士（人間科学）（大阪大学 2012）**【専攻・専門】** 文化人類学、ヒマラヤ地域研究 ネパール・ソルクンプ郡における山岳観光と「道」に関する人類学的研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本南アジア学会、観光学術学会、日本山岳文化学会

【主要業績】

[単著]

古川不可知

2020 『「シェルパ」と道の人類学』東京：亜紀書房。

[共訳]

奥野克巳・近藤祉秋・古川不可知

2018 レーン・ウィラースレフ著 『ソウル・ハンターズ——シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』東京：亜紀書房。

[論文]

古川不可知

2018 「インフラストラクチャーとしての山道——ネパール・ソルクンプ郡クンプ地方、山岳観光地域における『道』と発展をめぐって」『文化人類学』83(3)：423-440。

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[単著]

古川不可知

2020 『「シェルパ」と道の人類学』東京：亜紀書房。

[その他]

古川不可知

2019 「ネパールの背負いかご」『文部科学 教育通信』459：2。

2020 「モビリティと物質性の人類学——移動の物質的側面を追って」『民博通信Online』1：30-31。

2020 「英国のセミナー文化に見る人類学的な知のありかた」『民博通信Online』1：38-39。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2019年8月3日 「ネパール・ソルクンプ郡ソル地方における車道建設——移動インフラとトレッキング観光の相克」2019年度MINDAS「移民・移動」班第1回研究会、国立民族学博物館

・共同研究会での報告

2019年11月2日 「趣旨説明と研究動向紹介」国立民族学博物館若手共同研究『モビリティと物質性の人類学』

国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月1日 「土砂崩れとぬかるみ——ヒマラヤ山間部を運転することについての試論」日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学

2019年8月29日 Mountain Trails as Infrastructure: Trekking Tourism and Development in Solukhumbu, Nepal, UAES 2019 Inter-Congress

2019年12月16日 「山道を歩くこと、山間部を運転すること——ネパール・ソルクンブ郡、山岳観光地域における車道建設をめぐる」白山人類学研究会、東洋大学

・広報・社会連携活動

2019年9月6日 「エベレストの麓に生きる人びと——シェルパとヒマラヤ観光の現在」第492回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年6月18日 「歩く身体／道としての身体——ネパール・エベレスト地域を移動することについて」（慶應義塾大学 文学部総合教育科目「アナログ、アナクロ、アナロジーⅠ」（オムニバス講義・第9回担当）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（研究活動スタート支援）「ヒマラヤ東部地域における輸送インフラの発展と移動する身体に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（研究成果公開促進費（学術図書））「『シェルパ』と道の人類学」研究代表者、国立民族学博物館共同研究「モビリティと物質性の人類学」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

プロジェクト研究員

石原 和 [いしはら やまと]——プロジェクト研究員

【学歴】立命館大学文学部人文学科日本史学専攻卒（2011）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程前期課程修了（2012）、立命館大学大学院文学研究科人文学専攻日本史学専修博士課程後期課程修了（2017）【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC 2（2014）、国立民族学博物館人類基礎理論研究部プロジェクト研究員（2017）、立命館大学授業担当講師（2018）【学位】博士（文学）（立命館大学大学院 2017）【専攻・専門】日本史学 思想史、宗教史、宗教学【所属学会】日本歴史学会、日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本思想史学会、日本宗教学会、RA 協議会

【主要業績】

[単著]

石原 和

2020 『「ぞめき」の時空間と如来教 近世後期の救済論的転回』京都：法藏館。

[編著]

石原 和・吉永進一・並木英子編

2020 『月見里神社史料・宮城島家史料目録——近代清水の神職たちと鎮魂婦神「日本新宗教史像の再構築：アーカイブと研究者ネットワーク整備」調査・研究成果報告書』。

[論文]

石原 和

2018 「民衆宗教」大谷栄一・菊地暁・永岡崇編『日本宗教史のキーワード 近代主義を超えて』pp.229-235, 東京：慶應義塾大学出版会。

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

石原 和

2019 「一八〇〇年前後における救済論の質的転回——三業惑乱、尾州五人男、如来教から」前田勉・高山大毅編『季刊日本思想史』83：103-123。

2019 「一九二〇年代後半における「如来教」の“創出”——石橋智信の研究から」桂島宣弘編『東アジア遭遇する知と日本——トランスナショナルな思想史の試み』pp.280-297, 京都：文理閣。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年8月26日 「1800年前後の救済論の展開——「身」「心」をめぐる」宗教史懇話会サマーセミナー、奈良万葉若草の宿 三笠

2019年9月15日 「稲荷講社と出口王仁三郎——講社所管教会という視点から」日本宗教学会第78回学術大会、パネル「近代宗教政策下における「教団」未満の宗教者たち」（代表者：石原 和／報告者：井上智勝、石原 和、並木英子／コメント：永岡 崇の一部）、帝京科学大学

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「日本新宗教史像の再構築——アーカイブと研究者ネットワーク整備による基盤形成」（研究代表者：菊池 暁（京都大学））新宗教班として、近代清水の民間宗教者調査。

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

立命館大学「キャンパスアジア日本研究Ⅲ（LA）」、立命館大学「キャンパスアジア日本研究Ⅲ（LB）」「日本史Ⅱ（L）」、大阪大学「手話の世界と世界の手話言語☆入門（リレー講義）」

石山 俊 [いしやま しゅん]————— プロジェクト研究員

【学歴】名古屋大学大学院文学研究科満期退学（2006）【職歴】大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員（2014）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2015）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所外来研究員（2017）、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2017）【学位】博士（文学）（名古屋大学大学院 2015）【専攻・専門】文化人類学、環境人類学、アフリカ、中東乾燥地文化研究、農耕社会研究【所属学会】日本アフリカ学会、日本中東学会、日本文化人類学会、日本沙漠学会

【主要業績】

[編著]

石山 俊編

2017 『サーヘル内陸国チャドの環境人類学——貧困・紛争・「砂漠化」の構造』名古屋：名古屋大学大学院。

[共編]

石山 俊・縄田浩志編

2013 『ポスト石油時代の人づくり・モノづくり——日本と産油国の未来像を求めて 地球研叢書16』京都：昭和堂。

2013 『ナツメヤシ アラブなりわい生態系シリーズ2』京都：臨川書店。

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

石山 俊

2019 「サハラ・オアシスにおける灌漑水供給システムとナツメヤシ栽培」『沙漠研究』29(1)：21-29。

[分担執筆]

石山 俊・縄田浩志

2019 「ナツメヤシを育てる——オアシスの農業」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「見られる私」より「見る私』』 pp.124-125, 東京：河出書房新社。

縄田浩志・石山 俊

2019 「ナツメヤシからつくる——多様な利用法」縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「見られる私」より「見る私』』 pp.126-127, 東京：河出書房新社。

石山 俊

2020 「『農と食』をささえるいとなみ」石井 潤・中村 亮編『若者と研究者が見た北潟湖——その生物文化多様性の魅力』 pp.81-84, 福井：福井県里山里海湖研究所。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年 5月12日 「ワーディ・ファータマにおける土地利用・農業の変容」日本中東学会第35回年次大会、秋田大学

2019年 5月25日 「地域研究写真のデジタル化・データベース化と研究への活用——DiPLASプロジェクトの経験」シンポジウム『地域コミュニティのメディアテーク』国立情報学研究所

2019年10月20日 「土地利用と農業の変容——現地調査による景観変遷の復元」日本沙漠学会秋季シンポジウム、横浜情報文化センター

2019年11月10日 「アフリカ内陸サハラ・サーヘル文化」国際シンポジウム『「一带一路 One Belt, One Road」アフロ・ユーラシア文明論から考える』中部大学

・展示

2019年10月 5日～12月22日 「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『見られる私』より『見る私』』横浜ユーラシア文化館

◎調査活動

・海外調査

2019年 9月11日～9月21日—サウジアラビア（科学研究費（基盤研究（A））「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析—「近代世界システム」との相克」にかかる現地調査および打ち合わせ）

2019年12月23日～2020年 1月 7日—アルジェリア（科学研究費（基盤研究（B））にかかる現地調査および打ち合わせ）

2020年 2月19日～2020年 2月28日—タイ、ラオス（人間文化研究機構エコヘルズプロジェクトにかかる現地調査（ラオス山岳少数民族居住地域における生業と生計に関する聞き取り調査））

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」（研究代表者：縄田浩志（秋田大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の近代動態分析——『近代世界システム』との相克」（研究代表者：嶋田義仁（中部大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（B））「アフリカ食文化研究の新展開——食料主権論のために」（研究代表者：藤本 武（富山大学））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・社会活動

日本沙漠学会沙漠誌分科会運営委員、一般財団法人片倉もとこ記念沙漠文化財団理事、特定非営利活動法人緑のサヘル理事、特定非営利活動法人森のエネルギーフォーラム理事

河村友佳子 [かわむら ゆかこ]——プロジェクト研究員

【学歴】京都造形芸術大学芸術学部卒（2003）【職歴】国立民族学博物館情報管理施設 情報企画課技術補佐員（2003）、財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設 共同利用型科学分析室プロジェクト研究員（2018）【専攻・専門】保存科学【所属学会】文化財保存修復学会、日本文化財

科学会、日本民具学会

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

河村友佳子・園田直子・日高真吾・末森 薫・橋本沙知・和高智美・川越和四・富岡康浩

2019 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」
文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.290-291。[査読有]

河村友佳子

2019 「重要文化財『涅槃釈迦像』の3D複製品の取り組み事例」『国際フォーラム「地域文化を活用する——地域振興、地域活性に果たす役割」要旨集』pp.36-38。

橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森 薫・西澤昌樹

2019 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.218-219。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵

2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.206-207。[査読有]

園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵・和高智美

2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.208-209。[査読有]

和高智美・日高真吾・河村友佳子・橋本沙知

2019 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.204-205。[査読有]

Suemori, K., Y. Yue, T. Li, Q. Ma, G. Dong, T. Matsui, H. Yagi, Y. Kawamura

2019 Nondestructive Structural Survey applying CT on Mural Fragments of Maijishan Grottoes, Tianshui, China (CTを用いた麦積山石窟壁画片の非破壊構造調査). *Proceedings of 2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Daejeon*, pp.276-279。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2019年7月19日 「太陽熱を用いた高温処理の条件確立——今後の進めかた」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

2019年12月12日 「国立民族学博物館における温湿度に関する調査と分析手法」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月23日 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月23日 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月23日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月23日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年6月23日 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学八王子キャンパス

2019年8月29日 'Nondestructive Structural Survey applying CT on Mural Fragments of Maijishan Grottoes, Tianshui, China (CTを用いた麦積山石窟壁画片の非破壊構造調査). 2019 Daejeon International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, Daejeon, South Korea

2019年10月30日 「重要文化財『涅槃釈迦像』の3D複製品の取り組み事例」国際フォーラム『地域文化を活用

する——地域振興/地域活性に果たす役割』蘭陽博物館、台湾

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年7月27日 「博物館の実例Ⅰ 展示室・収蔵庫の温度湿度コントロールについて」公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター、国立民族学博物館

2019年11月28日 「民博の空調管理について」独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、国立民族学博物館

小林直明 [こばやし なおあき]———— プロジェクト研究員

1971年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部日本語学科卒（1994）、大阪外国語大学大学院外国語学研究科西アジア語学専攻修士課程修了（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科地域文化専攻博士後期課程単位取得退学（2002）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所日本学術振興会特別研究員（PD・文化人類学）（2002）、国立民族学博物館文化資源研究センター外来研究員/日本学術振興会特別研究員（PD・文化人類学）（2003）、大阪大学世界言語研究センター特任研究員（2008）、龍谷大学社会学部実習助手（2011）、国立民族学博物館人類文明誌研究部プロジェクト研究員（2016）【学位】修士（大阪外国語大学大学院 1998）【専攻・専門】文化人類学・民俗学 民族誌映像、図書館情報学・人文社会情報学 デジタルアーカイブ、地域研究 アフリカ【所属学会】日本アフリカ学会、日本映像民俗学の会、デジタルアーカイブ学会

【2019年度の活動報告】

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』）研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（研究支援代表者：吉田憲司）において技術支援員として写真資料のデジタルアーカイブ化（フィルムの整理やデジタル化・データベース化、権利処理などの諸業務）を効果的・効率的にすすめる手法を研究・考案し、実践した。

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

近畿大学非常勤講師「博物館情報・メディア論」「情報処理専門演習Ⅰ・Ⅱ」、龍谷大学非常勤講師「異文化研究B」、同志社女子大学嘱託講師「デジタルアーカイブス」、同志社女子大学大学院嘱託講師「メディアリテラシー特論」

橋本沙知 [はしもと さち]———— プロジェクト研究員

【学歴】同志社大学文学部文化学科・美学及び芸術学専攻卒（2004）【職歴】国立民族学博物館情報管理施設情報企画課技術補佐員（2004）、公益財団法人元興寺文化財研究所伝世資料修復室研究補佐員（2007）、国立民族学博物館情報管理施設共同利用型科学分析室プロジェクト研究員（2018）【専攻・専門】保存科学【所属学会】文化財保存修復学会、日本文化財科学会

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[その他]

河村友佳子・園田直子・日高真吾・末森 薫・橋本沙知・和高智美・川越和四・富岡康浩

2019 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.290-291。[査読有]

橋本沙知・日高真吾・園田直子・河村友佳子・末森 薫・西澤昌樹

2019 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.218-219。[査読有]

日高真吾・園田直子・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵

2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.206-207。[査読有]

- 園田直子・日高真吾・末森 薫・河村友佳子・橋本沙知・西澤昌樹・小関万緒・石田糸絵・和高智美
 2019 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.208-209。[査読有]
- 和高智美・日高真吾・河村友佳子・橋本沙知
 2019 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」文化財保存修復学会編『文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集』pp.204-205。[査読有]

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

- 2019年7月19日 「多機能保管庫におけるカビの発生資料と空気の対流調査——今後の進めかた」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館
- 2019年7月19日 「窒素雰囲気での密封実験——今後の進めかた」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館
- 2019年12月12日 「2019年特別展『驚異と怪異——想像界の生きものたち』調湿展示ケース内の温湿度制御事例」『博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年6月23日 「3Dスキャナーによる判読困難な津波碑の文字情報取得の可能性」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学
- 2019年6月23日 「国立民族学博物館における共同利用型科学分析室の活動について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学
- 2019年6月23日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の収蔵庫の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学
- 2019年6月23日 「大阪府北部を震源とする地震による国立民族学博物館の展示場と図書室の被害と対応について」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学
- 2019年6月23日 「太陽光を利用した高温処理システムの処理条件の創出に向けて——47.5℃繰り返し高温処理実験」文化財保存修復学会第41回大会、帝京大学

・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

- 2019年7月27日 「博物館の実例Ⅰ 民博におけるLED照明の考え方」(Thematic Training Course for Mid-career Professionals on Cultural Heritage Protection in the Asia-Pacific Region 2019) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、国立民族学博物館
- 2019年11月28日 「民博の収蔵庫で使用している包材について」2019年度博物館の環境管理に関するイラン人専門家研修、東京文化財研究所、国立民族学博物館

彭 宇潔 [ホウ ウケツ]————プロジェクト研究員

【学歴】北京外国語大学日本語学部卒（2008）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻5年一貫制博士課程修了（2016）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2016）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科2012）【専攻・専門】文化人類学、狩猟採集民研究、アフリカ地域研究【所属学会】日本アフリカ学会、生態人類学会、日本文化人類学会、国際狩猟採集民学会、英国王立人類学協会、国際民族生物学会

【主要業績】

[単著]

彭 宇潔

- 2017 *Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter Gatherers in Southeastern Cameroon*. Kyoto: Shokado.

[論文]

彭 宇潔

- 2016 Transmission of Body Decoration among the Baka Hunter-Gatherers. In H. Terashima and Barry S. Hewlett (eds.) *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary*

and *Ethnographic Perspectives*, pp.83-93. Tokyo: Springer.

2016 The Evidence of Proximity: Tattoo Practices of the Baka in Southeastern Cameroon. *Hunter Gatherer Research* 2(1): 63-95.

【受賞歴】

2017 中国民族生態学会第2回全国大会「優秀論文賞」

2012 英国王立人類学協会主催 Body Canvas Photography Competition「Runner-up 賞」

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[単著]

彭 宇潔

2020 「小規模居住集団の生活様式——アフリカ熱帯林のバカ・ピグミーと中国雲南のドゥーロン族（独龍族）を事例に」『パレオアジア文化史学 計画研究 B01班2019年度研究報告——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』 pp.39-43, 東京：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度計画研究 B01班（研究課題番号16H06411）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年2月29日 'Residence Styles among Small-Scale Societies: Cases from Central Africa and Southeastern Asia.' Society for Cross-Cultural Research Conference 2020, Seattle, United States.

◎調査活動

・海外調査

2019年8月9日～9月4日—カメルーン（アフリカ熱帯雨林狩猟採集民の資源獲得行動に関する現地調査）

2019年10月9日～10月20日—中国（パレオアジア文化史学プロジェクトのための資料収集及び現地調査）

2020年2月24日～3月2日—アメリカ合衆国（2020年通文化研究学会（SCCR2020）への参加と研究発表）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費（新学術領域研究（研究領域提案型））「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」（研究代表者：野林厚志）研究協力者、科学研究費（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「トイレを必要とする条件とは——狩猟採集民、農耕民、都市生活者の排泄と衛生条件の比較」（研究代表者：山内太郎（総合地球環境学研究所））研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

京都外国語大学外国語学部非常勤講師「民俗学から見た衣食住」、龍谷大学経済学部非常勤講師「入門演習」「基礎演習Ⅰ」

拠点研究員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

辛嶋博善 [からしま ひろよし]——特任助教

1974年生。【学歴】慶應義塾大学文学部史学科民族学考古学専攻卒業（1998）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻地域研究コース修了（2001）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得退学（2008）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー（2008-2013）、北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員（2013-2014）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員（2014-2015）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター地域比較共同研究員（2015-）【学位】博士（学術）

(東京外国語大学 2011)【専攻・専門】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、生き物文化誌学会、IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)

【主要業績】

[論文]

辛嶋博善

2017 「家業を起業する——モンゴル牧畜社会における牧夫の自立」(特集：市場化・脱生業化時代の生業論——
牧畜戦略の多様化を例に)『文化人類学』82(1)：35-49。

2016 「拡張する柔軟性——モンゴル国現代牧畜社会における居住単位のサイズと構成の変遷」『文化人類学』
81(1)：44-61。

[学位論文]

辛嶋博善

2010 「衝突する未来——ポスト社会主義期におけるモンゴル国ヘンティール県ムルン郡の牧畜社会を事例とし
て」東京外国語大学。

【2019年度の活動報告】

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年7月18日 'Herdsman as Entrepreneurs: Pastoralism and Family Business in Modern Mongolia.' "The
11th International Convention of Asia Scholars (ICAS11)", Leiden University, Nether-
lands

2019年8月20日 'From Herdsman to Household: Social changes in Modern Mongolia.' "International
Altay Communities Symposium - VIII", Isik K l, Kyrgyzstan

◎調査活動

・海外調査

2019年7月15日～7月21日—オランダ (国際会議出席・発表 (ICAS11, the 11th International Convention of
Asia Scholars))

2019年8月17日～8月25日—キルギス共和国 (国際会議 (第8回アルタイ会議シンポジウム) 出席・発表)

2019年11月27日～12月1日—デンマーク (Analyzing the Historic Photographs of Mongolia (第3回プロジェ
クトワークショップ) への参加)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクト の代表者・分担者など

科学研究費 (基盤研究 (A)) 「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」(研究代表者：小長谷有紀)
研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究拠点」(拠点代表
者：池谷和信) 拠点構成員

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「現代中東地域研究」国立民族学博物館拠点

黒田賢治 [くろだ けんじ] ————— 特任助教

1982年生。【学歴】北海道大学文学部人文科学科卒 (2005)、北海道大学文学研究科修士課程退学 (2006)、京都大学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程 (五年一貫制) 修了 (2011) 【職歴】日本学術振興会特別研究員
(DC) (2008-2011)、京都大学科学研究員 (2011-2012)、京都大学東南アジア研究所特別研究員 (2011-2012)、カリ
フォルニア大学中近東研究所客員研究員 (2011-2012)、日本学術振興会特別研究員 (PD) (2012-2015)、広島大学
総合科学研究科研究員 (2015-2016)、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員 (2016) 【学位】博士
(地域研究) (京都大学大学院 2011) 【専攻・専門】中東地域研究、イスラーム研究 【所属学会】宗教と社会学会、
日本文化人類学会、日本中東学会、IUAES

【主要業績】

[単著]

黒田賢治

2015 『イランにおける宗教と国家——現代シーア派の実相』 京都：ナカニシヤ出版。

[論文]

黒田賢治

2017 Pioneering Iranian Studies in Meiji Japan: Between Modern Academia and International Strategy. *Iranian Studies* 50(5): 651-670.

[学位論文]

黒田賢治

2011 『現代イランにおけるイスラーム国家と法学界の研究——イスラーム指導体制下の宗教と政治をめぐって』 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科。

【2019年度の活動報告】

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月2日 「情動の政治と個人の変容——イランにおける帰還民兵の事例から」 第53回日本文化人類学会研究大会、東北大学川内キャンパス

・研究講演

2020年1月30日 「現代イランにおける40年の殉教物語——死の社会化と国家の『神話』形成」 第300回民博研究懇談会、国立民族学博物館

2020年2月16日 「アメリカ・イラン関係の現代的展開——立憲革命からトランプと知の『内方浸透』から考える」 研究ワークショップ『ポスト・オリエンタリズムから考えるイランと日本』 上智大学四谷キャンパス

・展示

2019年6月6日～9月10日 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」

◎調査活動

・国内調査

2019年10月6日～10月8日—鹿児島県（戦争の記憶保存と博物館展示をめぐるイランとの比較調査）

2020年3月16日～3月18日—佐賀県（明治・大正期の日本の巡礼船事業に関する資料調査）

・海外調査

2019年12月14日～30日——イラン（テヘラン市、アーモル市、エスファハーン市にて科研課題についての調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（若手研究）「現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「国立民族学博物館現代中東地域研究拠点」（拠点代表者：西尾哲夫）拠点構成員

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講師

■人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点

菅野美佐子 [かんの みさこ]——特任助教

【学歴】 総合研究大学院大学博士後期課程修了（2007）【職歴】 国立民族学博物館外来研究員（2007-2010）、日本学術振興会・特別研究員（RPD）（2010-2013）、青山学院女子短期大学・非常勤講師（2012-2016）、東京福祉大学講師（2016-2017）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2017-

2020)【専攻・専門】文化人類学、南アジア地域研究、ジェンダー

【主要業績】

[論文]

Kanno M.

2017 Dynamics of working Housewives in Contemporary Rural Uttar Pradesh. In T. Awaya and M. Muzuki (eds.) *Women's Work in South Asia in the Age of Neo-Liberalism*, pp.9-23. Tokyo: The Center for South Asian Studies and Tokyo University of Foreign Studies.

菅野美佐子

2017 「親密圏と公共圏のはざまにある仕事——北インド農村の女性の暮らしと福祉事業」『多民族社会における宗教と文化』20: 3-15.

【2019年度の活動報告】

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「グローバルなアジェンダとなった月経のローカルな状況の比較研究」（研究代表者：杉田映理（大阪大学）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

田中鉄也 [たなか てつや] ————— 特任助教

1979年生。【学歴】関西大学文学部哲学科卒業（2004）、関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（2006）、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了（2014）【職歴】関西大学マイノリティ研究センターリサーチアシスタント（2009-2010, 2012-2013）、日本学術振興会特別研究員（DC）（2013-2014）、日本学術振興会（PD）（2014-2016）、アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー（2016-2017）、日本学術振興会海外特別研究員（2017-2018）、デリー大学社会科学科臨時研究員（2017-2018）、ロンドン大学東洋アフリカ研究所客員研究員（2018）、人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／国立民族学博物館南アジア研究拠点特任助教（2018-）【専攻・専門】博士（文学）（関西大学大学院 2014）

【主要業績】

[単著]

田中鉄也

2014 『インド人ビジネスマンとヒンドゥー寺院運営——マールワーリーにとっての慈善・喜捨・実利』東京：風響社。

[論文]

田中鉄也

2018 「コミュニティの実体化と女神巡行——インド・カルカッタのカースト団体を事例に」『宗教と社会』24: 33-47。

2016 The State and the Transformation of Religion: Marwari Merchants and Hindu Temple Management. *FINDAS Research Paper* 4: 1-33.

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[論文]

田中鉄也

2019 「女神に付与された複数の公共性——北インドの宗教的な慈善団体とヒンドゥー寺院」石森大知・二羽典之編『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』pp.391-430, 横浜：春風社。

2020 Trustee, State and Stakeholder: Hindu Temple Management in Contemporary India, 1957 - 2012.

[その他]

田中铁也

2020 「コメント：娯楽メディアと宗教表象——インド映画に現れた宗教世界を中心に」『宗教研究』93：132-134。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2020年3月7日 「インド司法が描く『宗教』——ラーニー・サティール寺院をめぐる裁判を事例に」2019年度第4回研究会、京都大学稲盛財団記念館

2019年10月13日 「18～19世紀におけるマールワリー商人の北インド内陸交易の諸相」第2回「僧院の政治経済」研究会、龍谷大学大宮キャンパス

◎調査活動

・海外調査

2019年8月9日～8月26日—インド（科研プロジェクト「宗教組織の経営プロセスについての文化人類学的研究」に係る現地調査（デリー、コルカタ、ヒサール他））

2019年10月2日～10月8日—インド（南アジア地域研究打ち合わせ（デリー大学）、資料調査（NMML）、現地調査（Devasar Hindu Temple））

2020年1月29日～2月15日—インド（コルカタ市における祭礼の変容に関する調査（コルカタ）、資料調査（National Library, NMML）、現地調査（New Market, Devasar Hindu Temple））

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（B））「宗教組織の経営プロセスについての文化人類学的研究」（研究代表者：藏本龍介（東京大学）研究分担者、関西大学研究拠点形成支援経費「法の支配と法多元主義」（研究代表者：西澤希久男（関西大学）研究分担者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MINDAS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

関西大学非常勤講師

・アウトリーチ

2019年12月21日 「インド都市社会における家族と宗教の今」『今月の主人公』天正寺。

2019年8月3日 「インド人ビジネスマンによつてのカーストと宗教」『今月の主人公』天正寺。

■人間文化研究機構総合情報発信センター・「人文知コミュニケーター」

大石侑香 [おおいし ゆか]———特任助教

【学歴】 首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻社会人類学教室博士前期課程修了（2009）、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻社会人類学教室博士後期課程単位取得退学（2016）【職歴】 日本学術振興会—特別研究員DC1（2009）、日本学術振興会—特別研究員PD（2016）、国立民族学博物館学術資源研究開発センター特任助教（2018）、人間文化研究機構総合情報発信センター特任研究員（2018）【学位】 博士（社会人類学）（首都大学東京大学院 2018）【専攻・専門】 社会人類学、文化人類学 シベリア北方少数民族の生業文化、社会・文化変容、北極域研究、毛皮のグローバルヒストリー【所属学会】 日本文化人類学会、日本シベリア学会、東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、生態人類学会、北極環境研究コンソーシアム、ヒトと動物の関係学会

【2019年度の活動報告】

◎出版物による業績

[分担執筆]

Юка Оиси

2019 Глава3 История человека в Арктике. In Хироки Такакура, Ёсихиро Иидзима, Ванда Игнатъева,

Александр Фёдоров, Масанори Гото and Тосикадзу Танака (eds.) *Вечная мерзлота и культура: Глобальное потепление и Республика Саха (Якутия), Российская Федерация* (Center for Northeast Asian Studies report 24) pp.18-19. Sendai: Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University.

[論文]

藤岡悠一郎・大石侑香・田中利和・ヴィノクロヴァ・N

2020 「サハ共和国・ゴルヌイ郡におけるサハの野生ベリー類採集」『北海道立北方民族博物館研究紀要』29: 31-51。[査読有]

Д. Бйамбаджав, Т. В.Литвиненко, Ю. Ойши, М. Сиотани and Х. Такакура

2019 Трансформация горнодобывающего предприятия и ее влияние на окружающую территорию: опыт Японии и уроки для России. *Староосвоенные районы: генезис, исторические судьбы, современные тренды развития. Отв. редактор В.Н. Стрелецкий. Материалы сессий экономико-географической секции* 35: 280-290。[査読有]

[その他]

大石侑香

2019 「トナカイと生きる——西シベリア・ハンティの生業研究」『Wendy (全国版)』364: 11。

2019 「厳粛で、愉しげな、ハンティのクマ遊び」『月刊みんぱく』43(10): 10-11。

2019 「西シベリアの牧畜犬」『BIOSTORY』32: 72-73。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月15日 'Flexibility and Adaptability of Freshwater Fishing in the Inland Forest Area of Siberia.' 3d International and interdisciplinary Conference on Tungus Studies "Social Interactions, Language, Landscape in Siberia and China", Blagoveshchensk, Russia

2019年6月8日 「移りゆくハンティのアイデンティティと階層性」第5回日本シベリア学会研究大会、同志社女子大学

2019年6月28日 'Perception Gaps between Local Inhabitants and Scientists on the Decrease in Population of Fish in Western Siberia.' UArctic workshop "The Experience - Exchange Workshop on 'Thematic Network on Collaborative Resource Management and Monitoring'", Hokkaido University

2019年10月24日 'History of fresh water fishery in Ob' River system from the viewpoint of Khanty.' "The Fifth Biennial Conference of East Asian Environmental History (EAEH 2019)", National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan

・広報・社会連携活動

2019年6月30日 「地の果てへ（講演）」国立民族学博物館・大阪大学主催『みんぱくディスカバリー・ツアー』国立民族学博物館

2019年7月28日 「フィールドワークに挑戦！——マイナス40℃の暮らし」みんぱく夏やすみ子どもワークショップ、国立民族学博物館

2019年8月12日 「だれのぼうし？どんなぼうし？」みんぱくワークショップ、国立民族学博物館

2019年11月7日 「つくって かぶって みんぱく・ぼうし工房」『ミュージアムキッズ！全国フェア2019』国立淡路青少年交流の家

2020年1月19日 「ハンティの文様の世界——フェルトのコースターづくり」みんぱくワークショップ、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2019年5月23日～5月28日—ロシア（Arctic Science Summit Week 2019に参加）

2019年6月11日～6月17日—ロシア（人間文化研究機構「北東アジア地域研究」の活動の一環として、第3回国際学際ツングース会議に参加し、研究発表を行う）

2019年8月27日～9月3日—ロシア（サハ共和国マガラス村にて採集活動と毛皮生産・流通の調査）

2019年10月23日～10月28日—ロシア（National Cheng Kung University で開催される The Fifth Biennial Conference of East Asian Environmental History (EAEH 2019) に参加し研究

発表を行う)

2020年2月9日～2月21日—ロシア(サハ共和国ヤクーツクおよびマガラス村にてヤクーチヤの毛皮産業の歴史と技術に関する調査)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費(若手研究)「肉食性動物のドメスティケーション——毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化」研究代表者、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業:東北大学東北アジア研究センター拠点『東北アジア地域の環境・資源に関する研究連携ユニット』」(研究代表者:高倉浩樹(東北大学))メンバー、北極域研究推進プロジェクト「ArCS: Arctic Challenge for Sustainability」(研究代表者:深澤理郎(国立極地研究所/海洋研究開発機構))メンバー

客員教員

■人類基礎理論研究部

宇陀則彦 [うだ のりひこ] ————— 教授

【学歴】図書館情報大学図書館情報学部卒(1989)、図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程修了(1991)、筑波大学大学院博士後期課程工学研究科修了(1994)【職歴】図書館情報大学図書館情報学部助手(1994)、図書館情報大学総合情報処理センター講師(1999)、図書館情報大学図書館情報学部助教授(2001)、筑波大学図書館情報学系助教授(2002)、筑波大学図書館情報メディア系准教授(2011)【学位】博士(工学)(筑波大学 1994)【専攻・専門】図書館情報学・知識情報学【所属学会】情報処理学会、情報知識学会

【主要業績】

[共著]

宇陀則彦

2017 「世界の知識に到達するシステム」逸村 裕・田窪直規・原田隆史編『図書館情報学を学ぶ人のために』pp.214-224, 京都:世界思想社。

[論文]

森 彩乃・松村 敦・宇陀則彦

2019 「分類動作を取り入れたウェブ検索支援システムの構築」『情報処理学会第81回全国大会講演論文集』pp.419-420, 東京:情報処理学会。

Uda, N., C. Mizoue, S. Donkai and S. Ishimura

2018 Information Seeking Behaviors of Older Adults in a Public Library in Japan. *LIBRES* 28(1): 1-12.

【受賞歴】

2007 情報知識学会論文賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化資源の人文社会情報学的研究——高度情報化とデータベースの連携

・研究の目的、内容

今年度はドキュメント展示のための博物館資料を選択するため、国立民族学博物館のデータベースと他機関のデータベースを横断的に利用し、展示文脈の形成可能性について考察する。近年、ヨーロッパに代表されるように、文化資源の情報を大規模な範囲で集約し、提供する動きが加速している。日本でも2019年2月に日本が保有する書籍、文化財、メディア芸術等の様々なコンテンツをまとめて検索できるジャパンサーチ(試験版)が公開された。人間文化機構も2008年より nihuINT という横断検索システムを提供しているが、ジャパンサー

チより一世代前のシステムであり、国立民族学博物館のデータ提供の在り方を再考する必要がある。そこで、展示文脈を形成するという視点から nihuINT とジャパンサーチを利用し、国立民族学博物館データベースの特長と課題について考察する。

・成果

国立民族学博物館は設立当初から情報化に取り組み、データベース提供の先進性は世界的にみても評価が高い。データベースの提供は情報技術の発展に伴って変化させる必要があり、一度作成すれば終わりというわけではない。時間軸としてみると、構築の時代、共有の時代、集約の時代と進んできた。構築の時代は博物館ローカルでデータベースを提供した時代、共有の時代は nihuINT に見られるように複数機関で横断検索できるようにした時代、そして現在は Europeana や Japan Search など巨大ポータルサイトに集約する時代であるといえる。国立民族学博物館はどの時代においても常に最前線にあり、時代ごとの問題を率先して解決してきた。最も大きな成果は多様な資料のメタデータを共通メタデータとしてマッピングし、提供してきたことである。これは主に共有の時代の成果であるが、集約の時代においてもより洗練された形で Japan Search に提供している。今後の課題は、短期的にはトリプルアイエフ (IIIF: International Image Interoperability) への対応、中長期的にはデータベースの多様性と集約のバランスをどうとるかであろう。

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

原 大介 [はら だいすけ]————— 教授

1965年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒業（1989）、国際基督教大学大学院教育学研究科修了（1991）、シカゴ大学大学院言語学科修了（2003）【職歴】愛知医科大学看護学部専任講師（2000）、愛知医科大学看護学部助教授（2004）、愛知医科大学看護学部教授（2007）、豊田工業大学工学部教授（2010）【学位】博士（言語学）（シカゴ大学大学院、2003）【専攻・専門】音韻論、形態論、手話言語学 【所属学会】日本言語学会、日本手話学会、日本特殊教育学会、日本英語学会

【主要業績】

[論文]

Hara, D.

2016 An Information-based Approach to the Syllable Formation of Japanese Sign Language. In M. Minami (ed.) *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, pp.457-482. Boston, MA: GRUYTER MOUTON.

原 大介

2010 「手話言語研究はどうあるべきか——捨象と抽象」『手話学研究』19：29-41。

2009 「手話」中島平三監修・今井邦彦編『言語学の領域II』（シリーズ朝倉「言語の可能性」2）pp.72-98, 東京：朝倉書店。

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語における音節構造の成り立ちとその適格性条件に関する研究

・研究の目的、内容

日本手話は、「手型」、「手の位置」、「手の動き」の3つのカテゴリに属する要素と「掌の向き」、「指先の方向」、「利き手の接触」等のいくつかのマイナーな要素が音節構成素として関与している。各カテゴリにはそれぞれ有限個の要素が存在するが、カテゴリ間の要素結合は自由ではなく数学的に可能な組み合わせの多くが不適格な音節と判定される。本研究では、どのような要素結合が適格な日本手話音節形成を可能にし、どのような要素結合が日本手話音節の不適格性の原因となるのかを明らかにすることを目的とする。目的達成のため、適格音節・不適格音節のそれぞれを収録したデータベース（以下DB）を作成している。2019年度は、(1)適格音節および不適格音節の両DBの精緻化・拡充化作業、(2)両DBのデータをインプットとして機械学習を行い、その結果を援用しながら日本手話音節の音素配列論の検討を行った。

・成果

1) 適格音節および不適格音節の両DBの精緻化・拡充化作業

適格音節 DB、不適格音節 DBに登録する音節は、複数の日本手話母語話者に適格性を判定してもらっている。2019年度は、その前年度に新たに協力を求めた日本手話母語話者が行った適格性判定結果を、それ以前の日本手話母語話者が行った判定結果に加え、あらためて適格性判定作業を行った。その結果、適格音節 DBに約3000個、不適格音節 DBに約250個が登録された。

2) 日本手話音素配列論の検討

日本手話音節は、片手のみが関与する音節と両手が関与する音節が存在する。両手が関与するものには、両手手話が同じ音節（タイプ1、タイプ2）と両手手型が異なる音節（タイプ3）が存在する。タイプ3は利き手・非利き手の手型が異なり、利き手のみが動くという特徴がある。本研究ではタイプ3音節に焦点を絞り、その音素配列論をいくつかの方向から検討した。

- (1) 適格音節 DB を利用して、タイプ3の利き手・非利き手に現れる手型と頻度を求め、それをもとに各手型の情報量およびタイプ3に現れる両手組み合わせの情報量を求めた。またタイプ3に現れる左右の手の接触の有無も記録した。情報量の高い手型同士の組み合わせは存在しないことは本研究者の過去の研究により明らかになっているが、一定数の音節を収録したDBの情報を利用し再調査した結果、タイプ3の両手手型の組み合わせの可否は情報量により規定されていることが確認できた。また新たに、利き手・非利き手の手型の伸ばされている指の本数が両手手型の組み合わせの可否に関与していることが分かった。すなわち、1手型（人差し指のみが伸びている手型）、I手型（小指だけが伸びている手型）等の1本指手型同士の組み合わせは存在しない。L手型（親指と人差し指のみが伸びている手型）、U手型（人差し指と中指のみが伸び、指と指の間を閉じている手型）、V手型（人差し指と中指のみが伸び、指と指の間を開いている手型）、Y手型（親指と小指のみが伸びている手型）等の2本指手型同士の組み合わせは、極わずかの例外を除いて存在しないことが分かった。
- (2) 掌の向き、中手骨の方向が組み合わさったものを「手の構え」と規定し、タイプ3の利き手すべてと非利き手に現れる主要な手型がかかわる手の構えを調査した。その結果、手の構えとして可能なものは、1つの手型に対して利き手の場合最大90通り、非利き手の場合は最大72通りあるが、実際には非利き手に現れる手の構えは、B手型（5指を伸ばし指と指の間を閉じた手型）を除いて、3～4通りしか存在しないことが分かった。利き手に現れる手の構えは非利き手と比較しバラエティに富んでいる。1手型やB手型のように10余通りの手の構えを持つものがある一方で、タイプ3に現れる利き手手型の3/4は、手の構えが3通り以下であった。
- (3) タイプ3音節の中には調動中に利き手の手型が変化するものがある（手型変化音節）。本研究では、手型変化音節の変化前の手型と変化後の手型を抽出し2つの手型の間にどのような関係があるかを検討し始めた。
- (4) 前年度に行った調査により、タイプ3音節は顎よりも下の位置で表されなければならないことが分かっている（例外は複数形態素を含む音節または身振り等で表される模倣による音節）。日本手話では、顎から下で利用可能な位置は、身体前面のニュートラルスペース（NS）と胴体（TK）の2つだけである。しかし、これら2つの位置と利き手と非利き手の2つの手を組み合わせた4通りの可能性のすべてが許されているかどうかは分かっていた。今年度の研究では、顎の下から腰までの位置をA-zoneと定め、A-zone内で存在できる利き手・非利き手の位置を調べた。その結果、以下のことが明らかになった。
 - ・両手はともにNSに位置することができる
 - ・両手はともにTKに位置することができる。ただし、その場合、それぞれの手はTKに直接接触するか、非利き手がTKに接触し、利き手はTKに接触した非利き手に接触しなければならない（＝利き手・非利き手は、TKに直接的または間接的に接触しなければならない）。
 - ・利き手がNS、非利き手がTKに位置することができる。
 - ・利き手がTK、非利き手がNSに位置するものは存在しない。
- (5) 適格音節 DB と不適格音節 DB をインプットとして機械学習を行い、音素配列論検討の一助とした。具体的には畳み込みニューラルネットワークおよび決定木を利用した。決定木は5層、10層、15層、20層、25層、30層の各パターンの機械学習を行った。そのうち、タイプ3の5層と10層の結果を分析し音素配列論の検討に取り入れ、以下の知見を得た。
 - ・非利き手U手型の中手骨上方向は許されない。
 - ・利き手O手型（5指のそれぞれの関節を中程度に曲げ各指先をお互いに接触させた手型）は手型変化音節にしか現れない。
 - ・非利き手B手型は掌後ろ向き・中手骨下方向の構えは許されない（例外は「大分」のみ）。

上記の研究結果（またはその一部）は、以下の研究費助成を受けている。

1. 科学研究費（基盤研究（B））2018年度～2021年度（予定）「音節構成要素の組み合わせに基づいた日本手話音節の適格性について」（課題番号：18H00671：研究代表者：原 大介）
2. 科学研究費（基盤研究（S））2017年度～2020年度「多用途型日本手話言語データベース構築に関する研究」（課題番号17H06114：研究代表者 工学院大学・長嶋祐二教授）
3. 科学研究費（基盤研究（C））2017年度～2019年度「日本手話における文末指さしの指示対象に関する統語研究」（課題番号17K02691：研究代表者 日本大学・内堀朝子教授）
4. 科学研究費（挑戦的研究（萌芽））2019年度～2021年度（予定）「手話言語版 MLAT（現代言語適正テスト）の開発と活用」（課題番号19K21764：研究代表者 大阪大学・中野聡子講師）
5. 科学研究費（基盤研究（C））2019年度～2022年度（予定）「日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明」（課題番号19K00592：研究代表者 国立民族学博物館・相良啓子特任助教）
6. 科学研究費（基盤研究（B））2019年度～2023年度（予定）「学術手話通訳者を対象とした日本手話習得再教育プログラムの開発」（課題番号19H01702：研究代表者 大阪大学・中野聡子講師）

◎出版物による業績

[論文]

- Watanabe, K., Y. Nagashima, D. Hara, Y. Horiuchi, S. Sako and A. Ichikawa
2019 Construction of Japanese Sign Language Database with Various Data Types. *HCI International 2019-Posters*, pp.317-322.
- 市川 薫・長嶋祐二・堀内靖雄・原 大介
2019 「『一体的リズム』と『分析的リズム』——実時間対話機能に関する試論（ヒューマンコミュニケーション基礎）」『電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report: 信学技報』119(179)：7-12。
- 市川 薫・長嶋祐二・堀内靖雄・原 大介・酒向慎司
2019 「超高齢化時代が対話システムに求める物理層の基礎的特性（第10回対話システムシンポジウム）」『言語・音声理解と対話処理研究会』87：80-85。
- 高藤朋史・三輪 誠・佐々木 裕・原 大介
2020 「コーディングと動画を併用した日本手話音節の適格性予測」『言語処理学会第26回年次大会発表論文集』pp.259-262。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2019年5月16日 (Hara, D. and M. Miwa) 'The Well-Formedness and the Ill-Formedness of JSL Type-III Syllables', The Chicago Linguistic Society 55th Annual Meeting, The University of Chicago
- 2019年9月26日 (Hara, D. and M. Miwa) 'The Phonotactics of Type-III Syllables of Japanese Sign Language', Theoretical Issues in Sign Language Research 13 (TISLR13), The University of Hamburg Germany

・研究講演

2019年12月17日 「手話音韻論研究の視点から」早稲田大学

・広報・社会連携活動

- 2019年9月15日 「講座3 手話言語学の始まり1（二重分節性、音素の抽出）」「講座4 手話言語学の始まり2（手話言語の音素と異音）」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！」』 国立民族博物館
- 2019年12月22日 「講座9 手話言語の音素とその組み合わせ（音素配列論）」「講座10 手話言語の形態素とその組み合わせ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！」』 国立民族博物館
- 2020年1月26日 「講座11 手話言語の動詞の種類とその成り立ち」「講座12 手話言語の文のつくり&まとめ」《手話言語学関連》『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！」』 国立民族博物館
- 2020年1月14日 「手話とはどのような言語か」同志社大学

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

大阪大学文学研究科「国語学講義 手話の世界と世界の手話言語☆入門」、関西学院大学「手話言語学基礎」、

■人類文明誌研究部

小長谷有紀 [こながや ゆき] ————— 教授

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒(1981)、京都大学大学院文学研究科修士課程修了(1983)、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学(1986)【職歴】京都大学文学部助手(1986)、国立民族学博物館第1研究部助手(1987)、国立民族学博物館第1研究部助教授(1993)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1993)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(1998)、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授(2000)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2003)、国立民族学博物館研究戦略センター教授(2004)、総合研究大学院大学地域文化学専攻長(2005)、国立民族学博物館研究戦略センター長(2007)、国立民族学博物館民族社会研究部長(2009-2011)、人間文化研究機構理事(2014)【学位】文学修士(京都大学大学院文学研究科1983)【専攻・専門】文化人類学【所属学会】国際モンゴル学会、日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ——変貌するモンゴルとともに』(フィールドワーク選書9) 京都:臨川書店。

[共編]

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか?』 京都:昭和堂。

[編著]

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義を生きた人びとの証言』(中公叢書) 東京:中央公論新社。

【受賞歴】

2016 第3回ゆとろぎ賞

2015 モンゴル国科学アカデミー 名誉博士

2013 紫綬褒章

2013 教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章(モンゴル国教育文化科学省)

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル(友好勲章)

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴル、中央・北アジアの遊牧文化の人類学的研究

・研究の目的、内容

〈目的〉これまで「社会主義的近代化とはなんであったか?」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化」以前の映像記録を用いて、グローバルな関係性の束を復元し、より多角的に地域像を描く。

〈内容〉19世紀から20世紀にかけて実施された、布教・軍事・商業・学術など多様なエクスペディションの記録写真を用いて、社会変容を分析する。

分析にあたっては、科学研究費(基盤研究(A))17H00897「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」により、ハンガリー、ポーランド、ロシア、モンゴル、スウェーデン、など資料整備にあっている研究者たちと協業した。

・成果

①多様なエクスペディションの記録について整備する国際的なこれまでのチームメンバーに、イギリスおよびデンマークの研究者を加え、ロンドンおよびパリで資料調査を行い、コペンハーゲンでワークショップを実

施した。

海外での調査研究は、科学研究費（基盤研究（A））17H00897「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」による。

- ②多様なエクスペディションの記録について共有するため、スウェーデンのモンゴルミッションナリーの情報を大幅に加えて、HPを更新した。

HPの更新は、科学研究費（基盤研究（C））818K000801「スウェーデンモンゴルミッションの研究」による。

- ③多様なエクスペディションについての事典を作成するため、おおよその構成をきめ、執筆を依頼した。

◎出版物による業績

[論文]

小長谷有紀

2019 「モンゴルにおけるウマと人」『生物の科学 遺伝』75(3)：244-250。

2019 「モンゴルにおける宿营地集団の研究（3）」『沙漠研究』29(1)：11-19。

Konagaya, Y.

2019 Natural environment, social context and historical background in Mongolia. In H. Fujita and C. Guth (eds.) *Encyclopedia of East Asian Design*. London, Oxford, New York, New Delhi, and Sydney: Bloomsbury.

[その他]

小長谷有紀

2019 「みんぱく、こぼれ話^㉔ ストックホルム・ノーベル週間の悲喜劇」『TOYRO BUSINESS』184：30。

2019 「みんぱく、こぼれ話^㉕ 弾丸出張『台湾』と『ハンガリー』」『TOYRO BUSINESS』185：30。

2019 「みんぱく、こぼれ話^㉖ フィールドワークがやめられないワケ」『TOYRO BUSINESS』186：30。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（A））「モンゴル仏教のグローバル実践に関する学際・国際的地域研究」（研究代表者：島村一平（滋賀県立大学））研究分担者、科学研究費（基盤研究（A））「モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築」研究代表者、科学研究費（基盤研究（C））「スウェーデンモンゴルミッションの研究」（研究代表者：都馬バイカル（桜美林大学））研究分担者

特別客員教員

■人類基礎理論研究部

下道基行 [したみち もとゆき] ————— 准教授

【学歴】武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業（2001）、東京総合写真専門学校研究科（2003）【職歴】テレビ番組制作リサーチ会社オフィスHIT（2001-2007）、美術研究所アトリエフラン裸婦絵画コース／陶芸コース講師（2001-2005）、東北芸術東北芸術工科大学ゲスト講師（2012-2016）【学位】学士【専攻・専門】写真映像、平面表現、現代美術

【受賞歴】

2019 Tokyo Contemporary Art Award

2015 さがみはら写真新人奨励賞

2014 第1回鉄犬ヘテロトピア文学賞

2013 第6回岡山県新進美術家育成『I氏賞』大賞

2012 韓国・光州ビエンナーレ2012 NOON 芸術賞（新人賞）

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究

・研究の目的、内容

写真家／美術家の視点から、国立民族学博物館（以下、民博）が所蔵する写真や動画資料の創造的な活用法やアーカイブのありかたについて、民博に所属する研究者との議論をベースに考案し、提案を行う。

また近年、アートと人類学の協働による人文学の新地平の開拓がさげられるが、人類学における、非言語メディアを用いた研究とアートのフィールドワークのあり方を比較検討し、互いの方法論の援用や建設的な交流のありかたについての可能性を探る。

・成果

2019年度の成果としては、1月12日に国立国際美術館において開催された『民族藝術学会誌 arts/』リニューアル創刊記念・公開シンポジウム『Cosmo-Eggs・宇宙の卵（ヴェネツィア・ビエンナーレ2019日本館）：アートと人類学の交点から考える』での発表があげられる。本企画において報告者は、民博の川瀬慈准教授、秋田公立美術大学の石倉敏明准教授、愛知県美術館学芸員の中村史子等とともに、企画考案、シンポジウムでの報告・討論に関わった。シンポジウム当日は、アートと人類学のフィールドワークにおける方法論の類似点や差異、さらには協働の可能性について、自身のフィールドワーク、ならびに人類学者とのヴェネツィア・ビエンナーレ2019でのコラボレーションの経験に立脚し報告した。報告内容は、3月に発刊された『民族藝術学会誌 arts/』リニューアル創刊号に掲載された。

辻 邦浩 [つじ くにひろ]————— 教授

1965年生【**学歴**】 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了（1994）【**職歴**】 Kunihito Tsuji Design 代表（1996-現在）、未来社会をデザインする会（2025年万国博を考える会）代表（2018-現在）、東京大学空間情報科学研究センター協力研究員（2018-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2018-現在）【**学位**】 博士（理学）【**専攻・専門**】 サービスデザイン、音響空間デザイン、環境デザイン、デザイン人類学【**所属学会**】 ヒューマンインターフェイス学会

【主要業績】

- 2010 上海万博大阪館（Water Speaker 展示）
- 2008 スペイン・サラゴサ万博日本政府館（音響デザイン・Water Speaker 展示）
- 2007 ミラノサローネ Water Speaker 個展
- 2006 ミラノサローネ MODAL Speaker 個展
- 2002 フランス・ビエンナーレ「Biennale Internationale Design Saint-Etienne」（日本代表選出）

【受賞歴】

- 2016 ヒューマンインターフェイス学会研究会賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

次世代型展示案内システムの構築

・研究の目的、内容

現状の電子ガイドシステム及びビデオテークを全面改訂するための、次世代型展示案内システムの構築を行う。プロトタイプをベースに実際の運用に向けて問題点を分析・改善点をフィードバックして、来館者視点からの多様なニーズ（常設展示物及びその背景をより能動的に深く知ることや、各地域展示間の関連づけ、観覧履歴の取得によるビデオテークゾーンとの関連づけ、多言語化、シームレスな障害者誘導など）に対応できるよう運用上も踏まえたユーザーインターフェイス設計とサービスデザインを行う。

9月に開催されたICOM京都大会での民博展示ブースに於いて、プロトタイプのデモンストレーションを実施し、体験者の意見を分析しフィードバックを行う。

更にコンテンツとの有効なインタラクションを実現するための、基本要素技術に加えて応用技術を検証しそれらを技術統合して総合的なサービスブラッシュアップの検討を行う。

・成果

- 4月～7月 ・次世代電子ガイドサービスのプロトタイプ検証を踏まえての実際の運用に向けての基礎要素技術に基づくサービス項目の再検証と動作安定化の検証を行った。
- ・前年度にプロトタイプ化した基礎要素技術に加えて、ICOM 京都大会に向けて応用技術を加えたサービス実現のための統合検討を行った。
- 8月 ・ICOM 京都大会でのデモンストレーションサービスの仕様決定を行った。
- 8月末～9月 ・ICOM 京都大会での民博展示ブースに於いてデモンストレーションを実施し、体験者の意見を収集しフィードバックを行った。
- 9月～12月 ・実際の運用に向けた、電子ガイドのユーザーインターフェイス修正を行い、ビデオテークの工事向けの仕様（素材や設計上の微修正など）の決定を行った。
- 1月～3月 ・ビデオテーク1期工事、電子ガイド運用開始前の確認や修正を行った。

■人類基礎理論研究部・日本財団助成手話言語学研究部門（附置）

武居 渡 [たけい わたる] 教授

1971年生【学歴】筑波大学第二学群人間学類卒業（1994）、筑波大学大学院心身障害学研究科中途退学（1999）【職歴】金沢大学教育学部講師（1999）、金沢大学教育学部助教授（2002）、金沢大学教育学部准教授（2007）、金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授（2008）、金沢大学人間社会研究域学校教育系（2014-現在）、国立民族学博物館特別客員教授（2017-現在）【学位】博士（心身障害学）（筑波大学2004年）【専攻・専門】発達心理学・聴覚障害心理学【所属学会】日本特殊教育学会、日本発達心理学会、日本手話学会、日本コミュニケーション障害学会、日本聴覚言語障害学会

【主要業績】

[論文]

武居 渡

- 2016 「聴覚障害児教育をめぐる環境の変化とろう学校の課題（特集 特別支援学校における現状と教育要求）」『障害者問題研究』44(1)：26-31。
- 2012 「言語を作り出す力——ホームサイン研究・手話研究を通じて見えてくるもの」『ENERGEIA』37：1-15。
- 2008 「手話研究の現状と展望——手話研究が言語獲得研究に貢献できること」『認知科学』15(2)：289-301。

【受賞歴】

- 2010 博報児童教育振興会第4回ことばと教育 研究助成事業 優秀賞
- 2002 日本発達心理学会第11回論文賞
- 2001 日本特殊教育学会研究奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

高等教育機関・学術機関における学術手話通訳者養成のしくみの研究

・研究の目的、内容

本研究は、学会や大学の講義など高度な専門的知識を日本語から手話、または手話から日本語へと通訳できる手話通訳者の養成プログラムを開発し、実施することを通してそのプログラムの妥当性を検証するものである。その中でも、通訳者の手話能力を客観的に測定するテストは現在我が国に存在していない。そこで、今年度は、学術手話通訳者養成のスクリーニングや手話学習者の手話能力を客観的に測定できる方法を開発するための基礎資料を得ることを目的とし、手話語彙力を評価する日本手話版 WFT 課題について、ネイティブサイナーに実施し、おおよその標準値を得ることとした。

・成果

日本手話を日常的に使用している成人ろう者7名に対し、研究実施者が作成した日本手話版 WFT 課題を実施した。カテゴリー流暢性課題が5問と音韻流暢性課題5問を7名の被験者に実施し、各問1分間に表出できた手話語彙数をカウントし、その合計をその被験者の語彙力得点とした。その結果、最もスコアが高い被験者と低い被験者では2倍のスコアの差があり、成人ろう者の表出性語彙力には大きな個人差があることが明らかになった。そのため、当初標準値を得ることを目的としたが、被験者の言語的バックグラウンドが大きく異なるため、より多くの被験者で実施する必要性が明らかになった。しかし一方で、個人による成績の違いが出たことから、手話語彙力を測定するテストバッテリーとして、使用可能なものであることも明らかになった。今後改善すべき点として、音韻流暢性課題の教示を被験者に理解してもらうのに時間と手間がかかったため、より簡易に被験者が理解できる教示を考え、動画として準備することが求められた。

本研究で得られた研究成果について、日本特殊教育学会第57回大会で発表を行った。また2020年7月にオーストラリア・ブリスベンで行われる International Congress on the Education of the Deaf においても発表を行う予定である。

なお、本研究は、科学研究費（基盤研究（C））聴覚障害児の手話力を評価する総合的アセスメントパッケージの開発（課題番号17K04930 代表者：武居 渡）の助成を得て行われた。

◎出版物による業績

[論文]

武居 渡

2019 「第3章 手話言語を獲得する」全日本ろうあ連盟編『手話言語白書——多様な言語の共生社会をめざして』pp.44-57, 東京：明石書店。

2019 「第3章 手話言語を獲得する」全日本ろうあ連盟編『手話言語白書——多様な言語の共生社会をめざして』pp.60-63, 東京：明石書店。

2019 「第3章 手話言語を獲得する」全日本ろうあ連盟編『手話言語白書——多様な言語の共生社会をめざして』pp.66-69, 東京：明石書店。

[その他]

武居 渡

2019 「書評：中島武史著『ろう教育と「ことば」の社会言語学——手話・英語・日本語リテラシー』『ことばと社会——多言語社会研究』21：136-140。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年9月21日 「日本手話版語彙流暢性検査の開発②——成人ろう者の基礎データから」日本特殊教育学会第57回大会、広島大学

2019年8月25日 「講座1 ろう児の手話獲得過程」「講座2 手話と認知科学」『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう!」』国立民族博物館

2019年9月6日 「講座5 ろう教育の現状と課題」「講座6 手話を活用した日本語指導」『手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう!」』国立民族博物館

・研究講演

2019年8月8日 2019年度東日本地区国語問題研究協議会（石川大会）話題提供者、ホテル金沢

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究（C））「聴覚障害児の手話力を評価する総合的アセスメントパッケージの開発（課題番号17K04930）」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他大学の客員、非常勤講師

群馬大学教育学部客員教授

■グローバル現象研究部

縄田浩志 [なわた ひろし] 教授

1968年生。【学歴】早稲田大学第一文学部史学科東洋史学専攻卒業（1992）、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所民俗学科ディプロマ課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻博士課程修了（2003）【職歴】鳥取大学乾燥地研究センター講師（2004）、国立民族学博物館特別客員准教授（2007）、総合地球環境学研究所客員准教授（2007）、鳥取大学乾燥地研究センター准教授（2007）、総合地球環境学研究所准教授（2008）、秋田大学新学部創設準備担当教授（2013）、秋田大学国際資源学部教授（2014）、秋田大学大学院国際資源学研究科教授（2016）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2003）【専攻・専門】資源管理学、文化人類学、社会生態学、地域研究（中東・アフリカ）、乾燥地研究、環境影響評価、村落開発、人間・家畜関係論【所属学会】日本沙漠学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本中東学会、日本ナイル・エチオピア学会、国際社会・自然資源学会（The International Association for Society and Natural Resources、アメリカ）

【主要業績】

[共編著]

縄田浩志・篠田謙一

2014 『砂漠誌——人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』神奈川：東海大学出版部。

[編著]

Nawata, H. (ed.)

2015 *Human Resources and Engineering in the Post-oil Era: A Search for Viable Future Societies in Japan and Oil-rich Countries of the Middle East.* (Arab Subsistence Monograph Series 3) Kyoto: Shokado.

2013 *Dryland Mangroves: Frontier Research and Conservation.* (Arab Subsistence Monograph Series 2) Kyoto: Shokado.

【受賞歴】

2015 大同生命地域研究奨励賞

2003 日本沙漠学会奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東における自然資源の管理と物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

本研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する5つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進する。注目する物質文化は、(1)ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、(2)飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、(3)衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明する。並行して、片倉もとこ（文化人類学者／地理学者）によるアラビア半島に関する現地調査資料（1968-2008）、小堀巖（地理学者）によるアルジェリア・サハラ沙漠に関する現地調査資料（1968-2010）といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化についても検証していく。

・成果

最終年度4年度は、中心研究テーマごとに議論を深化させていった。

主な研究成果は、以下の3点にまとめられる。(1)本研究会の成果をもととして、企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」(2019年6月6日～9月10日)また同巡回展(横浜ユーラシア文化館、2019年10月5日～12月22日)を開催。(2)本研究会の主要な成果として書籍『サウジ

アラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』（河出書房新社、縄田浩志編、2019年6月6日）を出版。(3)本研究会メンバーが中心的役割を担って、国際シンポジウム「サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから」（横浜情文ホール、2019年11月17日）を開催。なお、外部資金との関わりにおいては、企画展は片倉もとこ記念沙漠文化財団、横浜ユーラシア文化館との共催、書籍発行は片倉もとこ記念沙漠文化財団、国際シンポジウムは片倉もとこ記念沙漠文化財団、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」秋田大学拠点、サウジアラビア遺産観光庁を主催として、本研究会と日本学術振興会科学研究費助成事業「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」等との共催において実施した。

◎出版物による業績

[編著]

縄田浩志編

2019 『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 東京：河出書房新社。

[その他]

縄田浩志

2019 「ワーディ・ファーティマの人びと——半世紀の変化をおって」特集「サウジアラビア、女性の暮らしの半世紀」『月刊みんぱく』43(6)：2-3。

2019 「アラビア半島のオアシスに生きる女性たちの50年——文化人類学者、片倉もとこ現地調査資料から」『横浜ユーラシア文化館ニュース』32：4-5。

2019 「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——5 写真」『毎日新聞』12月4日。

2019 「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——6 水くみ」『毎日新聞』12月14日。

2020 「企画展『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』関連イベントを通じて——大学生が伝える、現地で学んだ中東文化のいま」『きざし』4：16。

2020 「銀と金からみるアラビア衣装」『鉱業博物館だより』17：2-4。

Nawata, H.

2019 Exploring 50 Years of Livelihood and Landscape Change in Wadi Fatima, Saudi Arabia: Ethnographic Collections of Motoko Katakura, a Japanese Female Cultural Anthropologist. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 49: 11-12.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2019年11月17日 「ワーディ・ファーティマ地域の景観、物質文化、社会の変化をたどる」国際シンポジウム『サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから』横浜情報文化センター

2019年11月17日 「企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』について」（西尾哲夫、竹田多麻子との共同発表）国際シンポジウム『サウジアラビアと日本をつなぐ文化交流のこれから』横浜情報文化センター

・共同研究会

2019年7月20日 「モロッコの自然環境、農業、物質文化——ナイル河岸、アラビア半島との比較の視点から」『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』国立民族学博物館

2020年1月25日 「アフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略」『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』国立民族学博物館

2020年1月25日 「企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』に対する一般来館者の反応」（西尾哲夫、竹田多麻子、藤本悠子との共同発表）『物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年5月1日 「文理融合／異分野連携の中東地域研究——人文学がつなぐ研究と実践の事例より」日本中東学会第35回年次大会公開講演会『中東地域における多元的資源観の醸成を目指して』秋田市にぎわい交流館 AU

2019年5月25日 「サウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ地域の景観変遷復元を目的とした古写真の利用について——片倉もとこ調査写真の追跡調査（2018年12月～2019年1月）から」（渡邊三津

子、遠藤仁、石山俊、Anas Mohammed Melihとの共同発表) 日本沙漠学会第30回学術大会、東京農業大学世田谷キャンパス

2019年6月3日 'Management Methods of the Alien Invasive Species Mesquites (*Prosopis* Spp.) in Regional Socio-Ecological Zones in Eastern Sudan.' The 25th International Symposium on Society and Resource Management (ISSRM) "Sustainability and the Land Ethic in the Anthropocene" June 2-7, 2019, University of Wisconsin Oshkosh, Oshkosh, United States

2019年9月25日 'Exploring 50 Years of Livelihood and Landscape Change in Wadi Fatima, Saudi Arabia: Ethnographic Collections of Motoko Katakura, a Japanese Female Anthropologist.' The National Museum, Riyadh, Kingdom of Saudi Arabia

2019年10月20日 「西アジア・北アフリカ乾燥地における半世紀前のフィールド調査資料を活かす」日本沙漠学会2019年度秋季シンポジウム『半世紀前の写真資料の研究活用——サウディ・アラビア、ワーディ・ファーティマ地域における再調査から』横浜情報文化センター

・みんぱくゼミナール

2019年6月15日 「物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀」(西尾哲夫、遠藤仁との共同発表) 第492回みんぱくゼミナール

・展示

2019年6月6日～9月10日 企画展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」

2019年10月5日～12月22日 巡回展「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——『みられる私』より『みる私』」横浜ユーラシア文化館

・広報・社会連携活動

2019年11月3日 「サウジアラビアのコーヒー文化」イベント『遊牧民のテントでアラビア文化を体験!』コーヒー体験講座、横浜情報文化センター

2019年12月1日 「オアシスを生き抜く知恵」企画展示『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年』について』(坂田隆との共同発表) 調査関係者による連続講座第1、横浜ユーラシア文化館、横浜市

2020年2月25日 「イスラーム世界の香りの文化」香り体験講座(竹田多麻子との共同発表)『LABTALK SESSION 22』石巻IRORI

・みんぱくウィークエンド・サロン

2019年6月9日 「物質文化から見た沙漠社会——アラビア半島オアシスの半世紀」(西尾哲夫との共同発表) 第545回みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究「現代中東地域研究推進事業」秋田大学国際資源学部拠点研究代表者、科学研究費(基盤研究(B))(海外学術調査)「半世紀に及ぶアラビア半島とサハラ沙漠オアシスの社会的紐帯の変化に関する実証的研究」研究代表者、科学研究費(新学術領域研究(研究領域提案型)『学術研究支援基盤形成』)研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」(課題番号16H06281、中核機関:国立民族学博物館)の支援による資料整理「地域研究画像デジタルライブラリ(略称DiPLAS)採択プロジェクト研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本沙漠学会沙漠誌分科会会長、日本沙漠学会評議員、日本沙漠学会編集委員、日本ナイル・エチオピア学会評議員、片倉もところ記念沙漠文化財団代表理事、国連砂漠化対処条約専門家(日本、人類学・社会学分野)、秋田市環境審議会委員

■学術資源研究開発センター

大坂 拓 [おおさか たく] ————— 教授

1983年生。【学歴】 明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業（2006）、明治大学大学院文学研究科博士前期課程修了（2008）、明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（2011）【職歴】 宮城県教育庁文化財保護課（2011）、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究職員（2015）【学位】 修士（考古学）（明治大学大学院 2008）【専攻・専門】 考古学【所属学会】 日本考古学協会、考古学研究会、北海道考古学会

【主要業績】

[論文]

大坂 拓

- 2019 「浜益地域のアイヌ民具資料に関する基礎的検討——1930年代の研究動向と工芸家山下三五郎の活動」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4：1-24。
- 2019 「アイヌ民族の編袋——地域差と年代差、及び『土産物』・『伝統工芸品』としての継承」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4：25-60。
- 2018 「北海道アイヌの「死者用靴」——日高東部地域の東方系出自集団に固有の死装束とその周辺」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3：51-72。

【受賞歴】

2015 北海道考古学会奨励賞

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

近現代におけるアイヌの物質文化の変容に関する研究

・研究の目的、内容

日本国内の博物館等に収蔵されるアイヌ民族の民具資料について、地域単位の組成比を検討することによって、和人の急速な流入の中で生じた文化変容の地域差を明らかにできるとの見通しを持っている。本年度は、文化変容の中で保守的な反応を示す可能性が想定できる葬送儀礼用品の中から、特に遺体包装用紐及び葬儀用品結束用紐に着目し、網羅的な資料集積と分類によって、基本的な地域差の枠組みを明らかにするとともに収集地の通時的な変化を明らかにすることを目指した。

・成果

現存する遺体包装用紐のうち、背景情報が伴う国内所在資料約400点を調査し、その成果を研究論文「北海道アイヌの葬送用広紐に関する基礎的検討——製作技術の地域差と日高東部地域における東方系・西方系出自集団との関係」（『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5号）として発表した。編みの技術に着目した分類を行った結果、日高地方東部では10本編みの特定のタイプが卓越し、一部、15本編みが僅かに混在することが確かめられた。これは従来、同地域で実施された民族調査の中に、menasunkur（東方系出自集団）が10本編みを用い、sumunkur（西方系出自集団）が15本編みを用いるとする記録が存在することと整合的な結果である。一方で、隣接する胆振地方では、8本編み、10本編み、12本編み等、多様なタイプが存在しており、日高東部に存在した規範意識は共有されていないことが明らかになった。従来の研究では menasunkur/sumunkur を、北海道を二分する地域集団と見なし、様々な文化的境界が日高地方に位置すると見る見解があったが、遺体包装用紐に関しては、それぞれの出自集団に特徴的とされるタイプの分布は日高地方東部の狭い範囲に留まっている。今後、その他の文化要素と比較することで、更なる議論の深化が期待される。

関連資料の調査にあたっては、科学研究費（若手研究）（18K12558）「考古学的分析手法を導入した博物館収蔵アイヌ民具資料の基礎的研究」を使用した。

◎出版物による業績

[論文]

大坂 拓

2020 「渡島半島のアイヌ社会と民具資料収集者の視野——旧開拓使函館支庁管轄地域を中心として」『北

海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5：47-80。〔査読有〕

- 2020 「北海道アイヌの葬送用広紐に関する基礎的検討——製作技術の地域差と日高東部地域における東方系・西方系出自集団との関係」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5：23-46。〔査読有〕

[その他]

大坂 拓

- 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 捕鯨用の銛先」『朝日新聞』9月4日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 樹皮衣」『朝日新聞』9月11日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 葬送儀礼用の紐」『朝日新聞』9月18日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 儀礼用の冠」『朝日新聞』9月25日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 木のクジラ」『朝日新聞』12月4日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ キツネ神の舟」『朝日新聞』12月11日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 脚絆」『朝日新聞』12月18日。
 2019 「アイヌの美 アンカナルピリカ 死後の世界に携える鞆」『朝日新聞』12月25日。
 2020 「アイヌの美 アンカナルピリカ サクリ・セトゥル」『朝日新聞』2月5日。
 2020 「アイヌの美 アンカナルピリカ 前掛け」『朝日新聞』2月19日。
 2020 「アイヌの美 アンカナルピリカ 手直しされた着物」『朝日新聞』2月26日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・その他（「口頭発表・展示・その他の業績」で以上の項目に属さないもの）

2019年7月4～5日「民具資料観察の方法」アイヌ民族文化財団担い手育成事業講師

◎調査活動

- ・国内調査

- 2019年5月22～23日—北海道稚内市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月4～5日—北海道標津町・同根室市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月7日—北海道小樽市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月11日—北海道別海町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月18～19日—北海道浦河町・同新ひだか町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月25日—北海道留萌市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年6月27～28日—北海道函館市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年7月25～26日—秋田県にかほ市・同秋田市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年7月30～31日—北海道札幌市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年8月2日—北海道乙部町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年8月6～7日—北海道木古内町・同知内町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年8月19～20日—青森県青森市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年8月31日—北海道旭川市（アイヌ民具資料の調査）
 2019年9月5～6日—東京都台東区（アイヌ民具資料の調査）
 2019年9月13日—北海道松前町（アイヌ民具資料の調査）
 2019年10月1～2日—東京都台東区（アイヌ民具資料の調査）
 2019年11月21日—北海道平取町（アイヌ民具資料の調査）
 2020年1月29日—北海道森町（アイヌ民具資料の調査）

■学術資源研究開発センター

田森雅一 [たもり まさかず] ————— 准教授

【学歴】 東京大学大学院総合文化研究科後期博士課程・単位取得満了（2005年3月）【職歴】 東洋英和女学院大学（1999年4月～現在）、埼玉大学（2000年4月～現在）、慶應義塾大学（2012年4月～2015年3月）、千葉大学（2012年4月～2014年3月）、東洋大学（2014年4月～現在）、埼玉学園大学（2014年4月～2017年3月）、東京外国語大学（2015年4月～現在）などの非常勤講師を兼任。現在、東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員（2012年4月～現在）および国立民族学博物館・特別客員教員（2016年4月～現在）【学位】 博士（学術）（東京大学大学院総合文

化研究科 2011)【専攻・専門】社会人類学・比較文化論・南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、日本口承文藝学会、東洋音楽学会

【主要業績】

[単著]

田森雅一

2015 『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容——「音楽すること」の人類学的研究』東京：三元社。

[論文]

Tamori, T.

2008 The Transformation of *Sarod Gharānā*: Transmitting Musical Property in Hindustani Music. In Y. Terada (ed.) *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71), pp.169-202. Osaka: National Museum of Ethnology.

田森雅一

1998 「都市ヒンドゥー命名儀礼における主体構築と命名慣習の変容」『民族学研究』63(3)：302-325。

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

グローバル化と南アジア音楽文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、グローバル化された“地続きの世界”における南アジアと欧米・日本という、より拡大された空間における「音楽文化と宗教・社会関係・ジェンダー」の動態について検討することにある。より具体的には、ヒンドゥーとイスラームが共生する南アジア社会、特にインドとパキスタンの国境の砂漠地帯のラージャスターンをルーツとする音楽芸能カーストのローカルな社会関係と、音楽家たちのトランス・ローカルな活動・ネットワーク形成を調査・検討することで、近代における音楽伝統・社会組織の再生産およびグローバル化のあり方について明らかにすることにある。

・成果

ラージャスターン地方の村落に生活の基盤を置き、支配カーストの人生儀礼や村落の祭礼において音楽演奏を生業としてきた世襲楽師たちは、インド独立にともなう藩王制度の廃止とともにパトロンとの間に築き上げてきた持続的な関係を失った。彼らの多くは演奏機会を求めて都市に移住し、その技芸を存続させてきたが、音楽教師やラジオ局付音楽家といった職業のポストは限られ、一回限りのコンサートやホテルでの観光客相手のイベントへの出演で安定した生計を立てるのは困難であった。そのような状況が変化したのは、1980年代からのインドの経済開放というグローバル化の流れのなか、個人的なネットワークを頼って海外に演奏機会を求める者たちが増加してからである。

本研究ではこのような実態をとらえるために、ラージャスターン州の州都ジャイプルからフランスに渡って成功をおさめた伝統的楽師一族に対する継続的な調査を行ってきた。この一連の調査は、「南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点MINDAS(拠点代表：三尾 稔)」の海外調査資金援助によって2014年から継続されているもので、複数のインフォーマントへのインタビューにより、インドのグローバル化の流れの中で、彼らがどのようなネットワークを築き上げ、音楽演奏の機会を見い出してインドとヨーロッパを往来して今日に至っているのかという課題のもと、本年度も継続調査を行った。

これらの調査結果の一部は、2019年度MINDAS合同研究会において、「グローバル化とローカルポリティクス——ラージャスターンのムスリム楽師カーストを事例として」のタイトルのもとに発表した。

さらに、インドにおける音楽芸能カーストの形成に、大きな影響を与えたと考えられる英領インド帝国期の民族誌や国勢調整について検討し、「日本文化人類学会・第53回研究大会」で発表した。また、「東洋音楽学会・第70回大会」において、インド独立前後に活躍した女性芸能者の再評価を行い発表した。この二つの発表は、当方が研究代表を務める科学研究費(基盤研究(C))「南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究」(課題番号：18K01165)の成果の一部である。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2019年6月1日 「英領インド帝国期の民族誌における音楽芸能カーストの結晶化とその余波——北インドの女性芸能者を中心に」日本文化人類学会第53回研究大会、東北大学

2019年7月27日 「グローバリゼーションとローカルポリティクス——ラージャスターンのムスリム楽師カーストを事例として」MINDAS 合同研究会、国立民族学博物館

2019年11月17日 「時代を駆け抜けた二人のインド女性芸能者——ゴウハル・ジャンとマダム・メナカ」東洋音楽学会・第70回大会、京都市立芸術大学

◎調査活動

・海外調査

2019年8月30日～9月6日—フランス（パリ市にて、インドのラージャスターン州ジャイプル市出身で音楽芸能グループを率いてフランスなどヨーロッパで活動する代表者3名及歌手・楽器奏者などにインタビューを行い、彼らのネットワークや出身地域における親族関係・社会組織等に関する聞き取り調査を実施した）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（MIND-AS）」（拠点代表者：三尾 稔）拠点構成員

平井康之 [ひらい やすゆき] ————— 教授

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部長（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）【学位】博士（芸術工学）（九州大学 2016）、修士（英国王立芸術大学院 1992）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

【主要業績】

[共著]

平井康之・藤 智亮・野林厚志・真鍋 徹・川窪伸光・三島美佐子

2014 『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社。

ジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池 禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

朝廣和夫・尾方義人・古賀 徹・近藤加代子・谷 正和・田上健一・富板 崇・平井康之

2012 『デザイン教育のススメ——体験・実践型コミュニケーションを学ぶ』東京：花書院。

【受賞歴】

2014 2014年度グッドデザイン賞（研究活動・研究手法カテゴリー）

2014 第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）

2013 「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども×くすり×デザイン実行委員会）

2013 The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞

2013 IAUD アワード2013 入賞「みんなの美術的プロジェクト」

2010 第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）

2009 2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）

- 2009 第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）
- 2008 2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2008 第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
- 2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
- 2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
- 2002 2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）
- 1996 1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）
- 1996 海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）
- 1996 1996年度レッド・ドット賞〈ドイツ・エッセンデザインセンター〉（インタープレイスシリーズ）
- 1994 1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）
- 1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）
- 1993 コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）
- 1992 1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）
- 1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2019年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

ユニバーサルミュージアム構築の理論と実践

Theory and Practice for Universal Museum Planning

・研究の目的、内容

本研究では、民博が目指すユニバーサルミュージアム構築にむけて、障がい者をはじめ、外国人や高齢者、その他鑑賞が難しい多様な来館者を対象に研究を進める。具体的には情報部会と共同で、「来館者視点からの情報化」をテーマにデジタル触地図の展示室への設置を昨年度に引き続き進める。

・成果

デジタル触地図の展示室への設置計画を進めた。これまで取り組んでいたFLASHの改修版からHTML5へ基本システムの根本的見直しによるシステム改修を完了した。さらに2階展示場の南アジア地域展示入口へ2号機の設置を行った。

これまで本プロジェクトは、研究活動として成果の公表を行ってきた。これまでの来館者調査プロセスは、「博物館情報学シリーズ5 ミュージアム・コミュニケーションと教育活動、2018年」、「知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた、学芸出版社2014年」の著書に紹介している。

また、触知案内板に関しては、「案内装置」として昨年度、特許取得が完了した。

特許庁のアブストラクトには、「デジタルを活用した新たな触地図デザインで、「国立民族学博物館文化資源プロジェクト「次世代ユニバーサルミュージアム展示空間における多様な来館者の知覚鑑賞開発と評価研究」の成果を元にしたものである。発明の名称は、案内装置で、特許番号は、特許第6528306号、特許権者は、大学共同利用法人人間文化研究機構である。発明者として平井康之を筆頭に富本浩一郎、吉田憲司、日高真吾、山中由里子と共同開発したものである」と記述されている。学会発表も「富本浩一郎、平井康之、博物館におけるインタラクティブな触地図の開発の研究、Museum 2015, 2015年」を行い、現在デザイン学会作品集（論文と同等の扱い）に申請中である。

外国人研究員

ADI, Prasetijo [アディ プラセティージョ] ————— 准教授

任期：2019年9月1日～2019年10月31日

研究課題：森林資源の変化と狩猟採集民の社会的レジリエンス—インドネシアの事例

【学歴】 B. A., Archaeology, University of Gadjjar Mada, Indonesia (1997), M. A., Anthropology, University of Indonesia, Indonesia (2005), Ph.D, Anthropology, Universiti Sains Malaysia, Malaysia (2014) 【職歴】 Senior Lec-

turer, Faculty of Humanities, Diponegoro University, Indonesia (2016) 【専攻・専門】 人類学

【主要業績】

[単著]

Adi, P.

2015 *Orang Rimba, True Custodian of the Forest*. Kota Jambi: ICSD and KKI WARSI.

[論文]

Adi, P.

2017 Living Without the Forest: Adaptive Strategy of Orang Rimba. In K. Ikeya (ed.) *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa*(Senri Ethnological Studies 95), pp.255-278. Osaka: National Museum of Ethnology.

2017 Livelihood Transformation of the Orang Rimba as Tacit Resistance in the Context of Deforestation. *Endogami: Journal Ilmiah Kajian Antropologi* 1(1): 1-13.

2015 Pergerakan Sosial: Antara Marxian dan Non Marxian. *Jurnal Antropologi: Isu-Isu Sosial Budaya* 17 (1): 65-70.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

森林資源の変化と狩猟採集民の社会的レジリエンスーインドネシアの事例

・研究の目的、内容

外国人研究員 Adi Prasetijo の2ヵ月の滞在において、以下のような研究活動を行った。

- ・ 日常の研究においては、受け入れ教員は今回の研究テーマである「森林環境の変化と狩猟採集民・ポスト狩猟採集民の対応」に関する議論を行った。
- ・ 外国人研究員は、滞在中に3回の研究報告を行った。①民博の研究懇談会（9月25日）、②民博でのアジアの狩猟採集民に関する国際ワークショップ（10月19日）、そして③総合地球環境学研究所での泥炭湿地プロジェクトのなかでの研究会（10月21日）である。
- ・ 受け入れ教員は、とりわけ②の国際ワークショップを企画しており、外国人研究員の報告では研究枠組みの提示と基礎文献の追加などの点から連盟の形で報告することができた。

・成果

1) 民博にとっての研究成果の意義

- ・ 民博は、近現代の狩猟採集民を対象にした研究の世界的なセンターの一つになっている。過去40年間において合計で20冊の狩猟採集民研究論集を刊行している組織は質と量において世界ではみられない。しかしながら、これまでインドネシアの狩猟採集民の研究は皆無であった。今回は、現在進行している科研のパレオアジアプロジェクト（代表：野林厚志）との共同研究のもとに、民博の研究基盤のさらなる強化につながった。
- ・ 現在、民博で進行している北東アジア地域研究プロジェクトへの貢献である。今回の研究員は東南アジアの専門家であったが、「森林環境の変化と狩猟採集民・ポスト狩猟採集民の対応」は、北東アジア地域の沿海州、シベリアのタイガ、北海道の森林などでの事例と共通の論点を提供する。そして、2つの地域を比較することで初めて北東アジア地域の特色を理解することができた。
- ・ 国内においては、民博と他の研究機関とのネットワーク形成にも有効であった。②の研究会では、清水展（日本文化人類学会会長）や加藤真二（奈良文化財研究所・研究員）、大澤隆将（総合地球環境学研究所・研究員）などが参加している。同じ人間文化機構内の地球研での研究報告も同様な成果となっている。
- ・ 総合研究大学院大学の院生が、①および②の研究会に参加をしていた。このことは、彼らに国際的な視野を広げる機会になった。

2) 今後の展開

- ・ 国際共同研究：北東アジアや東南アジアなどの地域研究のなかではなく、世界のなかでアジアを位置づけるような国際共同研究を展開していくことを計画している。これまで、今回の研究テーマにおいては、欧米の研究者が中心となり研究が展開してきたが、アジアの研究者が自らの国内のフィールド経験から世界を語る時代になっている。2021年7月に国際狩猟採集社会会議（ダブリンにて）が開催される予定である。その際には、アジアから世界を展望するようなセッションを受け入れ教員は設ける予定である。このことは、今回

の分野における国際的研究センターとしての民博の存在をさらに高めることにつながるであろう。

GOPALAN, Ravindran [ゴーパーラン ラヴィンドラン]——教授

任期：2020年1月31日～2020年4月15日

研究課題：民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

【学歴】 パッチャイヤッパ大学植物学部卒（1980）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部修士課程終了（1982）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部哲学修士課程終了（1984）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部博士課程終了（1991）【職歴】 マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部講師（1984）、名古屋大学大学院国際開発研究科外国人客員研究員（1993）、マノンマニヤム・スンドラナル大学コミュニケーション学部准教授（1995）、マレーシア大学コミュニケーション学部講師（2002）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部教授（2008）、マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部学部長（2008）【学位】 博士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1991）、哲学修士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1984）、修士（マドラス大学ジャーナリズム・コミュニケーション学部 1982）【専攻・専門】 コミュニケーション学

【主要業績】

[論文]

Gopalan, R.

2018 Human Rights and Contemporary Indian Journalism: Towards a “Journalism for People.” *Human Rights Education in Asia-Pacific* 8(1): 181-196.

2017 Philosophical and Anthropological Explorations of Digital/New Media Materialities, *Mizoram University Journal of Humanities and Social Sciences* 3(2): 1-7.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

・研究の目的、内容

ゴーパーラン・ラヴィンドラン教授は、「民衆のためのジャーナリズム」journalism for the peopleの取組みの一つとして、ダリット（不可触民）の伝統的な太鼓をもとに創られた新しい音楽ジャンル（タッパータム）の調査研究を進めるとともに、この演奏を学生パフォーマンスグループの活動に取り入れ、カーストによるインド社会の分断を乗り越えるための挑戦的な活動を継続している。民博での招聘期間中、比較研究を目的として、大阪の被差別部落で結成された和太鼓集団の活動の調査を行った。両者は、偏見や差別の対象となった楽器を戦略的に用いて創られた新しい表現形式である点や、解放に向けた政治運動と一定の距離を保ちながらも、音楽を媒介とした新しい社会運動の形を模索している点などで共通している。ラヴィンドラン教授は両者の類似点と差異を、コミュニケーション学の観点から検討し、その成果を延期となった特別研究の国際シンポジウムに反映させる計画である。なお、新型コロナウイルスの流行にともなうインドのロックダウンにより、当初の予定通りに帰国することができず、2020年6月22日まで日本に滞在した。

JOHNSON, Robert Erik [ジョンソン ロバート エリック]——講師

任期：2019年5月18日～2019年7月13日

研究課題：日本手話の音声学的研究——「動き」の諸類型

【学歴】 スタンフォード大学心理学部卒（1967）ワシントン州立大学人類学研究科言語学専攻博士課程終了（1975）

【職歴】 ギャローデット大学名誉教授（2014）【学位】 博士（人類学）（ワシントン州立大学 1975）【専攻・専門】 言語学

【主要業績】

[共著]

Patrie, C. J. and R. E. Johnson

2011 *Fingerspelled Word Recognition: A Rapid Serial Visual Processing Approach*. San Diego: Dawn Sign Press.

[論文]

Johnson, R. E.

2015 El Bilingüismo y el aprendizaje: Sobre las bases culturales en modelos educacionales basados en el habla para chicos sordos con implantes cocleares que impiden la discusión acerca de la variabilidad. In Ruggiero, F. (coordinadora) *Una mirada transversal de la sordera*, pp.109-148. Buenos Aires: COPIDIS.

Johnson, R. E. and S. K. Liddell

2012 Towards a Phonetic Representation of Hand Configuration: The Thumb. *Sign Language Studies* 12 (2): 316-333. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話の音声学的研究——「動き」の諸類型

・研究の目的、内容

民博における研究環境の提供および国内の諸研究者とのハブの役割を担った。とくに、他大学・機関等での講演につないだり、部門のメンバーによる日本手話に関する情報の提供を行った。また、現在進行中の部門メンバーの研究内容を紹介することにより、氏が構築しつつある手話言語分析のための新たな分析理論への情報を提供した。

・成果

ジョンソン氏は退職後も手話言語学研究的国際的な拠点であるギャローデット大学と連絡をとりつつ、在職中に構築された手話言語の音韻に関する理論を見なおし、記述のための新しい枠組みを構築されつつある。まだ形が固まっていない発展中の理論を理解するには、構築している研究者自身の説明を聞く必要があり、かつ、それがその研究者へのフィードバックにもなる。民博在任中、手話言語の音韻の記述方法に関する考え方を適宜伺ったり、手話言語学部門関係者および外部の研究者と一緒にジョンソン氏による3日間のセミナーに参加し、最新の音韻理論に関する講義を聞く機会ができたことは、民博の各個人にとっても、部門としても、今後、記述的な側面に重点をおきつつ、手話言語研究を進めてゆく上で大変有意義であった。また、受け入れ担当者個人的には、在任中を通じて、部門代表者としての立場で、日本における手話言語研究の動向と部門としてのアプローチに関する状況について、国際的な手話言語研究の動向を踏まえつつコメントをいただくことができた。これを踏まえて、民博における今後の研究の進め方や部門の在り方の展開を考えてゆくために、大変参考になった。

MOROZOVA, Irina [イリーナ モロゾワ]————— 教授

任期：2019年9月1日～2019年11月29日

研究課題：中央・北アジアにおける社会主義的近代化

【学歴】 ロモノソフ記念モスクワ国立大学アジアアフリカ研究所（1997）、ロモノソフ記念モスクワ国立大学アジアアフリカ研究所修士課程終了（1999）、ロモノソフ記念モスクワ国立大学アジアアフリカ研究所博士課程終了（2002）【職歴】 IIAS 国際アジア研究所研究員（2003）、ライデン大学研究員（2004）、IIAS 国際アジア研究所講師（2006）、ロモノソフ記念モスクワ国立大学アジアアフリカ学研究所講師（2006）、ベルリン・フンボルト大学アジアアフリカ学研究所 PI（2010）、ライブニッツ記念南および南東ヨーロッパ地域研究所研究員（2014）レーゲンスブルグ大学南東および東ヨーロッパ史部門研究員（2015）【学位】 博士（ロモノソフ記念モスクワ国立大学 2002）、修士（ロモノソフ記念モスクワ国立大学 1999）【専攻・専門】 歴史学

【主要業績】

[単著]

Morozova, I.

2009 *Socialist Revolutions in Asia: The Social History of Mongolia in the Twentieth Century*. London and New York: Routledge.

[論文]

Morozova, I.

2019 Post-Colonialism, 'Kazakh Autocracy' and International Oil Companies' Representation in Atyrau. In P. Rabé and W. Vogelsang (eds.) *Spatial Dynamics in Infrastructural Investment in Central Asia: Revival, Decline, Centers and Periphery*. Amsterdam: Amsterdam University [査読有]

2018 Review on "Collectivization and Social Engineering, Soviet Administration and the Jews of Uzbekistan, 1917-1939" by Zeev Levin in *Jahrbuecher fuer Geschichte Osteuropas. Jgo.e-reviews* 8: 31-33 [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央・北アジアにおける社会主義的近代化

・研究の目的、内容

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの一環として実施している「中央・北アジアの物質文化に関する研究——民博の標本資料を中心に」に即して、以下のような研究活動を行った。

1) 休館日に展示場に赴き、展示ケースを開け、標本資料の内部や裏面などを熟覧した。

2) 民博のデータベース（標本資料目録、標本資料詳細情報）をチェックし、記載情報の確認ならびに修正点等のリストアップをおこなった。

3) 収蔵庫に入り、中央・北アジアの社会主義に関わる標本資料を熟覧した。

データベースを活用することにより、精細なデジタル画像のおかげで暗い収蔵庫内での総覧よりも精密な観察・分析が可能になったことは特筆に値する。これらの活動に基づいて、すでに論文を執筆しており、年内に本館の研究報告に投稿する予定である。

また、本館と北東アジア地域研究のネットワーク先である北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの招きにより同センターを訪問し、社会主義時代におけるカザフスタンの石油開発について学術報告をおこない、それらの成果を含めて論文にまとめた。

・成果

社会主義時代の政治・経済・文化、とりわけ民博が標本資料を収集した時代の専門家として、民博の所蔵・展示する標本資料を熟覧し、それらの具体的な資料に基づき、物質文化の観点から、社会主義という普遍的な政治的影響のもとでローカライズされた社会主義文化の実態について学術的論文を執筆した。その論文は、'Normativity against uniformity in late- and post-socialist Central Asia and Mongolia' という題目で、『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定である。

同論文の刊行により、本館における資料収集という営為の学術的価値がより一層深まると考えられる。

ARAUJO, Samuel [アラウジョ サミュエル]——教授

任期：2020年2月24日～2020年3月12日

研究課題：音楽実践、公益、社会的共存

【学歴】 パライバ連邦大学（ブラジル）音楽学部卒（1981）、イリノイ大学ウルバナ・シャンペイン校音楽学部修士課程修了（1987）、イリノイ大学ウルバナ・シャンペイン校音楽学部博士課程修了（1992）【職歴】 リオデジャネイロ連邦大学音楽学・音楽教育学部講師（1995）、リオデジャネイロ連邦大学音楽学・音楽教育学部助教授（2003）、リオデジャネイロ連邦大学音楽学・音楽教育学部准教授（2011）、シカゴ大学音楽学部客員教授（2014）、リオデジャネイロ連邦大学音楽学・音楽教育学部教授（2016）【学位】 博士（イリノイ大学 1992）【専攻・専門】 民族音楽学

【主要業績】

[論文]

Araujo, S.

- 2019 Music, Research and Public Interest: A Dialogical Praxis for Social Justice. In U. Hemetek and M. Kölbl (eds.) *Ethnomusicology Matters: Influencing Social and Political Realities*, pp.77-92. Wien: Böhlau Verlag. [査読有]
- 2017 From Neutrality to Praxis; The Shifting Politics of Applied Ethnomusicology in the Contemporary World. In J. C. Post. (ed.) *Ethnomusicology: A Contemporary Reader Vol. II*, pp.67-79. New York/London: Routledge. [査読無]
- 2009 Ethnomusicologists Researching Towns They Live in: Theoretical and Methodological Queries for a Renewed Discipline. *Музикологија* (Musicology) 9: 33-50. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

音楽実践、公益、社会的共存

・研究の目的、内容

サミュエル・アラウジョ教授は、出身国のブラジルを主なフィールドとして、コンフリクトの緩和、解消における音楽の役割について長年研究を続けてきた民族音楽学者である。同教授は、受入担当教員が2018年度から代表を務める民博特別研究「パフォーマンス・アーツと積極的共生」の国際研究協力者であり、2020年3月開催の国際シンポジウム *Performing Arts and Conviviality* で基調講演を行う予定であった。民博滞在中は、受入教員および同特別研究の国際研究協力者であるゴーパーラン・ラヴィンドラン教授（マドラス大学、民博外国人研究員）とともに、特別研究プロジェクトのテーマや研究の進め方について議論を重ねた。

・成果

アラウジョ教授は、特別研究プロジェクトに関連する国内外の研究や民博での研究活動を、文献や映像番組の精査を通して把握し、自らの研究との接点や共通性を確認した。特に、特別研究のキーワードである *conviviality* の有効性や射程について、ラヴィンドラン教授や受入教員と議論を重ね、シンポジウムにおける議論の方向性を明確化することができた。残念ながら、新型コロナウイルス拡散防止のために国際シンポジウムが延期され、同教授もこれを受けて時期を早めて帰国したため、基調講演の形で成果の公開はかなわなかったが、今回の滞在経験は、2020年度に延期された国際シンポジウムで生かされるはずである。

SOMFAI, David Istvan [ショムファイ デイビッド イシュトヴァン]——講師

任期：2018年11月1日～2019年9月30日

研究課題：モンゴルと北東アジアのシャーマニズムに関する博物館フィールドワーク——過去と現在

【学歴・学位】 B. A., Mongolic Studies and Turkic Studies, ELTE Budapest University, Hungary (1999)、M. A., Mongolic Studies and Turkic Studies, ELTE Budapest University, Hungary (2000)、Ph. D., Altaic Linguistics, ELTE Budapest University, Hungary (2007) 【職歴】 Assistant Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary (2007)、Lecturer, Department of Inner Asia, ELTE Budapest University, Hungary (2009)、Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary (2009)、Visiting scholar, Department of Central Eurasia Studies, Indiana University, USA (2010)、Researcher, Institute of Ethnology, Hungarian Academy of Sciences, Hungary (2010-) 【専攻・専門】 Turkic and Mongolic Philology, Inner Asian Folklore, Shamanism

【主要業績】

[論文]

Somfai, D. I.

- 2019 Museum and Exhibition Reviews. *Shaman* 27: 161-176.
- 2017 The Swan Dance: a Kazakh Healing Ritual from the Syr-Darya Region (field report). *Shaman* 25: 197-206.

2017 The Tree of Life according to an Altay-kizhi (Telengit) Epic Song. In A. Mátéffy and G. Szabados (eds.) *Shamanhood and Mythology*, pp.405-412. Budapest: Hungarian Association for the Academic Study of Religion.

【2019年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルと北東アジアのシャーマニズムに関する博物館フィールドワーク——過去と現在

・研究の目的、内容

シャーマニズム研究にとって北東アジアは中核的地域であり、また北東アジアにとってもシャーマニズムは重要な要素である。そのため本館でも中央アジア・北アジア展示においてシャーマニズム関係資料は点数も多く、かなりの面積を占めている。一方、ハンガリーはヨーロッパにおいて独特の言語を有することからアジア研究とりわけミハイ・ホッパールに代表されるようにシャーマニズム研究が盛んであり、現在でも学術誌“Shaman”が刊行されている。そこで、民博に収蔵・展示されている中央アジア・北アジア・東アジア（アイヌ）などの地域に関連する民博のシャーマニズム関連資料について、ハンガリー人研究者バラートシらによる調査資料と照合することによって、詳細な学術情報を付加するという国際共同研究を行った。

受け入れ教員と協働して、本館該当資料のリストアップ、標本資料の熟覧、バラートシによる調査（1908-1914）を確認するための現地調査、北東アジア地域研究やフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（中央・北アジア、アイヌ資料関連）との連携などを進めながら、2つの国際ワークショップ（2019年9月14日〔中央・北アジア〕、15日〔アイヌ資料関連〕）の実施に際しては、両日研究活動成果を発表した。

・成果

本館所蔵のシャーマニズム資料約96点について、20世紀初頭の現地調査に関するハンガリー語旅行記（本館所蔵）と照合することにより、データベース用として詳細な学術情報を付加したリストが作成された。同時に、従来の記載の誤りが訂正された。また、詳細不明だったモンゴル資料を中心に、本館コレクションの重要性が上述誌で紹介された。

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトにとって、シベリア少数民族のように危機言語の場合は、ソースコミュニティそのものが消滅の危機にあるため、過去の学術調査記録が極めて有益である。過去の学術調査記録を活用して情報を得るばかりでなく、ソースコミュニティへの還元も果たすことができた。

WONG, Deborah Anne [ウォン デボラ アン]——教授

任期：2019年7月9日～2019年8月17日

研究課題：民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

【学歴】 ペンシルヴァニア大学音楽学部卒（1982）、ミシガン大学音楽学部修士、博士一貫課程修了（1991）【職歴】 ポモナ大学音楽学部助教（1991）、ペンシルヴァニア大学音楽学部助教（1993）、プリンストン大学音楽学部客員助教（1994）、カリフォルニア大学リヴァーサイド校音楽学部助教（1996年）、カリフォルニア大学リヴァーサイド校音楽学部准教授（1999）、シカゴ大学音楽学部客員准教授（2002）、カリフォルニア大学リヴァーサイド校音楽学部教授（2004）【学位】 博士（ミシガン大学 1991）【専攻・専門】 民族音楽学

【主要業績】

[単著]

Wong, D.

2019 *Louder and Faster: Pain, Joy, and the Body Politic in Asian American Taiko* (American Crossroads series). Los Angeles: University of California Press. [査読有]

2004 *Speak It Louder: Asian Americans Making Music*. New York: Routledge. [査読有]

2001 *Sounding the Center: History and Aesthetics in Thai Buddhist Ritual*. Chicago: University of Chicago Press. [査読有]

【2019年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

民族音楽学におけるマイノリティ研究の再想像

・研究の目的、内容

受入担当教員が代表を務める特別研究プロジェクト「パフォーミング・アーツと積極的共生」では、2020年3月19日～22日に国際シンポジウムを開催すべく準備を進めている。デボラ・ウォン教授は、これまでも本プロジェクトの国際共同研究員として基本方針の策定に参加しており、プロジェクト期間を通してその推進、運営に携わることを内諾している。受入期間中には、シンポジウムの内容・構成について受入担当教員とともに検討し、シンポジウムに向けた準備研究集会（8月6日開催）では、特別研究のテーマに関する理論的背景と北米南カリフォルニア州における事例についての発表を行った。さらに、受入担当教員とともにマイノリティ集団の集住地域2箇所（大阪市大正区の沖縄人コミュニティ、同生野区の在日コリアン・コミュニティ）を訪れ、シンポジウムの第4日目に予定しているエクスカージョンの可能性を地元関係者と協議した。

・成果

ウォン教授は、受入担当教員と共同で、シンポジウムの基本概念である「積極的共生」に関する関連業績を整理し、シンポジウムの構成の策定と招聘者の選定を行った。特に、招聘候補者の業績を精査し、シンポジウムのテーマとの整合性を検討する作業に大きく貢献した。この結果、基調講演者を含む招聘候補者の選定を完了することができた。ウォン教授は、今後もシンポジウムの企画・運営に継続的に関わり、シンポジウム終了後も成果論集の編集に携わることを内諾している。